

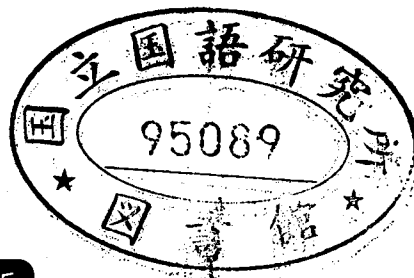
北海道における共通語化と 言語生活の実態

(中間報告)

国立国語研究所

1997年3月





国立国語研究所



100055497

目 次

I. まえがき	江川 清	1
II. 調査の概要	杉戸 清樹・塚田実知代	2
1. 調査の経緯－前回調査から今回調査へ		
2. 調査対象者の基本的な属性		
III. 言語項目編		
1. 語彙		
1.1. 語彙(1) 富良野パネル調査から	相澤正夫・小野米一	24
1.2. 語彙(2) 高校生調査から	小林 隆	45
1.3. まとめ	相澤 正夫	70
2. 文法		
2.1. 文法(1) 富良野・札幌継続調査から	真田 信治	72
2.2. 文法(2) 高校生調査から	杉戸 清樹	83
2.3. まとめ	杉戸 清樹	110
3. 発音・アクセント		
3.1. 発音－富良野・札幌継続調査から	尾崎 喜光	112
3.2. アクセント(1) 富良野・札幌継続調査から	相澤 正夫	140
3.3. アクセント(2) 富良野パネル調査から	尾崎 喜光	161
3.4. まとめ	尾崎 喜光	167
IV. 言語生活・言語行動項目編		
4. 一日の言語生活・言語生活意識	熊谷 康雄	170
5. 言語行動意識－買物場面について	杉戸 清樹	195
6. 言語意識・方言意識－高校生調査から	小林 隆	204
[文献一覧]		209
V. 調査票・提示リスト		210

I. まえがき

国立国語研究所では、昭和61年から平成元年にかけて、北海道における共通語化と言語生活に関する社会言語学的な調査を実施した。この調査は、その25年前、昭和33年から36年にかけて実施した同地における共通語化の調査を発展的に継承し、その間の共通語化の過程を実証的に把握するとともに、現在の北海道における言語生活の姿をとらえようとして企画したものである。

この調査は、「北海道における共通語化および言語生活の実態」という課題のもとに文部省科学研究費補助金（総合研究A・課題番号61301052・代表者：江川清）の交付を受け、関連諸大学の研究者の参加と、調査対象各地の機関・住民各位のご理解・ご援助とをいただくことによって実現した。関係各位には、あらためて御礼を申し上げる。

今回、ここにまとめるのは、この調査の中間的な報告である。中間的な報告とは、実施した幾種類かの調査や多くの調査項目の全体には及ばない報告であること、また、この種の調査報告に盛り込むべき基本的な集計資料を含まないものであることを指している。調査完了後、すでに長い年月を経たこの時点で、なお中間的な報告にとどまることについては、担当者が同種の調査研究を並行的に進めなければならない事情があったとはいえ、ご協力をいただいた各方面には心からお詫びしなければならない。研究参加者の中には、すでに早い段階で分担された分析論文をお寄せ下さった方もあり、その点でもお許しを乞わねばならない。

しかしながら、最終的な段階には及ばないとはいえ、現時点までに達成できた範囲の報告は遅ればせながらもおおやけにし、大方のご批判をいただくのがとるべき道と考え、中間的な報告をまとめることとした。中間報告とは言え、扱うデータも含めた内容についての検討を、及ぶ限りの段階まで経たものであることは申し添えることができる。

この先、この中間報告を土台として、その内容の充実をはかりつつ、残された課題を果たすことによって、所期の全体的な調査報告を実現したいと願っている。そのためにも、この報告書の内容について忌憚のないご批判とご指導がいただけることを切に願う次第である。

Ⅱ．調査の概要

1. 調査の経緯 —— 前回調査から今回調査へ

1. 0. 北海道における共通語化・言語生活調査

国立国語研究所は、北海道における共通語化および言語生活に関する調査研究を、ここに報告するものを含めて2度行っている。いずれも、関連大学の研究者との共同研究として行ったものである。

1度めは、昭和33年度から35年度にかけて行ったものである。以下では、これを前回調査と呼ぶ。この調査は、中心的な課題として北海道における共通語化の過程を把握することを掲げたものである。当時、東京語に近いと言われていた「北海道共通語」がどのようにして成立しつつあるのかを明らかにし、当時議論されていた日本全国における共通語化の方策と共通語教育の方針をたてるのに有効な知識を得ることを目的としたものであった。

2度めは、その後、約25年を経た昭和61年度から63年度にかけて実施したものである。以下、これを今回調査と呼ぶ。この調査は、前回調査の知見をふまえて、新しい観点に立った社会言語学的な調査研究を行うことにより、その後の共通語化の動向と調査時点における北海道民の言語生活の実態を把握することを目指したものである。

以下、本章では、これら2度の調査の概要を示す。前回調査の詳細については、その調査報告書『共通語化の過程 —— 北海道における親子三代のことば』（国立国語研究所報告27 1965年 秀英出版刊）にゆずり、ここでは概要を示すにとどめる。今回調査については、調査実施のより詳しい事項を示す。

1. 1. 前回調査の概要

前回調査は、昭和33、34、35年度の3年間にわたって各年度の文部省科学研究費交付金・総合研究をうけて実施された。「北海道の言語の実態と共通語化の過程」という課題のもとに、全体の目的として

東京語に近いといわれる「北海道共通語」がどのようにして成立しつあるかを明らかにして、日本全国の共通語化の方策と共通語教育の方法をたてるのに有効な知識を得ることを掲げたものであった。

(1) 研究組織

研究組織は次の通りであった。職名は当時のもの。

研究代表者	岩淵悦太郎（国立国語研究所第1研究部長）
研究分担者	柴田 武（国立国語研究所地方言語研究室長）
	野元 菊雄（国立国語研究所地方言語研究室員）
	上村 幸雄（ 同 上 ）
	徳川 宗賢（ 同 上 ）
	五十嵐三郎（北海道大学文学部助教授）
	長谷川清喜（北海道学芸大学札幌分校助教授）
	石垣 福雄（北海道立札幌北高等学校教諭）
	佐藤 誠（北海道学芸大学函館分校教授）

(2) 調査の種類と概要、および知見

前記の全体的な目的に基づき実施されたのは、次の6種類の調査研究である。各調査に与える名称は、前回調査報告書の章立てに用いられたものにならう。

調査Ⅰ	1世・2世・3世調査
調査Ⅱ	3世調査
調査Ⅲ	富良野調査
調査Ⅳ	吉野・浦臼・豊頃調査
調査Ⅴ	高校調査
調査Ⅵ	吟味調査

以下に、それぞれの調査の目的や得られた結果のあらましを前回調査報告書に基づいて列記する。

① 調査Ⅰ 1世・2世・3世調査

目的 北海道をよく代表する数地点で、移住第1世・第2世・第3世の、原則として男がそろい、かつ第3世が15歳以上であるような家族を探し、世代による変化を言語の各面から記述する。そして、三つの世代の間で、言語のどの面が変わりやすく、どの面が変わりにくいか、変わるとすればどの世代とどの世代との間か、などを明らかにし、同時に、いわゆる「北海道共通語」がどのようにして形成されつつあるかを調べる。

調査地 ①美唄市・空知郡奈井江町 ②中川郡池田町 ③虻田郡倶知安町
④上川郡永山町

結果 第2世ではまだ第1世の(出身地の)方言の影響が残っているが、第3世になると、その影響はほとんどなくなり、しかも、第1世の出身地がどこであろうと、どの第3世も同じようなことばを話している。このような北海道第3世に共通のことばは「北海道共通語」と呼んでいいようなものと思われる。

② 調査Ⅱ 3世調査

目的 数地点だけでの調査から得られた調査Ⅰの結果を検証するため、各地方からの移住者が混住し第3世の数も多い都会地において、その第3世の言語状況を調査する。北海道共通語成立の一つの側面を扱う。

調査地 ①札幌市 ②帯広市 ③釧路市

結果 都市部の第3世を中心として見た北海道のことばは、けっして単一なものではなく地域差が相当認められる。また同じ世代であっても、年齢の差によって言語の状態、あるいは共通語化の程度が違うのではないかと考えられる。

③ 調査Ⅲ 富良野調査

目的 第1世から第2世、さらに第2世から第3世に移るにしたがって共通語化が進む(調査Ⅰ)なかで、では、同じ世代にあっても年齢が違えば共通語化の程度が違うかどうか、違ふとすれば、年齢の差と世代の差のどちらが共通語化の要因としてつよく働くものであるのかを知る。同時に第2世と第3世の言語実態を把握する。

調査地 空知郡富良野町(当時)

結果 世代がきくか年齢がきくかについては、調査項目によって違いがあり一般的な答えは出せない。共通語化の状況は他の諸方言における事情と

全く同じで、世代の下がるにつれ、年齢の若くなるにつれて、全国共通語にむしろ近くなっていく。独特の北海道共通語が形成されつつあるわけではない。項目によっては、北海道的なものが強くなっていくというものもある。

④ 調査Ⅳ 吉野・浦臼・豊頃調査

目的 調査Ⅰ～Ⅲはいずれもいろいろな土地からの移住者の混住地での調査である。これらに対して、集団移住により形成された地域社会では、とくに第3世の言語状況はどのようなものであるのかを知る。

調査地 ①空知郡富良野町 ②樺戸郡新十津川町 ③中川郡豊頃村 ④樺戸郡浦臼村

結果 移住の形態が集団的であるか混住的であるかによって共通語化も相当違っている。また同じ混住であっても、地域によって相当の差がある。北海道方言はけっして単一ではない。

⑤ 調査Ⅴ 高校調査

目的 広く北海道各地を調査して、北海道の言語の地方的な差異をつかむ。調査Ⅱ、Ⅲで把握された第3世のことばの地域差を、北海道全域にわたって調べ、従来指摘された「浜ことば」と「内陸のことば」の対立が第3世にも反映しているか、その境界線はどのあたりなのかを知る。

調査地 全道にわたる全40高校。このほか比較のために東北地方の6高校も。

結果 北海道方言をより細かく区分する地域差が認められる。大まかにいえば、半島部・海岸部とその他に分かれ、前者が比較的強く東北方言の影響を受けている。また東北地方での比較調査から、新しく北海道に生まれたと考えられる表現もかなり指摘できる。全体として共通語化の方向に向かっていることは事実だが、無アクセント化ということも含めて全国共通語から離れていく現象も指摘できる。

⑥ 調査Ⅵ 吟味調査

目的 調査Ⅰ～Ⅴは複数の調査者の協力分担によって進められた。その調査結果に調査者の個人的なかたよりがどの程度含まれているのかを知る。

調査地 札幌市

結果 調査者の個人差はたしかにあるけれども、結果に強い影響を与えるほどのものではない。

1. 2. 前回調査から今回調査への継続と展開

前節で概観したとおり、前回調査は、調査研究の全体として、「北海道共通語」の成立過程を明らかにすることを軸としながら、北海道内の各地域社会における言語状況を、とりわけ入植にまつわる世代や年齢層という通時的な観点から調査記述しようとしたものである。

次節(1.3.)に示す通り、今回調査は、

①前回調査後、約28年を経たのちの北海道における言語状況、とくにその間の共通語化の経過を把握すること

②北海道内の都市部と農村部の言語生活の実態を把握すること

という、大別して二つの目標を掲げて実施したものである。これは、今回調査を実施するために交付を受けた文部省科学研究費による研究の課題名「北海道における共通語化および言語生活の実態」にも現れている。このうち前者の目標は、基本的には、前回調査の目的を受け継ぐものだと言ってよい。

具体的には、前回の各種調査のうち、その調査目的・調査内容・調査地などの点で今回調査が直接的に継続しようとしたものは、調査Ⅲ・富良野調査と調査Ⅴ・高校調査の二つである。また、富良野調査との関連を踏まえつつ、あらたな視点に基づいた前回調査からの展開というべき調査を、札幌市において今回実施した。これらに関して、前回調査からの継続と展開の様子を箇条書きで列挙すると次のようになる。

(1) 富良野調査からの継続と展開

①前回富良野調査では、とくに移住2世と第3世の住民200人について、音声・アクセント・語彙・文法などにわたって方言と共通語の使用状況が調査された。この対象者は、年齢の上では、25～40歳(前回報告書では30代とまとめられた)、15～24歳(同じく、10代とまとめられた)の2群に別れる。今回はこの200人をパネル・サンプルとして(つまり同一人物に同じ調査内容でもう一度調査する形で)調査対象とした。もっとも直接的な形で調査を継続した姿である。

②前回富良野調査の調査項目の一部については、今回あらたに選んだ富良野市民からのランダム・サンプル400人に対してもう一度質問した。現代の

富良野の言語状況を社会言語学の観点から調査記述しようとしたのである。ここでも、前回富良野調査は内容的に継続・展開されたといえる。

(2) 札幌市におけるあらたな調査の展開

前項②とほぼ同様の調査を、今回、札幌市民からのランダム・サンプル500人に対しても実施した。富良野を農村型社会、札幌を都市型社会と位置づけての対照的な調査研究を企図したのである。さらに、この富良野・札幌ランダム・サンプル調査には、前回富良野調査には含まれなかった言語生活・言語行動の領域の項目を相当数設定した。現代北海道の言語生活の実態を把握する目的によるものであって、前回調査からの新しい展開である。

(3) 高校調査からの継続と展開

①前回高校調査は、道内の40高校と東北地方の6高校で、各数人の生徒を対象に、調査員が直接出向いて個別に面接する形で進められた。前述の通り、第3世という若い世代の全道的な言語状況を知るのを目的にして、語彙・文法に関する言語項目が扱われた。今回の高校生調査は、その目的と調査内容（質問項目）に関して前回調査を、ほぼそのまま継続している。ただ、調査対象を前回の道内40高校を含めて、それ以外に、人口集中の顕著な大都市（札幌・旭川・函館）の高校を12校追加したこと、また調査方法を個別面接法から回答者自記式アンケート法に変えたことの2点で変更がある。東北地方の高校は今回は調査しなかった。調査項目についても、若干の追加をした。

以上、前回調査の枠組みを土台にしつつ、今回調査がそのうちのどの部分を引き継ぎ、また展開しているかを概観した。次節で今回調査の概要を述べるが、それに先立ち、前回調査との関連を指摘した。

1. 3. 今回調査の概要

今回調査は、昭和61、62、63年度の3年間にわたって「北海道における共通語化および言語生活の実態」という研究課題により文部省科学研究費補助金・総合研究A（課題番号：61301052）をうけて実施した。

研究の目的として掲げたのは次の2項目であった。

- ①社会言語学ならびに言語行動研究の観点にたつて、現在の北海道民の言語および言語生活を調査する。とくに農村型地域社会の事例として富良野市を、都市型地域社会として札幌市をとりあげ、それぞれの地域社会における住民の言語および言語生活の実態をとらえ、両者を対比的に考察する。
- ②前回調査の追跡調査を行うことにより、語彙・文法・アクセント・音韻などの諸側面について、その後の変化の実態を明らかにする。

(1) 研究組織

研究および調査の組織は以下の通りであった。所属は調査当時のもの。

研究代表者 江川 清 (国立国語研究所言語行動研究部第二研究室長)

研究分担者 池上二良 (札幌大学教授)

小野米一 (北海道教育大学教授)

菅 泰雄 (旭川工業高等専門学校助教授)

吉見孝夫 (北海道教育大学助教授)

南 芳公 (北海道教育大学講師)

徳川宗賢 (大阪大学文学部教授)

真田信治 (大阪大学文学部助教授)

高田 誠 (筑波大学文芸言語学系助教授)

志部昭平 (千葉大学文学部助教授)

鈴木敏昭 (富山大学人文学部助教授)

野元菊雄 (国立国語研究所長)

南不二男 (国立国語研究所日本語教育センター長)

杉戸清樹 (同・言語行動研究部第一研究室長)

米田正人 (同・言語行動研究部主任研究官)

佐藤亮一 (同・言語変化研究部第一研究室長)

沢木幹栄 (同・言語変化研究部主任研究官)

小林 隆 (同・言語変化研究部第一研究室研究員)

日向茂男 (同・日本語教育センター教材開発室長)

相澤正夫 (同・日本語教育センター第一研究室研究員)

水野義道 (同・日本語教育センター第四研究室研究員)

研究協力者 菱沼 透 (明治大学教授)

村山昌俊 (国学院女子短期大学講師)

吉岡泰夫[°]（熊本短期大学講師）
中畠孝幸（大阪大学文学部大学院生）
尾崎喜光（大阪大学文学部大学院生）
永田高志*（上智大学大学院生）
松田謙次郎*（上智大学大学院生）
堤 真木*（上智大学大学院生）
金沢裕之[°]（大阪大学文学部大学院生）
渋谷勝己[°]（大阪大学文学部大学院生）
宮治弘明[°]（大阪大学文学部大学院生）

面接調査には、上記分担者のうち、江川、杉戸、米田、佐藤、沢木、小林、日向、相澤、水野[°]、小野、菅、南(芳)、吉見、徳川、真田、高田*、志部、鈴木[°]の18名、および研究協力者の11名が参加した。*印は富良野調査のみに、[°]印は札幌調査のみに、無印は両方の調査に参加したことをそれぞれ示す。

以上のほか、現地調査本部要員として国立国語研究所研究補助員の白沢宏枝、塚田実知代、磯部よし子が参加した。

調査対象者のサンプリングは、米田正人が、一部、北海道教育大学の学生アルバイト2名の補助を得て実施した。

調査資料全般の整理・集計は主として米田正人・磯部よし子が担当した。一部の集計・作図プログラムの作成には、熊谷康雄・杉戸清樹があたった。また、資料整理に、アルバイトとして野田羊子、吉富悦子、太田幸代、栗山千恵美が臨時的に従事した。

この中間報告の執筆は、目次の各章・節に示す分担者が担当した。また、その編集・印刷の実務は、杉戸清樹・尾崎喜光・塚田実知代が担当した。

なお、調査実施に際しては、以下の各自治体、組織からさまざまなご協力を得た。記して謝意を表す。

北海道教育庁・調査対象高等学校(52校)・札幌市役所・富良野市役所・
「全国単身赴任者の会」事務局

(2) 調査の種類と概要

今回調査では、以下に示す6種類の調査を実施した。このうち、今回の中間報告で扱うのは、①～④の各調査の結果の一部である。

①富良野市民パネル調査（昭和61年度実施）

前回調査で調査対象とした富良野市民（旧富良野町民）で、現在も富良野市およびその近隣に住むことの確認された方を対象として、基本的には前回調査と同じ内容の、語彙・文法・音韻における共通語化に関する調査項目について、個別面接調査を実施した。前回行ったアクセント項目は、前回データが録音されていないために比較するうえの困難があったので、今回のパネル調査では調査しなかった。

前回調査の全回答者200名のうち、126名の所在が確認された。これらに対して協力を依頼し、うち106名の回答を得た。

②富良野市民継続調査（昭和61年度実施）

前回調査を行った富良野市において、あらたに400名の市民を無作為抽出し、共通語化と言語生活に関する調査項目について個別面接調査と留置き式アンケート調査を実施した。富良野市を、札幌市との対比において、農村型地域社会と位置づけた調査である。質問項目は、語彙・文法・アクセント・発音、言語行動・言語意識・言語生活・社会言語学的諸属性などにわたる。

面接・アンケート両調査への有効回答者総数は299名（74.8%）であった。なお、面接調査だけが実施できた回答者が1名あったので、アクセント項目については300名を分析対象とすることができた。

③札幌市民継続調査（昭和62年度実施）

富良野市との対比で都市型地域社会と位置づけた札幌市で、無作為に抽出した500名の市民を対象として実施した。前項②の富良野市民継続調査とほぼ同じ内容で個別面接調査と留置き式アンケート調査を行った。

有効回答者総数は351名（70.2%）、アクセント項目への有効回答者は350名であった。

④高校生調査（昭和63年度実施）

北海道各地における若い世代の言語変化と現況を概観的に把握するために、前回の高校調査の対象40校に、都市部の12校をあらたに加えた総計52高校において、1学年在学学生を対象にした調査を実施した。調査項目は、語彙・文法・言語意識に関する内容であった。

前回は、各校5名程度の個別面接調査であったが、今回は、原則として各校50名へのアンケート方式（学校に郵送し、マークシートへの自記式回答を依頼した）で行った。回答者総数は2,682名であった。

⑤富良野の3世代同居家族へのアクセント事例調査（昭和61年度実施）

アクセントに関する富良野パネル調査が実現しなかったのを補うことを目的として、老・壮・若の3世代のそろった4家庭、総計19名を対象にして、アクセントの共通語化に関わる事例的な面接調査を実施した。

⑥札幌市在住の単身移入者調査（昭和62年度実施）

都市型社会の住民の一つの生活形態としての単身生活者に焦点をしばり、語彙項目および言語生活項目についてのアンケート調査を実施した。対象者の選定、調査票の配付・回収は民間団体「全国単身赴任者の会」（事務局・札幌市内）に依頼した。

調査の種類ごとの調査対象数と達成（回収）数は以下の通りであった。

			対象数	回収数
富良野	パネル	面接調査	200名	106名
		継続	400名	304名
		留置調査	400名	315名
		（両調査有効数）		（299名）
札幌	継続	面接調査	500名	352名
		留置調査	500名	368名
		（両調査有効数）		（351名）
高校生調査		52校	2,682名	
札幌単身移入者調査		200名	162名	

(3) 実施経過

昭和61年6月27日	第1回企画会議
6月30日～7月2日	富良野市、札幌市へ協力依頼
7月29日～8月3日	高校調査協力依頼と予備調査
9月1日～2日	北海道在住分担者との研究連絡会議
9月27日～10月3日	富良野サンプリング
10月15日	調査依頼と「言語生活調査票」の発送

10月29日～11月10日	富良野本調査。パネル調査および継続調査（面接実施・アンケート回収）
11月中旬	富良野調査礼状発送
昭和62年7月18日	富良野調査中間報告講演会（富良野市）
7月20日～23日	札幌市へ協力依頼と事前調査
8月24日～30日	札幌サンプリング
9月1日	調査依頼と「言語生活調査票」の発送
9月中旬	札幌単身移入者調査の「言語生活調査票」を発送
9月17日～28日	札幌本調査（面接実施・アンケート回収）
10月上旬	札幌調査礼状発送
昭和63年2月上旬	札幌補充調査
平成元年2月16日～18日	「高校生調査」の依頼・打合せ
3月中旬	「高校生調査」発送
3月下旬～6月	「高校生調査」回収

(4) 関連した研究発表・調査報告

1997年2月までに、今回調査の結果の一部について、以下のような研究発表や調査報告がなされている。これらの内容は、この中間報告の内容と重複する場合がある。

①富良野報告講演会1987『富良野のことばをめぐって—富良野言語調査の中間報告—』

- | | |
|------|---|
| 野元菊雄 | 1. ことばを調査する |
| 米田正人 | 2. 富良野言語調査から(1)—ことばとくらし— |
| 杉戸清樹 | 3. 富良野言語調査から(2)—27年間で使われ方の変わったことばと変わらなかったことば— |
| 小野米一 | 4. 北海道のことば—そのなりたち— |

②相澤正夫1987「非全国共通形の使用意識—北海道言語調査から」

国立国語研究所研究発表会

③水野義道1989「『北海道における共通語化および言語生活の実態』調査から—語彙について—」 第49回日本方言研究会発表原稿集

- ④相澤正夫1990「北海道における共通語使用意識 一富良野・札幌言語調査から一」
国語研報告101『研究報告集11』
- ⑤国立国語研究所研究発表会『北海道における共通語化』（1991年）
- | | |
|------|------------------|
| 米田正人 | 1. 北海道調査の概要 |
| 水野義道 | 2. 語彙をめぐって |
| 尾崎喜光 | 3. 発音・アクセントをめぐって |
| 杉戸清樹 | 4. 若い世代の動向 |
- ⑥日本行動計量学会第19回大会研究発表会（1991年）
- | | |
|------|------------------------------------|
| 江川清 | 「北海道における言語生活調査(1)一調査の目的と概要一」 |
| 杉戸清樹 | 「同 (2)一買物場面での言語行動意識一」 |
| 熊谷康雄 | 「同 (3)一近所づきあい・あいさつ行動の男女差，地域差，年齢差一」 |
- ⑦相澤正夫1993「札幌市におけるガ行鼻音保持の一側面」
第57回日本方言研究会発表原稿集
- ⑧小林隆1993「北海道における共通語化と地域差」
第1回国立国語研究所国際シンポジウム分科会発表予稿集
- ⑨相澤正夫1994「ガ行鼻音保持の傾向性と含意尺度一札幌市民調査の事例から」
国語研報告107『研究報告集15』
- ⑩相澤正夫1994「札幌市民のガ行鼻音保持をめぐって」
『北海道方言研究会20周年記念論文集 ことばの世界』
- ⑪相澤正夫1995「富良野市におけるガ行鼻音の動向」
国語研報告110『研究報告集16』
- ⑫小林隆1996「北海道における共通語化と地域差」
国立国語研究所編『世界の国語研究所一言語問題の多様性をめぐって』凡人社

2. 調査対象者の基本的な属性

以下に、この中間報告で扱う4種類の調査の調査対象者について、それぞれの基本的な属性を示す。ここには、調査で得られた諸属性のうち、この中間報告で参照・利用する限りの基本的な属性だけを掲げる。これ以外の、より詳細な属性内容、あるいはサンプリング作業の詳細などについては、別の機会の報告にゆずる。

2. 1. 富良野市民継続調査

今回あらたに富良野市民から400人のランダム・サンプルを選び、調査対象とした。サンプリングの対象となった市域は、前回調査の対象となった旧富良野町域を含めて、その後、富良野市に編入された周辺地域、麓郷、山部などの地域も含めた。その地域に住民登録した15歳以上、70歳未満の住民から無作為抽出によって400人を選んだ。

この400人のうち、299人から面接調査とアンケート調査の両方に協力が得られた。その有効回答者の諸属性は以下の通りであった。

【性×年齢層】

	15～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60以上 (歳)	計
男性	11	14	38	19	36	21 (人)	139
女性	15	24	31	37	25	28	160
計	26	38	69	56	61	49	299
	8.7	12.7	23.1	18.7	20.4	16.4 (%)	100.0

【学歴】

	低学歴 (新制中学卒まで)	中学歴 (新制高校卒まで)	高学歴 (短大卒以上)	計
人	141	117	41	299
(%)	47.2	39.1	13.7	100.0

【居住地区】

	市街地 1	市街地 2	市街地 3	北の峰	周辺部	麓郷	山辺	計
人	68	38	58	13	50	20	52	299
(%)	22.7	12.7	19.4	4.4	16.7	6.7	17.4	100.0

居住地区の区分は以下のとおりである。

市街地 1 西町, 桂木町, 新富町, 朝日町, 本町, 若松町, 弥生町,
日の出町, 幸町, 末広町

市街地 2 栄町, 若葉町, 扇町, 緑町

市街地 3 花園町, 錦町, 新光町, 住吉町, 瑞穂町, 北麻町, 西麻町,
東麻町, 南麻町, 春日町, 東町

【居住歴】

	富良野以外 2年未満	北海道以外 2年未満	北海道以外 2年以上	計
人	113	131	55	299
(%)	37.8	43.8	18.4	100.0

【出身地】

	富良野市	富良野市 周辺	北海道 その他	東北地方	その他	計
人	171	29	76	11	12	299
(%)	57.2	9.7	25.4	3.7	4.0	100.0

【職業】

専門的 職業	管理的 職業	事務・販売 サービス	農林水産 鉱業	運輸 技能	主婦	学生	無職	ほか	計
31	12	47	64	32	35	20	29	29	299
10.4	4.0	15.7	21.4	10.7	11.7	6.7	9.7	9.7	100.0

2. 2. 札幌市民継続調査

札幌では、基本的には全市域を対象として、町を単位とした第1段サンプリング、そこに住民登録をした15歳以上、70歳未満の住民からの第2段サンプリングという層化抽出によって、500人の調査対象者を選んだ。

この500人のうち、351人から面接調査とアンケート調査の両調査への回答が得られた。その諸属性は以下の通りであった。

【性×年齢層】

	15～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60以上 (歳)	計
男性	21	37	30	31	35	15 (人)	169
女性	19	34	44	36	28	21	182
計	40	71	74	67	63	36	351
	11.4	20.2	21.1	19.1	18.0	10.3 (%)	100.0

【学歴】

	低学歴 (新制中学卒まで)	中学歴 (新制高校卒まで)	高学歴 (短大卒以上)	計
人	66	194	91	351
(%)	18.8	55.3	25.9	100.0

【居住歴】

	札幌以外 2年未満	北海道以外 2年未満	北海道以外 2年以上	計
人	57	177	117	351
(%)	16.2	50.4	33.3	100.0

【出身地】

	札幌市	北海道 札幌以外	東北地方	その他	計
人	115	190	10	36	351
(%)	32.8	54.1	2.9	10.3	100.0

【職業】

専門的 職業	管理的 職業	事務・販売 サービス	農林水産 鉱業	運輸 技能	主婦	学生	無職	ほか	計
44	22	33	46	44	71	52	17	22	351
12.5	6.3	9.4	13.1	12.5	20.2	14.8	4.8	6.3	100.0

サンプリングされた地区は以下の25地点である。

- 01 中央区 南4条西23～26丁目
- 02 南13条西11～13丁目
- 03 北1条西25～27丁目
- 04 北区 北8条西1～6丁目
- 05 北34条西5～9丁目
- 06 新琴似6条5～6丁目
- 07 屯田5条8丁目
- 08 拓北6条1～2丁目
- 09 白石区 本通13～16丁目北
- 10 北郷4条7～8丁目
- 11 東札幌2条1～2丁目
- 12 もみじ台東5～6丁目
- 13 厚別中央2条5～6丁目，3条1丁目

- 14 豊平区 平岸1条21～23丁目, 2条1丁目
- 15 中の島2条10丁目
- 16 月寒東4条18丁目
- 17 福住3条3～6丁目
- 18 北野5条4丁目
- 19 南区 真駒内本町7丁目
- 20 真駒内柏丘2～5丁目
- 21 西区 琴似1条2丁目
- 22 発寒4条6～7丁目
- 23 手稲宮の沢
- 24 福井5～6丁目
- 25 前田6条9～12丁目

2. 3. 富良野市パネル調査

前回調査では、本人の氏名・性別・生年・現住所・出生地・居住経歴・学歴、父母・祖父母の生年・現住所・居住経歴などを尋ねる「社会調査票」を全部で11,425人の富良野町民に配付し、回答のあった8,463人から、できるだけ純粋な北海道2世、3世であること、年齢が10代（実際には当時の年齢で15～24歳の人をまとめて10代と呼んでいた）か30代（同じく、24～40歳の人を30代と呼んでまとめていた）であることなどを条件に、計200人の回答者が選ばれて調査対象とされた（前回報告書 pp. 43～45）。

10代第2世	50人	30代第2世	50人	第2世	100人
10代第3世	50人	30代第3世	50人	第3世	100人
10代	100人	30代	100人	計	200人
男性	100人	女性	100人		

今回調査は、この200人の今回調査時点の所在をたずね、富良野市および近辺に現在も居住することの確認された方126名に、再度の調査協力を依頼し、結果的に106人から回答を得た。前回の属性の枠組みをあてはめて見ると、今回の回答者は以下のような人たちであった。

	男性	女性	計
今回の回答者 全体	55	51	106(人)
前回調査の時点での10代	25	20	45
〃 30代	30	31	61
第2世	32	23	55
第3世	23	28	51

前回の10代グループ（実年齢：15～24歳）は、前回調査後27年の年月の経過ののち、今回調査時点では42歳から51歳にあたり、前回の30代グループ（実年齢：25～40歳）は、今回、52歳から67歳にあたる年齢層の人ということになる。もちろん、2世、3世という点はそのまま変わらない。また、調査対象者の総数は半減したが、その内訳としての年齢層、世代ごとの男女比率は、それぞれおおむね半々となっていて前回調査とほぼ平行的なものとなった。

2. 4. 高校生調査

高校生調査については、富良野・札幌の市民調査と異なり、調査対象の選定について前回調査からの経緯があるので、ここにより詳しく記述しておく。

(1) 調査目的との関連

前回調査では、移住第3世という若い世代にあたる高校生を対象として、北海道全域にわたることばの地域差を把握する目的で、高校調査が行なわれた。今回調査でも、そののち一世代以上の年を経て概略としては第4世に該当させ

うる現時点での高校生を対象にして、前回調査の目的と質問項目を原則としてはそのまま継続した高校生調査を行った。

(2) 対象者選定の変化

前回調査は、道内の40高校で各校原則として5人（男子3，女子2。一部で計6人～9人）の生徒に、調査員が直接出向いて面接する形式で行われた。生徒は、①本人がその土地生まれ、②父母が北海道生まれ、③父方の祖父が内地出身で移住1世、という条件で選ばれ、全体で男子123人、女子87人が調査対象とされた。また、言語的に関連の深い東北地方のうち6地点、盛岡・弘前・能代・青森・八戸・大曲の高校でも、それぞれ1校5人（男子3人、女子2人）の生徒を対象に、道内との比較のための調査が行われた（前回報告書 PP. 97～100）。

今回調査では、道内の高校については、前回の学校を覆うものとした。ただし、その基本はふまえて、生徒の選び方などで以下の点に変更を加えた。

- ①各校の調査人数を、原則として50人（男女半々）とした。前回調査では前述のように本人・父母・祖父の生育地などを条件づけて選んだが、今回はこれは断念した。前回の条件に該当する生徒が今回の対象者に含まれている可能性はもちろん高いけれども、当面は、それ以外の生徒も含めて、各地点での現状を概観しようとする点に調査の重点を動かしたことになる。この変更は、調査運営の事情により、調査員が直接現地に出向いて個別に面接する前回調査の方法が困難であったため、郵送式の回答者自記式調査票による一斉調査に切り替えたことによる面が大きい。
- ②前回調査の時点から考えて、人口・経済活動の圧倒的な集中など、北海道における大都市のウエイトが増したという前提に基づいて、前回の対象40高校のほかに、札幌市内6校・旭川市内3校・函館市内3校の計12校を追加した。一方、前回行った東北地方の高校では今回は行わなかった。道内で総計52高校を対象としたことになる。

(3) 対象校と生徒人数（性別）

今回の対象校、回答した生徒の性別・人数を以下に示す。回答を依頼した生徒の学年は、原則として昭和63年度の1年生であったが、一部の高校では2年生が回答した。また調査実施が次の平成元年度に持ち越された高校があったが、

この場合もその時点の2年生が回答しており、実際上は大部分同じ学年の生徒が回答したことになる。

【前回調査・今回調査の共通対象校（40校）】

高校名	男子	女子	計	高校名	男子	女子	計
広尾	22	31	53(人)	増毛	19	58	77
北見北斗	31	29	60	檜山北	17	25	42
羽幌	25	25	50	赤平西	23	39	62
稚内	25	22	47	本別	24	21	45
深川西	24	27	51	静内	19	26	45
浦河	25	35	60	室蘭清水丘	25	25	50
松前	34	45	79	斜里	30	30	60
栗山	19	21	40	厚岸水産	33	14	47
寿都	19	36	55	紋別北	26	24	50
江刺	25	25	50	伊達	23	23	46
岩内	20	23	43	遠軽	23	21	44
清水	30	30	60	留萌	26	34	60
函館東	30	29	59	旭川東	26	24	50
中標津	22	23	45	江別	19	26	45
苫小牧東	25	25	50	札幌月寒	27	27	54
名寄	27	23	50	余市	32	28	60
歌志内	34	25	59	三笠	25	25	50
森	25	25	50	士別	24	23	47
小樽桜陽	30	30	60	滝川	33	27	60
根室	28	30	58	長万部	22	26	48

【今回あらたに対象とした都市部の高校（12校）】

高校名	男子	女子	計	高校名	男子	女子	計
札幌西	27	18	45	函館中部	24	22	46
札幌手稲	27	17	44	函館西	20	25	45
札幌西陵	22	24	46	函館稜北	22	22	44
札幌東陵	21	25	46	旭川北	20	24	44
札幌南	26	32	58	旭川南	26	32	58
札幌丘珠	20	26	46	旭川西	26	19	45

なお、前回対象校のうち一部に、その後、統合・改組・改称などがあった。その場合は、前身校の主要部分を受け継ぐ高等学校を継続調査の対象とした。以下のケースである。

《今回対象校名》

《経緯》

- 江差高校 かつてあった商業科・機械科・電気科が昭和57年に江差南高校として分離独立した。普通科の江差高校を今回対象とした。
- 檜山北高校 かつての北檜山高校と今金高校（前回対象校）とが統合した。
- 赤平高校 かつてあった採鉱科が昭和39年に芦別工業高校に移った。昭和40年に赤平高校から赤平西高校に改称した。さらに、平成元年、他校と統合して赤平高校に再度改称した。
- 紋別北高校 昭和41年に紋別高校から紋別北高校に改称した。
- 厚岸水産高校 かつての厚岸高校から改称した。

Ⅲ. 言語項目編

1. 語彙

1. 1. 語彙(1) 富良野パネル調査から

1. 1. 0. はじめに

富良野パネル調査の語彙項目について報告する。前回調査(1959年)から今回調査(1986年)までに27年の歳月が流れた。ほぼ四半世紀を隔てたパネル調査によって、この間における同一個人の言語史、あるいは同一個人からなる集団の言語史を垣間みることができる。ここでは、特に北海道に特有の語彙や表現形式にスポットをあて、それらの使用状況がどのように変化したのかを明らかにする。実際に調査しえた項目と質問の観点は多岐にわたるが、それらをすべて取り上げるのではなく、テーマを絞って報告することにしたい。

ここで分析対象とする語形や表現形式は、全部で19項目である。どの項目も、面接調査の際にインフォーマント本人に実際に使うかどうかを質問して、その時点でその語形が使用語であるかどうかの確認をしている。したがって、使用語と答えた人の割合、すなわち使用率を問題にすることができる。次に大きく2類に分けて項目を示す。

1) 事物の名称を表わす名詞類(7項目)

ゴショイモ(じゃがいも), カイベツ(キャベツ), トーキビ(とうもろこし), アキアジ(鮭), ストーフ(ストーブ), アク(薪の灰)
ホイト(乞食)

2) 動作・様態を表わす動詞, 形容詞類(12項目)

シバレル(ひどく寒い), シバレル(池の水が凍る), シバレル(手拭が凍る), ハク(手袋をする), ユルクナイ(楽でない), メンコイ(かわいい), ナンボ(値段がいくら), オバン~(こんばんは), アメル(ごはんが腐る), カテル(仲間に入れる, 加える), バクル(交換する), カッチャク(ひっかく)

全国共通語化の進展が予想されるなかで、このような北海道に特有の語彙や表現形式に、どのような使用率の変化が起こったのであろうか。大きく変化し

たものとあまり変化しなかったものなど、変化には何らかのパターンが見出させるのであろうか。そうだとしたら、そこにはどのような要因が関わっているのであろうか。

1. 1. 1. 全体の概観

富良野パネル調査のインフォーマントは、総計 106名である。生年は、最年長が1920年生れ、最年少が1944年生れである。性別は、男性55名、女性51名とほぼ同数である（詳細は2. 3. 参照）。この 106名のパネルからなる集団全体について、まず前述19項目の使用率を、前回調査と今回調査とで対比させてみよう。前回調査の使用率（%）の高い順に項目を配列する。

	前回	今回	較差	変化	水準
シバレル（ひどく寒い）	97.2	99.1	+ 1.9	△	◎
トーキビ（とうもろこし）	97.2	86.8	10.4	▽	○
アキアジ（鮭）	96.2	84.9	11.3	▽	○
オバン〜（こんばんは）	95.3	89.6	5.7	▽	○
ハク（手袋をする）	94.3	96.2	+ 1.9	△	◎
バクル（交換する）	93.4	84.9	8.5	▽	○
シバレル（手拭が凍る）	93.4	83.0	10.4	▽	○
メンコイ（かわいい）	91.5	87.7	3.8	▽	○
カッチャク（ひっかく）	91.5	81.1	10.4	▽	○
ナンボ（値段がいくら）	78.3	74.5	3.8	▽	□
アク（薪の灰）	77.4	70.8	6.6	▽	□
ユルクナイ（楽でない）	68.9	61.3	7.6	▽	□
アメル（ごはんが腐る）	67.0	54.7	12.3	▽	□
ホイト（乞食）	64.2	29.2	35.0	▼	●
ゴショイモ（じゃがいも）	63.2	23.6	39.6	▼	●
シバレル（池の水が凍る）	62.3	52.8	9.5	▽	□
カイベツ（キャベツ）	50.9	11.3	39.6	▼	●
カテル（仲間に入れる）	48.1	15.1	33.0	▼	●
ストーフ（ストーブ）	19.8	15.1	4.7	▽	●

ここで、「較差」は、前回調査と今回調査の使用率の差を示す。「+」を付した2項目以外は、全て減少幅を示す値である。「変化」は、使用率の変化を「△=やや増加、▽=やや減少、▼=大きく減少」という記号で示す。「水準」は、今回調査の使用率の水準を「◎=90%以上、○=80%台、□=50~70%台、●=50%未満」という記号で示す。

この表から、項目によって使用率とその変化の動きに大きな違いがあることは明らかである。ここでは、上述の「変化」「水準」の欄の記号分布に注目して、とりあえず計19項目を以下の5グループに分類してみる。各グループには、その特徴を明示するような仮称を与えておく。

- a) 安定型：使用率が前回調査で90%以上、今回調査でさらに増加したグループ。→シバレル（ひどく寒い）、ハク（手袋をする）
- b) 微減・安定型：使用率が前回調査で90%以上、今回調査でも80%台のグループ。→トーキビ（とうもろこし）、アキアジ（鮭）、オバン〜（こんばんは）、バクル（交換する）、シバレル（手拭が凍る）、メンコイ（かわいい）、カッチャク（ひっかく）
- c) 微減・衰退型：使用率が前回調査で60~70%台、今回調査で50~70%台のグループ。→ナンボ（値段がいくら）、アク（薪の灰）、ユルクナイ（楽でない）、アメル（ごはんが腐る）、シバレル（池の水が凍る）
- d) 激減・衰退型：使用率が前回調査で40~60%台、今回調査で10~20%台のグループ。→ホイト（乞食）、ゴショイモ（じゃがいも）、カイベツ（キャベツ）、カテル（仲間に入れる）
- e) 衰退型：使用率が前回調査で10%台、今回調査でも10%台のグループ。→ストーフ（ストーブ）

語形の使用率のみに注目すれば、このような5グループに分類できるが、実際には同様な事物・事態を表現する競合語形が存在し、場合によってはそれらとの併用、あるいは使い分けが行われているはずである。以下では、項目ごとに競合語形との勢力関係、語形の意味理解のあり方など種々の観点を交えながら、より詳細な考察を加えることにしたい。

1. 1. 2. 安定型

「シバレル（ひどく寒い）、ハク（手袋をする）」の2項目は、他の項目が

のきなみ減少傾向をみせるなかで、例外的にきわめて高い使用率を維持している項目である。数値だけで言えば、むしろ前回調査より今回調査の方がわずかに増加し、ほぼ全員が使っているとみなしてよい語形である。

ここでは、競合語形との勢力関係をみるために、いわゆる「なぞなぞ式」でたずねた時の回答を参照する。各項の冒頭に、調査時の質問文を掲げる。

【シバレル (ひどく寒い)】

冬ひどく寒いことをどうだと言いますか。

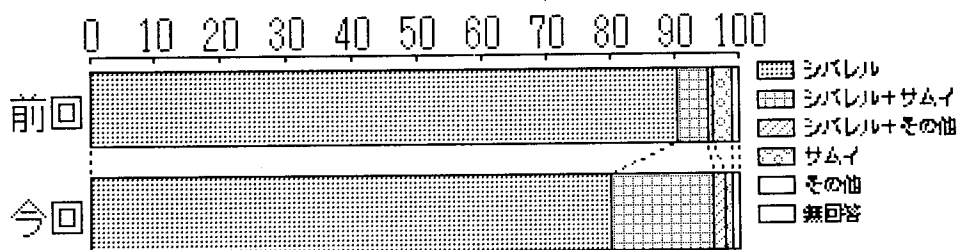


図1-1 シバレル (ひどく寒い)

この「シバレル」は全国共通語「サムイ」と競合関係にあり、両方を答えた併用の話者もいる。図1-1から明らかなように、「シバレル」単独は、前回90.6%、今回80.2%、「シバレル」と「サムイ」の併用は、前回4.7%、今回16.0%と、10%程度が単独から併用へと移行している。「ひどく寒い」ことはとにかく「シバレル」としか言わないという人が減りはじめ、「サムイ」も使う人が増えていく兆しである。「シバレル」としか言いようのない厳しい寒さが確かに冬の北海道にはあるから、そのための固有語はあくまでも保持しながら、その一方で場面によっては全国共通語も使うという傾向が出はじめてるのである。

【ハク (手袋をする)】

「手に手袋を……」それから何と申しますか。

「手袋をハク」は、全国共通語的な「手袋をハメル」「手袋をスル」と競合関係にある。図1-2から明らかなように、「手袋をハク」単独は、前回85.8%、今回87.7%で減少の兆しが全くみえない。手袋はハクものなのだという認識の強固さを、改めて感じさせる結果となっている。おそらく、この中には、

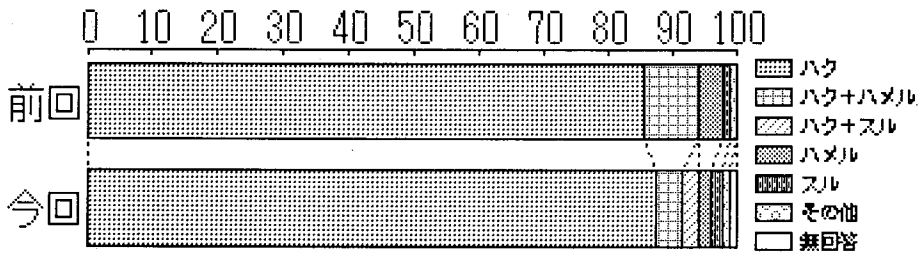


図1-2 ハク（手袋をする）

「手袋をハク」を全国共通語だと思って使っている人が、少なからず含まれているはずである。今回の富良野継続調査では、23.7%の人がこの言い方を全国共通語と意識しているという結果も出ている（相澤正夫1990「北海道における共通語使用意識」参照）。

ちなみに「ハメル」「スル」の使用率は、次の通りである。

	ハメル	ハメル+ハク	スル	スル+ハク
前回	3.8%	8.5%	0.9%	0%
今回	1.9%	3.8%	1.9%	2.8%

いずれも比較的細かな数値ではあるが、「ハメル」の使用率が半分以上に減少し、「スル」が微増傾向にあることがうかがえる。仮りに全国共通語で「ハメル」から「スル」への移行が進行中であるとするならば、その影響とも考えられる。

1. 1. 3. 微減・安定型

「トーキピ（とうもろこし），アキアジ（鮭），オバン～（こんばんは），バクル（交換する），シバレル（手拭が凍る），メンコイ（かわいい），カッチャク（ひっかく）」の7項目は、前回調査で90%以上の高い使用率であったものが、今回調査で80%台へとわずかに減少したグループである。依然として5人に4人は使っており、ひとまず安定した勢力を維持しているとみられるが、はたして本当にそう解釈してよいのかどうか、個別に詳しく検討してみることにした。

「トーキピ（とうもろこし），アキアジ（鮭），オバン～（こんばんは），シバレル（手拭が凍る）」の4項目は「なぞなぞ式」，「バクル（交換する），メンコイ（かわいい），カッチャク（ひっかく）」の3項目は「提示確認式」

の質問による。「提示確認式」は、具体的にある語形を提示して使うかどうかの確認をしたり、その意味をたずねたりする方法である。

【トーキピ（とうもろこし）】

（絵を見せて）これを何と言いますか。夏の終わりごろとれます。薄緑色の皮があって、赤い毛のふさがついています。

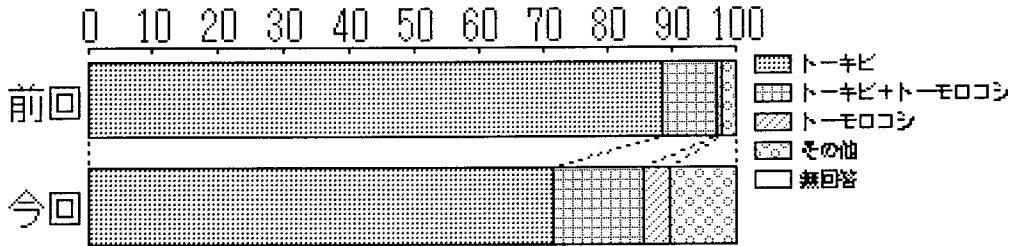


図1-3 トーキピ（とうもろこし）

図1-3から明らかなように、「トーキピ」の競合語形は「トーモロコシ」である。「トーキピ」も単独では、前回88.7%、今回71.7%と相当に減少している。一方、「トーキピ」「トーモロコシ」の併用は前回 8.5%、今回14.2%、「トーモロコシ」単独は前回 0.9%、今回 3.8%と少し増加している。「トーキピ」も、使用率をみれば86.8%と依然として勢力を維持しているが、実際はこのように徐々に「トーモロコシ」への移行が始まっているのである。なお、「トーキピ」を使うかどうかの確認に対して、今回「使った」と過去形で答えた人が13.2%に増えていることも、このことを裏付けている。

今回調査で「その他」が10.4%に増えていることも目をひく。念のため、とうもろこしは種類によって区別があるかどうかを質問してみた。結果は、次の通りである。

	ある	ない	昔はあった	知らない
前回	30.2%	2.8%	0%	67.0%
今回	62.3%	14.2%	5.7%	17.9%

今回は、区別があると回答した人が倍増し、知らないという人は大幅に減少した。区別がある場合には、種類によって「コーン、デントコーン、ハニーバントム」などと呼び分けをしているようである。

【アキアジ（鮭）】

秋になると海から川へ上って来る大きな魚で、北海道名産です。

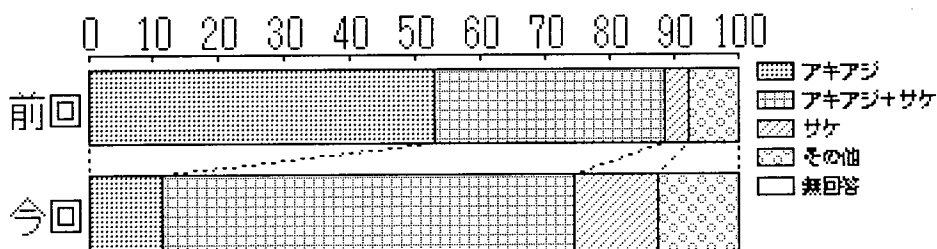


図1-4 アキアジ（鮭）

図1-4から、「アキアジ」の競合語形は「サケ」（「シャケ」も含む）であり、前回からすでに両者の併用率が相当に高かったことがわかる。それでも前回は「アキアジ」単独が52.8%と5割を超えていたが、今回は11.3%と激減している。反対に「サケ」単独の方は、前回3.8%から今回17.9%へと伸びをみせ「アキアジ」単独を上回った。「アキアジ」「サケ」併用は、前回35.8%から今回63.2%へとさらに大幅に増加している。「アキアジ」の使用率は今回も84.9%と確かに高いが、確認質問に対して「使った」と過去形で答えた人が11.3%に増えており、徐々に衰退しつつあることがわかる。

固有語形の「アキアジ」は依然よく使われてはいるものの、その一方で全国共通語形の「サケ（シャケ）」も盛んに使われるようになり、両者はまさに併存状態にある。おそらく改まった上位場面では「サケ」、うちとけた下位場面では「アキアジ」といった使い分けがなされているものと思われる。

【オバン～（こんばんは）】

あなたが夜8時ごろ、この町の知っている人の家へ用があって行ったとします。玄関で何と言って夜のあいさつをしますか。

図1-5の凡例からもわかるように、「オバン」につづける言い方は様々である。「オバン～」という「オバン系」の使用は、表面的には前回より今回の方がむしろ盛んになったように見える。前回はなぜか34.9%（3人に1人）の高率で「無回答」が出たが、今回は14.2%に減った（マイナス20.7%）。その分だけ「オバン～」がそれぞれ増えているのであるが、中でも「オバンデシタ」「オバンデゴザイマス」の増加が目立つ。

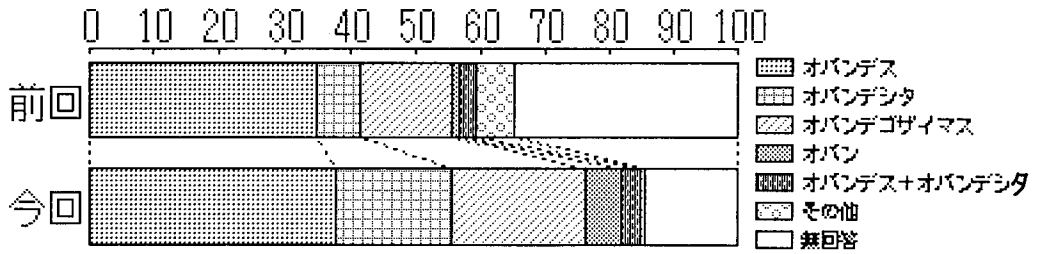


図1-5 オバン～（こんばんは）

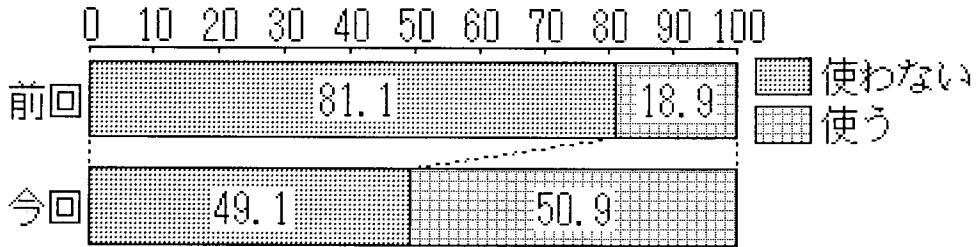


図1-6 「オバン～」以外を使うか

「無回答」の意味するところが気になるが、「オバン系」以外の語形を使うかどうか質問してみた結果は、図1-6の通りである。前は5人中4人まで「オバン系」専用であったが、今回はそれが2人に1人まで減っている。具体的な表現は不明であるが、「オバン系」以外の言い方も使われはじめ、全体としてみれば、夜のあいさつ表現は「オバン系」を中心にしながら多様化が進んでいるものと推測される。

【バクル（交換する）】

「バクル」ということばを使うことがありますか。それはどういう意味ですか。

まず「バクル」という語形を提示し、その使用状況を内省によって確認してもらった結果が、図1-7である。百分率は次の通り。

	使う	使った	聞く	聞いた	無回答
前回	93.4%	1.9%	4.7%	0%	0%
今回	84.9%	11.3%	2.8%	0.9%	0%

「使った」とすでに過去の事として答えた人は、前はわずかに1.9%に

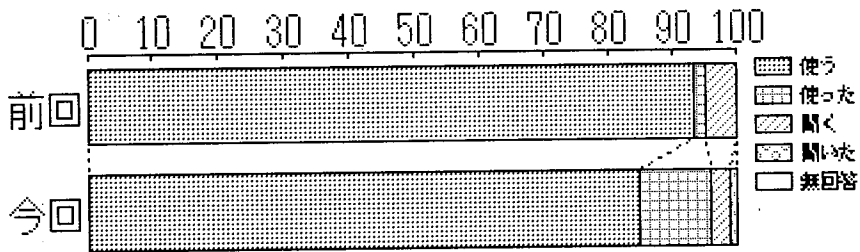


図1-7 バクル (交換する)

過ぎなかったが、今回は11.3%に増えている。この人たちはすでに全国共通語の「交換する、とりかえる」に乗り換えたものとみえる。

「バクル」の意味をたずねたところ、「とりかえる」と答えたのは、前回が69.8%であったのに対し、今回は99.1%とほぼ全員になった。このように「バクル」は、ほぼ全員の理解語である。また同時に、場面によっては「トリカエル」を使うことも相当に増えていると予想される。前は「無回答」が30.2%もあったのだが、おそらくこの中には、「バクル」のもつ方言特有のニュアンスがうまく表現できないまま、時間切れで「無回答」になった人も含まれている。この語は、単に「とりかえる」と言うだけではどこか足りない、卑俗な語感（「巧妙に、ずるく」など）をもっていた可能性もある。

【シバレル (手拭が凍る)】

濡れた手ぬぐいが寒さのためにカチカチになることを手ぬぐいがどうなると言いますか。

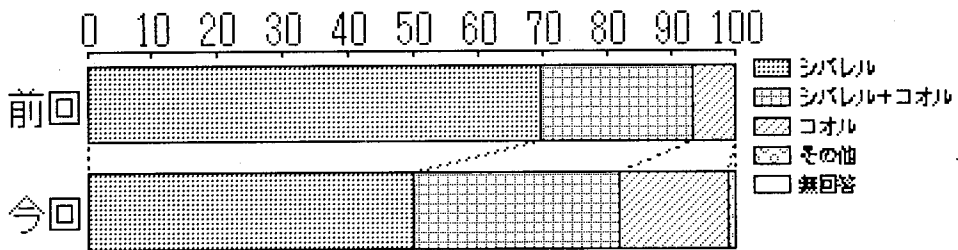


図1-8 シバレル (手拭が凍る)

「厳寒」を表わす「シバレル」に比べ、やや衰退傾向に加速がついてきたのが、「手拭が凍る」場合の「シバレル」である。図1-8から明らかなように、

「シバレル」単独は、前回69.8%から今回50.0%へと5割ラインまで落ちこんでいる。一方、全国共通語の「コオル」は、単独使用でも前回 6.6%から今回 17.0%に伸び、「シバレル」との併用も含めた使用率は、前回30.2%から今回 49.1%へとさらに大きく伸びている。

北海道特有の表現として、以前は手拭のような「固形物の凍結」の場合にも盛んに「シバレル」を使っていたのが、急速に「コオル」によって置き換えられてゆく、その途上を示しているものであろう。「厳寒」の場合には、「シバレル」でしか言い表わせないような厳しい寒さという積極的な理由が見つかるが、「固形物の凍結」の場合には、表現としての味わい以外に「コオル」をしりぞけるだけの理由が見出だしにくいせいかもしれない。

【メンコイ (かわいい)】

かわいいという意味で「メンコイ」ということばを使いますか。

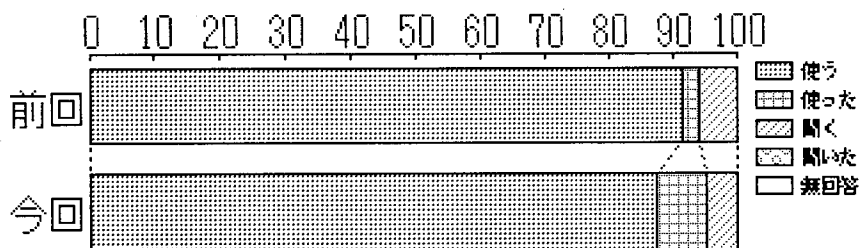


図1-9 メンコイ (かわいい)

この項目も、提示確認式の質問である。使用状況を、図1-9に示す。百分率は次の通り。

	使う	使った	聞く	聞いた	無回答
前回	91.5%	2.8%	5.7%	0%	0%
今回	87.7%	7.5%	4.7%	0%	0%

前回から今回にかけて「使う」がわずかに減り、その分「使った」が増えている。微かに衰退の兆しはみられるものの、「メンコイ」は依然として非常によく使われているようである。

「メンコイ」は子猫や子犬など、小さな動物について言うことが多い。人間についても、赤ちゃんなどを見て「メンコイネ」と言う。人間についても使うかどうかを確認したところ、次のような結果が得られた。

	使う	使った	聞く	聞いた	無回答
前回	85.8%	0.9%	9.4%	0%	3.8%
今回	88.7%	3.8%	5.7%	0%	1.9%

やはり、圧倒的に「使う」という回答である。代表的な北海道方言として、「メンコイ」は確固とした基盤に立っていると言ってよかろう。

【カッチャク（ひっかく）】

「カッチャク」ということばを使うことがありますか。それはどういう意味ですか。

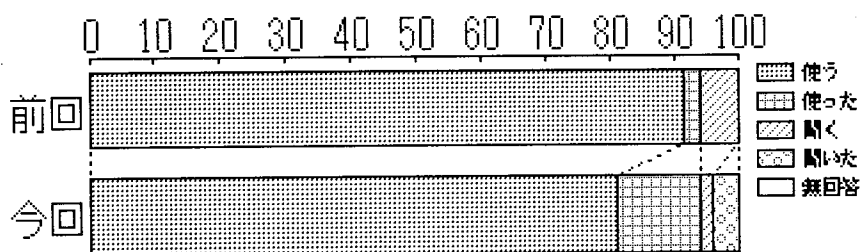


図1-10 カッチャク（ひっかく）

提示確認式の質問に対する回答を、図1-10に示す。百分率は次の通り。

	使う	使った	聞く	聞いた	無回答
前回	91.5%	2.8%	5.7%	0%	0%
今回	81.1%	13.2%	1.9%	3.8%	0%

前回から今回にかけて、「使う」が10%程度減ってその分「使った」が増え、また「聞く」がわずかに減ってその分「聞いた」が増えている。「使う」「聞く」がそろって「使った」「聞いた」へと移行し、徐々に過去のことばへと衰退していく気配である。

「カッチャク」の意味については、「ひっかく」という回答が、前回の69.8%に対し、今回は98.1%とほぼ全員になった。このように「カッチャク」は、ほぼ全員の理解語である。この点は、前述の「バクル（交換する）」の場合と非常によく似た傾向を示している。これは、別の見方をすれば、全国共通語の「トリカエル」や「ヒッカク」が、一方で十分な普及をとげている証拠であるとも言えようか。また、前回は「無回答」が30.2%もあり、この点も「バクル」と酷似している。やはりこの中にも、「カッチャク」の方言的なニュアンスが

うまく表現できないままに、「無回答」扱いになってしまった人が多く含まれていよう。

1. 1. 4. 微減・衰退型

「ナンボ（値段がいくら），アク（薪の灰），ユルクナイ（楽でない），アメル（ごはんが腐る），シバレル（池の水が凍る）」の5項目は，前回調査で60～70%台の使用率を示していたものが，今回調査で50～70%台へと，わずかに減少したグループである。前回の段階ですでに衰退過程に入っていたとみられるが，今回は小幅の減少に止まっている。以下，個別に変化の動きを検討する。「ナンボ（値段がいくら），アク（薪の灰），シバレル（池の水が凍る）」は「なぞなぞ式」，「ユルクナイ（楽でない），アメル（ごはんが腐る）」は「提示確認式」の質問による。

【ナンボ（値段がいくら）】

ごく親しい人に物の値段を尋ねる時，何と言って尋ねますか。

「このマンジュウはひとつ……」それから何と言いますか。

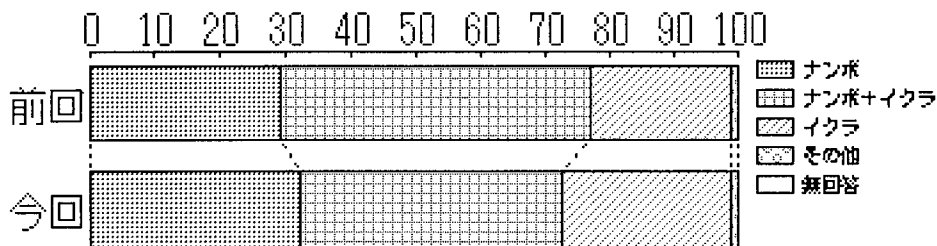


図1-11 ナンボ（値段がいくら）

結果は，図1-11に示す通り，前回と今回とで大きな変化はない。細かくみると，「ナンボ」「イクラ」の併用が48.1%から40.6%へと減少して，その分「ナンボ」「イクラ」の単独使用がそれぞれ微増している。「ナンボ」の使用率が減っているにもかかわらず，「ナンボ」単独が減少していないのは，「ごく親しい人に」という場面設定でたずねたことが，回答の選択に影響したためと考えられる。下位場面ということで「ナンボ」が出やすかったのであろう。

このように下位場面では，「ナンボ」と「イクラ」がほぼ拮抗状態にある。ここから判断して，上位場面では「イクラ」の方が相当に優勢になっているも

のと思われる。

【アク（薪の灰）】

たきぎ（まき）をたいたあとに残る白いものを何と言いますか（「燃える前の形をとどめている場合ではなく、完全に燃え尽きた状態のことを尋ねる」という指示あり）。

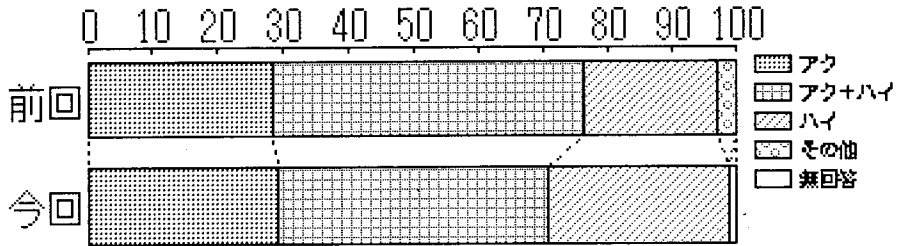


図1-12 アク（薪の灰）

回答結果は、図1-12に示す通りである。前回と今回とであまり変化がみられないのは、前述の「ナンボ（値段がいくら）」の場合と同様である。全国共通語形「ハイ」の単独使用が若干増えているが、「アク」の単独使用も減っているわけではない。意味領域に違いはあるが、「アク」という語形自体は全国共通語でも使われているため、そのことが方言的な「アク」の衰退を押し止めている可能性もある。いずれにせよ、「アク」と「ハイ」も、ほぼ拮抗状態にあると言ってよい。

【ユルクナイ（楽でない）】

楽でない・苦勞だという意味で「ユルクナイ」ということばを使いますか。

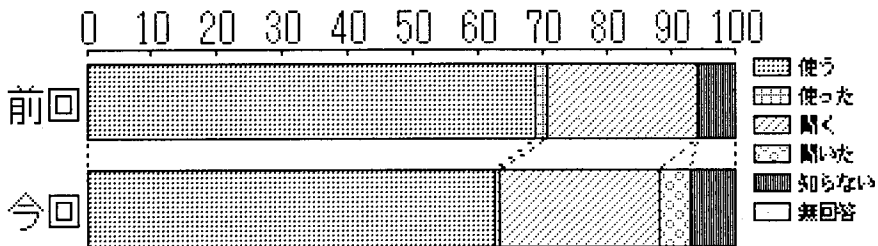


図1-13 ユルクナイ（楽でない）

回答結果を、図1-13に示す。回答区分ごとの百分率は、次の通り。

	使う	使った	聞く	聞いた	知らない	無回答
前回	68.9%	1.9%	23.6%	0%	5.7%	0%
今回	61.3%	0.9%	24.5%	4.7%	6.6%	1.9%

図1-13から明らかなように、この項目も前回と今回とであまり大きな変化はみられない。もっとも「使う」がわずかに減少し、「聞いた」という過去形の回答も現れているので、衰退過程にあることは確かである。

注目すべきは、「知らない」という回答が、前回 5.7%、今回 6.6%と、わずかながら現れていることである。これは、「1. 1. 3. 微減・安定型」の各項目には見られなかった回答区分である。使用率があるラインより下回ると、「知らない」という区分の人が自ずと混じってくるということであろうか。

【アメル（ごはんが腐る）】

「アメル」ということばを使うことがありますか。それはどういう意味ですか。

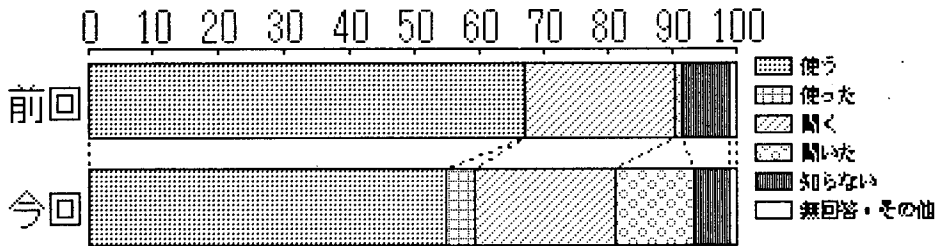


図1-14 アメル (ごはんが腐る)

回答結果を、図1-14に示す。回答区分ごとの百分率は、次の通り。

	使う	使った	聞く	聞いた	知らない	無回答他
前回	67.0%	0%	23.6%	0.9%	7.5%	0.9%
今回	54.7%	4.7%	21.7%	12.3%	5.7%	0.9%

「アメル」の場合は、前述の「ユルクナイ」に比べて、より鮮明に衰退の途上にあることが読み取れる。「使う」が10%以上減少し、「使った」「聞いた」という過去形の回答が目立って増加している。また、「知らない」という回答が、前回、今回ともに見られるのは、「ユルクナイ」の場合と同様である。

「アメル」の意味については、「腐る」という回答が、前回の64.2%に対し、

今回は88.7%と大幅に増えた。これは、「1. 1. 3. 微減・安定型」で扱った「バクル（交換する）」「カッチャク（ひっかく）」の場合の意味理解とよく似た傾向を示している。但し、「アメル」という語形自体を知らない人も若干いるので、全員の理解語にはなっていない。また、この項目も前回は「無回答」が34.0%にも達していた。「バクル」「カッチャク」の場合と同様、この中にも方言的なニュアンスがうまく表現できないまま、「無回答」扱いになった人が含まれていよう。

【シバレル（池の水が凍る）】

池の水が寒さのために氷になることを水がどうなると言いますか。

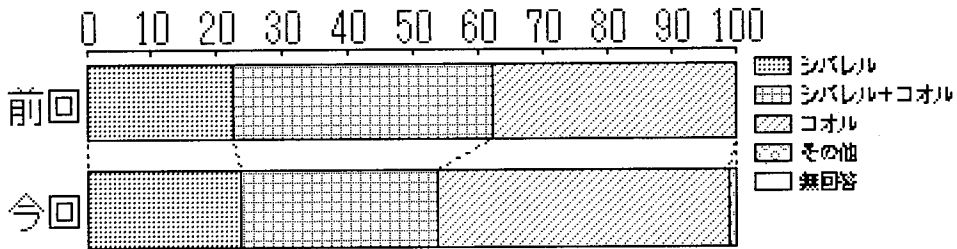


図1-15 シバレル（池の水が凍る）

「手拭の凍結」を表わす「シバレル」に比べ、一段と衰退が進んでいるのが、「池の水が凍る」場合の「シバレル」である。しかし、図1-15から明らかのように、「シバレル」単独は前回、今回とも20%台に踏み止まり、一方的に衰退に向かっているわけでもないようだ。また、全国共通語の「コオル」も、単独使用では前回37.7%から今回45.3%に伸びたものの、「シバレル」との併用は、むしろ減っているのが現状である。

これまでの「シバレル」3項目の分析から、北海道固有の「シバレル」は、かつては「厳寒」「固形物の凍結」「水の凍結」の三者を含む幅広い意味領域をカバーしていたのが、ここへ来て「凍結」を表わす二つの意味領域で、全国共通語「コオル」の進出をうけ、徐々に交替が進行していることが分かる。

1. 1. 5. 激減・衰退型

「ホイト（乞食），ゴショイモ（じゃがいも），カイベツ（キャベツ），カテル（仲間に入れる）」の4項目は、前回調査で40～60%台の使用率だったも

のが、今回調査で一気に10~20%台へと大幅に衰退したグループである。「ゴシヨイモ（じゃがいも），カイベツ（キャベツ）」は「なぞなぞ式」，「ホイト（乞食），カテル（仲間に入れる）」は「提示確認式」の質問による。

【ホイト（乞食）】

「ホイト」ということばを使うことがありますか。それはどういう意味ですか。

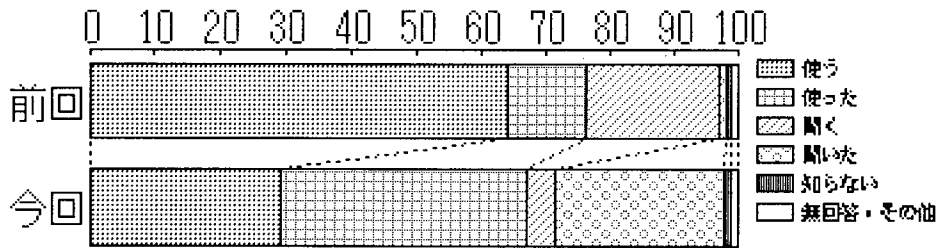


図1-16 ホイト（乞食）

回答結果を、図1-16に示す。回答区分ごとの百分率は、次の通り。

	使う	使った	聞く	聞いた	知らない	無回答他
前回	64.2%	12.3%	20.8%	0.9%	0.9%	0.9%
今回	29.2%	37.7%	4.7%	26.4%	0.9%	0.9%

「使う」「聞く」が大幅に減少し、その分「使った」「聞いた」という過去形の回答が増加している。ほぼ全員が語形としては知っているものの、すでに使用語としては大きく衰退していることが分かる。

「ホイト」の意味については、「乞食」という回答が、前回の76.4%に対し、今回は81.1%とわずかに増えた。8割程度の人の理解語ということになる。また「無回答」は、前回の20.8%に対し、今回は10.4%に減ったが、率として決して低いとは言えない。語形は知っているが、意味の特定や表現がしにくいことばということであろうか。

【ゴシヨイモ（じゃがいも）】

（絵を見せて）食べものの名前です。このいもを何と言いますか。

「なぞなぞ式」でたずねた結果、回答区分は多様なものとなった。「ゴシヨイモ」「ジャガイモ」「バレイショ」「イモ」が主たる回答語形であるが、こ

これらの組合わせである複数回答も数多く現われた。ここでは、変化の概略を捉えるために、上記4語形の単独回答のみを取り上げる。図1-17は、語形ごとの出現率を、前回と今回とで対比させて示したものである。

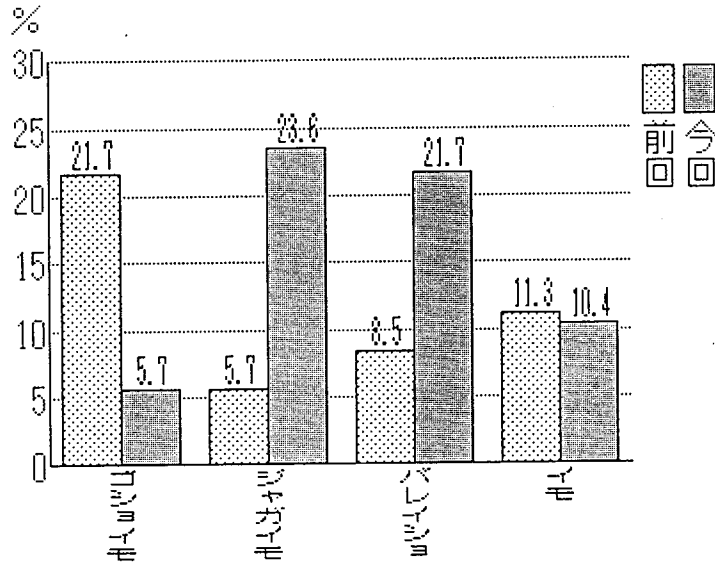


図1-17 「じゃがいも」の代表的語形（単独回答のみ）

前回は、「ゴショイモ」が圧倒的に多く、「イモ」「パレイショ」「ジャガイモ」の順であったが、今回は、順序が全く逆転して、「ゴショイモ」は最下位に落ちた。「ゴショイモ」が大きく衰退したのに対して、「ジャガイモ」が大きく伸び、「パレイショ」がこれに続いている。「イモ」にはほとんど変化がない。

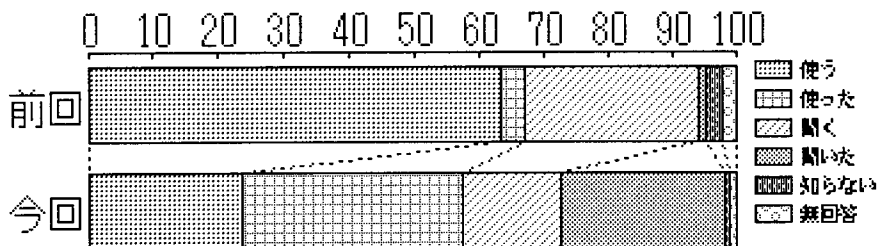


図1-18 ゴショイモ（じゃがいも）

「ゴショイモ」を使うかどうかの確認に対しては、図1-18に示すような回答が得られた。回答区分ごとの百分率は、次の通り。

	使う	使った	聞く	聞いた	知らない	無回答
前回	63.2%	3.8%	27.4%	0.9%	2.8%	1.9%
今回	23.6%	34.0%	15.1%	25.5%	0.9%	0.9%

「使う」「聞く」が大幅に減少し、反対に「使った」「聞いた」という過去形の回答が大幅に増加している。この回答分布は、語形が衰退過程にあること確実に裏付けるものと言えよう。とはいえ「ゴショイモ」ということば自体がまだ皆によく知られていることも事実のようだ。なお、道南地方では「ニドイモ」という語形が現われるが、富良野では使われていないようである。

【カイベツ（キャベツ）】

（絵を見せて）これを何と言いますか。大きな葉が巻いて、玉になる野菜です。

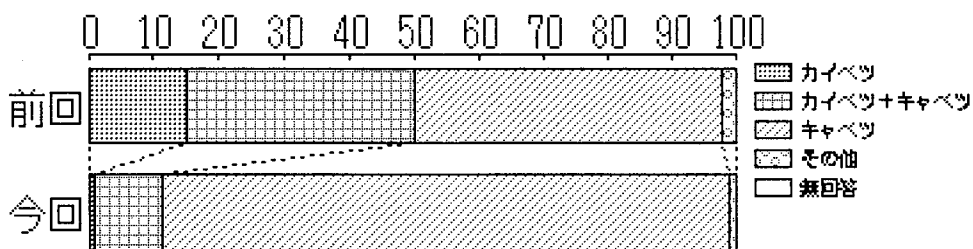


図1-19 「キャベツ」の語形

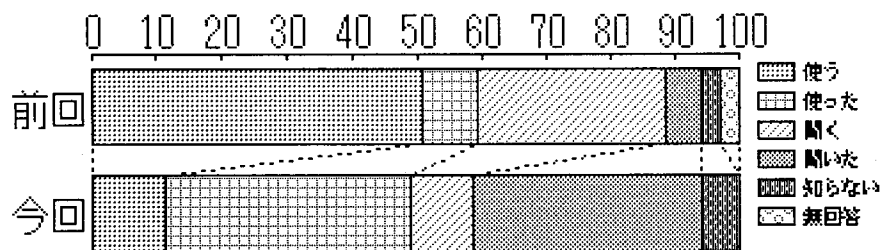


図1-20 「カイベツ」の使用状況

図1-19から明らかなように、北海道固有の語形「カイベツ」は、「キャベツ」との併用を含めた使用率が、前回50.9%から今回11.3%へと激減したばかり

りでなく、単独使用も前回15.1%から今回 0.9%へとほとんどゼロになった。反対に「キャベツ」は、今回、単独使用が87.7%とほぼ9割にまで達し、併用の場合も含めれば、全員の使用語と言える状況になっている。

「カイベツ」を使うかどうかの確認に対しては、図1-20に示すような回答が得られた。回答区分ごとの百分率は、次の通り。

	使う	使った	聞く	聞いた	知らない	無回答
前回	50.9%	8.5%	29.2%	5.7%	2.8%	2.8%
今回	11.3%	37.7%	9.4%	35.8%	5.7%	0%

「使う」「聞く」が大幅に減少し、反対に「使った」「聞いた」という過去形の回答が大幅に増加しているのは、前述の「ゴショイモ」の場合と同様である。但し、こちらの方が、一段と変動幅が大きくなっている。もっとも、「カイベツ」ということばが、まだ皆の記憶に留まっていることも確かなようである。

【カテル（仲間に入れる）】

「カテル」ということばを使うことがありますか。それはどういう意味ですか。

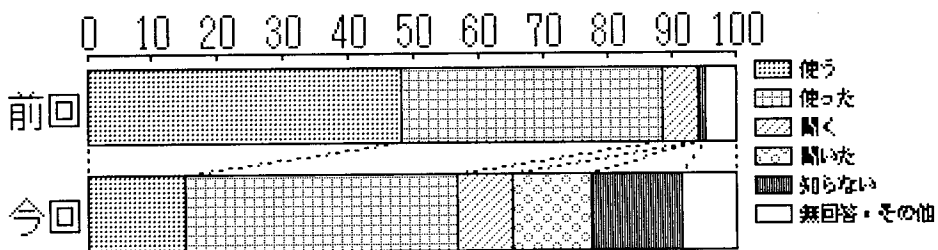


図1-21 カテル（仲間に入れる）

回答結果を、図1-21に示す。回答区分ごとの百分率は、次の通り。

	使う	使った	聞く	聞いた	知らない	無回答他
前回	48.1%	40.6%	5.7%	0%	0.9%	4.7%
今回	15.1%	41.5%	8.5%	12.3%	14.2%	8.4%

全国共通語では、「かてて加えて」という言い回しにのみ残っている語形である。「使う」は、前回すでに5割ラインを割っていたが、さらに大幅に減少して10%台となった。「使った」は前回の段階で40%台に達しており、衰退の時期がかなり早かったことを示している。「聞いた」「知らない」「無回答」

の合計が大幅に増えていることも、すでに衰退過程の終わりにさしかかったことを物語っている。

「カテル」の意味については、「加える，仲間に入れる」という回答が，前回の65.1%に対し，今回は68.9%とわずかに増えた。7割程度の人を理解語ということになる。また「無回答」は，前回34.9%，今回28.3%と，高率のままである。事実上，約3割の人が意味を知らないことになる。

1. 1. 6. 衰退型

「ストーフ（ストーブ）」は，前回調査，今回調査ともに10%台の低い使用率を示した項目である。この項目は，「なぞなぞ式」の質問による。

【ストーフ（ストーブ）】

（絵を見せて）これは何と言いますか。冬寒い時にたくものです。色々種類がありますが，ひっくるめて何と言いますか。

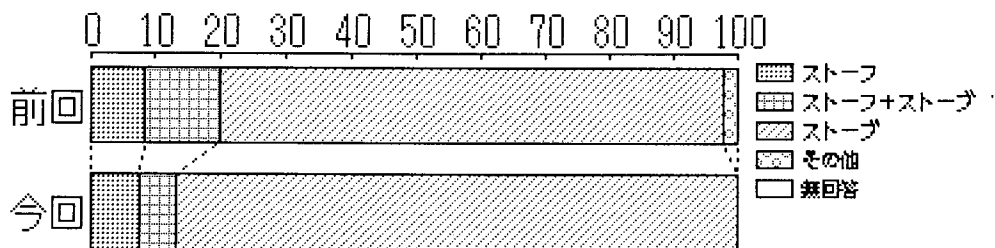


図1-22 ストーフ（ストーブ）

「ストーフ」の使用率は，前回すでに19.8%と，他の項目と比べて格段に低いレベルであったが，今回は15.1%とわずかな減少に止まった。全国共通語の「ストーブ」と語形がほとんど違わないために，一度「ストーフ」と覚えた人は，大抵がそのまま通しているのであろう。図1-22から明らかなように，「ストーフ」単独は，前回，今回ともすでに1割以下になっている。一方「ストーブ」単独は，そろそろ9割に届く勢いである。いずれにしても，消えていくことがすでに明らかになった語形と言えよう。

1. 1. 7. まとめ

以上のように、使用率の変化に注目しつつも、さらに語形ごとの使用状況に個別に踏み込んでみると、変化の動きにそれぞれ特徴が見出されることが明らかになった。

冒頭で分類した5グループは、変化の類型としてほぼ妥当なものと思われるが、これに「併用率」の多寡を加味して考察することが、より正確に実態を捉えるうえで重要であることも明らかになった。方言語形も、全国共通語形とうまく使い分け段階に入り、あるいは意味分担が確立することにでもなれば、減び去ることなくひとまずは安定した地位を得る、と言えるのではなかろうか。

本報告では、パネル調査と言いながら、実は同一個人からなる集団の言語史しか扱っていない。個人レベルでの語形の乗り換えが、実際にどのように行われたのかについては、全く触れることができなかった。また、インフォーマントの社会的属性にもとづく使用傾向の分析も行っていない。いずれも、今後の重要な課題として指摘しておきたい。

1. 2. 語彙(2) 高校生調査から

1. 2. 0. はじめに

前回調査によれば、北海道に行われている方言形には、全道にわたって広まっているものと、海岸部を中心に使用されているものと、大きく分けて二つの類型があることがわかっている。前者が「北海道共通語」であり、後者がいわゆる「浜ことば」と呼ばれるものである。

このような北海道内におけることばの地域差が、現在はどうなっているか、また、約30年の間にどのように変化したかを明らかにすることがここでの目的である。

予想される変化としては、まず北海道全体が等質化に向かう方向、すなわち、

イ. 全国共通語化が進む

ロ. 北海道共通語化が進む

ということが考えられる。イ. が一般に言う「共通語化」であり、ロ. は全道が共通の方言形で統一される地方的な共通語化のことである。一方、これらとは逆に、

ハ. 浜ことばがそのまま保持される

という可能性も予想されるであろう。さらに、

ニ. 新たな地域差が形成される

ということもないとは言えない。しかし、このうちで最も可能性が高いのは、各地で報告されているような全国共通語化の進展であろう。最近の北海道共通語の状況を5地点の調査から把握しようとした小野米—1989「北海道方言の均一化」によれば、北海道共通語は一部に相変わらず高い使用率を保つ語が見られる反面、おおかたは衰退が進み全国共通語化に向かっているという。そのような動向が、ここでの全道を対象とした考察でも認められるであろうか。

さて、前回調査と今回調査の比較に入る前に、前回調査で得られた方言形の分布類型をもう一度確認しておこう。前回調査の分布を全体的に見直した結果、次の四つの類型を抽出することができた。

(1) 全道型

(2) 海岸a型

(3) 海岸b型

(4) 海岸c型

まず、「全道型」とは当該の語形が北海道全域にまんべんなく分布する型であり、北海道共通語と言われるものはここに分類される。次に、海岸部を中心に分布する型を「海岸型」としたが、これはその中をさらに3種類に分けた。すなわち、どの海岸部にも分布の見られるものを「海岸a型」、渡島半島から日本海側に集中して分布するものを「海岸b型」、逆に、渡島半島を除く海岸部に分布するものを「海岸c型」とした。

なお、北海道における語彙の分布類型を扱ったものには、佐藤亮一1976「北海道方言の地理的背景」があり、そこでも「全道型」とここでの「海岸型」にあたる「道南型」を最も顕著な類型として認めている。ただし、佐藤氏の「道央型」と「道東型」は、そのほとんどの語が全国共通語であるため、方言形を中心としたここでの考察には現れていない。

以下に、前回調査における、それぞれの型に属する調査語形を掲げる。「全道型」「海岸a型」「海岸b型」は事例が豊富だが、「海岸c型」は少ない。

(1) 全道型

<1>ゴショイモ (じゃがいも), <2>カイベツ (キャベツ), <3>トーキビ・トーキミ (とうもろこし), <4>アキアジ (鮭), <5>デレキ・デレッキ (火掻棒), <6>アク・アグ (灰), <7>シバレル (ひどく寒い), <8>シバレル (手拭が凍る), <9>シバレル (池の水が凍る), <10>ハク (手袋をする), <11>ハッチャキニナル (一生懸命になる, 思いきりがんばる), <12>シャッコイ (冷たい), <13>ショッパイ (塩辛い), <14>メンコイ (かわいい), <15>コワイ・コワカッタ (疲れた, ぐたびれた), <16>アズマシー (気楽だ, ゆったりしている, 気まずくない), <17>ナンボ (値段がいくら), <18>オバンデス (こんばんは)

(2) 海岸a型

<19>エントー (煙突), <20>クロブシ・クロボシ・クロコブシ (蹠), <21>ヤノアサッテ・ヤナサッテ (あさっての次の日), <22>シアサッテ (あさっての次の次の日), <23>カム (嗅ぐ), <24>アメル (ごはんが腐る), <25>オガル (草や木が大きくなる), <26>タナク・タガク (重いものを持ち上げる), <27>カテル (仲間に入れる, 加える), <28>スカイ・スッカイ (すっぱい), <29>ヤバシー・ヤバチー (きたならしい, むさくるしい)

(3) 海岸 b 型

<30>キミ・キピ (とうもろこし), <31>シガ・スガ (つらら), <32>アメユキ・アマユキ (みぞれ), <33>ストフ・ストーフ (ストーブ), <34>アクト・アグド (踵), <35>ヨダレ・ヨダリ (唾), <36>ペロ・ピロ (唾), <37>ネマル (すわる), <38>ヒザオル・ヒザツク (すわる), <39>ウマイ (甘い)

(4) 海岸 c 型

<40>エント (煙突)

ただし、以上のような四つの分布類型への各語形の振り分けは、かならずしも截然としたものではない。中には別の類型を立てた方が適切と考えられる場合もあるかもしれない。例えば、「全道型」には、当該の語形がすべての地点でまんべんなく使われているという典型的な場合の他に、分布の広がりとしては北海道全域にわたるが、あちらこちらに不使用の地点が混じるという場合も含めてある。また、特定の地域にかぎってやや分布が弱いというケースもあり、それらは「全道型」以外の類型に連続していくものと言える。逆に、「海岸型」には、他の地域に分布の全く見られない典型的なパタンの他、分布は内陸部にも及んでいるが、とりわけ海岸部に集中しているというものも含めることにした。特に、内陸部の三笠・歌志内・赤平等の炭鉱地域は、そこに集まった人々に漁村出身者が多いために、海岸部と同じ傾向を示すことがよくある。結局、ここでの分布類型の認定は、地域間の分布の濃度の差を相対的に判断したものということになる。なお、分類にあたり問題となりそうな点については、後ほど個々の語形ごとに注意することにした。

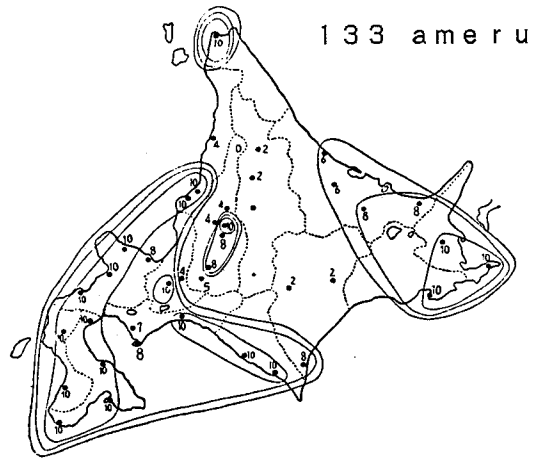
ところで、30年間の分布の変化をとらえようとするならば、上で述べたような「分布の型」ということの他に、「分布の量」という側面にも注目しなければならないであろう。30年前に比較して語形の使用地域自体に変化がなくとも、その内部において、使用者が増えるとか減るとか、そういう量的な移り変わりは認められるはずである。この調査では、各地点ごとに複数の人数を調査しているので、そのような量的な側面からの分析も可能である。そして、実際のところ結論を先取りして言えば、分布の型はそのままで、分布の量が減少するという語形が非常に多いのである。

このような量的な側面にも注目しつつ、以下では、30年間の分布の変化を具体的事例に即して明らかにしたい。

【付】高校生調査の回答状況の図示について（この項、杉戸分担）

本報告での高校生調査の回答状況の図示の方法について説明しておく。この説明は、高校生調査の語彙項目を扱う 1. 2.，文法項目を扱う 2. 2.，および言語生活・方言意識を扱う IV. 6. に関係する。

前回調査の報告書では、たとえば参考図①のように、北海道全図の各該当地点に数値を直接記載し、これに調査項目ごとの基準による「等高線」式の補助線を入れて、数値の地理的な分布を示していた。この数値は、各高校での回答者数が5人～9人という幅のある小人数であったため、これを標準化する必要上、各高校の回答者数が10人であったとして換算して、当該の回答を選んだ人の人数を算出したものである。いわば十分率である。



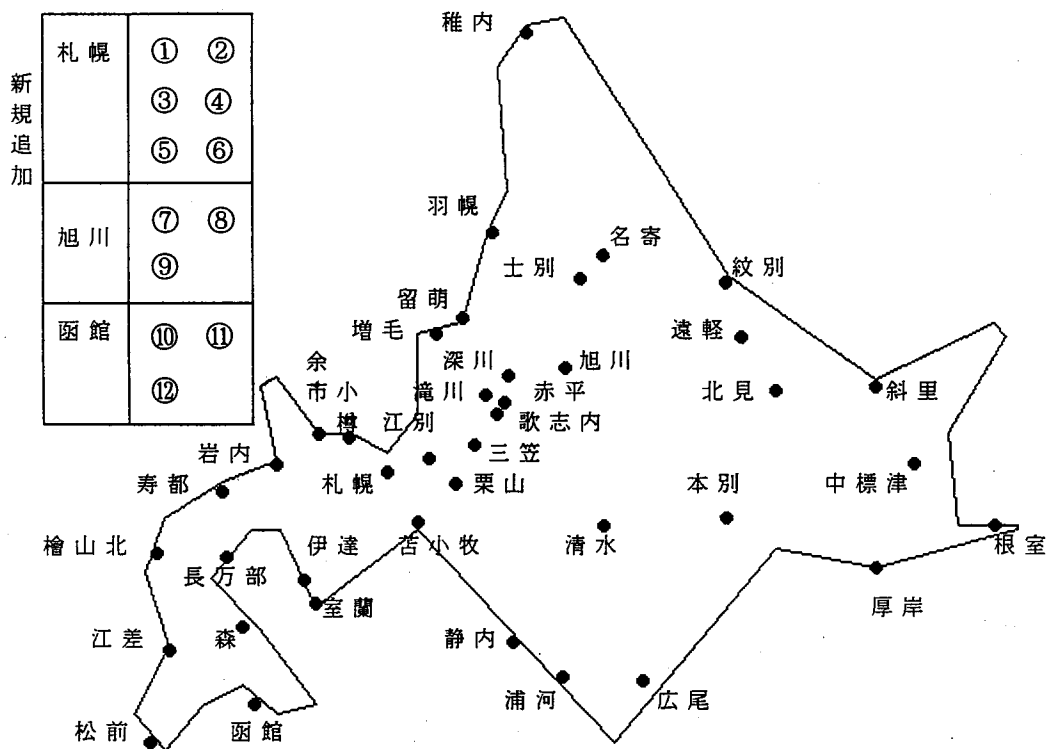
参考図① 前回報告書での図示（例）

これに対して、今回調査では、各調査対象校で原則として50人（男女25人ずつ）を対象にした。

前回と今回の結果を比較するのが調査の趣旨であることを思えば、調査人数や調査方法（前回は面接方式、今回はアンケート方式）の上での差異は問題を含んでいるが、そのことを留意しつつも、本報告では、両調査を概括的に対照することを目標として、以下のような手順で作成した両調査共通の図によって結果を示すこととした。

- ① 前回調査の結果は、前回報告書で標準化された数値（十分率）を10倍した値を仮の百分率として扱う。
- ② 今回調査の結果は、各調査校の数値を百分率に置き換えて扱う。
- ③ それぞれの百分率を、北海道の概略図の中の調査地点ごとに描く円の大きさに視覚化して示す。
- ④ 原則として、同じ質問項目の図を左右に並べることにより比較対照の便を計る。

参考図②に、この手順で作成する図に記入する調査対象地名と位置を示す。地図の中には、両調査で継続して対象とした40高校が記入してある。また、図の左横に四角の欄を設けて、今回あらたに対象とした大都市（札幌・旭川・函館）の12校を取り出して示す。欄の中の12校の位置は下に示すとおりである。



参考図② 高校生調査の対象高校所在地点

【新規対象高校の図示の位置】

- | | | | | | | |
|----|---|------|---|------|---|------|
| 札幌 | ① | 札幌南 | ② | 札幌西 | ③ | 札幌手稲 |
| | ④ | 札幌丘珠 | ⑤ | 札幌東陵 | ⑥ | 札幌西陵 |
| 旭川 | ⑦ | 旭川北 | ⑧ | 旭川西 | ⑨ | 旭川南 |
| 函館 | ⑩ | 函館中部 | ⑪ | 函館西 | ⑫ | 函館稜北 |

1. 2. 1. 「全道型」の語形

(1) 分布の型は変わらず分布の量が増減したもの

前回調査で「全道型」の語形は、今回調査でも同じく「全道型」をとるものがほとんどである。つまり、分布の型自体にはあまり変化が認められない。しかし、分布の量の減少は多くの項目で明らかに確認される。

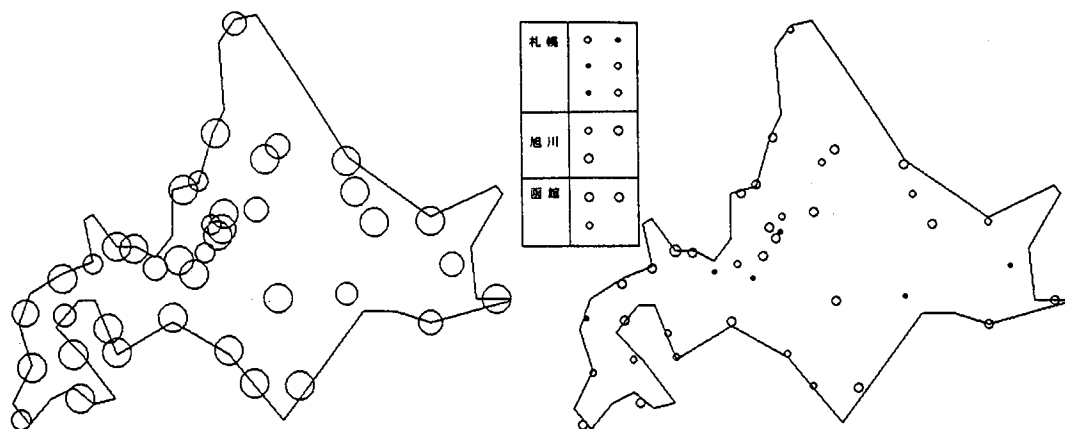


図1-23-1 前回 オバンデス 図1-23-2 今回 オバンデス

そのような傾向が顕著に現れたのが「オバンデス」である。「オバンデス」の前回調査の分布（図1-23-1）は典型的な「全道型」であり、北海道全域でまんべんなく使用率が高い。ところが、今回調査（図1-23-2）では全道で一様に使用が減っており、二つの調査の間には分布の量の面で極端な差を認めることができる。

この「オバンデス」のように使用が激減した結果、全道的に分布が消えてしまったものに「ゴショイモ」と「カイベツ」がある。二つはよく似た傾向を示すので、ここでは「カイベツ」の図のみを掲げる（図1-24-1, -2）。今回調査の分布は「オバンデス」に比べてさらに弱く、ほとんど使用する人がいない状況である。ただし前回調査の分布も、「オバンデス」に対し「カイベツ」は貧弱であるから、そのような前回調査の違いが今回調査の違いとなって現れたとも言える。なお、「カイベツ」については、札幌調査の結果（図1-24-3）と富良野継続調査の結果（図1-24-4）も示したのでご覧いただきたい。

分布の量は減少したものの、上記の事例のように消滅しかかっているのではなく、まだある程度全道的に使用されているという語形としては、「デレキ・デレッキ」「シャッコイ」「シバレル（手拭が凍る）」「シバレル（池の水が凍る）」「ナンボ」「アク」「ハッチャキニナル」がある。ここでは「デレキ・デレッキ」について見てみよう。

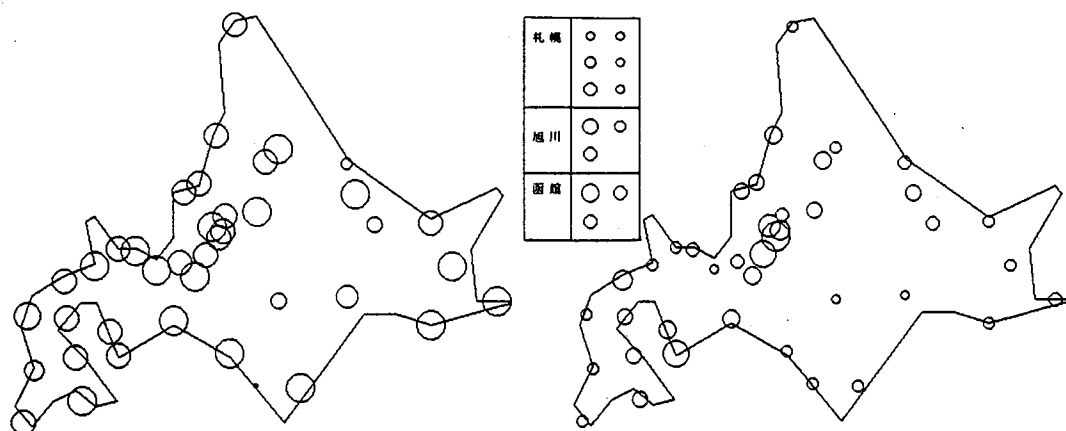


図1-25-1 前回 デレッキ類 図1-25-2 今回 デレッキ類

この語形は、前回調査（図1-25-1）では、一部に使用率の低い地点があるものの、ほぼ全道にわたってよく使われている。それが今回調査（図1-25-2）になると各地で軒並使用が減っている。ただし、まったく消えてしまったのではなく、なお全道的に使用が認められる。この今回調査の分布は、一応「全道型」として分類したが、細かく見ると比較的西部で強く、東部で弱い傾向がうかがえる。さらに、西部の中でも、歌志内・三笠などの道央の炭鉱部と室蘭とで使用が依然高いことが見てとれる。なお、地図は省略するが、質問の火掻棒自体を知らないと答えた人々の分布は、ちょうど図1-25-2を逆にした形となっていることを付け加えよう。結局のところ、石炭を燃料とした暖房が減り、したがって火掻棒も使われなくなり、結果としてその名称である「デレキ・デレッキ」も衰退を始めた、ただし、炭鉱部などでは依然この火掻棒が使用されているために、その名称も根強く残っていると推測されるのではなかろうか。事物の盛衰が方言形の消長に直接関わる一例と言える。

(2) 分布の型も量も変化しなかったもの

「全道型」については、分布の量にほとんど変化が見られない、すなわち、依然として全道的に高い使用率を示した語形も多い。それらの語形としては、「トーキビ・トーキミ」「シバレル(ひどく寒い)」「ハク(手袋をする)」「ショッパイ」「メンコイ」「コワイ・コワカッタ」を挙げることができる。これらの中には、「シバレル」「メンコイ」「コワイ・コワカッタ」のようにいくぶん使用の減ったものもあるが、しかし、総じて今回調査でも北海道全域におよぶ強力な分布が確認されたものである。例として「トーキビ・トーキミ」の結果(図1-26-1, -2)を掲げておく。渡島半島先端部に分布のやや弱い地域があるものの、両図ともほぼ全道にわたり「トーキビ・トーキミ」の使用率の高いことが見てとれる。

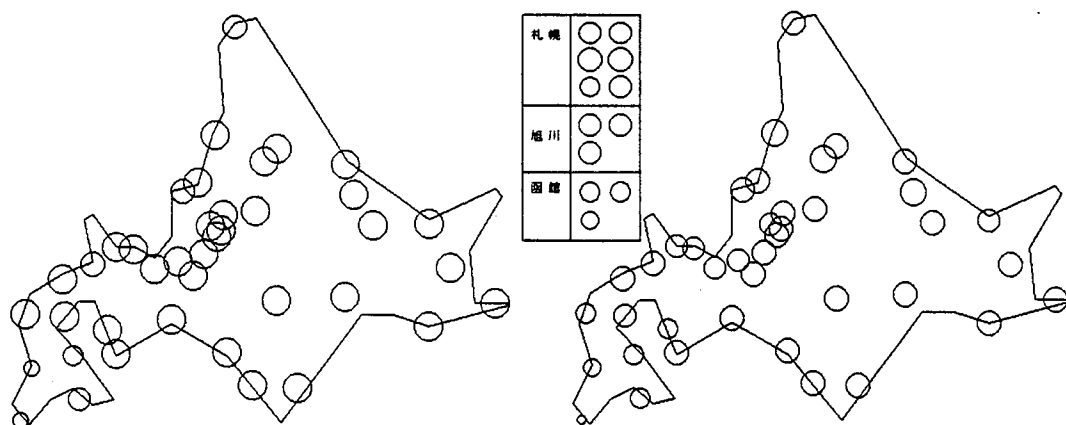


図1-26-1 前回 トーキビ類 図1-26-2 今回 トーキビ類

他の語形に比べこれらの語形が今もよく使用されている理由について考えてみると、まず「ショッパイ」は、現在では首都圏を含め全国に広まっていることが河崎裕子・井上史雄1983「首都圏の《新方言》」や井上史雄・荻野綱男1984『新しい日本語・資料図集』などの調査から明らかになっており、口語レベルでの全国共通語と意識されるに至っていると考えられる。そのような共通語意識が北海道における「ショッパイ」の分布をも支えているのであろう。

また、「トーキビ」については、北海道方言研究会1978『共通語化の実態』

によれば、「札幌あたりの公的場面でも使われ、道内版の新聞文章にも現れ」(255頁) ということから、やはり方言という意識が薄く、広い地域で通用する共通語的な感覚で使用されている可能性がある。北海道の西半分におけるいくつかの調査を総合的に扱った井上史雄1981「北海道内の方言差」78頁によれば、この語形は渡島半島ではテレビ出演時などの改まった場面での使用率が高くなることから全国共通語的な扱いを受けており、それ以外の地域では改まった場面で「トーモロコシ」に切り替えられることから北海道共通語と意識されていると指摘されている。このような共通語意識の背景には、「とうもろこし」の主要産地が北海道であることが関わっているかもしれない。

さらに、方言意識が薄いという点では「手袋をハク」もそうであろうと考えられる。ただし、こちらは「靴下をハク」「ズボンをハク」と同じ発想であるために、地元の人が方言形と気づかない度合いが強く、全国共通語と思い込んで使用している人が全道的にかなりいるのではないかと思われる。今回の札幌調査と富良野継続調査では、札幌で16.0%、富良野で23.7%の人がこの言い方を全国共通語と意識しているという結果が出ている(相澤正夫1990「北海道における共通語使用意識」121頁)。

この他、「シバレル」については現象自体が北海道など厳寒の地に特有のものであること、「メンコイ」「コワイ」については共通語では置き換えがたい独特のニュアンスや味をもっていることなどから、これらの語形は北海道方言の語彙体系のなかで一定の存在意義をもって使用されていると考えられ、そのことが現在も全道で使用率が高い一つの要因となっていると推定される。

なお、このように分布の量の点で30年前の勢力を保つという語形は他の類型にはなく、「全道型」に限られている。一旦、全道に浸透し北海道共通語の域に達した語形は、北海道の一部にしか広まらなかった語形に比べて衰退しにくい傾向があると言ってよいだろう。

(3) 分布の型も量も変化したもの

このパタンに属するのは、「全道型」の項目では「アキアジ」「アズマシー」の二つである。

まず、「アキアジ」(図1-27-1, -2)について見てみよう。この語形は前回調査では全道にわたってよく使われていたが、今回調査では全体的に使用が減っている。とりわけ渡島半島から内陸部にかけての減少が著しく、結果

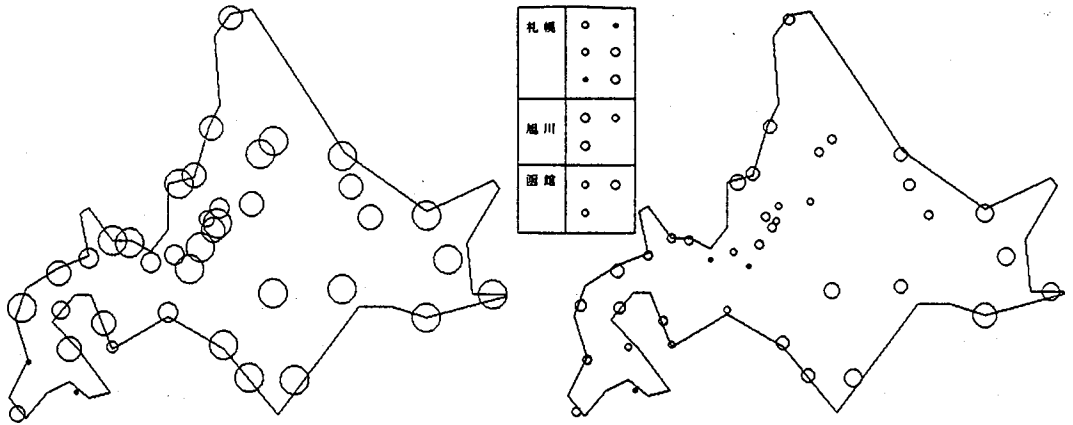


図1-27-1 前回 アキアジ

図1-27-2 今回 アキアジ

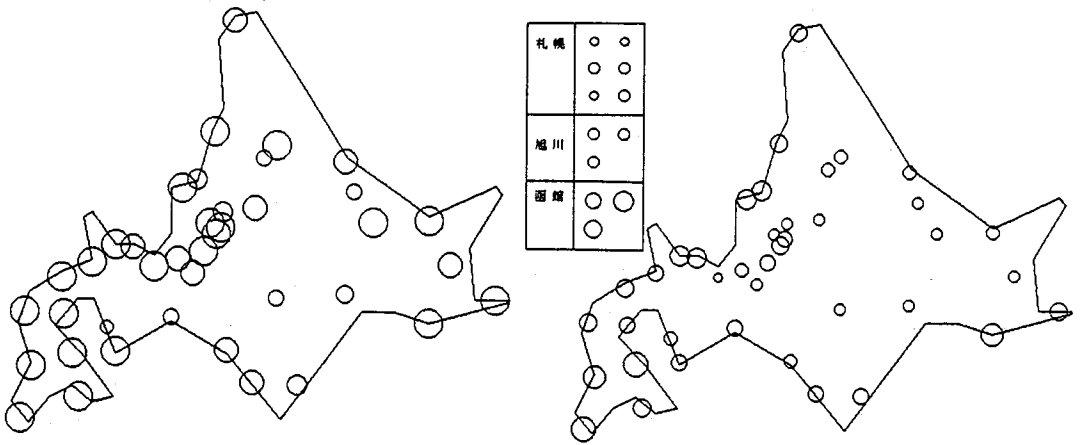


図1-28-1 前回 アズマシー

図1-28-2 今回 アズマシー

として東部の海岸部に優勢な分布，すなわち「海岸c型」を呈するに至っている。もっとも，前回調査の分布を詳細に見ると，その時点ですでに渡島半島と内陸部の一部において「アキアジ」の勢力の弱い地点が確認される。したがって，今回調査の分布は，そのような「アキアジ」の劣勢な地域が30年の間に周

囲に拡大した結果とみなすことができる。

次に、「アズマシー」（図1-28-1, -2）は、前回調査で「全道型」であったものが、内陸部での使用が急激に減少した結果、今回調査では「海岸a型」に変化したと見ることができる。しかも、海岸部全域で使用率が高いのではなく、オホーツク海沿いの紋別から中標津にかけては減少が著しい。この場合も、「アキアジ」同様、前回調査ですでに内陸部に「アズマシー」をあまり使わない地域が現れており、その地域が広がったのが現在の分布と考えられる。

以上、「アキアジ」と「アズマシー」については、全体としてそれらの語形の使用が減ったが、それが北海道全域で均等に進行したのではなく、その過程に減少の遅速からくる新たな地域差を生じさせながら進展したとまとめることができる。ところで、「アキアジ」の代わりに広まった語形は「サケ」であることが調査から確認されている。「アズマシー」については交替語形を調査していないが、おそらく質問文に示した「気楽だ」とか「ゆったりしている」などの言い方であろう。これらの形式は全国共通語であるから、上で見たことを裏返せば、全国共通語の浸透、いわゆる共通語化にも地域差の関与する場合があるということになる。

1. 2. 2. 「海岸a型」の語形

(1) 分布の型は変わらず分布の量が変化したもの

「海岸a型」に属する語形は、「全道型」にあったような、前回調査の勢力を今回調査においてもそのまま維持しているというものはなく、いずれも分布の量を減らしている。その中で、分布の型は前回同様「海岸a型」を保っている場合から見よう。このようなパターンは、以下の語形に認められた。「エントー」「クロブシ・クロボシ・クロコブシ」「スカイ・スッカイ」「カム」「タナク・タガク」「カテル」。

このうち、「タナク・タガク」の図を掲げる（図1-29-1, -2）。「タナク・タガク」は、前回調査の結果では「全道型」に分類してもおかしくないほど全域で使用されているが、内陸部に集中して分布の弱い地域が現れている点を重視して、この「海岸a型」とした。今回調査では、全道的に分布の量を激減させたことがわかるが、分布の型としては、あいかわらず海岸部に強く内陸部に弱いパターンを保っているとみなされる。この「タナク・タガク」と似た変化を示すのが「エントー」と「カテル」である。

布も「海岸 a 型」と認定した。しかし、内陸部に注目すると、今回新たに使用者が現れてきていることに気がつく。この内陸部での変化が海岸部との差を縮めることになり、結果として今回調査の分布は「全道型」に近いものとなっている。これとよく似た変化は「カム」でも生じている。

ところで、今回調査の結果を性別の観点からながめると、男女差がほとんど認められない語形が多い中で、「クロブシ・クロボシ・クロコブシ」（全道平均男25.8%、女14.8%）と「カム」（男20.3%、女32.7%）はともに顕著な男女差を示していて注目される。これらの語形の語感をみると、狭母音[u]が連続する「クルブシ」よりも、広母音[o]が加わる「クロブシ、クロボシ」や、さらに「コ」が入る「クロコブシ」の方がおおらかで男性的な印象を与える。また、「カグ」に対して鼻音の「カム」の方が、やわらかく女性的な語感をもつと言えよう。このような異なった語感が、それぞれ別の性の受け入れ手に積極的に作用し、上で見たような内陸部での増加をうながしたと推測することもできる。

(2) 分布の型も分布の量も変化したもの

前回調査の「海岸 a 型」から、今回調査で別の類型に移った語形としては、「ヤバシー・ヤバチー」「ヤノアサッテ・ヤナサッテ（あさっての次の日）」「シアサッテ（あさっての次の次の日）」「アメル」「オガル」が挙げられる。このうち、「ヤバシー・ヤバチー」は海岸部の分布が一律に激減した結果、内陸部との対立が失われ、「全道型」に転じたものである。

一方、「ヤノアサッテ・ヤナサッテ」以下の語形は、「海岸 a 型」から「海岸 b 型」に移行したものである。「アメル」の例を見てみよう。前回調査（図 1-31-1）では、アメルは海岸部の全域にわたって強力に分布している。今回調査（図 1-31-2）では全体的に分布の量に減少が見られるが、とりわけオホーツク海沿いと太平洋沿いの地域での退潮の著しいことがわかる。この変化の結果、分布の優勢な渡島半島および日本海沿岸部と、それ以外の分布の劣勢な地域との対立が顕著となった。「ヤノアサッテ・ヤナサッテ」「オガル」も「アメル」とたいへんによく似た変化を示している。「シアサッテ」も基本的にこのパターンと考えてよいが、他の語形に比べやや分布がはっきりしない。

以上、「海岸 a 型」の語形は、前回調査と比較して、多少の差はあれいずれも分布が弱まっている。そして、その過程には主として、「海岸 a 型」を保ち

つつ分布を薄めていく場合と、「海岸b型」に移行しつつ衰退していく場合の二つのケースが認められることなどがわかった。

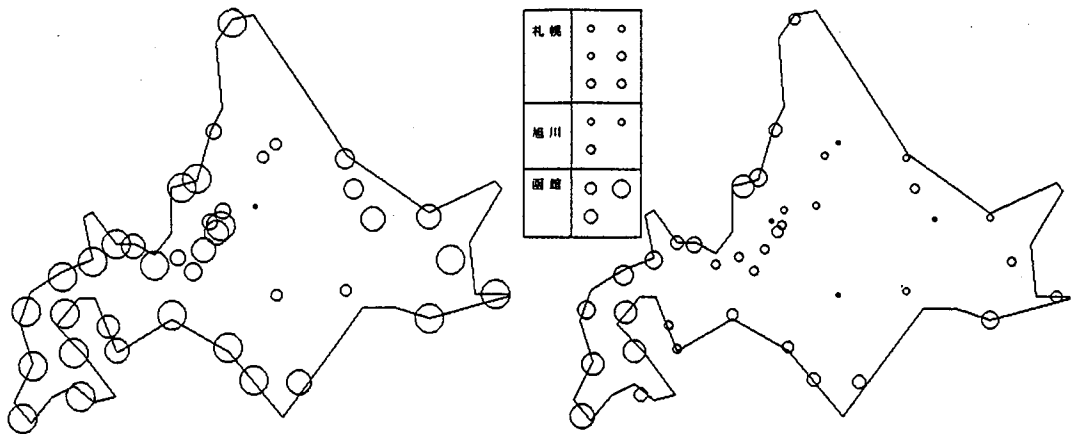


図1-31-1 前回 アメル

図1-31-2 今回 アメル

1. 2. 3. 「海岸b型」の語形

(1) 分布の型は変わらず分布の量に変化したもの

「海岸b型」の語形は、分布の型はそのままに分布の量を減少させたものがほとんどである。具体的には、「キミ・キビ」「シガ・スガ」「アメユキ・アマユキ」「ストフ・ストーフ」「アクト・アグド」「ネマル」「ヒザオル・ヒザツク」「ウマイ」がこのパターンに該当する。最も典型的なものとして、「キミ・キビ」の例(図1-32-1, -2)を掲げておく。両図を細かく見比べると、渡島半島の中でも依然前回調査の勢力を保っている地域(松前・江差)と減少の著しい地域(松前・江差以外)のあることに気がつく。

ところで、「海岸b型」の語形は、そもそも前回調査の段階で分布の量の少ないものが多い。分布の型としては、渡島半島から日本海沿岸部に顕著であっても、その勢力自体の弱い点が「全道型」や「海岸a型」の語形と異なる点である。前回調査の時点でそのような状況であるから、その後の衰退の結果、今回調査ではほとんど使われなくなってしまった語形も目立つ。「ウマイ」を例として示そう。図1-33-1, -2を見るとわかるように、分布の型について言えば、今回調査の結果も一応前回調査の「海岸b型」を踏襲していると認め

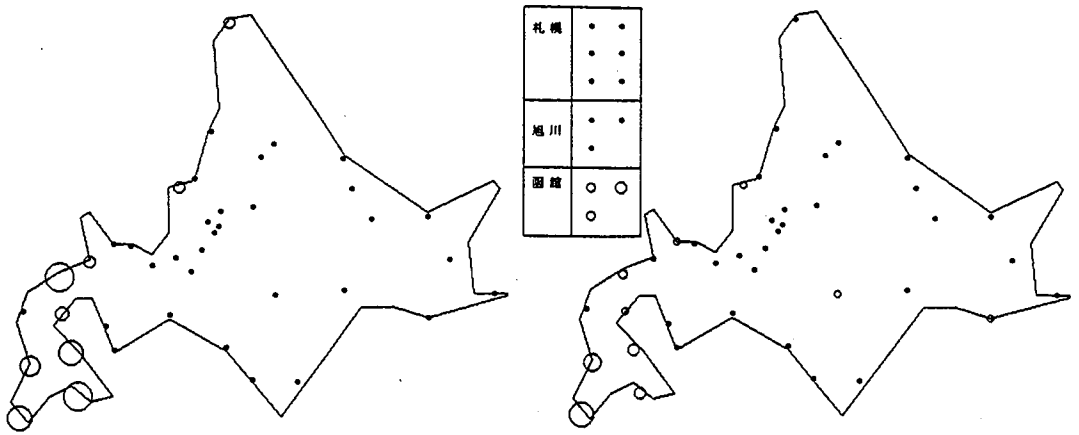


図1-32-1 前回 キミ・キビ 図1-32-2 今回 キミ・キビ

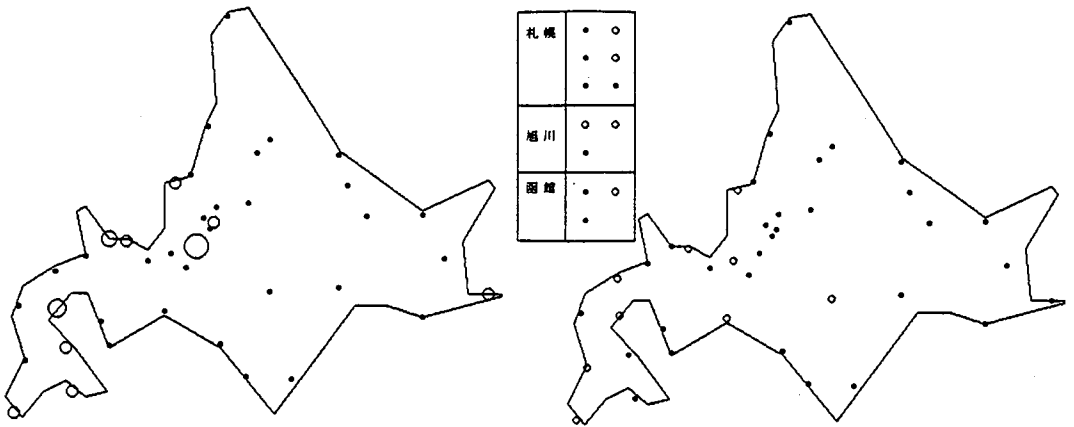


図1-33-1 前回 ウマイ 図1-33-2 今回 ウマイ

られる。しかし、分布の量の衰退が著しく、今まさに消滅する寸前の状態と言えよう。上に挙げた語形の中では、他に、「シガ・スガ」「ストフ・ストーフ」「アクト・アグド」「ネマル」「ヒザオル・ヒザツク」が同じような傾向を見せている。

以上のほか、前回調査で「海岸b型」を示した語形に「ヨダレ・ヨダリ」と「ペロ・ピロ」がある。これらは、今回調査では海岸部の分布の量がやや弱まった反面、それ以外の地域に分布が出現したために、結果として両地域の差がきわだたず「全道型」に近い型をとるに至っている。ただし、ここで問題にした「ヨダレ・ヨダリ」「ペロ・ピロ」は、ともに「唾」の意味である。これらの語形は「涎」の意味ならば『日本言語地図』第119図で知られるように、ほぼ全道にわたって分布が見られるから、あるいは、回答者が調査に際し、「唾」を「涎」と誤って回答した結果が今回の「全道型」分布となって現れたのかもしれない。「唾」と「涎」は意味上まぎれやすいが、面接調査で行った前回調査ではその危険が回避されたのに、今回調査は通信調査であったために誤答が現れてしまったという可能性が残る。もちろん、そのような意味上の曖昧さを契機に、各地で「涎」を表す上記の語形が「唾」をも指すように意味変化を起こしたことも考えられる。この点については、さらに確認のための調査が必要であり、その上で分布の変化を問題にしたい。

1. 2. 4. 「海岸c型」の語形

前回調査の語形で該当するのは「エント」のみである。図1-34-1に前回調査の分布を示す。典型的ではないが、渡島半島以外の海岸部に優勢な分布であり、「海岸c型」に分類してよからう。これが今回調査では図1-34-2のように現れた。

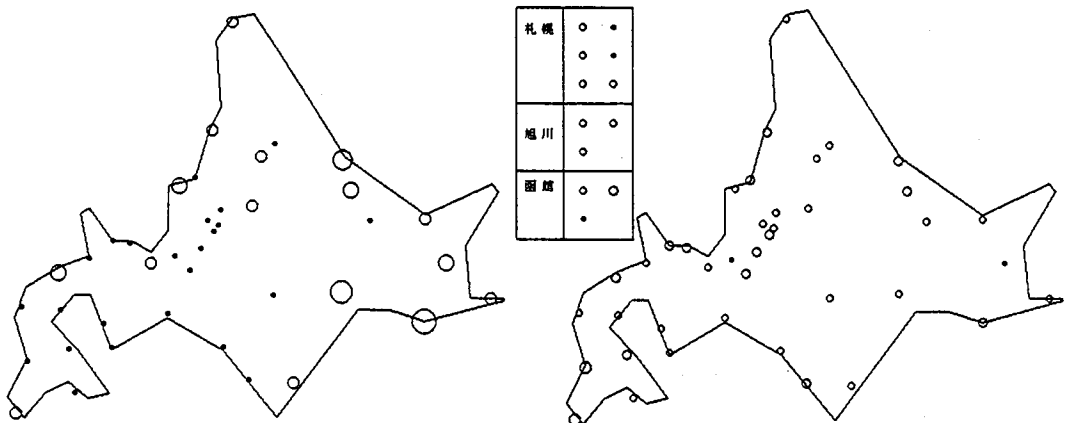


図1-34-1 前回 エント

図1-34-2 今回 エント

海岸部特有の分布が消え、使用者は少ないが北海道全域に平均して分布の見られる「全道型」となっている。この語形の場合、「煙突」を表す語形としてもう一つ「エントー」と伸ばす形があり、こちらは前回渡島半島を含めた海岸部全体に有力で内陸部にも分布があった。この「エントー」が今回調査では激減していることは先に述べておいた。この点を考慮すると、「エントー」が衰退していく過程で一部が「エント」という短い形に変化して生き残り、それが渡島半島や内陸部に新たに分布となって現れたという可能性が考えられる。

1. 2. 5. 総合的考察

以上、前回調査と今回調査を比較し、その間の動きを見てきた。結果を総合的に図示すると、図1-35のようになる。上段の「4, 3, 2, 1」の数字は分布の量を4段階で表したものであり、数字が大きいほど分布の量も多いことを示す。矢印は前回調査と今回調査の間を結んでおり、該当する語形が多いほど線を太くしてある。矢印上の数字は該当する語形の識別番号であるが、<35>「ヨダレ・ヨダリ」、<36>「ベロ・ピロ」（ともに「唾」の意）はすでに述べたように調査上の問題がありそうなのでここからは除いてある。

この考察をまとめる意味で、この図から指摘できる特徴的な点を列挙してみよう。

1. 30年前と比べ、大部分の語形で分布の量が減少している。特に、渡島半島と日本海沿岸部を中心に分布していた「海岸b型」の語形には、ほとんど使われなくなったものが多い（<31><33><34><37><38><39>）。「浜ことば」の衰退は著しいと言えよう。
2. 北海道全域に広まっていた「全道型」の語形、すなわち「北海道共通語」にも同様に退潮の波が及んでいる。しかし、その中には、このような動きに抵抗して現在もよく使われ続けている語形があり（<3><7><10><13><14><15>）、注目される。
3. 全体に分布の量は減少したが、分布の型については30年前の状態をそのまま保っている語形が多い。使用地域には変化がないが、その内部で使用者が減り、分布そのものが薄まったわけである。
4. ただし、分布の型が変化した語形もある。特に、30年前には海岸部の全域で使用されていた語形（「海岸a型」）で、今回、その分布を渡島半島と日本海沿岸部（「海岸b型」）に縮小したものが目立つ（<21><22><24>

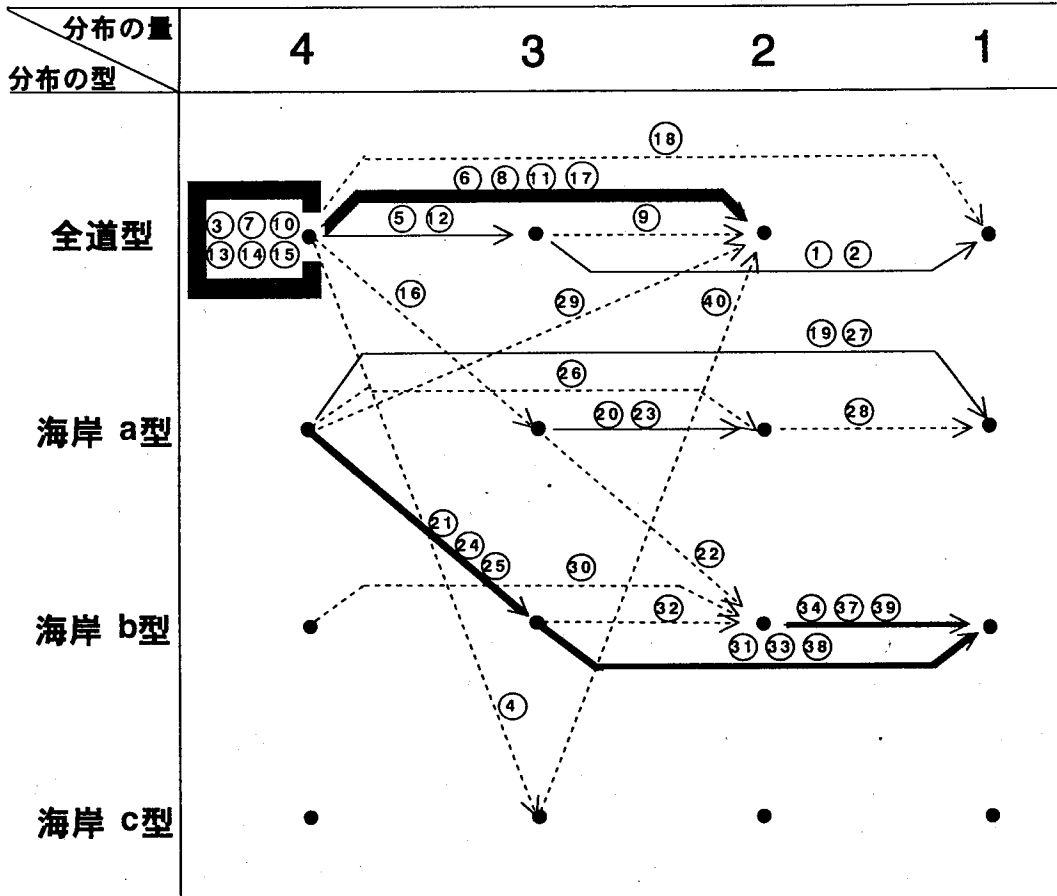


図1-35 分布の変化の総合図

<25>)。「浜ことば」内部における退縮と言えよう。また、「北海道共通語」の中で、今回海岸部に偏った分布を示し、「浜ことば」的になった語形もある(<4><16>)。これらはいずれも衰退の過程において、分布が縮小することによって生じた変化であり、積極的な拡大によって新たな分布が形成されたものではない。

ところで、北海道の方言形は以上のように総じて退縮に向かっているが、その代わりに勢力を広げているのは「全国共通語」である。上で見てきた方言形衰退の様子を裏返せば、それがそのまま全国共通語形の進出パターンとなる。上のほとんどの語形において、分布の型は変えずに分布の量のみが減る現象が確認されたが、これは、全国共通語が全道にわたって一律に浸透しつつあることを意味する。全国共通語は地理的伝播によるよりも、マスメディアや教育などを媒介としていわば空からばらまいたように広まると言われているが、それが北海道の共通語化にもあてはまるようである。ただし、「全道型」から「海岸型」へ推移した事例や、「海岸型」内部での変化も見られることからすれば、共通語化にも地域差が現れる場合があり、周辺地域から当該地域への共通語形の伝播など、地理的観点の必要なことは注意しておいてよい(この問題については小林隆1996でも扱った)。

1. 2. 6. 『日本言語地図』との比較

さて、北海道におけることばの分布の変化をさらに詳しく見るために、今回調査では『日本言語地図』(1957~64年、老年層男性を調査)からも項目を追加して調査した。それらの項目のうち、「七日」「ふすま」「糯米」「煮る」は、それぞれ方言形「ナヌカ」「カラカミ」「モチマイ」「タク」の衰退が著しく、現在では共通語の使用率が全道にわたり非常に高くなっている。一方、次の項目は異なった傾向を示していて興味深い。

まず、「ものもらい(麦粒腫)」は図1-36-1、-2に見られるように、主として「メッパ」が海岸部に、「モノモライ」が内陸部に優勢であり、顕著な対立を示している。この対立は『日本言語地図』の調査時にも存在していたもの(図1-36-3)であり、それが現在に引き継がれてきている。上で見てきたところでは、「海岸型」の語形はいずれもその分布量を減らしていたことからすれば、依然強力な分布を維持している「メッパ」の例は特殊である。逆に言えば、この項目においては、全国共通語である「モノモライ」の進出は予

想外に鈍いと言える。

機	○	○
	○	○
川	○	○
	○	○
産	○	○
	○	○

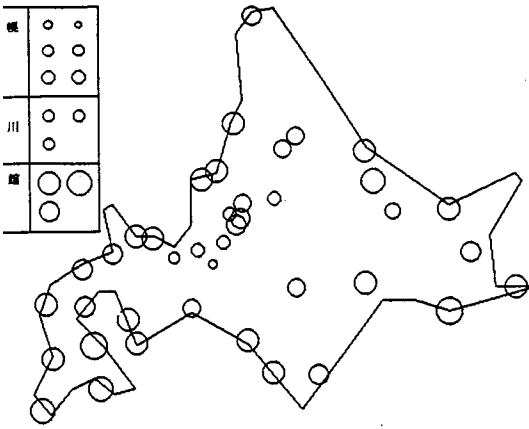


図1-36-1 今回 メッパ

札幌	○	○	○	○
	○	○	○	○
旭川	○	○	○	○
	○	○	○	○
函館	○	○	○	○
	○	○	○	○

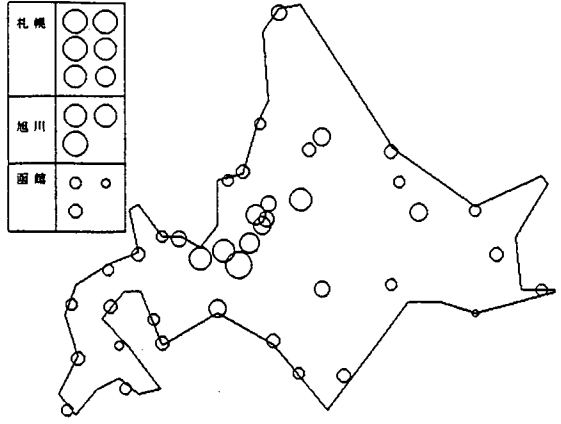


図1-36-2 今回 モノモライ

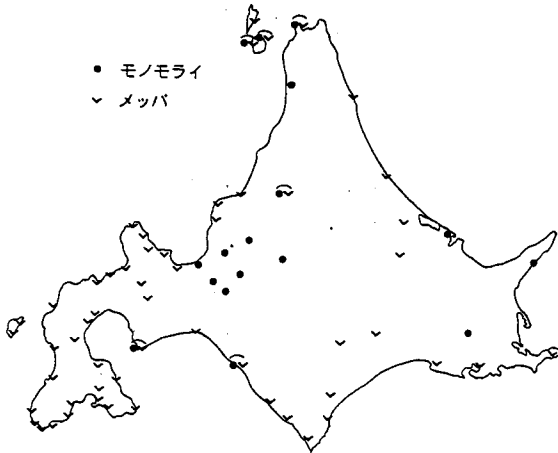


図1-36-3 『日本言語地図』第112図

次に、「くすぐったい」も、図1-37-1，-2のように、海岸部に「モチヨコイ」が多く、内陸部に優勢な「クスグッタイ」と対立している。この対立は、やはり『日本言語地図』の時代にも見られたもの（図1-37-6）である。

ただし、上記の「モノモライ」よりも「クスグッタイ」の勢いは全道的に強いようである。この項目で注目されるのは、『日本言語地図』で内陸部から東部にかけて分布していた「コソバイ」が劣勢になり（図1-37-3）、代わりに「コチョバイ」（図1-37-4）と「コチョバシー」（図1-37-5）の勢力が伸びた点である。

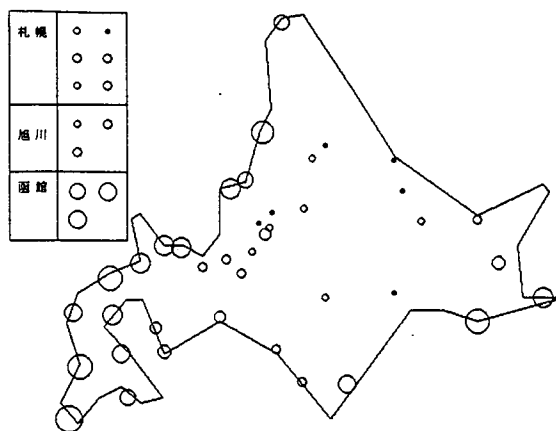


図1-37-1 今回 モチヨコイ

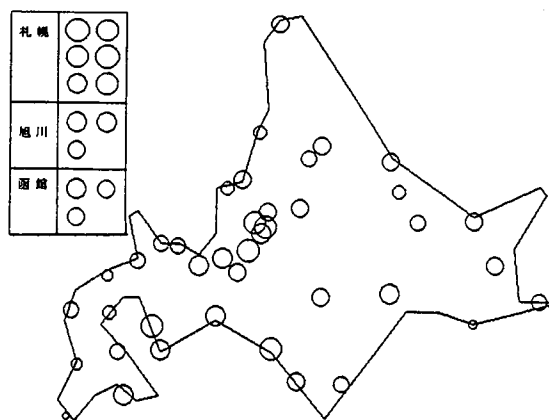


図1-37-2 今回 クスグッタイ

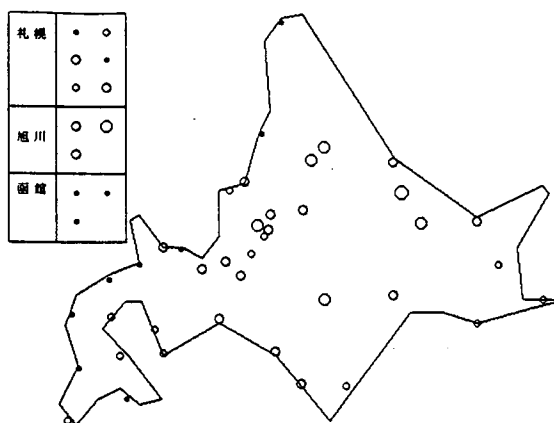


図1-37-3 今回 コソバイ

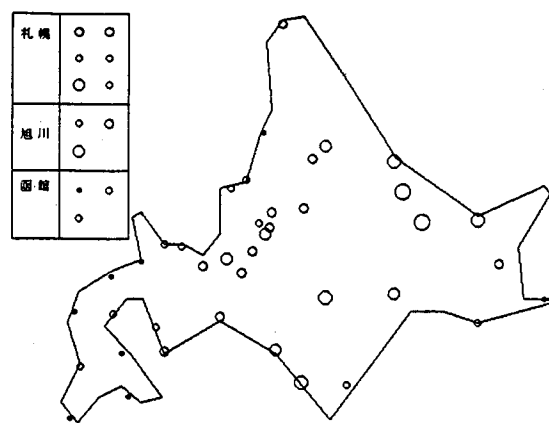


図1-37-4 今回 コチョバイ

地図』では1地点を除き「マツボックリ」の分布は見られず、全道的に「マツカサ」となっている。ということは、『日本言語地図』以降「マツカサ」から「マツボックリ」への劇的な交替が起こったということになる。この「マツボックリ」は地域的には関東地方の方言形であるから、一見全国共通語が道外から侵入してきた方言形に駆逐されたようにも見える。しかし、「マツボックリ」は幼児語のレベルでは早くから全国共通語の仲間入りをしていたことが考えられ、北海道での流行は、共通語内部における幼児語から一般語への格上げを意味するものと思われる。一般語としての「マツボックリ」の急速な普及が北海道のみでなく全国的な現象であることは、井上・荻野1984などから知られるところである。

以上、今回調査で新たに取り上げた項目の中で、全国共通語化が単純には進行しないケースと、従来の全国共通語が新しい全国共通語と交替するケースについて見た。「モノモライ」の拡張を拒む「メッパ」、および「クスグッタイ」に対立する「モチョコイ」とむしろ勢力を伸ばした「コチョバイ」「コチョバシー」が前者のケースであり、「マツカサ」に一気に取って代わった「マツボックリ」が後者のケースである。ところで、これらの「メッパ」「モチョコイ」「コチョバイ」「コチョバシー」「マツボックリ」という語形は語音が卑俗で親しみやすく、そのことが盛んに用いられる一つの理由になっているのではないかと考えられる。このような点も含め、共通語に対抗して勢力を保ったり拡張したりする語形の特徴については、今後総合的に検討してみる必要がある。

1. 3. まとめ

本章では、「富良野パネル調査」と「高校生調査」の語彙項目について報告した。両調査とも、前回調査と今回調査のデータが完備していることから、ほぼ四半世紀を隔てた二つの時点間の変化をたどることが可能となった。本章で取り上げたのは、そのうちの北海道に特有の語彙や表現形式の部分である。それらの使用状況が、この間にどのように変化したのか、またどのくらい変化したのかという観点に立って分析を行った。結果は、すでに各節で詳述した通りであるが、所期の目的はほぼ達せられたと考える。

ここでは、本章のまとめとして、性格のことなる両調査に共通する項目を取り上げ、変化の動きに関連性がみられるかどうかを確認しておきたい。もちろん両者を単純に結び付けるわけにはいかないが、連動している可能性は十分に考えられるからである。分析対象となった項目の中で、両調査に共通するのは、全部で15項目である。富良野パネル調査の分析におけるグループ分けを基準にして、これに高校生調査の結果を突き合せてみると、次のようになる。各項目とも「:」の右側が、高校生調査の結果である。図1-35「分布の変化の総合図」にもとづいて、分布の型(4類型)・分布の量(4段階)、およびその変化(前回→今回)について簡潔に表示した。

a) 安定型

シバレル(ひどく寒い) : 全道型・4 → 全道型・4 [変化なし]
ハク(手袋をする) : 全道型・4 → 全道型・4 [変化なし]

b) 微減・安定型

トーキビ(とうもろこし) : 全道型・4 → 全道型・4 [変化なし]
アキアジ(鮭) : 全道型・4 → 海岸c型・3
オバン~(こんばんは) : 全道型・4 → 全道型・1
シバレル(手拭が凍る) : 全道型・4 → 全道型・2
メンコイ(かわいい) : 全道型・4 → 全道型・4 [変化なし]

c) 微減・衰退型

ナンボ(値段がいくら) : 全道型・4 → 全道型・2
アク(薪の灰) : 全道型・4 → 全道型・2
アメル(ごはんが腐る) : 海岸a型・4 → 海岸b型・3
シバレル(池の水が凍る) : 全道型・3 → 全道型・2

d) 激減・衰退型

ゴショイモ（じゃがいも）：全道型・3 →全道型・1

カイベツ（キャベツ）：全道型・3 →全道型・1

カテル（仲間に入れる）：海岸a型・4 →海岸a型・1

e) 衰退型

ストーフ（ストーブ）：海岸b型・3 →海岸b型・1

以上のように、両調査から帰納された変化の動きは、決して無関係なものではなく、ほぼ同じ方向に向かって同じ歩調をとりながら、明らかに連動していることが分かる。念のため、両調査の性格の違いを、もう一度みておこう。

富良野パネル調査：内陸方言の1地点で、1920年～44年生れの同一個人を対象に、今回は10代～30代の時期、今回は40代～60代の時期に実施。

高校生調査：北海道全体をおおう数十地点で、今回は1941年～43年生れの10代、今回は1971～72年生れの10代を対象に実施。

インフォーマントの生年をみると、富良野パネル調査の最も若い層が、前回の高校生調査の対象者と、ほぼ同じコーホートに属していることが分かる。内陸方言に話を限れば、富良野パネル調査は高校生調査よりも、かなり古い段階の言語状態を扱っていることになる。したがって、今回の高校生調査が、一段と新しい段階の言語状態を捉えていることは間違いない。そうだとすれば、上でみたように、総体的には多くの語形や表現形式が衰退していく中で、「シバレル（ひどく寒い）」「ハク（手袋をする）」「トーキビ（とうもろこし）」「メンコイ（かわいい）」の4項目が依然として強い勢力を保持しているのは、まさに特筆すべきことなのである。北海道共通語と呼ぶにふさわしいことばと見えよう。

この報告では、今回調査で同時に実施された富良野・札幌継続調査の成果について、残念ながらほとんど触れる余裕がなかった。今回調査の時点における富良野市の言語状況、そして大都市札幌の言語状況を加味した分析が、この報告にさらなる厚みを与えてくれることは間違いない。今後の課題として銘記しておきたい。

2. 文法

2. 1. 文法(1) 富良野・札幌継続調査から

2. 1. 1. 推量・勧誘表現

推量・勧誘表現としては、この両表現に対応する方言の形式「べ」の使用状況に焦点を当てることにした。

具体的には、「手紙はあの人が書くべ（書くだらう）」＜推量＞および「映画見に行くべ（行こう）」＜勧誘＞という文脈における「べ」の消長を見たのである。

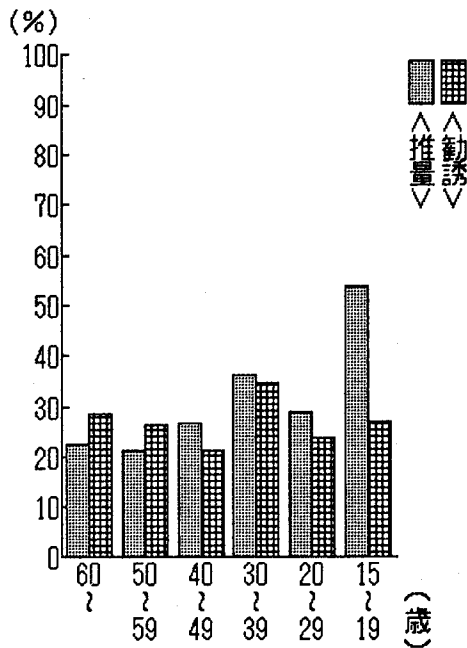


図2-1 「べ」の消長（富良野）

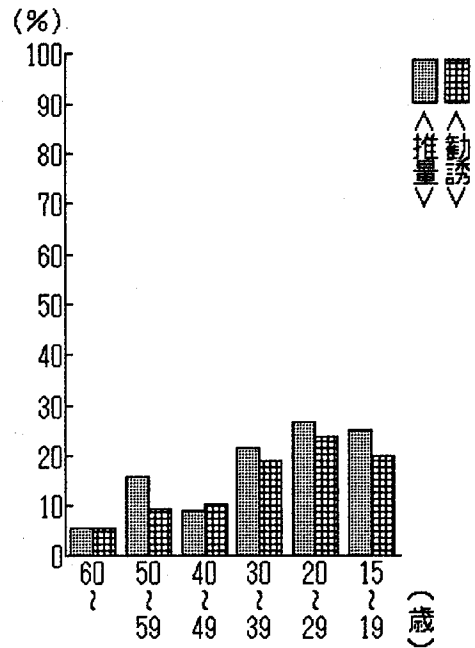


図2-2 「べ」の消長（札幌）

まず、富良野における推量の「べ」については、全体として29.8%の使用率であるが、性別で見ると、男が52.5%、女が10.0%で圧倒的に男性に使用者が多い。注目されるのは、年齢別の実態である（図2-1）。「べ」は年齢が低くなるほどに使用率が上昇していることが分かる。特に10代では、53.8%と過半数を占めるに至っている。「べ」の再生が明らかに認められるのである。

次に、札幌における推量の「べ」については、全体として17.9%の使用率で富良野よりはかなり低くなっている。性別では、男が33.1%、女が3.8%で富良野同様、圧倒的に男性に使用者が多い。年齢別では、富良野ほどではないが、やはり若年層にいたって「べ」の使用率が伸びていることが認められる(図2-2)。このような様相から判断すると、この地において、推量の「べ」にはいわゆる *covert prestige*(潜在的権威)が付加しつつあることがうかがわれるのである。

一方、勧誘の「べ」は、富良野で27.4%(男56.1%、女2.5%)、札幌で15.4%(男30.2%、女1.6%)の使用率であり、全体的には富良野において使用者が多く、またいずれにおいても圧倒的に男性の方に使用者が多い。ただし、この勧誘の「べ」については、推量の「べ」のように若年層において使用率がアップするといった傾向は顕著には認められない(札幌の場合にややその傾向があるが)。

すなわち、同じ「べ」であっても、推量の場合と勧誘の場合とでその使用傾向に相違が見られる点が指摘されるのである。「べ」の再生は推量に対応するものについて言えるのであって、勧誘に対応するものについては、使用率が増加する傾向はあまり認められない。勧誘を表す場合には、例えば「行く」であれば「行こう」となるのが一般である。したがって、若年層においては、推量と勧誘とが表現形式の上で分化しつつあるわけである。

これは体系としては共通語にパラレルに対応するものである。共通語では、「あの人が行くだろう」《推量》、「見に行こう」《勧誘》のように、推量と勧誘とで表現形式が異なっているからである。

「べ」の復権は、共通語の「だろう」を背景に意識しつつ成ったものと考えられる。一方、接続形式の上から、また対応変換の対象が定めにくいところから、「べ」が勧誘に回帰するまでにはいたらなかったのであろう。結果として、若年層においては「べ」の意味が限定されることになったのである。

2. 1. 2. 命令形

ここでは、命令表現としてではなく、具体的な活用における「命令形」のバラエティに焦点を当てた。

具体的には、いわゆる一段動詞の「起きる」とサ変動詞「する」の命令形の現れ方を見たのである。「起きる」の場合、「オキロ」、「オキレ」、「オキ

一」の形が存在するが、このうちの「オキレ」は五段活用化した「起きる」の命令形であり、かつて、この地での地域共通語とされたものである。「する」の場合には、「セー」、「シロ」、「シレ」、「スレ」の形が存在するが、このうちの「シレ」、「スレ」はやはり五段活用の命令形への類推によって生まれたものである。

まず「起きる」の場合について。「オキー」の形は富良野で全体の0.7%、札幌で全体の1.1%と微々たる使用率なのでここでは考察の対象にしない。「オキロ」：「オキレ」の比率は、富良野で、

31.4%：41.8%

であり、「オキレ」がまだ優勢であるが、札幌では、

36.2%：24.8%

で、「オキロ」の方が「オキレ」を凌駕している。

「オキロ」は、札幌では年齢が若くなるにつれ増加しているが、富良野ではその傾向は顕著には認められない。富良野では、特に15～19歳の年齢層において、逆に「オキレ」が急上昇し、過半数を越える(57.7%)にいたっていることが注目される。「オキレ」は、富良野での若い世代において、いわば仲間用語としてではあろうが、再生しつつあることが認められるのである。

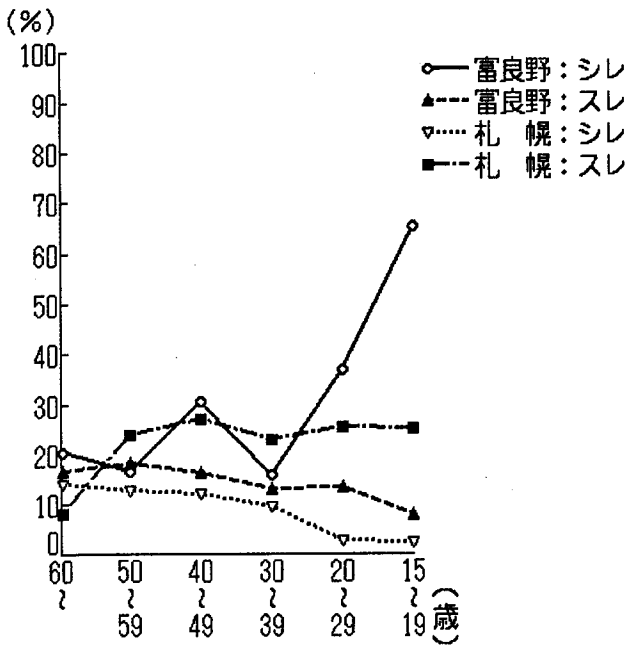
次に「する」の場合について。「セー」、「シロ」、「シレ」、「スレ」の形の富良野、札幌それぞれにおける全体的な使用率は、次のようになっている。

	セー	シロ	シレ	スレ	(%)
富良野	9.0	30.1	26.4	14.7	
札幌	4.6	39.9	8.8	23.1	

「セー」の形は両地いずれにおいても少数派である。使用層は年齢の高いところに多い。10代では皆無である。なお、「シレ」と「スレ」の使用率は両地で逆転しており、「シレ」は富良野的形式、「スレ」は札幌的形式ということが言えそうである。「シレ」と「スレ」の年齢別の実態を図2-3に示した。

富良野では、「シレ」が年齢が若くなるにつれ上昇していることが認められよう。10代における「シレ」の使用率は65.4%に達している。一方、「スレ」はそれと正反対に、若い年齢層では使用率が下降している。

札幌では、富良野とは逆に「スレ」が年齢が若くなるにつれ上昇しているように見える。そして、「シレ」はやはりそれとは反比例して、年齢が若くなる



につれ明らかに下降していることが認められる。

図2-3 「シレ」と「スレ」の消長

2. 1. 3. 仮定表現

仮定表現としては、サ変動詞「する」とカ変動詞「くる」の場合について、具体的には、「もっと勉強すればいいのに」、「早くくればいいのに」という文脈における「すれば」と「くれば」に対応する形式のパラエティを見ることにした。

「すれば」の場合については、「スレバ」のほか、「シレバ」、「スリヤー」、「シリヤー」などの形が存在する。富良野、札幌それぞれにおける、全体的な使用率は、次のようになっている。

	使用率 (%)			
	スレバ	シレバ	スリヤー	シリヤー
富良野	75.3	11.0	8.0	2.0
札幌	83.2	3.1	9.4	0.9

一段化した「シレバ」、「シリヤー」の形は富良野の方に比較的多いことがわかる。また、この両形は富良野において年齢が若くなるにつれて若干ではあるが増加する傾向にあることが認められる。なお、札幌においては「スリヤー」

が年齢が若くなるにつれ増えているように見える。

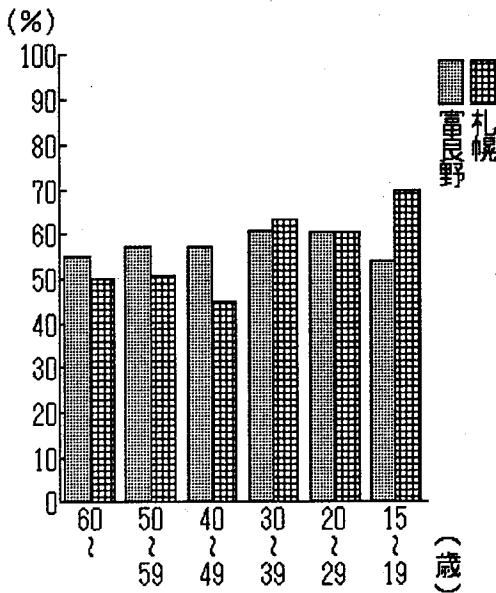
「くれば」の場合については、「クレバ」のほか、「コレバ」、「コエバ（コイバ）」、「クチャー」などの形が存在する。富良野、札幌それぞれにおける全体的な使用率は、次のようになっている。

	(%)			
	クレバ	コレバ	コエバ (コイバ)	クチャー
富良野	49.2	5.4	36.8	1.3
札幌	66.4	4.8	17.1	4.0

「コエバ（コイバ）」の形が富良野で圧倒的に高く現れている。男女比では、男44.6%、女30.0%で男性に使用者が多い（札幌では、男23.7%、女11.0%）。ただし、年齢差ははっきりしない。年齢差が見られる形式は、使用率の低い「コレバ」である。これも方言形であるが、富良野、札幌ともに若い層、特に10代、20代で使用率が若干上昇していることが見て取れる。

2. 1. 4. 可能表現

可能表現としては、一段動詞の「見る」の可能動詞形の消長に焦点を当てた。具体的には「きょうは忙しいから映画は見られない」という文脈における



「見られない」に対応する形式のパラエティを見たのである。「ミラレナイ」のほか、「ミランナイ」、「ミレナイ」、「ミレン」の形が存在する。このうち「ミランナイ」は、富良野で3.0%、札幌で4.3%と弱小勢力ではあるが、いずれも若年層、かつ学生に比較的多用される傾向が認められる。なお、「ミレン」は富良野で一人から回答があった(0.3%)が、札幌では皆無であった。

「ミラレナイ」と「ミレナイ」の使用率は、年齢を軸として見ると、およそ反比例の関係にある。いま、「ミレナイ」の年齢層ごとの使用率を示すと、

図2-4 「ミレナイ」の消長

図2-4のようになる。

若干のこぼこはありながらも、ほぼ年齢にそった形での可能動詞「ミレナイ」の伸長が認められよう。ただし、富良野の10代に関しては「ミレナイ」の落ち込みが特に目立っている。しかしながら、その理由についてはよくわからない。

なお、図には示さなかったが、性差の観点からは、全体的に男性の方に「ミレナイ」の使用率の高いことを指摘することができる。

2. 1. 5. 助詞「エ」「ニ」「サ」をめぐって

行き先をたずねる場合の「どこへ？」という文脈における助詞部分の表現には、各地にさまざまなパラエティが存在する。北海道におけるこの表現に関して触れたものに、真田1985「社会言語学と方言」がある。そこには、室蘭市における調査結果に基づいた、次のようなコメントがある。

この部分に対応する形式は、エ、ニ、サ、マデ、 ϕ （助詞なし）の5種である。

老年層においては、改まった意識を伴いやすい場面では助詞エが多用される。それ以外の場面では無助詞表現（これ自体が当地での方言的な表現である）が一般的である。男女間で運用上の差異は認められない。なお、下位場面に限って一部に方言の助詞サが現れてくることにも留意したい。

一方、若年層において注目されるのは、老年層の場合とくらべて、助詞ニが増大していることである。この傾向は特に女性において著しい。エとニとの文体上の価値については判然としないが、エはあまり知らない人に対して使うものでニの方が直接的で使いやすい、という内省が幾人かから寄せられている。どうもエには、大人の使う比較的よそよそしい表現といった評価が付随しているようである。

さて、この度の調査によってこの点が検証されうるかどうか。調査では、「道で会った親しい友だちに、その行き先をたずねるとき、ふつうどうたずねますか。」「では、目上の人（たとえば学校の校長先生など）に出会って、その行き先をたずねるときはどうですか。」という質問文で、「親しい友だち」を対者とする場面（casual）と「目上の人」を対者とする場面（formal）の二場面が設定された。

まず、富良野での状況について。全体としては、次のような出現率である。
(%)

	エ	ニ	サ	φ
「親しい友だち」 (casual)	40.5	32.4	2.0	18.4
「目上の人」 (formal)	57.9	28.4	0.3	5.7

いずれの場面においても、「エ」がもっとも多く、次いで「ニ」、「φ」、「サ」の順である。なお、ここでの「エ」と「ニ」には「目上の人」に対する「ドチラエ」、「ドチラニ」のような形での「ドチラ」に接続するものも含めている。

次に、札幌での状況について。全体としては、次のような出現率である。
(%)

	エ	ニ	サ	φ
「親しい友だち」 (casual)	31.9	39.3	2.6	17.4
「目上の人」 (formal)	58.7	27.9	1.1	3.1

casualな場面では、「ニ」がもっとも多く、次いで「エ」、「φ」、「サ」の順である。一方、formalな場面では、「エ」が圧倒的に多く、次いで「ニ」、「φ」、「サ」の順である。なお、ここでの「エ」と「ニ」にも、「ドチラエ」、「ドチラニ」のような形での「ドチラ」に接続するものを含めている。

さて、場面差の面から指摘されるのは、「ニ」、「サ」、「φ」が、「目上の人」、すなわち改まった意識を伴う場面においては一律に使用率がダウンするのに対して、逆にエの使用率は大幅にアップするということである。「サ」と「φ」がダウンすることは予想されるころではあるが、「ニ」のダウンと「エ」のアップについては興味深い現象といえよう。

そこで、「エ」と「ニ」に焦点を当て、その年齢層ごとのアップ率（ダウン率）を計測することにした。結果は表2-1（富良野）と表2-2（札幌）のようである。

表2-1 「エ」「二」のアップ率（富良野）

「エ」

	casual	formal	アップ率 (%)
15～19歳	30.8 →	69.2	38.4
20～29歳	21.1 →	55.3	34.2
30～39歳	30.4 →	53.6	23.2
40～49歳	48.2 →	69.7	21.5
50～59歳	54.1 →	54.1	0
60歳以上	49.0 →	51.0	2.0

「二」

15～19歳	42.3 →	26.9	-15.4
20～29歳	42.1 →	36.8	-5.3
30～39歳	47.8 →	34.8	-13.0
40～49歳	26.8 →	21.4	-5.4
50～59歳	18.0 →	24.6	6.6
60歳以上	22.4 →	26.5	4.1

表2-2 「エ」「二」のアップ率（札幌）

「エ」

	casual	formal	アップ率 (%)
15～19歳	27.5 →	57.5	30.0
20～29歳	8.5 →	56.3	47.8
30～39歳	32.4 →	63.5	31.1
40～49歳	35.8 →	55.2	19.4
50～59歳	55.6 →	69.9	14.3
60歳以上	33.3 →	41.6	8.3

「二」

15～19歳	32.5	→	40.0	7.5
20～29歳	49.3	→	26.7	-22.6
30～39歳	47.3	→	28.4	-18.9
40～49歳	44.8	→	31.4	-13.4
50～59歳	25.4	→	17.5	-7.9
60歳以上	25.0	→	27.8	2.8

casualな場面に関して、一般的に言えば、「エ」は比較的高年層に多用され、「二」は低年層に多用される傾向がある。そして、注目されるのは、casualからformalへの切り替えの様相である。

「エ」については、中年層以下においてはアップ率が一様に高いことがわかる。すなわち、そこでは場面による切り替えが激しいのである。一方、高年層におけるアップ率はそんなに高くはなく切り替えは比較的緩慢である。結果として、formalな場面では、年齢層間における「エ」の出現率の格差は縮小しているわけである。

「二」については、「エ」の場合と反比例して、中年層以下においてその使用率は一様にダウンする。（なお、札幌での10代においてcasualな場面での「二」の出現率が低いのは、この年代において「φ」の出現率が極端に高いことを受けての結果である。）したがって、formalな場面ではやはり年齢層間の格差は縮小しているのである。

以上の点から、はじめに掲げた室蘭市における若年層の内省とそれを承けてのコメントの正当性は立証されたと考える。

なお、この状況には、おそらく「エ」と「二」の文法的意味もかかわっている。 「エ」は、動作がその方向にむけて行われることを表すものとして使われるのに対して、「二」は、行き着き先や動作の目的を表すものとして使われるのである。したがって、「どこエ？」が、ある場合には婉曲性を表現しうるのに対し、「どこニ？」は、より具体的な質問を形成するのである。目上の人に「どこエ？」とたずねる場合には、おそらく具体的な答えを要求しない、いわば大人の世界でのあいさつであることが多いだろうと想像されるし、親しい友だちに「どこニ？」とたずねる場合には、単なるあいさつではなく具体的な

答えを要求する内容を伴った質問項と考えられるからである。「ニ」の使用が目上の人に対してはばかりされる理由はまさにここにある。

2. 1. 6. 特定形式の使用意識

以下、北海道での新表現として話題になる特定形式の使用意識についての実態を報告する。

対象とするのは、相手に念を押して「行くでしょう」「来るでしょう」という表現に対応する「行くッショ（行くショ）」「来るッショ（来るショ）」という言い方、および別れのあいさつ「さようなら」に当たる「シタッケ」という用語の2項目である。

(1) 「行くッショ（行くショ）、来るッショ（来るショ）」について

まず、富良野での比率は、

	「使用」	「理解」	
女性	72.5	21.3	
男性	66.9	26.6	(%)

のようになり、札幌での比率は、

	「使用」	「理解」	
女性	69.8	25.8	
男性	48.5	37.6	(%)

のようになっている。いずれも男性より女性の方に使用者が多いことが注目されよう。この形式は地域共通語とすべきもののようである。なお、ここでは回答のうち「使う」とされたものを「使用」, 「使った」「聞く」「聞いた」などとされたものを「理解」として処理している。

富良野と札幌それぞれにおける年齢層別の状況を図2-5に示した。特に札幌では年齢との相関がきれいである。年齢が若くなるにつれて使用率が上昇しているわけである。なお、全般的には富良野での使用率が高く、この形式の導入に関しては富良野の方が先行していることをうかがわせる結果となっている。

(2) 「シタッケ」について

この項目に関しては、札幌のみで調査が行われたので、ここでは富良野での状況をみるできない。

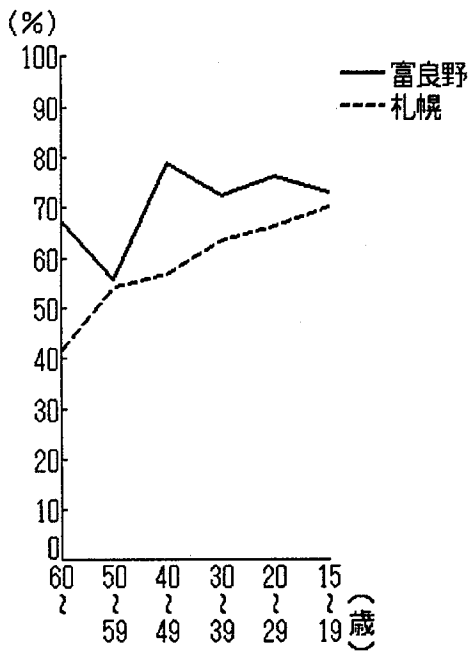


図2-5 「~ッショ」の消長

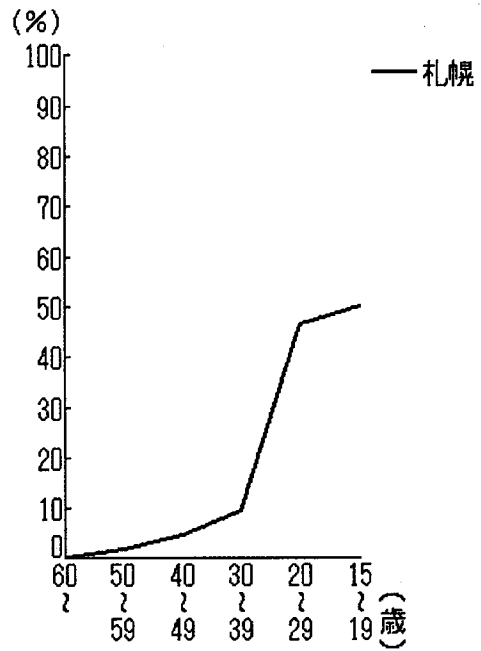


図2-6 「シタツケ」の消長

全体的な使用率は18.2%で、まだ高いとは言えないが、年齢層別の実態は図2-6のようになっており、30代と20代の間で断絶が存在する。10代においては「シタツケ」の使用者は50.0%に達し、この形式が札幌では若者用語として定着しつつあることをうかがわせる。

なお、女性よりも男性の方に使用者が多い（全体で、女性22.5%：男性14.3%）ことが指摘される。この形式は、いわば新俗語として意識されているようであるが、今後の運用状況を追跡していく必要がある。

2. 2. 文法(2) 高校生調査から

2. 2. 0. 本節で扱う調査と項目

本節では、前回と今回実施した高校生調査の項目のうち、文法に関連する20項目を扱う。各質問の内容は概略以下のようなものである。実際に提示した質問文は本報告書末尾の調査票を参照されたい。番号は調査票での質問番号である。

201. 「あの人は手紙を全然書カナイ～書カン」 (否定)
202. 「こんなペンではうまく書カサラナイ」 (状況可能の否定)
203. 「このペンは書クニイイ」
204. 「ローマ字で手紙を書ケル～書ケレル～書カサル」 (能力可能)
205. 「あの人が書クベ～書クダロウ」 (推量)
206. 「書クナラ～書クダラ, 早く書いた方がいい」 (条件)
207. 「朝五時には眠くて起キレナイ～起キラレナイ」 (能力可能の否定)
208. 「早く起キロ～起キレ」 (命令)
209. 「一緒に映画に行クベ～行コウ」 (勧誘)
210. 「もっと勉強シロ～勉強セイ」 (命令)
211. 「早く来レバ～来イバいいのに」
212. 「あんまりおかしくてどうしても笑ワサッタ」 (自発)
213. 「弟に食ベラセヨウ～食ベラソウ など」 (使役)
214. 「野菜の値段が高く (タケク～タカク) なる」
215. 「冬は野菜が高カンベ～高イベ～高カッペ」 (推量・疑問)
216. 「寒いスケ～寒いハンデ」 (理由)
217. 「寒いドモ雪は降っていない」 (逆接接続)
218. 「学校サ行く」 (行き先の格助詞)
219. 「行クッショ」 (念押し)
220. 「シタツケ」 (別れの挨拶「さようなら」)

このうち、201. ～ 218. の項目は前回調査から引き継いだ質問項目であり、219. と220. の2項目は今回調査であらたに追加した質問項目である。

本報告では、これらの各項目についての詳細な回答結果を網羅的に示すことはせず、主として、前回調査から今回調査への回答状況の変化、とくに回答状

況を全道的な分布という視野からひろく見た際に指摘できる、概括的な変化について報告することを目標としたい。

その際、二度の調査の結果を対照的に検討することが必要となるが、1.2.0.の【付】で説明した手順によって描いた、全道的な回答状況の図によることとする。

2. 2. 1. 文法形式の使用状況の分布と変化 —— いくつかの類型

各質問項目の文法形式の使用状況の分布を全道的な視野で検討してみると、多くの項目について、前回調査と今回調査の間に差異が指摘できる。この差異は、一つには方言的な文法形式を使用すると答えた高校生の人数比率の上での差異であり、多くの場合、前回から今回への減少という方向の変化として観察できる。また一つには、使用すると答えた人数比率の地域的な分布の変化として観察できる。まとめれば、全体として多かれ少なかれ使用率を減少させつつ、使用される地域を変化させている場合が多いというのが、調査結果の全般的な姿である。

このように概括できる調査結果を、地域的な分布状況を類型化しつつ、前回調査と今回調査との間の変化という視点でまとめると、次ページの表2-3のように分類できる。

この分類は、検討の対象として概略図を土台にしたものであり、一つ一つの項目をどの類型に属させるかについて客観的な基準を持つものではないことを留意しておく。分類の枠の間の境界は必ずしも截然としたものでなく、図の視覚的な印象によっているものであるから、詳しく検討すれば異なる分類の可能性を残すものである。また、とくに前回調査の数値が、各地点原則として5人の回答をもとにした十分率（をさらに百分率に仮に置き換えた値）によるものであり、数値としてはいわば不安定であることも考慮しなくてはならない。そうした数値から地域的な分布を積極的に読み取ることは慎重でなくてはならない。そのような点に留意しつつも、当面ここでは、得られた各質問項目の結果が表2-3のように分類できると考えた。

以下では、このように得られた分布と変化の類型の分類ごとに、属する調査項目の中から注意されるものを具体的かつ重点的に取り上げて検討することとする。

表2-3

高校生調査・文法項目の分布・変化の類型

前回調査(1960)	今回調査(1989)	該当項目
A. 全道的によく使われていた	A 1. 全道的に今もよく使われる	202. 書カサラナイ 207. 起キレナイ 208. 起キレ (命令) 215. 高イベ
	A 2. 全般に減少したがなお全道的に使う	204. 書ケレル 205. 書クベ (推量) 209. 行クベ (勧誘) 210. 勉強スレ 211. 来イバイイ
	A 3. 渡島半島に分布が目立つようになった	212. 笑ワサッタ
B. 渡島半島や海岸部に分布が見られた	B 1. 全道的に使用域が見られる	203. 書くにイイ 213. 食べラセヨー 217. 寒いドモ 218. 学校サ行く
	B 2. 半島や海岸部で分布がなお見られる	206. 書くダラ 214. 高 (タケ) ク
	B 3. 全道的にほぼ消えたがごく一部だけに残る	216. 寒いスケ/ 寒いハンデ
C. 半島・海岸部以外に分布が見られた	C 1. 全般に使用域が広がった	201. 書カン 213. 食べラソー
D. 前回は調査せず	D 1. 全道に広がっている	219. 行くショ
	D 2. 道央に分布が目立つ	220. シタツケ

2. 2. 2. 前回調査で使用域が全道的に分布していたもの

表2-3のAに分類したものは、前回調査で当該の方言的な文法形式が全道的に分布していたものである。調査項目の半数にあたる10項目がこれに属していた。これらの項目の今回調査での結果を見ると、

- (A1) 今も全道的によく使われているもの
- (A2) 全般に減少したものの、なお分布は全道にわたっているもの
- (A3) 分布が渡島半島にやや集中して見られるもの
- (A4) 全道的にほとんど使われなくなったもの

のように、4類に分類することが可能であると考えられた。

(A1) 今も全道的によく使われているもの

「202. こんなペンではうまく書カサラナイ」は、図2-7に示すように、前回調査では渡島半島・海岸部にとどまらずほぼ全道的によく使われていた状況可能な打消表現であった。これは東北地方方言に由来する（さらには山梨・静岡などでも広く行われていた）表現形式であるとされるものだが、今回調査でも大都市の高校生も含めてなお多くの回答者（回答者全体の53.3%）が「使う」と答えた。

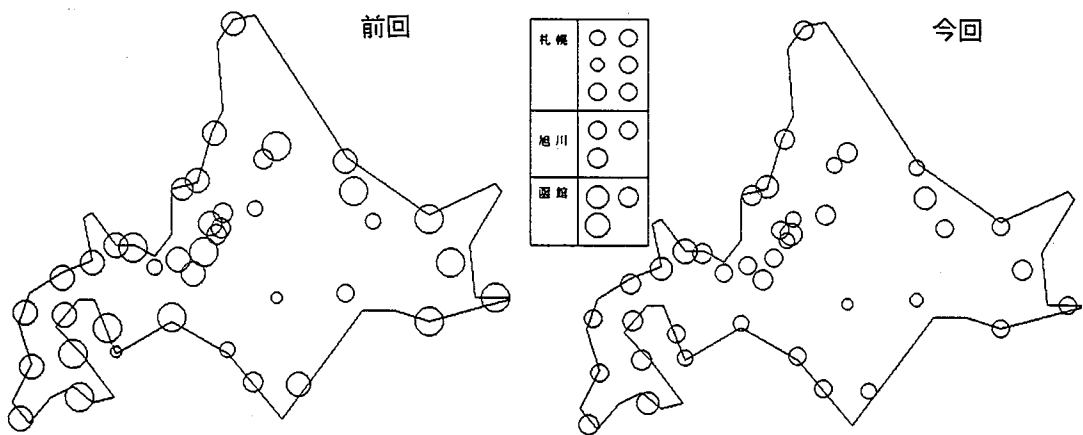


図2-7 このペンではうまく書カサラナイ

今回調査の質問では、書カサラナイを使わないとすれば他のどのような言い方をするかを、書ケレナイ／書カレナイ／書カラナイ／書ケナイという選択肢を添えて質問している。このうちもっとも選択が集中したのが書ケナイであって、全体では39.9%にのぼった。図2-8に今回調査の使用分布を示したが、全国共通語の可能動詞形がほぼ全道的に広がっていることがわかる。

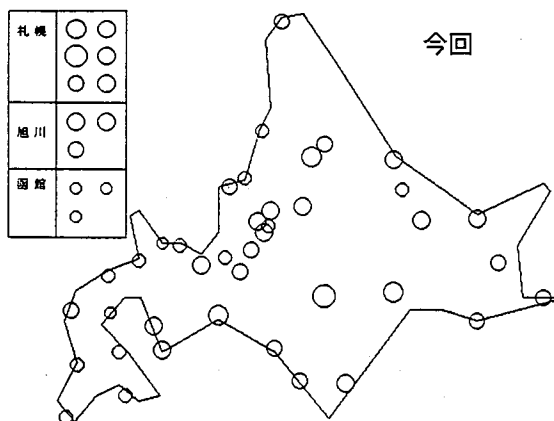


図2-8 書ケナイ

この他の形式は、書ケレナイが4.0%、書カレナイが0.6%、書カラナイが0.5%といずれもごく少数であった。選択肢のほか書カサンナイという音便形変種が、半島部と南部海岸部を中心にしてわずかずつの分布を示した(分布図は省略する)。

一段活用の動詞に接続する能力可能の打消表現を、いわゆるラ抜きで言う「207. 朝5時には眠くて起キレナイ」は、前回・今回とも全道的に活発に使用されるものである。図2-9に両回の調査結果を示す。

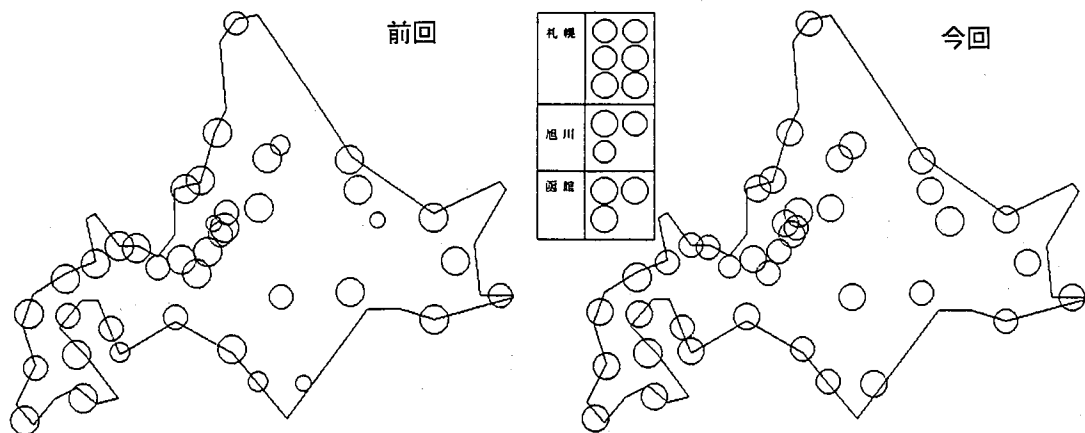


図2-9 起キレナイ+起キレン

図は、否定の助動詞をナイと言う者とンと言う者とをまとめたものである。これも含めて、さらに動詞の語中が有声化するかどうかを区別せずに、起キレナイ・起キレン・起ギレナイ・起ギレンをまとめると、今回調査では全体で86.9%がラ抜きで答えており、起キラレナイ（～ン）の13.1%を大きく上回る。前回調査の報告書では、この形式の起源を東北地方に想定しているが、起キレナイが全国的に広がったラ抜き言葉の典型例と形態的に同じであるだけに、今回調査の結果の中には全国的なラ抜き形式の広がり及んだケースも相当程度含まれると考えるのが適切だろう。

「208. 早く起キレ」という命令表現も、道央・道東でいくらかその勢力を弱めたとは言え、なお全道的に半数近くの高校生（全体で46.4%）に使われている。図2-10を参照。

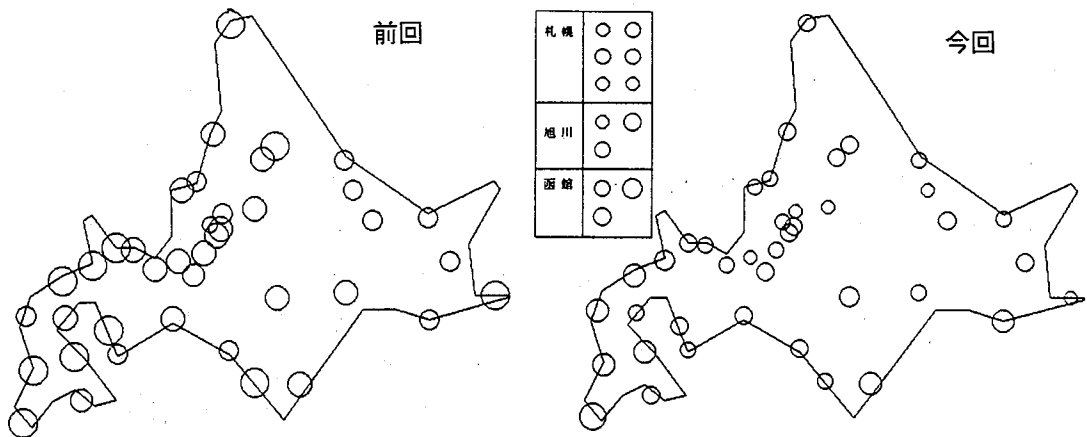


図2-10 早く起キレ（命令）

前回調査で全道を圧倒的に覆っていた起キレに替って、今回調査で勢力を増したのが共通語式の起キロである。次ページの図2-11に示すように、前回調査では道東の一部にわずか現れるだけであって、その報告書でも「極めて勢力が弱い」とされたのだが、今回調査では全道的に現れ、全体で40.4%と、起キレとほぼ勢力を2分するに至っている。共通語化の一つの事例であると見てよいであろう。

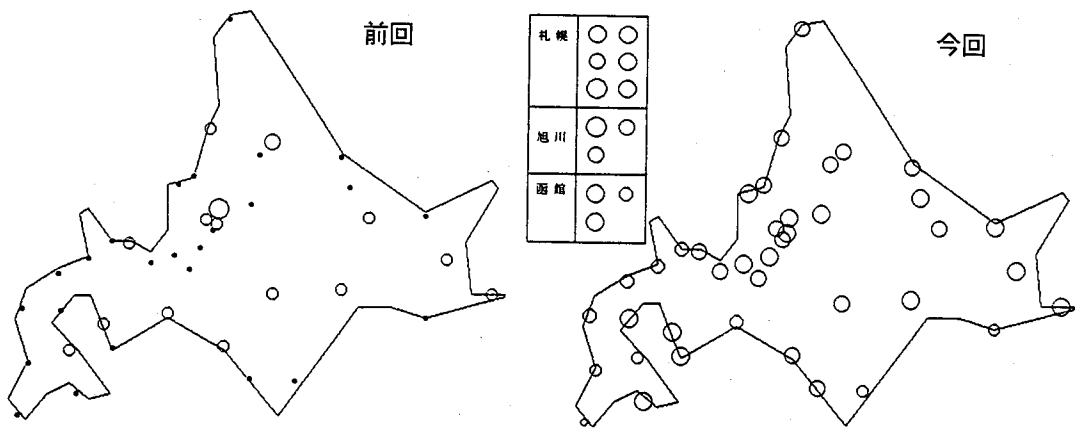


図2-11 早く起キ口 (命令)

起キレ・起キ口の2大勢力と並んで、もう一つ起キナという形式も注目される。これは、前回調査ではあまり有力ではないと記述されていた形式であるが、今回調査では、とくに女子高校生の間で無視できない位置を占めるに至った。

起キレ・起キ口・起キナという三つの形式の使われ方を回答者の性別で対照してみると次のようになる。数値は全道全体の比率である。

[今回]	男子	女子	全体
起キ口	40.0	40.8	40.4%
起キレ	59.7	32.7	45.8
起キナ	0.2	20.1	10.4

共通語形の起キ口は男女均等に約4割、それも全道的に分布している。これに対して、起キレは全体としては4割強で全道に分布しているのがあるが、その内訳は男子に片寄っている。これを補うかのように、起キナは、男子ではほとんど回答されないのに対して女子の2割に選ばれて

いる。起キ口も起キナも、起キレに比べれば北海道では新しい語形と見てよいだろう。それらが、前回調査から今回調査にかけて、性別の片寄りを見せながら広がっていることがわかる。つまり、共通語形の起キ口は男女ほぼ均等に、また非共通語形の起キナはほぼもっぱら女子の間に、それぞれ広まったのであ

る。

いま一つ、女子高校生の起キレと起キナは、その分布について図2-12、図2-13にみられるような特徴も指摘できる。すなわち、起キレが、どちらかといえば渡島半島・海岸部に優勢な分布を示すのに対して、起キナは、その地域では勢力が比較的弱いという対比である。前回調査で全道にわたって圧倒的であった起キレが、今回調査の女子では半島・海岸分布を示す（別の見方をすれば、より新しい起キナがそれ以外の地域に広がっている）という事実は興味深い。なお、男子の起キレには、女子に見られるような分布の片寄りには観察されないと言ってよい（分布図は省略）。

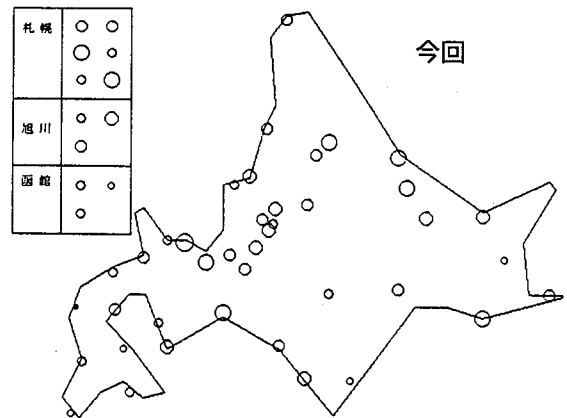
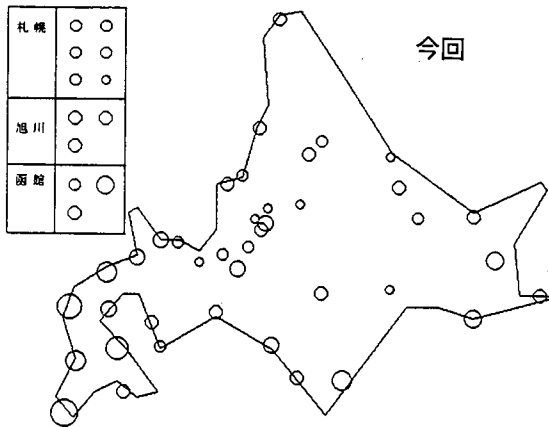


図2-12 起キレ（女子）

図2-13 起キナ（女子）

(A1)に分類される項目は、以上のほかに「215. 冬は野菜が高いべ」がある。質問では高カンベ／高イベ／高カッペの3形式を区別して選択してもらったが、結果的には高カンベ／高カッペはそれぞれ0.4%にとどまり、方言形式としては高イベが55.0%を占めてもっとも有力なものであった。選択肢以外の記入として終止形による共通語的な高イ（31.9%）、比較的新しい方言形である高イッショ（5.0%）などが現れた。

高カンベ／高イベ／高カッペの3形式を合わせた分布状況を、次ページの図2-14に掲げる。やや、半島・海岸部に多めの分布があるものの、今回調査でもなお、全道的に広く分布していると見てよいであろう。

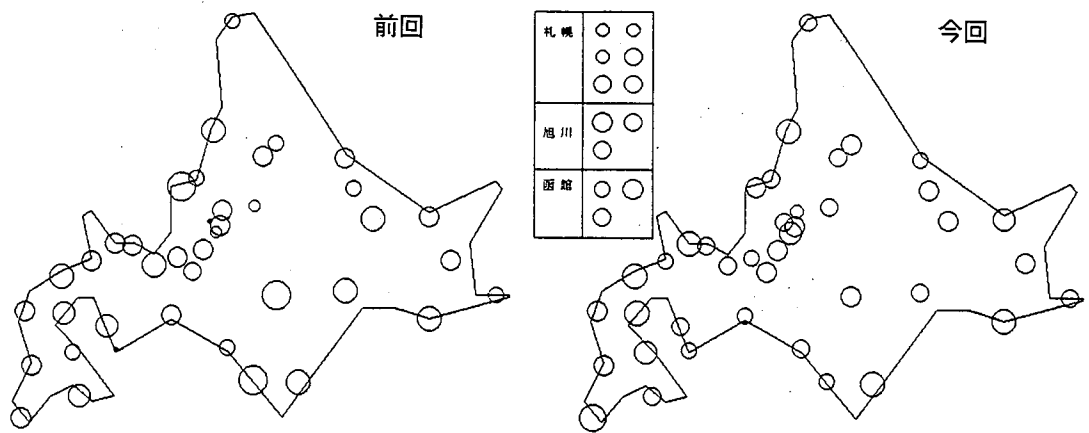


図2-14 高いべ (高カッペ, 高カンベも含む)

(A2) 全般に減少したものの、なお分布は全道にわたっているもの

「204. 自分はローマ字で手紙を書くことができる」の下線部をどうかについて、書ケル／書ケレル／書カサル／書カエル／書クニイーという選択肢を添えて質問した項目である。能力可能の表現を問うものだが、この選択肢のうち、書カサル、書カエル、書カクニイーの形式は、前回調査でもほとんど使われていず、また今回調査でも書カサル (0.4%)、書カエル (0.1%)、書カクニイー (0.4%) とごくわずかしかな選ばれなかった。別の項目で「203. このペンは書きやすいという意味を書クニイーと言うか」という状況可能を質問して、前回も今回も書クニイーがそれぞれに回答されていた (後述・B1) のと対比的である。

能力可能の表現形式として前回もっとも多く選ばれていたのが書ケレルである。全国共通語の本来の規範によれば可能動詞形である書ケルに、さらに可能の助動詞のレルが重なった表現である。この書ケレルの前回・今回の結果を図2-15に示す。図のとおり、前は半島・海岸部に濃い分布を見せながら全道的に現れていたのが、今回は全般的に頻度をさげつつも、なお全道的に薄く分布している。道全体では8.1%の選択率であった。

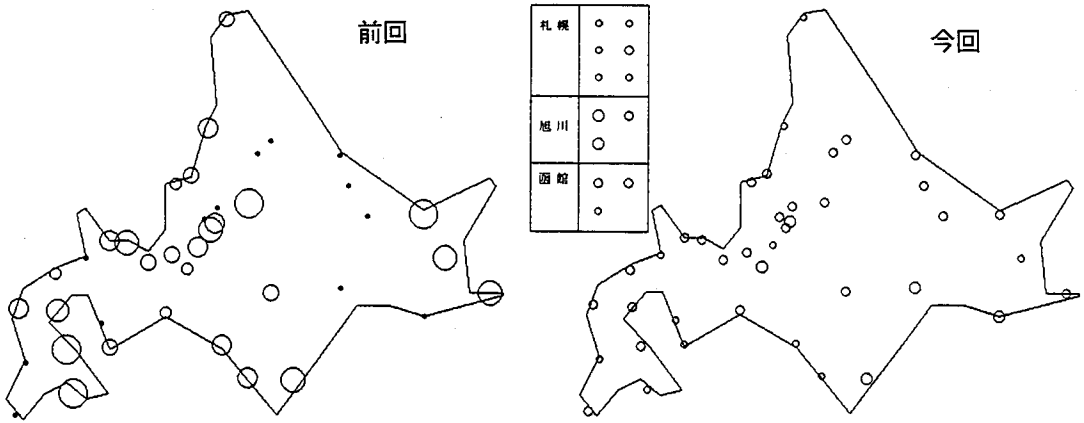


図2-15 書ケレル

今回調査で全道的に圧倒的な現れを見せたのは、全国共通語の可能動詞形の書ケルであった。道全体で91.1%の高率で選ばれ、図2-16に見るように地域的な片寄りもない。

能力可能の表現では、書ケルという形への全国共通語化が全道の高校生でほぼ完成したと言ってよい回答状況であるのだが、その流れの中で、なお、図2-15に見たように、書ケレルとい旧来の形式も1割弱、残っている。ただし、この書ケレルは、本州各地において、書ケルという可能動詞に可能助動詞レルが累加された相対的に新しい

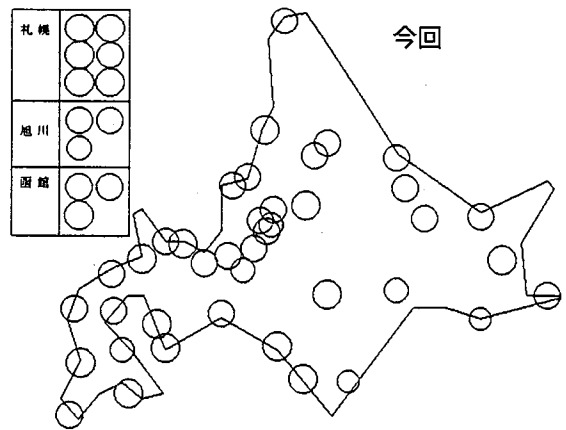


図2-16 書ケル

形式として現れる可能性のあることも指摘されている。北海道全域で若い世代に少数ながらも行われる書ケレルにも、この可能性のあることは否定できない。より詳しい調査が望まれるところである。

「205.手紙はあの人が書くだらう」という推量表現を書クダロー～書クペーのいずれで言うかを尋ねた項目では、前回、全道的に優勢であった書クペーが、今回も、総体的には頻度を下げながらもなお全道で選ばれている。今回、道全体では書クペーが47.4%，書クダローが35.4%という比率であって、方言形が全国共通語形を上回っている。書クペーについて、図2-17を示す。

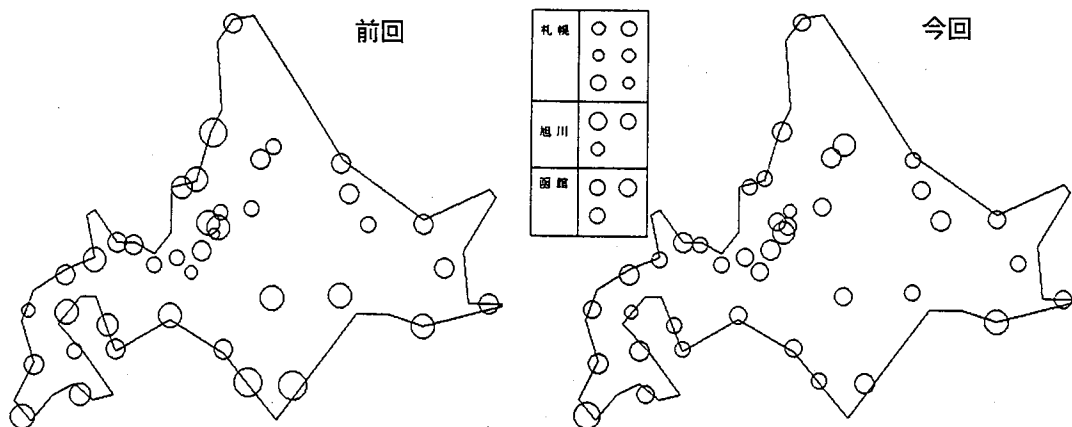


図2-17 書クペー

この推量表現の項目については、性別による特徴が3点指摘できる。

一つは、方言形・書クペーが男子生徒に濃く行われていて、女子生徒では比較的薄いという点である。共通語形・書クダローとの張合い関係を考慮すれば、

[今回]	男子	女子
書クペー	64.4	31.3%
書クダロー	30.9	39.7

左のような比率であって、女子ではむしろ共通語形の方が高率である。方言形は男子では約3分の2の多数派であるが、女子では3分の1にも満たない。このことは、前回調査でもすでに指摘されていたことであつたが、それが今回一層は

きりした。この項目での共通語化は女子から進行したと見てよいと思われる。

二つめは、方言形・書クペーの分布そのものにも性別による地域差が指摘できる点である。次ページの図2-18に示すように、男子では全道的にほぼ均等な分布が見られるのに対して、女子の方は渡島半島・海岸部に比較的濃い分布

が見られる。前回調査でも、方言形について「どちらかと言えば海岸的」という指摘がされていたが、今回調査では、その傾向がとくに女子ではっきりととらえられている。

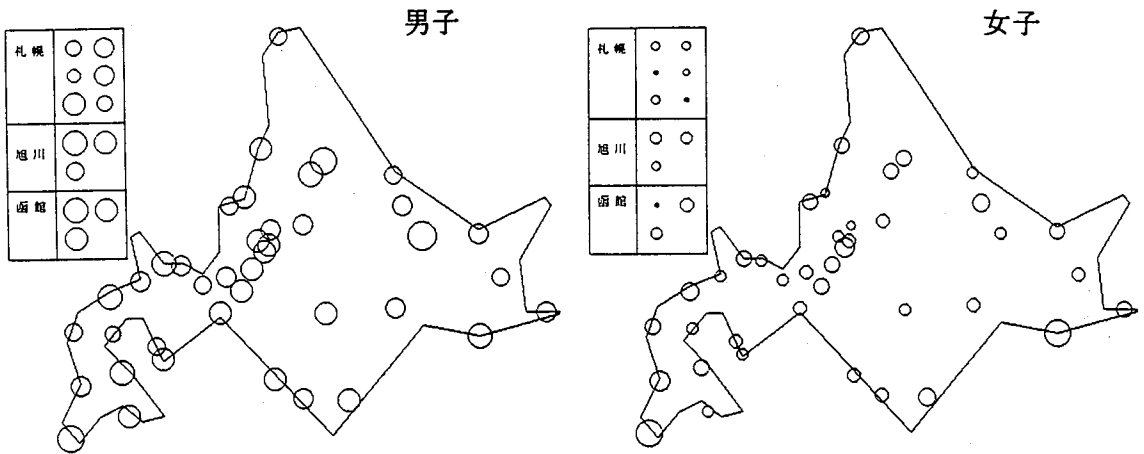


図2-18 書クベー (今回・性別)

いま一つ、書クショ～書クッショという形式が、とくに女子で回答された点が指摘できる。全体の頻度では、二つの変種を合計しても 8.6%という少数であるが、男子の 0.9%に比べれば留意すべき位置を占めるものといえる。この形式の分布は、図2-19のようなものであるが、円は小さいながらも、全道にわたって広がっていて、推量の意味でのこの文末形式(ショ)の使用が、性別の要因をはらみながら全道で観察できることがわかる。

～ショは、別の意味(念押し)でも道全域に広がっていることが219.の項目でわかっている(後述・D1)。

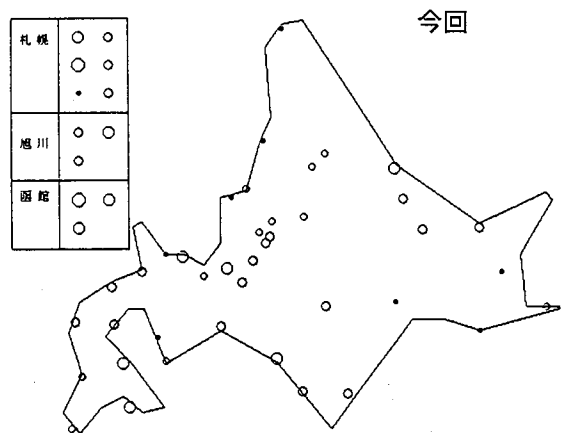


図2-19 書ク(ッ)ショ (女子)

「209. いっしょに映画を見に行こう」という勧誘の意味を行クベ～行コーのどちらで言うかという項目でも、方言形・行クベが、前回よりは頻度を下げながらも今回もお全道的な分布を見せた。図2-20を参照。

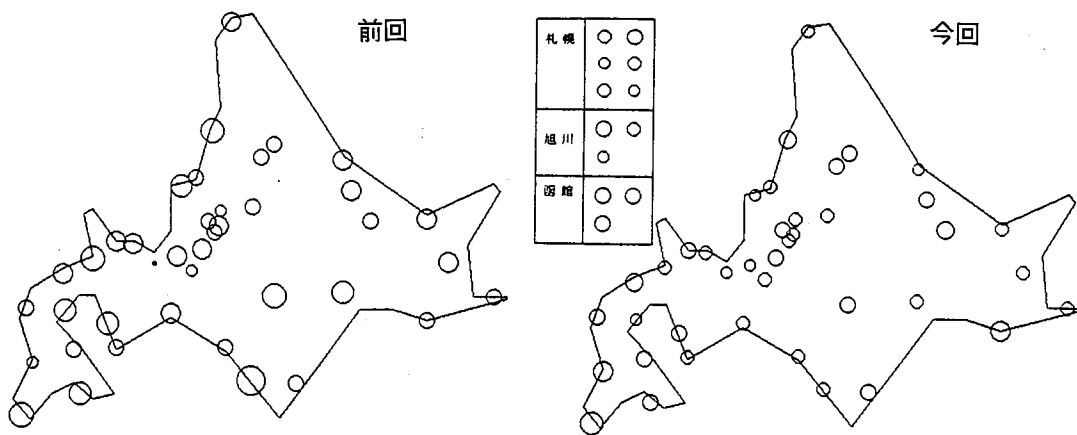


図2-20 行クベ（勧誘）

この項目でも、前項と同様に、共通語形と方言形の割合にはっきりとした性差が指摘できる。

[今回]	男子	女子
行クベ	61.9	8.1%
行コー	35.8	90.0

また、女子の方言形・行クベの使用が、図2-21のように半島部に目立つことも指摘できる。共通語形はこの裏返して、半島部で薄いほかは全道ほぼ均一的に優勢に広がっている（図は省略）。

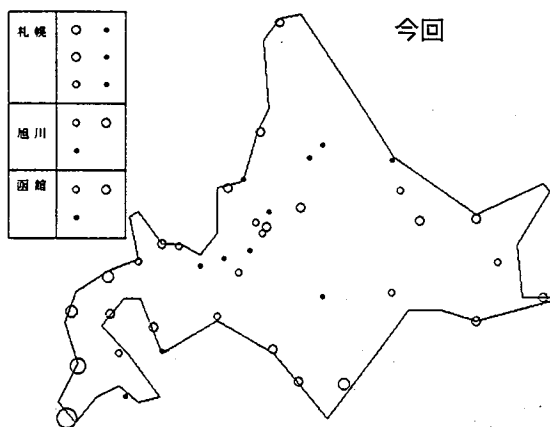


図2-21 行クベ（勧誘）（女子）

「210. もっと勉強しろ」と仲のよい友達にどう言うかについて、勉強セー／～シロ／～シレ／～スレという選択肢を挙げて質問した項目で、方言形～シレと～スレが、全道に広くかつ濃く見られた前回の分布から、今回はなお全道に広がっているものの総体的に頻度を下げた。～シレと～スレの両形を合算して図2-22に示す。この方言形の使用には、全体で、男子 54.6%、女子 34.8% という性差がある。また、前項までと同様、特に女子で～スレが半島部や南部海岸部で目立つという地域差も見られる。

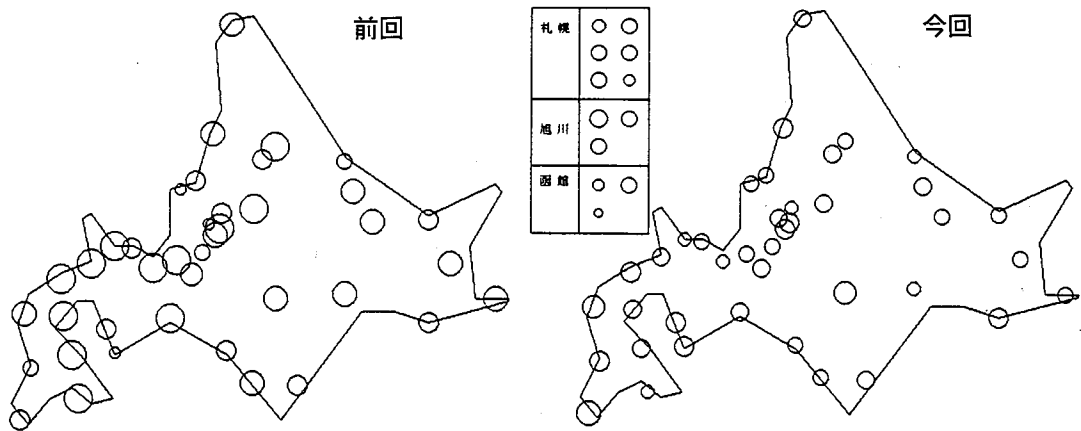


図2-22 勉強スレ+勉強シレ

この他の選択肢のうち、共通語形・勉強シロは、全体で 33.4%であり、顕著な地域差や性差は示さない（男子 37.8%、女子 29.2%）。

これに対して、勉強セーは、全体で 5.9%（男子8.9%、女子3.1%）であるが、このうち、男子について図2-23のような地域差が見られる。やはり、半島部に分布が比較的目立つのである。

回答には、選択肢のほか、自由記入で勉強シナが現れていて、全体で14.8%と比較的優勢な頻度であった。この

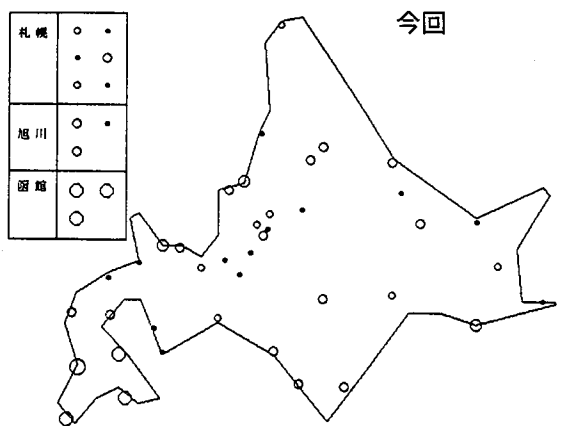


図2-23 勉強セー（男子）

勉強シナには顕著な性差が見られ、男子が0.6%とごくわずかであるのに対して、女子は28.3%と4分の1を越えた。女子だけの今回の分布図を図2-24に示す。半島部に薄いほかは、全道的にほぼ均一に広がる分布を見せている。この～シナは、前回調査では報告に登場していない。おそらく北海道では相対的に新しい形式と見てよいであろう。それが、ほぼ女子だけにとってもよい性差を示しつつ、全道に広がっているのである。全国共通語とは言にくい語形であり、おそらく東日本に広く行われるものが、このような広がりを見せていることに注目しておきたい。

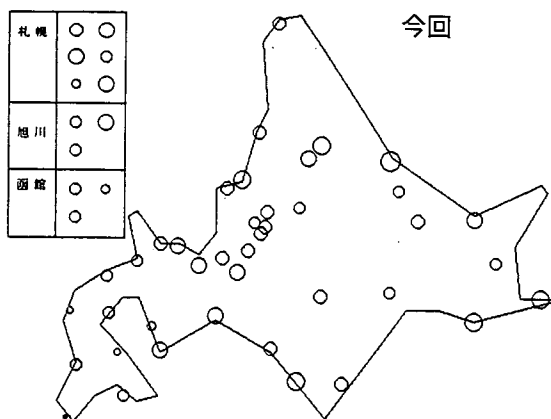


図2-24 勉強シナ (女子)

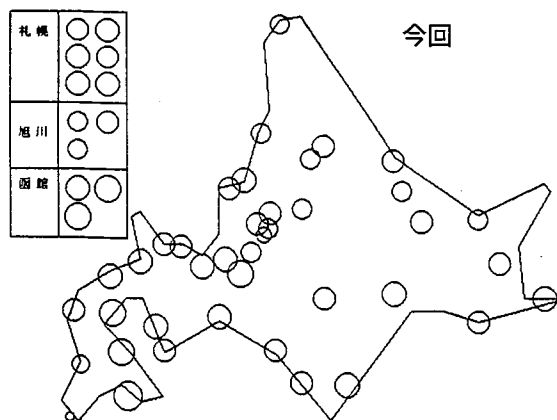


図2-25 クレバ

(A2)の類型に属させたもう一つの項目が「211. 早く来ればいいのに」という表現の動詞部分の形式である。コレバ/クレバ/コイバの三つの選択肢によって回答を求めたところ、前回調査で全道的にもっとも優勢であったコイバ～コエバが、今回は頻度を総体的にかなり下げながらも(全体で19.6%)、なお全道にわたって使われていることがわかった。コイバとコエバを合算して、両回調査の分布図を次ページの図2-26に示す。

共通語形のクレバは全体で70.7%と今回もっとも優勢であり、左の図2-25に示すように全道に広く行われている。活用上の変種コレバは8.7%と少数である。

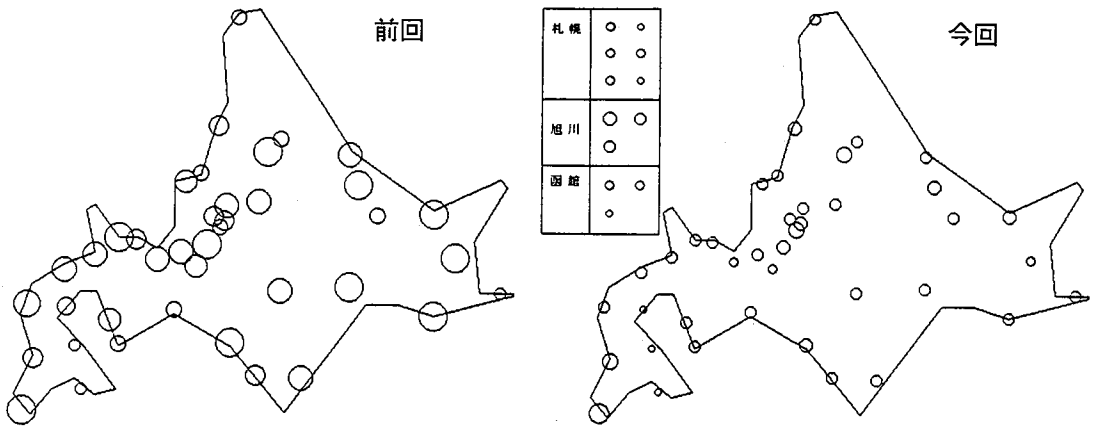


図2-26 コイバ+コエバ

(A3) 分布が渡島半島にやや集中して見られるもの

前回、分布が全道的に「圧倒的多数」（報告書）であるとされた項目で、今回、その分布が渡島半島（ないし海岸部）に片寄りを示した項目が「笑ワサッタ」という自発の表現である。 possible の意味の～サルと同様に、東北方言で優勢な言い方であるとされるものであるが、その分布が図2-27に示すように、今回とくに半島部において目立った。

全体では38.6%という比率の中で函館の都市部も含めて、半島部では75~85%の高い比率で選ばれているのである。

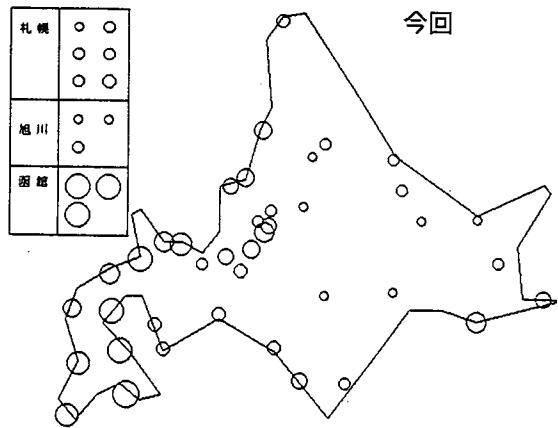


図2-27 笑ワサッタ

2. 2. 3. 前回調査で、渡島半島や海岸部に分布が見られたもの

表2-3のBに分類したものは、前回調査で、総体として半島部・海岸部に分布が目立つとされたものである。ここでは7項目をこれに属させたが、これらの項目は、今回調査では次の3類型に分類できると思われる。

- (B1)全道的に使用域が見られるもの
- (B2)半島部・海岸部で分布がなお見られるもの
- (B3)全道的に分布が消えたが、ごく一部だけに残るもの

(B1)全道的に使用域が見られるもの

「203. ペンが書きやすいということを書くニイイ」と言うかどうかの項目では、両回の調査で図2-28のような対比が得られた。この図は、前回調査にならって～ニイイと～ニエエとを合算して描いたものである。前回調査では半島部を中心にした（および道央東部にも）分布が見られていたのが、今回調査では全体の平均で12.8%と頻度はかなり下げながらも、前回分布のなかった道の南部や東部にもほぼ均等な分布を見せた。

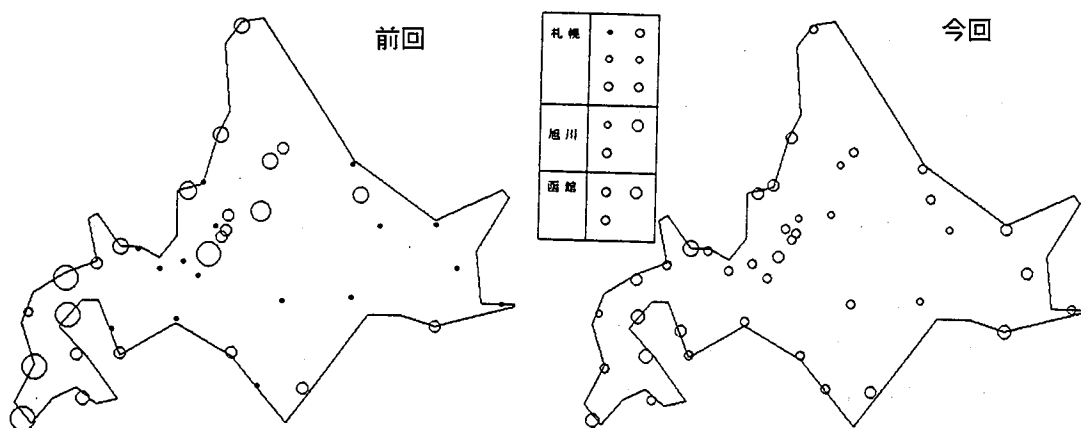


図2-28 書くニイイ+書くニエエ (合算)

この項目の他の回答語形のうち、前回、図2-29のような分布で広く行われていた書カサルは、今回は全体でわずか0.2%だけにとどまった。激減というべき変化である。

前回調査は面接調査によっていて、質問する際の候補形式の最初に書カサルが並んでいた。これに対して、今回調査はアンケート調査で、書クニイと言わない回答者には自由記入を求めるだけであった。こうした調査方法の上の違いによる差異である可能性も否定できない。

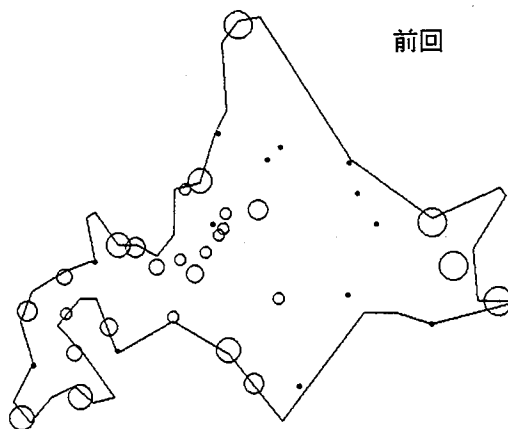


図2-29 書カサル

もちろん、この意味での～サルが、別項目の～サル（202. 状況可能，212. 自発）とは異なり、意味領域を限定して衰退したという解釈もできるような結果であるが、ここで確かな結論を導くことは困難である。今後の課題となる点である。

書くニイ、書カサルという方言形に替って、今回、全道的に勢力を広げているのが共通語形・書きヤスイである。全体で73.3%にのぼる。

「213. リンゴは弟に食べさせよう」という使役表現に関して、前回調査では、方言形式の食べラセヨーと食べラソーという二つの形式が異なる分布を示していた。前者の食べラセヨーは半島・海岸部に分布が見られ、後者、食べラソーは、半島・海岸部をのぞく地域で分布が目立つものであった。

半島・海岸部に分布の見られた食べラセヨーは、今回、全般的に頻度は下げながらも（全体平均で18.3%）、全道的と言ってよい分布に変わった項目の一つである。図2-30に両回の結果を示した。食べラソーについては、(C1)に分類すべき項目であるので、後述する。

一方、共通語形・食べサセヨーは、図2-31に示すように、前回調査では道央を中心しつつ全道にひろく現れていたのが、今回調査では、頻度を総体的に上げて（全体平均で59.7%）、分布も全道にさらに濃く現れた。全国共通語化の進んだ事例である。この変化に男女差はほとんど見られない。

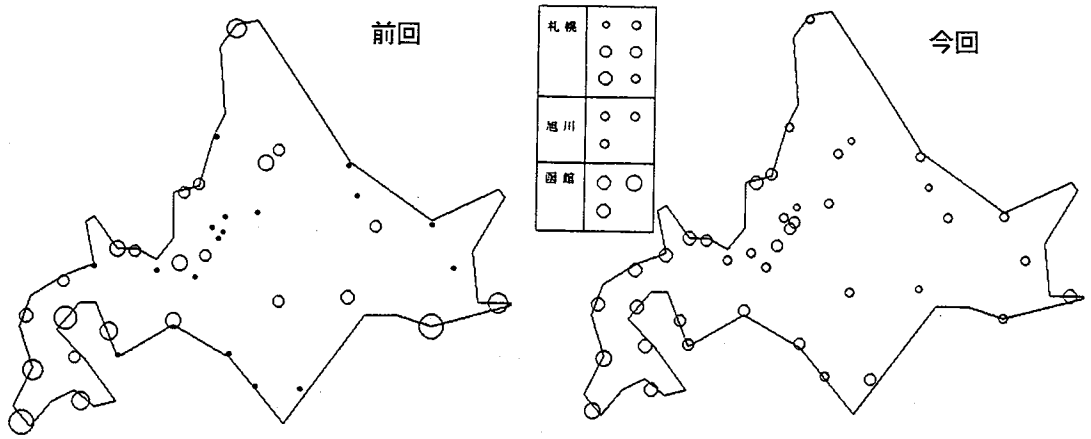


図2-30 食ベラセヨ

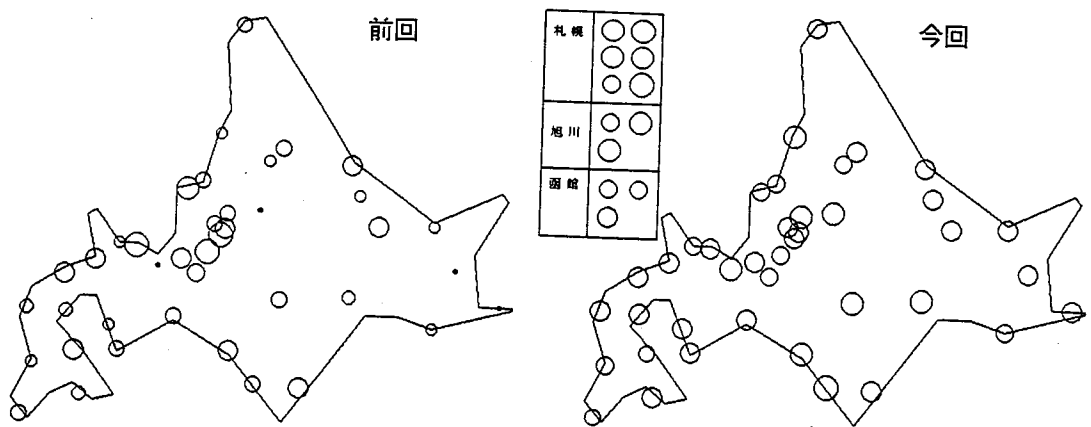


図2-31 食ベサセヨ

(B1)の類型に属する項目には、以上のほか、逆接の接続表現「217. 寒いドモ」と行き先の格助詞「218. 学校サ」の二つが該当する。図2-32, 図2-33。

寒いドモは、前回調査で半島部に分布していたと言え、その地域でも「今は使わないが昔使った」という回答者がいて、報告書で「このようなものは、すでに北海道方言とは言えないであろう」とされたものである。今回調査でも、なお全道に分布を広げた観があるものの、全体で6.0%にとどまった。

学校サという言い方は、図2-33に見るように、前回はっきりした半島・海岸分布を示していたのが、今回もなおその片寄りを示しつつ、全道的にもいくらかずつの現れを見せた。これなどは、分類としては次の(B2)（今回も半島や海岸部で分布が見られる）にあたる面をもつが、ここでは全道各地での現れも重視して(B1)に含めておく。全道平均して18.3%が～サと答えていて、そこには顕著な男女差は指摘できない（男子20.3%，女子16.4%）。

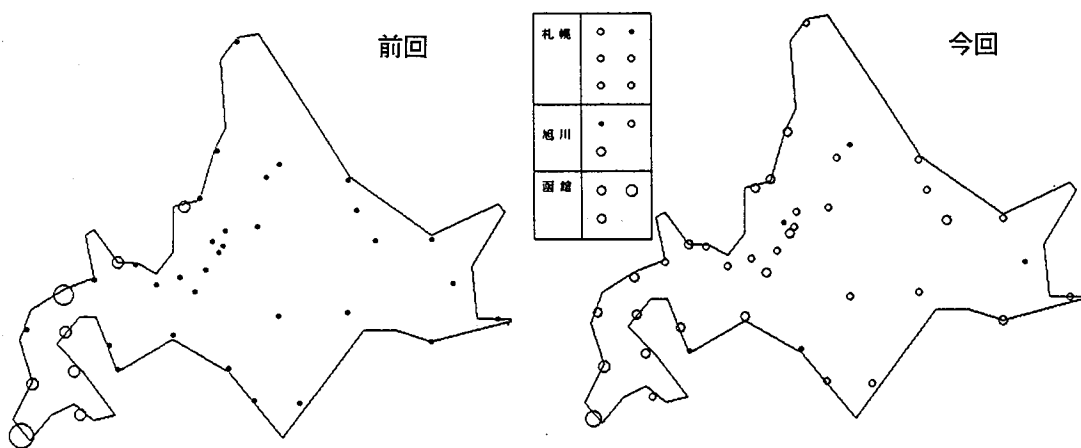


図2-32 寒いドモ

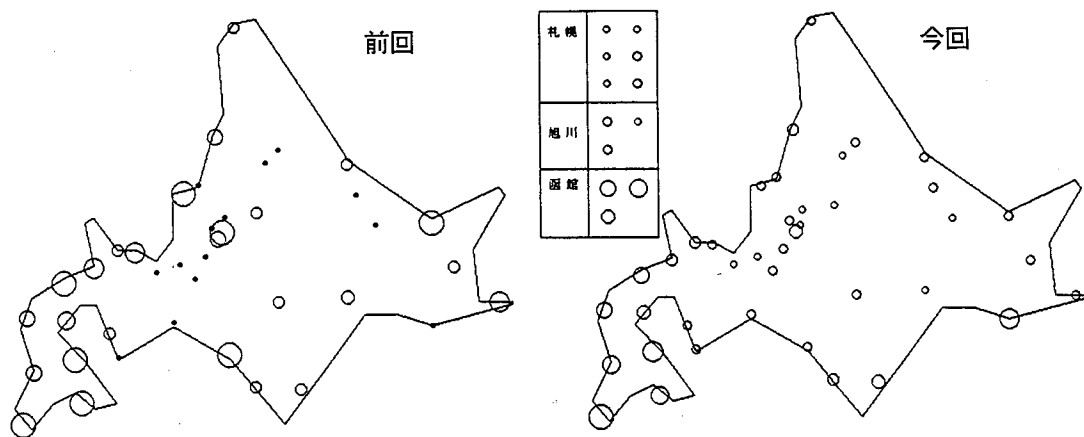


図2-33 学校サ行く

(B2)半島部・海岸部での分布が今回もなお見られるもの

出現頻度は下がっても、前回と同じような半島・海岸分布が今回も指摘できる(B2)のグループには、「206.手紙を書くなら早く書いた方がいい」と言うときの書くダラ、「214.冬には野菜が高くなる」のタケクナルの二つが該当する。

このうち、書くダラの両回の分布状況は図2-34に示すとおりである。前回の結果は、札幌周辺の道央部にもまとまった分布が見られるものであるが、前回報告書(114ページ)には関連する質問への回答状況も考慮に入れた結果、「ダラはやはり半島部・海岸部に多いことはあきらかである」と記述されたことにもとづいて、今回もその分布を重視した分類に属させた。

図2-34からは、前回に比べて、全道的に頻度が下がっている(全道平均で2.9%)様子があきらかであるし、半島・海岸部でも勢力はごくよわいものである。共通語形の書くナラが、全道平均で95.7%と圧倒的な広がりをもせた共通語化の流れの中で、ダラはほぼ消えかかっていると言ってもよいだろう。

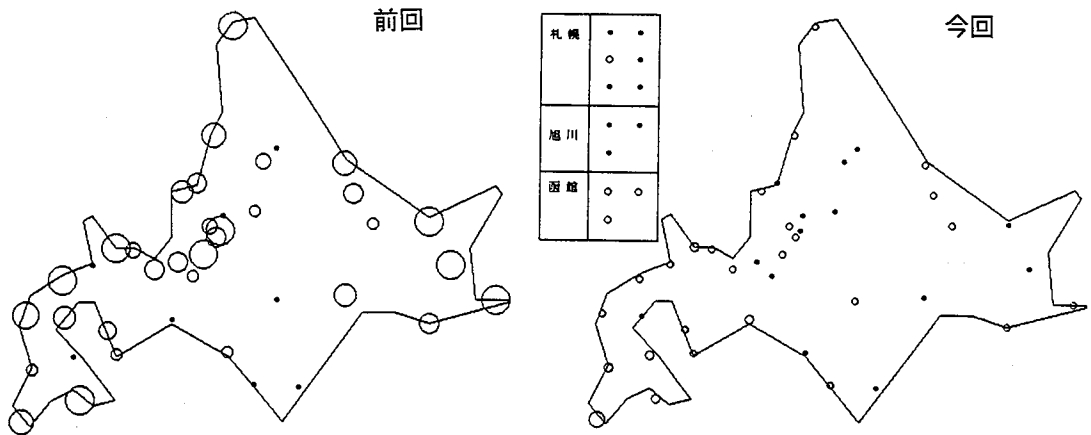


図2-34 書くダラ

これに対して、「タケ（高）ク」は、図2-35に示すように、前回からすればいくらか勢力を回復したと見てもよい状況である。全体では9.2%という少数ではあるものの、今回調査の半島部を中心にした分布は、前回よりも地点数で増えており、それぞれの頻度もそれほど低いものではない。このような事例は、今回調査の中でもまれなケースであって留意されるものである。ここでも、男子12.1%、女子6.5%というように、男子に方言選択率が高いという性差が指摘できる。

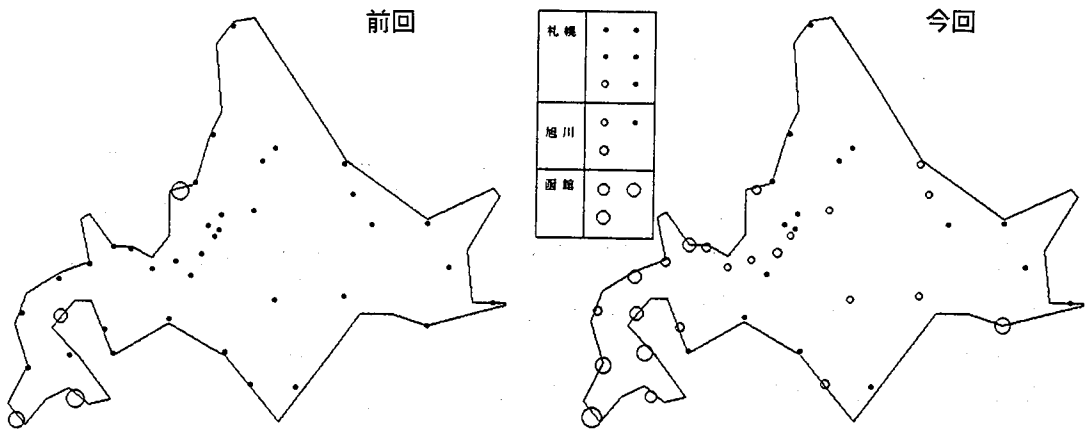


図2-35 タケ（高）ク

(B3) 全道的に分布が消えたが、ごく一部だけに残るもの

前回報告書で、すでに北海道から「ほとんど消えかかっているといっている」（116ページ）とされた項目に「216. 寒いから寝たほうがいい」というときの接続表現、～ハンデ、～スケがある。これらは、分布としては半島・海岸に残るものであったのだが、今回に至って、ごくわずかの頻度を各地に残しつつも、全体としてはきわめて薄い分布しか示さないものとなった。全体平均では、～ハンデが4.5%、～スケが6.0%という回答率である。今回調査の～ハンデを図2-36、～スケを図2-37にそれぞれ示す。

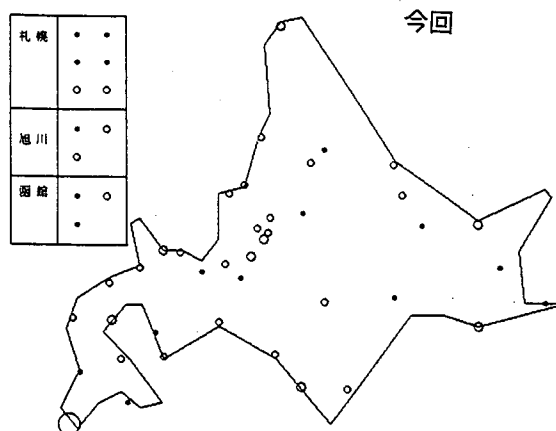


図2-36 ~ハンデ

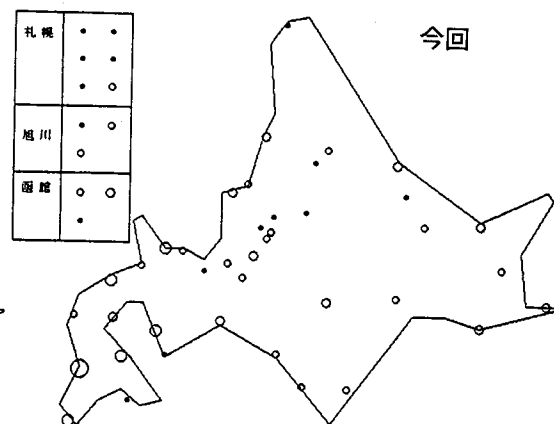


図2-37 ~スケ

図2-36と図2-37には、それぞれ半島部に1地点ずつ孤例的に回答率の高い学校が見える。~ハンデは松前高校(69.6%)、~スケは江差高校(50.0%)である。ともに半島部に属する高校であるが、なぜこのような回答率が見られるのか、ここでは不明である。

なお、言うまでもなく、この項目に自由記入で回答された語形は、寒いカラ(74.5%)、寒いノデ(3.5%)のように全国共通語式のものである。

2. 2. 4. 前回、半島・海岸部以外に分布が見られたのが、今回、全般に使用域が広がったもの

表2-3で(C1)に分類した項目である。「201.あの人は全然書かない」という否定表現を書カンと言うか、「213.リングは弟に食べさせよう」を食べラソーと言うか、の2項目をここに分類した。

書カンの両回調査の分布図は次ページの図2-38のようになる。

前回報告書では「カカンという者はあまり多くないし、地域性もないようである。しかし、これは調査という場面に制約されているように思う。実際生活ではカカンのような表現はよく耳にした。これは方言であるという意識が強い

ので、調査では出てこないであろう」(111ページ)と説明されていた。この報告書で省略された前回調査の分布図を描いてみると、その限りでは、半島部をのぞいた各地に散らばった分布が見られる。これが、今回調査に至って、半島や南海岸以外の地点を中心にして地点数を増やした分布が観察できるようである。とくに新規の対象校も含めて、旭川や道東の地点に分布が広がっている。そうした地点では、それぞれおおよそ4分の1程度の生徒が書カンを使うと答えている。全体としては8.6%という少数である中で、こうした地点の存在は無視できないように思われる。全体平均で89.9%と圧倒的に多数を占める共通語式の書カナイとの張合いの中で、書カンがどのような経過をたどったか、またこの先たどるのか、注意すべき問題である。前回報告書で指摘された日常生活の中では否定辞「ン」がよく使われるという感触は、今回の調査時にも得られたものであった。こうした形式が調査では現れにくいという事情が実際にあるのかどうか、という調査法にかかわる問題点も含めて、今後の課題の一つとなる。

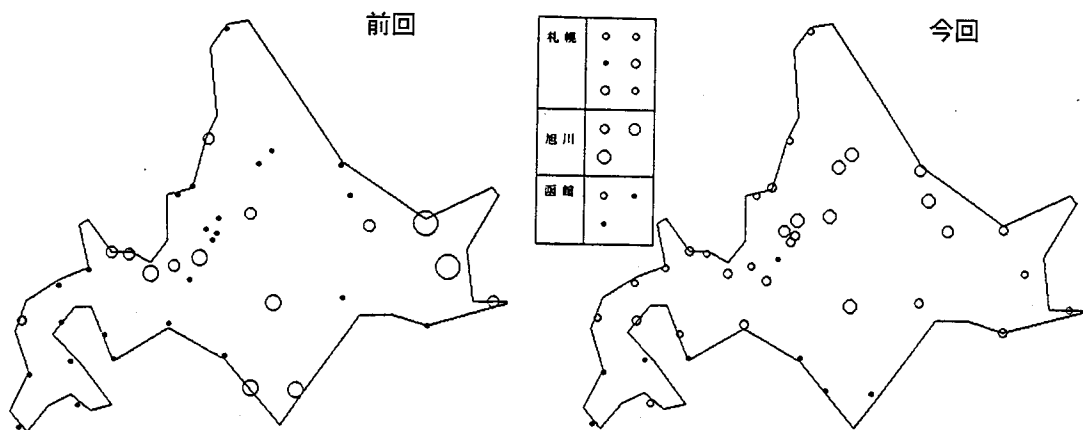


図2-38 書カン

「213. リンゴは弟に食べさせよう」を食ベラソーと言うという回答の、両回調査の分布図を図2-39に示す。同じ質問項目での別の回答語形・食ベラセヨ一は、(B1)の項で見たように、前回、半島・海岸分布であったものが、今回は全道的な分布を見せていた。これに対して、食ベラソーの方は、前回、半島部

ではほとんど分布が見られず、道東や南海岸部で現れていたものであった。今回調査では、図に見られるようにほぼ全道にわたってある程度ずつの頻度でもって現れている。全体の平均は9.1%と少数であるが、この全道的な分布は無視できないものだと考える。西日本で問題となる一段動詞の五段化や、これにまつわる使役表現の現れ（食べラン、食べサス～食べラスなど）が、北海道ではどのような状況にあるのかなども含めて、今後さらに検討されるべきであろう。

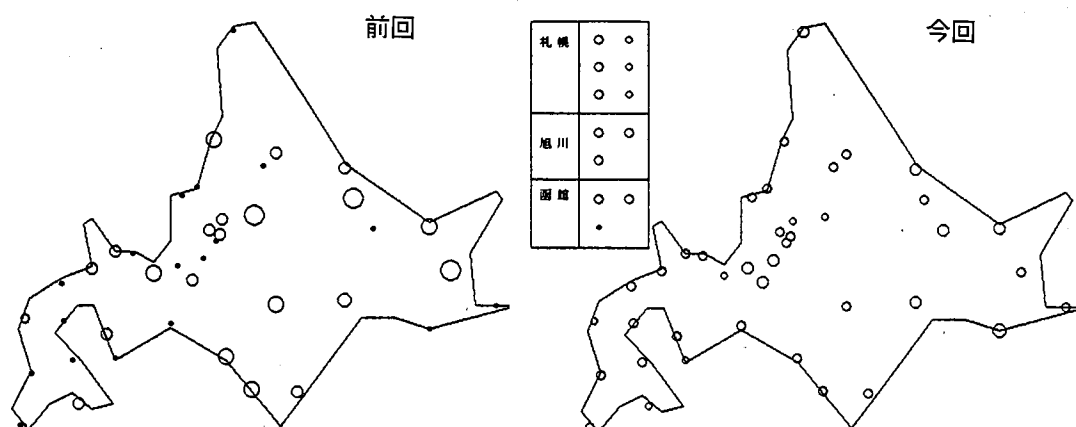


図 2-39 食べラソー

2. 2. 5. 前は調査されなかった項目

表 2-3 で、D とした分類である。ここには、前回調査では調査項目にならなかったもので、今回調査であらたに質問した 2 項目が該当する。相手に念を押すとき「219. 行くシヨ」と言うかどうか、別れのあいさつで「220. シタツケ」と言うかどうかの 2 項である。

これらは、今回調査の企画にあたって、北海道に特有な表現であり当時としては比較的新しいと目されるものを選んだ結果の追加であった。二つとも、北海道の若い層を中心にして広く用いられる表現であるという見通しと、また、短時日の間に生まれて消えて行く流行語ではないであろうという判断とを経て

選択したものであった。ちなみに、調査当時、北海道各地で販売されていたいわゆる方言グッズ（湯飲み茶碗、方言のれんなど）にはこれらの新しい表現も見えており、さらには北海道地方で市販されるインスタント・ラーメンに「うまいっしょラーメン」や「シタツケラーメン」などもあった。

二つの追加項目のうち、「行くシヨ」は図2-40のような分布となり、全道の高校生にかなり優勢に用いられる表現であることがわかった。全体では75.0%と4分の3の回答者が使うと答えた。大都市であると否とに関わらず、全道で平均した分布である。このうち、性別の内訳をみると、女子が86.1%，男子が63.3%という比率で性差を見せている。女子に優勢な表現であると言える。

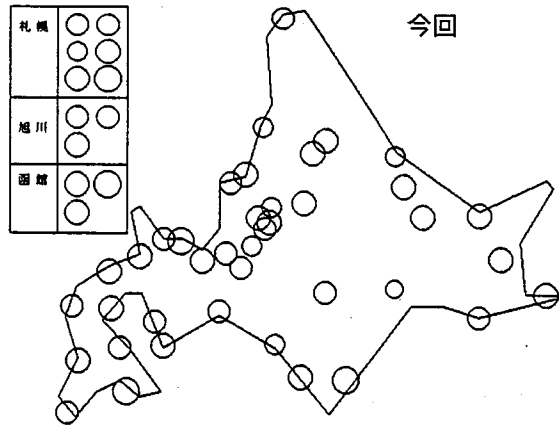


図2-40 行くシヨ

この～シヨ（ないし～ッシヨ）という文末表現は、推量の意味でも用いられ、たとえば「205.手紙はあの人を書くだろう」の項目でも少数（1.6%）ながらも回答に現れた。調査時の現地での印象からすれば、これらも含めて幅広い意味で多用されているものだと言ってよい。今後とも注意すべきものであろう。

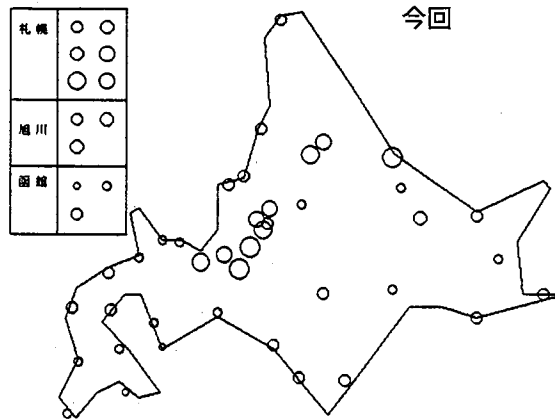


図2-41 シタツケ

一方、別れのあいさつ「シタツケ」は、図2-41のように、道央部を中心にした地域に分布が見られた。全道平均では24.0%であって、前項の～シヨほどではないが、地点によっては6割という過半数の生徒が用いると答えた。また、この回答率には女子に多いとい

う性差も見られ、目立つ学校では、3分の2以上の女子生徒が使うと答えている。

この形式は、もともと、宮城・秋田など東北地方で「そうしたら」「それでは」という意味で用いられた表現とされ、北海道でもそのような用法が今もあるのだが、今回は別れのあいさつとして質問した。この用法の場合、うしろに「ネ/ネー」を添えて「シタツケネ（一）」という形で言うことが多いとされる。今回調査の質問文では「シタツケ」だけを示したために、あるいは選択率が少なめに現れたのかもしれない。こうしたことも含めて、今後とも北海道のあいさつ表現の一つとして注目していくに値する形式であると思われる。

2. 2. 6. まとめ

以上、高校生調査のうち文法形式に関わる項目の結果を見てきた。

冒頭に述べたように、多くの項目について、その方言的な表現変種が、前回から今回への減少という方向での変化を見せていた。また、その裏側の事実として、全国共通語の形式が全道的に増加した事例が少なくなかった。このこと自体は、総体としては、今回調査にあたって予想されたことであることは言うまでもない。

しかしながら、そうした中で、その減少が、いろいろな言語形式を通じて均質的に起きているのでもなく、また地理的にみて全道で均質的に起きているのでもないことが、今回調査によって、たとえば次のように把握された。

○大勢としては方言形式が減少する方向にあるものの、表現形式によっては、なお全道的に優勢に用いられるものがある（A1類など）。

○半島・海岸部での分布と、全道的な分布とを対比的にとらえた場合、両者の間には双方向的な動きが見られる。たとえば、かつては全道的分布だったものが半島・海岸分布を示すもの（A3類）、逆に、かつての半島・海岸分布が全道的な分布に広がりを見せるもの（B1類）など。

また、今回調査の結果のうちに性差を示すものが数多く見られたことも、変化の多様性の一面を示している。

これらを概括すれば、北海道では、高校生という若い世代においても、方言と共通語の張合い関係や共通語化は多様な形で進行中であって、今後とも継続的に調査研究の対象とする必要性が高いことは動かないと考えられる。

2. 3. まとめ

この章では、富良野・札幌両継続調査と高校生調査のうち、文法形式に関する項目を取り上げた。そこで記述した範囲について継続調査と高校生調査を突き合わせてみると、次のような事項が概括的に指摘できたことになる。

(1) 方言形がなお有力である場合が指摘できた。

推量・勧誘の表現「べ」は、各調査を通じて現在も相当有力な方言形式として使われている。その中で、推量と勧誘の意味領域による違い（推量>勧誘）、札幌と富良野の違い（富良野>札幌）、年齢層による違い（とくに推量の意味で、若年層に向けて再生と呼べる使用の高まりがある）、性別による違い（各調査を通じて、男性>女性）という、使用状況の多様性が指摘できる。今後も、こうした意味領域の限定や属性差を見せながらも、有力な方言形式として持続されることが予想できる。

(2) 共通語化が進展した中で、なお方言形との間に多様な張合い状況のあることが指摘できた。

たとえば、命令表現のうち、方言形・起キレは、共通語形・起キロと全道の高校生ではほぼ拮抗する勢力を分かち合っている。富良野より札幌で、また全般に男性より女性で起キロが優勢で共通語化の進展が見られること、また第3の形式としての起キナがとくに若年の女性に広がっていることなど、起キレというかつて全道で有力だった形式の位置の変化の過程がとらえられる。サ変動詞の命令形・（勉強）シレ～スレも、共通語形シロ、第3の形式シナとの張合い関係の中で、起キレとほぼ並行的な位置にあると見てよい。

また、仮定表現「来ればいい」は、共通語化が全道的に進展したものと見られる。共通語形・クレバ（その変種・コレバも）が3調査を通じて優勢な現れを示している。方言形・コイバ～コエバは、富良野全体で3分の1強の勢力をなお残すとはいえ、高校生調査では全道的に2割弱と劣勢であり、「べ」に見られたような若年層での再生は指摘できない。サ変動詞での方言形・シレバは、コイバ～コエバよりもさらに勢力を弱めている。前2項（推量・命令）よりも共通語化の進展がはっきりととらえられた例である。

(3)共通語化が広く徹底して進み、方言形が劣勢になった場合が指摘された。

方向・行き先を示す格助詞の方言形・サは、さらに共通語化が進み、場面差(casual～formal)を契機にした使い分けを伴いつつニとエの両共通語形が勢力を強めている。高校生調査では、前回に比べて、半島・海岸分布の特徴をゆるめながら、また全体としての使用率を下げながら、なお全道平均で2割弱程度には使われている。札幌・富良野両継続調査ではサが、場面による差を含めても0.3～2.6%という少数にとどまったことと、高校生調査では18.3%にのぼったことの違いは、高校生調査では「サを使うかどうか」だけを質問したという質問方の違いによる(たとえば、継続調査で無視できない比率を示した助詞抜き・φが、高校生調査では回答者に意識されにくかったであろうことなど)ものと解釈しておきたい。その点を含めても、共通語化が広く進んで方言形・サが劣勢になった過程は指摘できるのである。

これらの他、今回あらたに調査項目とした～ッショ、シタツケについては、今回調査の時点で、地点による幅はあるものの、若者、とくに女子を中心に、全道的に使われているものであることが把握できた。今後の動向が注意されるところである。

以上をまとめて考えれば、文法形式における共通語化の過程はなお進行中であって、今後引続き調査の目を向けるべき必要性のあることは動かないと思われる。とくに、本章で記述した今回調査の結果の多様性を土台にするならば、その共通語化の過程は、

- ①どのような共通語形が、
 - ②方言形とどのような条件・契機による使い分けによって、
 - ③どのような地理的分布(都市化の程度による地域差も含めて)のもとに、
 - ④言語主体の属性の点でどのような片寄りを示しながら、
- 展開・定着していくのかという視点に立ってとらえていくことが必要であると思われる。

3. 発音・アクセント

3. 1. 発音－富良野・札幌継続調査から

3. 1. 0. はじめに

富良野パネル調査・富良野継続調査・札幌継続調査の発音項目について報告する。

発音については次の項目を調査した。このうち○を付したものは前回富良野調査と富良野パネル調査で調査した項目、◎を付したものはさらに富良野継続調査と札幌調査でも調査した項目である。なお、富良野継続調査と札幌調査の調査項目の選定は野元菊雄が中心となっておこなった。

1. イとエの区別（「息」vs.「駅」）…◎
2. 母音の中舌化
 - 1) シとスの区別（「寿司」vs.「煤」）…◎
 - 2) チとツの区別（「土」のチvs.「月」のツ）…○
 - 3) ジとズの区別（「知事」vs.「地図」）…○
3. 語中の無声子音の有声化
 - 1) kの有声化（「茎」 cf.「釘」）…◎
 - 2) tの有声化（「的」 cf.「窓」）…○
4. 母音の無声化
 - 1) iの無声化（「北」）…◎
 - 2) uの無声化（「口」）…◎
5. 語中のガ行子音の鼻音化（「釘」「中学」「道具」）…◎
6. ヒとシの区別（「火箸」「膝」のヒ）…○
7. {口蓋化子音+u}と{口蓋化子音+i}の区別
 - 1) シュとシの区別（「手術」「主人」のシュ）…◎
 - 2) ジュとジの区別（「手術」のジュ・「主人」のジ）…◎

調査は、漢字のみで書いたりストを提示しながらのなぞなぞ式でおこなった（付録の提示リストを参照）。発音項目については、次節のアクセント項目と同様、調査員による調査票への記入は必須としなかった。そのかわり、インフォマント全員に対して録音をおこない、これをあとで尾崎喜光が一括して聴き取った（富良野パネル調査・富良野継続調査・札幌調査ともに）。本節で用い

るデータは、この尾崎の判定によるものである（ただし前回富良野調査は別）。テープの録音状態は概ね良好であった。しかし、録音の許可が得られなかった等の理由でそもそもテープがないインフォマントや、録音状態が部分的あるいは全体的に良好でないインフォマントも若干あり、分析に用いることのできるデータはインフォマントの人数よりも多少少なくなっている。

本節では各項目につき、

①前回富良野調査と富良野パネル調査との比較（実時間で見た変化）

②富良野継続調査と札幌調査との比較（地域差）

という観点から調査結果を考察していくことにする。なお前回富良野調査と富良野継続調査との比較は、サンプリングの性格が異なるので特におこなわない。

発音の項目で留意されたい点がある。それは、発音の判定者が前回富良野調査と富良野パネル調査とで異なっているという点である。今回の調査については、先にも述べたように判定は尾崎がおこなったが、前回の調査については、当時の調査員4名（主として3名）がおこなった。また判定方法の点でも、今回の調査では録音テープをあとでじっくり聞いて判定したのに対し、前回の調査では特に録音はとらずその場で判定した、という違いがある。もし前回調査で録音をとっていれば、それについても改めて尾崎が聞きなおし資料の統一性を高めることができるのであるが、前回は録音はとらなかったのもそれは不可能である。こうした調査上の制約があるので、前回富良野調査と富良野パネル調査を比較する際にはいささか慎重を要する。

3. 1. 1. イとエの区別…「息」vs.「駅」

『共通語化の過程』（前回調査報告書）では、「息」のイと「駅」のエとを比較して、両者に区別があるかないかという点からただちに分析を始めているが、ここではもう一つ前の段階として、そもそも「息」のイ・「駅」のエがそれぞれどういう音で発音されたかをまず見て、そののち両者をクロスして区別があるかないかを見ていくことにする。

それぞれの発音の結果は図3-1・2のようであった。

はじめにこの図の見方等についていくつかコメントしておく。

図の中の、「前回富」は「前回富良野調査」の略、「パネル富」は「富良野パネル調査」の略、「継続富」は「富良野継続調査」の略である。（）内の数値はインフォマントの人数である。「前回富」は2種類あるが、「前回富1」

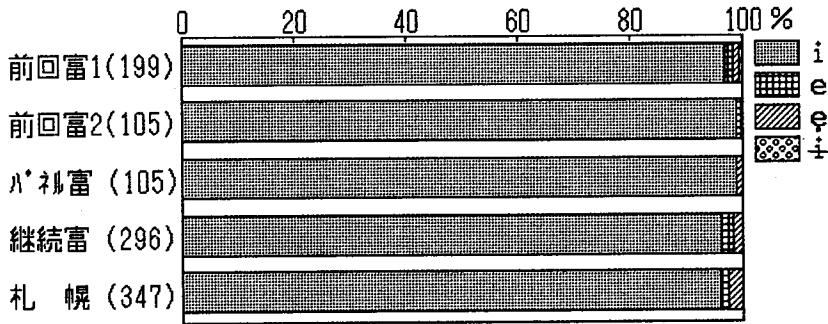


図3-1 「息」のイ

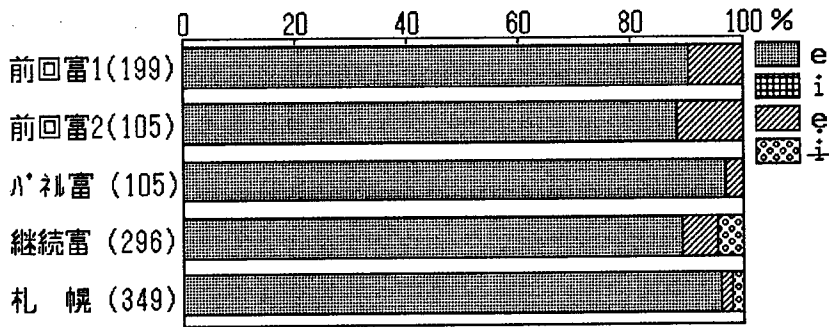


図3-2 「駅」のエ

は前回富良野調査のインフォマント全員のデータ、「前回富2」はそのうち今回のパネル調査で調査ができたインフォマントのデータである。「パネル富」と比較する場合、「前回富1」よりも「前回富2」と比較した方がより正確な比較ができる。『共通語化の過程』では、区別のあるなしについてのみ示され、個々の発音がどのようなものであったかは示されていないので、これについては当時の調査票にもどって確認した。「前回富1」が200人でなく199人であるのは、当時の調査票で発音の記録のページが1人分欠落しており発音の記録が確認できなかったためである。ただしイとエをクロスした図3-3では、『共通語化の過程』から直接引用したため200人となっている。「パネル富」のインフォマントの総数は106人であったが、欠測値がこの項目に1人分あるため、105人となっている。「前回富2」もその人数に合わせた。なお、それぞれの

グラフの数値については、小さな数値を持つ発音（グラフで幅の小さな部分）まで数値を重ねずに表示することが技術的に困難であったため本報告では表示することを断念した。今後予定される最終報告書では、資料一覧等の形で示す予定でいる。

まず前回富良野調査（以下「前回調査」と省略）と富良野パネル調査（以下「パネル調査」と省略）の比較について。「前回富1」および「前回富2」を見ると、富良野は当時からすでに非常に共通語的であったことがわかる。「息」のイは100%近くまでが [i] であるし、「駅」のエも90%程度までが [e] である。

これより27年経った「パネル富」を見ると、「息」のイはやはり100%近く [i] であるし、「駅」のエはさらに共通語化が進みこれも100%近く [e] となっている。前回10%ほど見られた [e̞] は、今回大幅に減っている（もっとも前回調査での [e̞] の判定は一人の調査員に集中しているので注意を要する）。

こうした共通語発音の行き渡った状況は、「継続富」「札幌」でも見られる。両市とも、「息」のイは100%近く [i] , 「駅」のエも札幌では100%近く、富良野では90%程度まで [e] と非常に共通語的である。

なお「駅」のエについては多少地域差が見られ、[e̞] [i] は富良野に若干多く残っている。

では次にこれらをクロスし、両者に区別があるかないかを見てみよう。結果は図3-3のようであった。

凡例では、「区別あり」には1点などというようにそれぞれに点数を与えてあるが、これは、『共通語化の過程』で「i と e の区別なし」という index をたて、index どおりであれば（すなわち両方とも e で）区別がなければ 0 点、index どおりでなければ（すなわち区別があれば）1 点というように、区別のあるなしを点数で示しているわけであるが、その表現を引き継いだものである（『共通語化の過程』を参照するときの便のため）。なお『共通語化の過程』の記述ではやや不明瞭であるが、「息」のイは普通の [i] だが「駅」のエは狭い [e̞] という場合には0.5点を与えている（つまり一応区別はあるがその差が小さいというケース）。区別があるかないかという基準に厳密に従うならば、「区別あり」に分類されるべきものである。

ではまず前回調査とパネル調査の比較について。前回調査の頃よりすでに

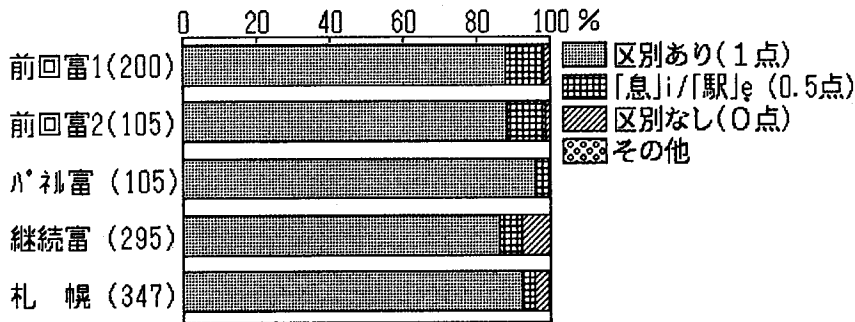


図3-3 iとeの区別

- * 「区別なし」には、両方[e]で区別なし、両方[i]で区別なしの両方を含む。
- ** 0.5点には、「息」はe/「駅」はe、「息」はi/「駅」はe、も若干含む。

「区別あり」は90%近くを占めていたが、パネル調査ではその比率は一段と高くなっている。逆に「「息」はi/「駅」はe」の比率は大きく減少している。イとエが明確に区別される比率が増え、共通語化が進んでいることがわかる（ただしこれについても判定者が異なっている点は注意を要する）。なお前回調査でごく少数ながら見られた「区別なし」は、パネル調査では皆無となった。

次に富良野（継続）と札幌の比較について見てみると、両市とも「区別あり」が90%前後とかなり共通語的であることがわかる。ただし地域差も多少見られ、共通語化は富良野よりも札幌で一段と進んでいる。

3. 1. 2. 母音の中舌化

1) シとスの区別…「寿司」vs.「煤」

この項目についても『共通語化の過程』ではシとスに区別があるかないかという点から分析を始めているが、ここでもその前段階として、「寿司」のシ・「煤」の後のスがそれぞれどういう音であったかをまず見てみることにする。結果は図3-4・5のようであった。

まず前回調査とパネル調査の比較について。シについては両調査とも [ʃi] が100%占めており、完全に共通語音が保たれている。またスについても、両調査とも共通語の [su] が90%以上保たれている。ただしスについては、こまかく見ると、中舌の [st] は多少増加しており共通語音が後退しているように

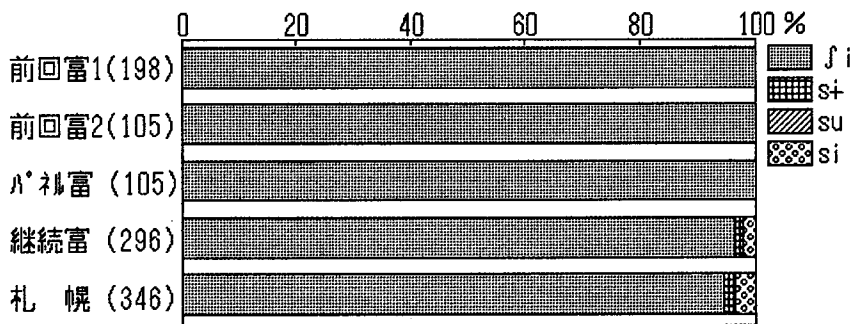


図3-4 「寿司」のシ

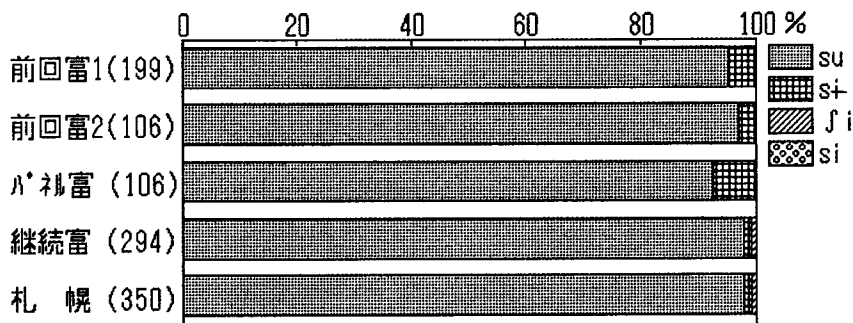


図3-5 「煤」の後のス

も見受けられる。しかし判定者が異なることを考えると、そのように結論を下すには慎重を要しよう。いずれにせよ、スについても、両調査ともに極めて共通語的であることには変わりない。

次に富良野（継続）と札幌の比較について。まずシについては、両市とも95%前後共通語の〔ʃi〕であり、地域差もほとんど認められない。注目されるのは〔si〕という音である。この音は富良野に2.0%、札幌に3.5%見られる。井上史雄・荻野綱男1984『新しい日本語・資料図集』によると、この音は東京でも認められ、若年層、特に女性に多く用いられているようである。これが札幌や富良野でもわずかながら認められるのである。この〔si〕の音を年齢層別に分けると表3-1のようになる。サンプル数が少ない富良野では年齢差はあまりはっきりしないが札幌ではそれが見られ、15-19歳という最も若い年齢層

で特によく使われているようである。今後の動向が注目される。

表3-1 「寿司」のシを [si] と発音した者の年齢層別比率 [%]

	15-19歳	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69
富良野(継続)	3.9 (1)	5.3 (2)	1.5 (1)	1.8 (1)	1.6 (1)	0.0 (0)
札幌	12.8 (5)	2.8 (2)	2.7 (2)	3.1 (2)	1.6 (1)	0.0 (0)

* ()内は人数。

次にこれらをクロスしてシとスの間に区別があるかないかを見てみよう。結果は図3-6のようであった。なお「区別あり」というのは、ほとんどの場合シは [ʃi] , スは [su] と共通語的に区別しているものであるが、継続富・札幌には、シは [si] , スは [su] と区別しているものも若干含む。また「区別なし」には、両方 [st] で区別なし、両方 [su] で区別なし、両方 [ʃi] で区別なしがある。

まず前回調査とパネル調査の比較について。前回調査の頃から「区別あり」はすでに95%前後と非常に共通語的であったが、パネル調査でもその傾向が維持されている。ただしこまかく見ると0.5点が多少増えており、共通語的な区別が若干後退したかのようにも見える。しかしこれも、判定者が異なるので判断には慎重を要しよう。

次に富良野(継続)と札幌の比較について。両市とも「区別あり」は97%前後にまで達し、ほとんど地域差なく非常に共通語的である。

2) チとツの区別…「土」のチ vs. 「月」のツ

この項目は前回調査とパネル調査でのみ調査した項目である。「月」と「土」とは、ツが共通でチとキで対立しているわけであるが、ここで比較するのは「土」のチと「月」のツである。

まず、「土」のチ・「月」のツがそれぞれどういう音であったかを見てみよう。結果は図3-7・8のようであった。

チについては両調査とも [tʃi] が100%を占めており、完全に共通語音となっている。ツについても、前回調査の頃から共通語音の [tsu] はすでに100%近くまでであったが、パネル調査では中舌音 [tsɯ] は完全になくなり100%共通語音になっている ([su]は言い誤りか)。

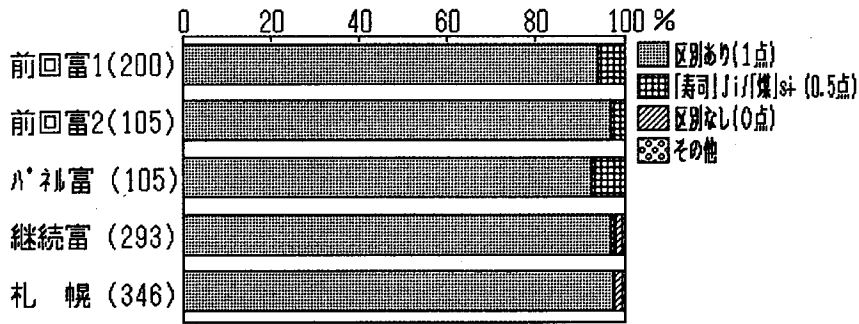


図3-6 「寿司」のシと「煤」の後のスの区別

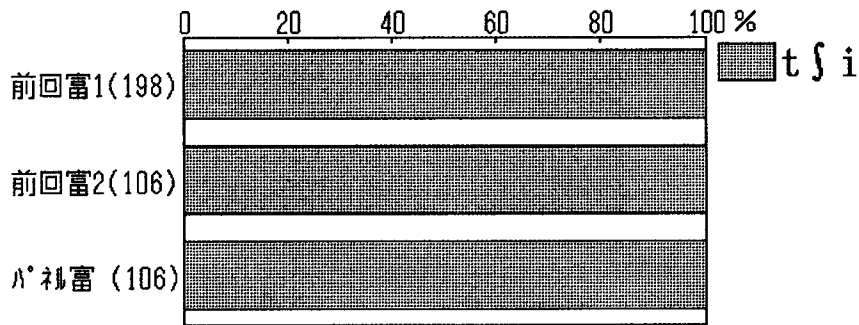


図3-7 「土」のチ

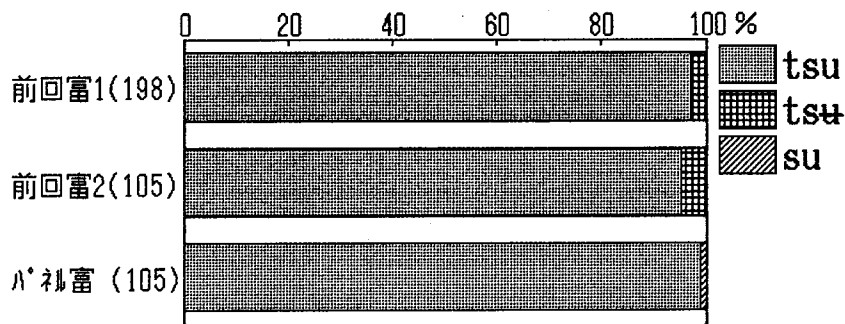


図3-8 「月」のツ

*前回富1が198人であるのは、調査票なしが1人、不明が1人いるため。

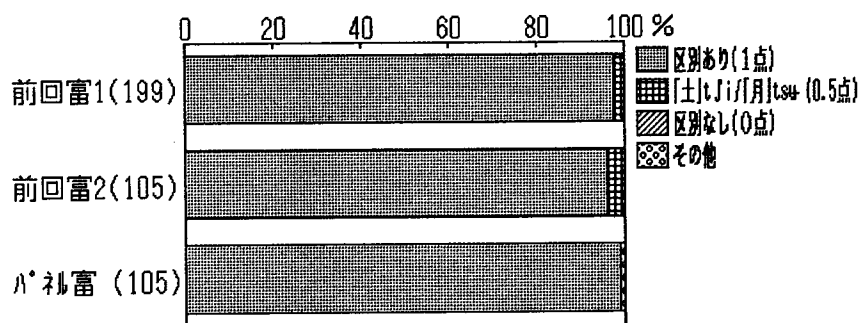


図3-9 「土」のチと「月」のツの区別

*「前回富1」が199人であるのは「不明」が1人いるため。
 **「前回富1, 2」の「区別あり」には、じつは0.5点とすべきケースが1人含まれている。そのため図3-8よりも若干数値が高めになっている。

次に両者をクロスし、チとツの間に区別があるかないかを見てみよう。結果は図3-9のようであった。

いずれの調査でもチは100% [tʃi] であったため、結果的には図3-8と同じグラフになっている。前回調査から「区別あり」はすでに100%に近かったが、パネル調査では、言い誤りと考えられる「その他」(tʃi/su)を除き100%に達し、完全に共通語的になっている。

3) ジとズの区別…「知事」vs.「地図」

この項目も前回調査とパネル調査のみで調査した項目である。まずはそれぞれの音について見てみよう。結果は図3-10・11のようであった。なお、聴き取りでは摩擦音と破擦音の区別は無視した。表記は摩擦音で代表した。凡例の [zj] や本文の [zj] は硬口蓋歯茎音を示している。

ジについては、すでに前回調査の頃からほぼ100% [zj] であったが、パネル調査では完全に [zj] となった。ズについても同様に、前回調査から100%近く [zu] であったが、パネル調査ではこれも完全に [zu] となった。

次に両者をクロスし、ジとズの間に区別があるかないかを見てみよう。結果は図3-12のようであった。

前回調査から、ジはほとんど [zj] , ズもほとんど [zu] であったため、

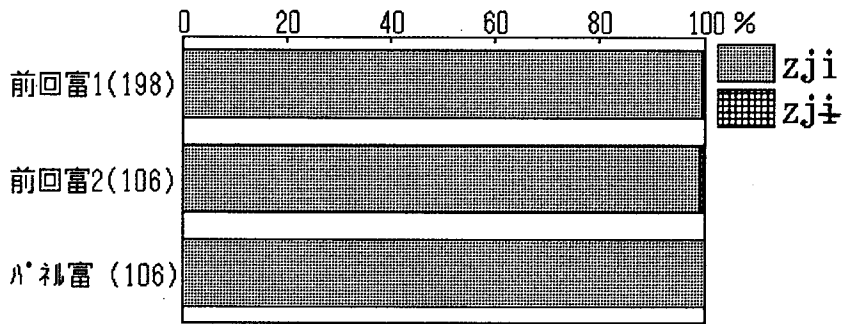


図3-10 「知事」のジ

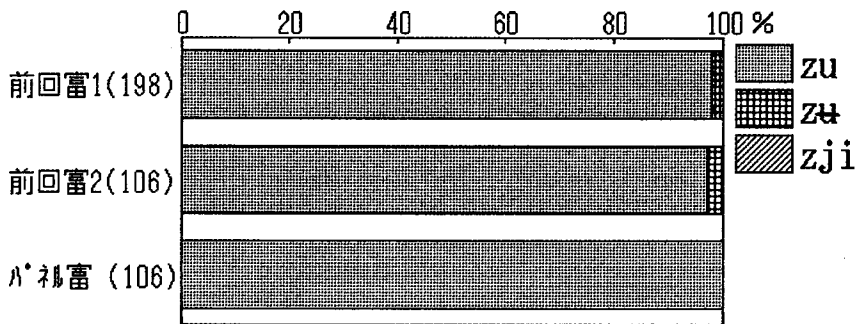


図3-11 「地図」のズ

*前回富1のzji(1人)はzuの記録ミスの疑いあり。

両者の区別の有無についても、すでに前回調査の頃より「区別あり」が100%近くを占めている。パネル調査ではさらにそれが徹底し、「区別あり」は100%と完全に共通語的になっている。

3. 1. 3. 語中の無声子音の有声化

1) kの有声化…「茎」(クキ)

この項目は、「釘」のギの子音と対比するという形で調査されたものであるが、『共通語化の過程』では、両者に区別があるかないかという観点からではなく、「茎」のキの子音が有声化しているかしていないかという観点から報告がなされているので(これはギの子音が[g]のほかに[n]印刷の都合で

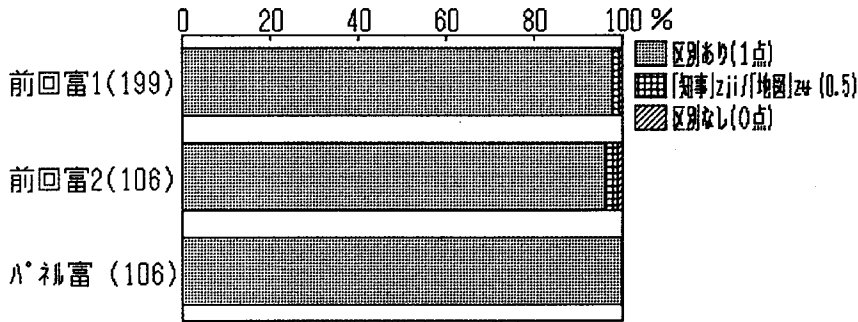


図3-12 「知事」のジと「地図」のズの区別

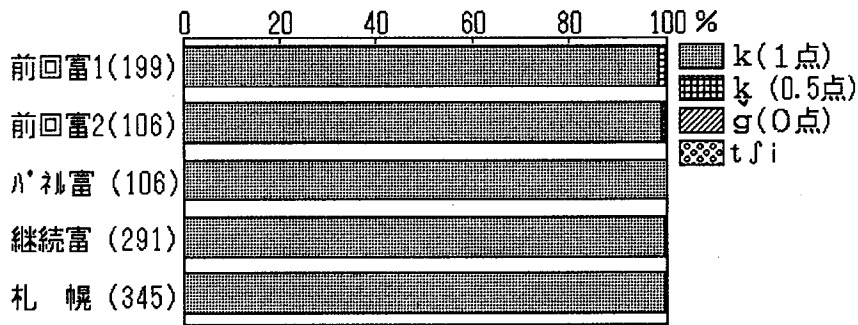


図3-13 「葦」のキの子音の有声化

* 0.5点を与えたk̄はわずかに有声化しているものである。

軟口蓋鼻音を [ŋ] で代用する；以下同じでも発音され対比にならなかったためであろう），ここでもその観点から見ていくことにする。結果は図3-13のようであった。

まず前回調査とパネル調査について。この項目もすでに前回調査から100%近く [ki] と非常に共通語的であった。パネル調査ではそれがさらに徹底され完全に共通語的になっている。

次に富良野(「継続」と札幌の比較について。これについても両市ともにほぼ100%共通語の [ki] である。そのため地域差も見られない。

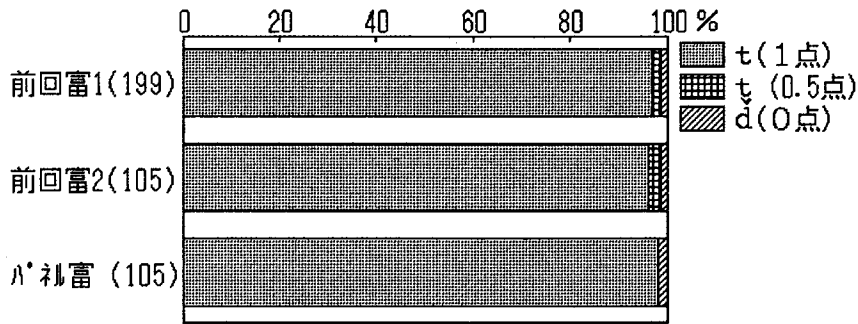


図3-14 「的」のトの子音の有声化

* 0.5点を与えた t はわずかに有声化しているものである。

2) tの有声化…「的」(マト)

この項目も「窓」のドの子音との対比で調査されたものであるが、ここでも有声化しているかしていないかという観点から見ていくことにする。この項目は前回調査とパネル調査でのみ調査された項目であるが、結果は図3-14のようであった。

この項目も、[t]は前回調査からすでに96~97%と非常に共通語的であった。パネル調査でもほぼ同様であった。「茎」のキの子音と比べると有声化音は幾分多く、パネル調査でもまだ2%ほど見られる。

なお、これらとの対比で調査された「釘」のギの子音、「窓」のドの子音については、その入り渡り鼻音化([ⁿg][ⁿŋ][ⁿd])が注目されるのであるが、ギの入り渡り鼻音は、前回富1=0.0%，前回富2=2.0%，パネル富=0.0%，継続富=0.3%，札幌=0.9%といずれも非常にわずかであった。またドについては、前回富1，前回富2，パネル富ともに入り渡り鼻音は皆無であった。なお「釘」のギの子音の鼻音/非鼻音の対立については3.1.5.で述べる。

3. 1. 4. 母音の無声化

母音の無声化については、「北」のキの母音と「口」のクの母音について調査したが、『共通語化の過程』では、「2語とも無声化あり」(1点)か、「1語

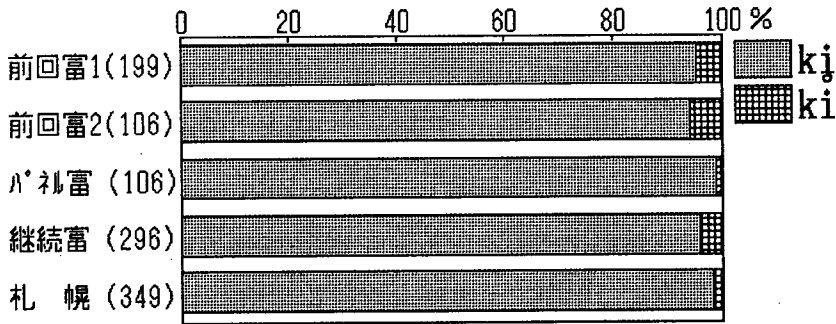


図3-15 「北」の i の無声化

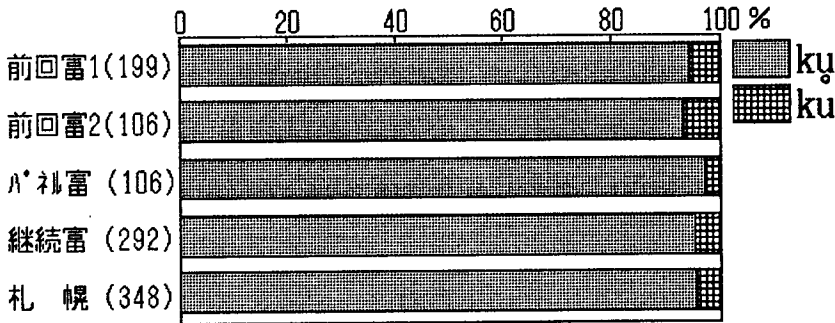


図3-16 「口」の u の無声化

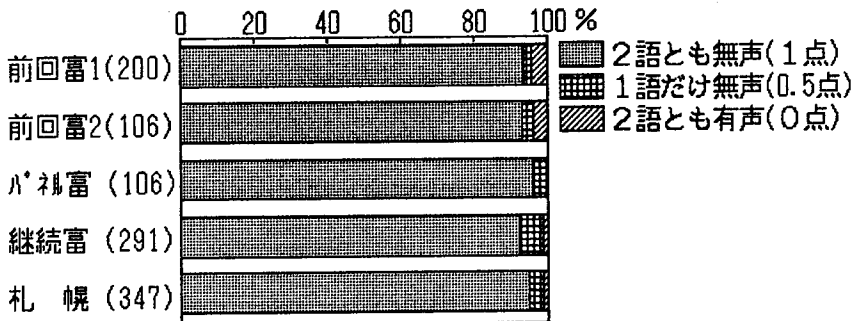


図3-17 「北」の i と「口」の u の無声化

*前回富1, 前回富2の0.5点には, 「2語ともわずかに無声化」というケースが1人含まれている。

だけ無声化あり」(0.5点)か、「2語とも無声化なし」(0点)かという観点から報告しているが、ここではまずそれぞれの発音について見ておくことにする。

1) iの無声化…「北」

「北」のiの無声化については、図3-15のような結果であった。

まず前回調査とパネル調査の比較であるが、前回調査の頃からすでに95%前後と非常に高率であった無声化は、パネル調査では100%近くへとさらに徹底してきている。また富良野(継続)と札幌を比較して見てみると、両市とも無声化率は非常に高いが、富良野よりも札幌でより徹底している。

2) uの無声化…「口」

次に「口」のuの無声化について。結果は図3-16のようであった。

「北」のキの母音と同様、いずれの調査でも無声化は著しい。前回調査とパネル調査を比較すると、無声化はパネル調査でより徹底してきている。富良野(継続)と札幌も無声化率は非常に高い。地域差はほとんど認められない。なおいずれの調査においても、「北」のキの母音に比べると無声化率は若干低いようである。

では次に『共通語化の過程』にならい、「2語とも無声化あり」か、「1語だけ無声化あり」か、「2語とも無声化なし」という観点から見てみることにする。結果は図3-17のようであった。

まず前回調査とパネル調査の比較について。前回調査の頃からすでに93~94%あった「2語とも無声化あり」は、パネル調査では97%程度へとさらに徹底してきている。前回調査で4%ほど見られた「2語とも無声化なし」は、パネル調査では皆無となっている。また富良野(継続)と札幌を比較して見てみると、両市とも無声化率は非常に高いが、札幌の方がさらに幾分高いようである。

3. 1. 5. 語中のガ行子音の鼻音化…「釘」「中学」「道具」

語中のガ行子音の鼻音化については、「釘」のギの子音、「中学」のガの子音、「道具」のグの子音を調査した。結果は図3-18-1~25-2のようであった(鼻音の記号はここでは[ŋ]で代用した;本文の[g]も本来の発音記号と字体が異なるがこれで代用した)。なお「釘」は、本来は「莖」のキの子音と対比するための項目であったため、前回調査で鼻音/非鼻音が調査票に明記されていないケースが10数人分あった。それらを差し引いたため、前回調査

とパネル調査ではデータ数が本来のインフォマントの人数よりも若干少なくなっている。また前回調査では、いくぶん鼻音化がある場合あるいは鼻音・非鼻音の両方がある場合（なおこれらの判定は一人の調査員に集中して現われる）には、「鼻音化多少あり」(g~n)というカテゴリー（『共通語化の過程』では0.5点が与えられているカテゴリー）に入れたが、今回は録音テープを用いたため鼻音・非鼻音のいずれかに分類することは比較的容易であったこと、また基本的には発音は1回であったことから、「鼻音化多少あり」というカテゴリーは特にもうけなかった。そのため前回調査とパネル調査の比較は多少しにくくなっている。なお非鼻音には破裂音と摩擦音とがあるが、いずれであるかの判定は微妙なケースが少なくなくしかも実りは多くないと予想されたので、尾崎の聴き取りでは特に両者の区別はしなかった（前回調査でも集計の段階では両者をまとめている）。ただし表記は破裂音の[g]で代表した。

まず前回調査とパネル調査の比較について。図3-18-1~20-1で[n]の比率を見てみると、前回調査では10数%、パネル調査でもほぼ同程度と、この間あまり変化のなかったことがわかる。図3-21-1は3語の平均を示したものであるが、前回調査・パネル調査ともに[n]は10数%とやはり変化は少ない。前回調査に「鼻音化多少あり」(g~n)というカテゴリーがあるためにパネル調査との比較がしにくくなっているが、この困難を取り除くために作成したのが、「前回富理」とした「前回富良野調査の理論値」である。これは、前回富2の「鼻音化多少あり」の部分を、前回富2の[g]対[n]の比によって[g]と[n]に振り分けたものである。これによると、前回富理・パネル調査ともに[n]は12%程度であり、この間全くと言っていいほど変化がなかったことがわかる。

さて図3-18-2・19-2・20-2・21-2は、前回富2とパネル調査の[n]の比率を10年刻みのコーホート（同時期出生集団）別に見たものである。年齢はパネル調査時のもので示してある。前回富2での年齢は、ここから30歳差し引いた年齢である。すなわちパネル調査の「60-69歳」は前回富2では「30-39歳」、「50-59歳」は「20-29歳」、「40-49歳」は「15-19歳」である。なお各コーホートに入る人数は、「釘」のケースでは、パネルについては60代20人、50代45人、40代35人、前回富2については30代36人、20代48人、10代16人である。また「中学」「道具」のケースでは、パネルについては60代22人、50代47人、40代37人、前回富2については30代39人、20代49人、10代18人である。

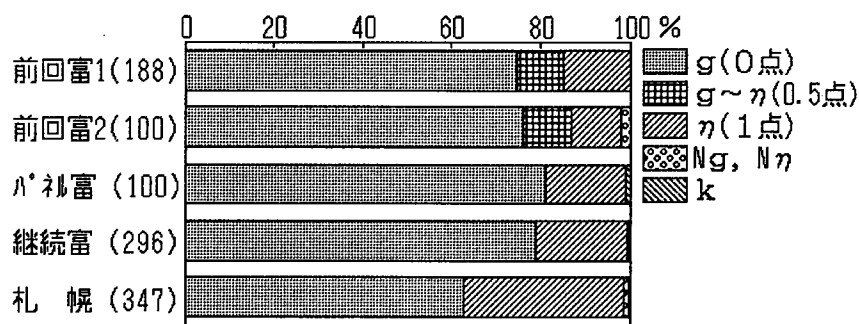


図3-18-1 「釘」のギの子音の鼻音化

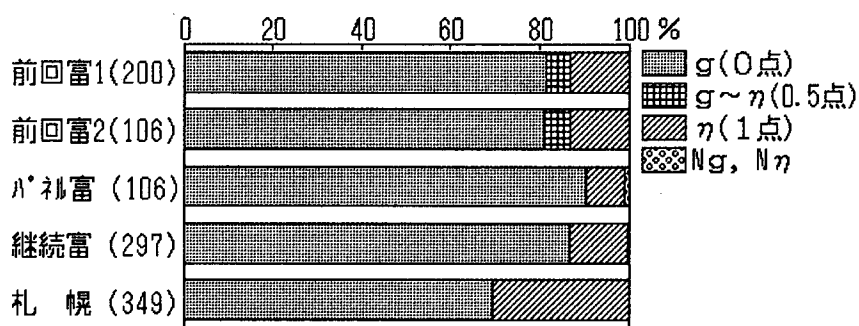


図3-19-1 「中学」のガの子音の鼻音化

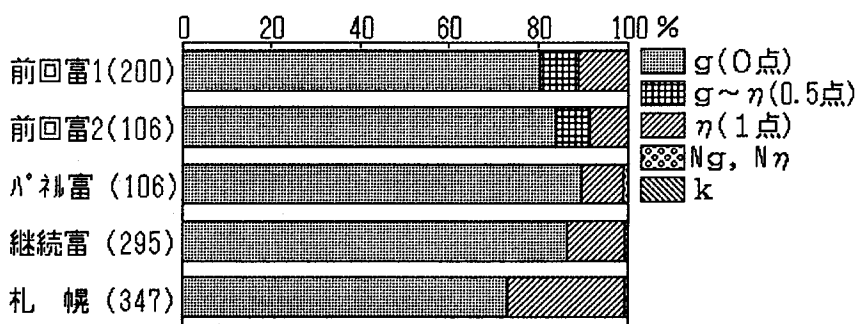


図3-20-1 「道具」のグの子音の鼻音化

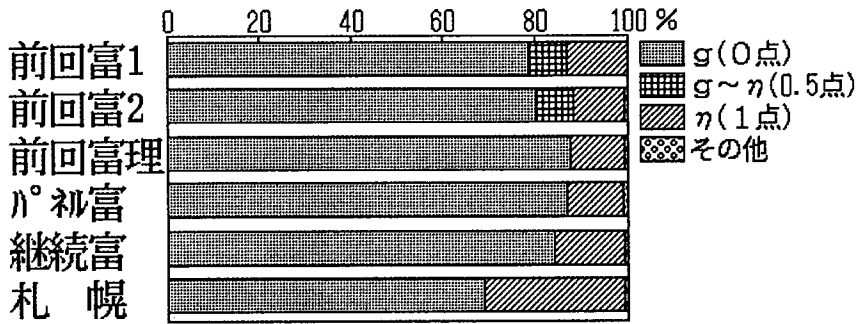


図3-21-1 3語の平均の鼻音化

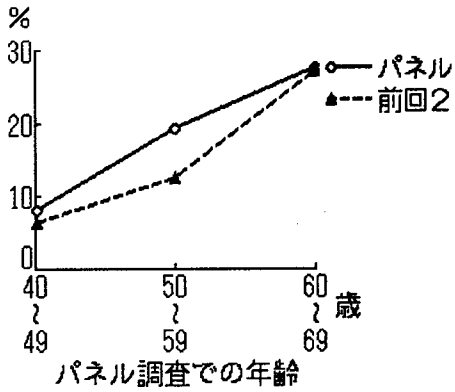


図3-18-2 「釘」の[ŋ]の前回富2と1°初のコホート別

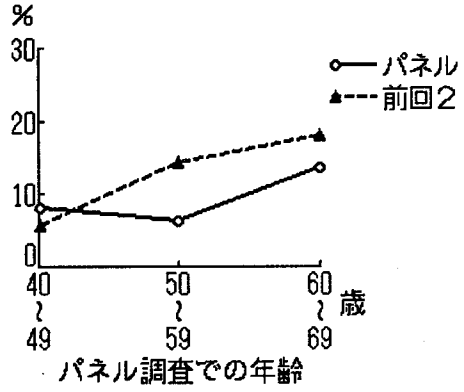


図3-19-2 「中学」の[ŋ]の前回富2と1°初のコホート別

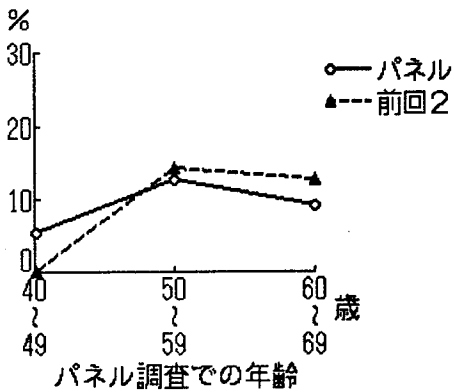


図3-20-2 「道具」の[ŋ]の前回富2と1°初のコホート別

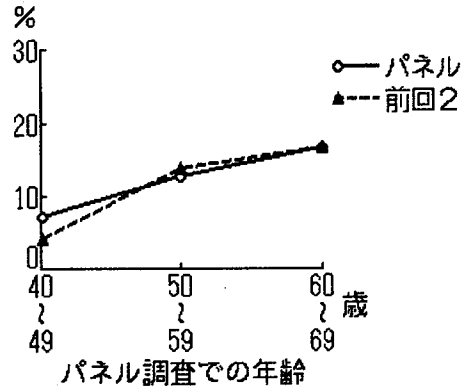


図3-21-2 3語平均の[ŋ]の前回富2と1°初のコホート別

これによると、いずれの項目においても、前回富2・パネルともに〔 η 〕の比率は若年層ほど低いという傾向が認められる。また、前回富2(点線)とパネル(実線)とはかなり接近している。こうした傾向は、3語を平均した図3-21-2で非常にはっきりと認められる。点線と実線は、左下がりのほとんど同じ線になっている。これよりガ行鼻音は、サンプル全体としてばかりでなくコーホートに分けて見た場合も、この27年間ほとんど変化のなかったことがわかる。

さて、サンプル全体あるいはコーホートに変化が見られない場合でも、個人ごと見た場合には変化があり、しかしそれらが相殺して全体あるいはコーホートとしては変化がないということも考えられる。そこで、個人レベルで見た場合どうであるかを示したのが図3-18-3・19-3・20-3・21-3である。

グラフは、縦に前回富2の結果、横に今回のパネル調査の結果をとってある(数値は人数;なお〔 n g〕などの特殊な発音はここでは除外してある)。図3-18-3・19-3・20-3では全部で6つの枠があるが、太枠で示したa・fは両調査で変化のなかった枠、b・eは変化のあった枠、c・dはどちらとも決めかねる枠である。変化なしのa・fと、変化ありのb・eとを比べると、aに入る人数が圧倒的に多いということもあり、変化ありよりも変化なしの方がはるかに多く、個人レベルで見た場合でもこの間変化が少なかったことがわかる。ただし、前回富2で〔 η 〕であったeとfに注目すると、図3-18-3では確かにeは非常に少ないが、しかし図3-19cでは両者はほぼ半々であるし、図3-20cではむしろeの方が多いいった状態であるので、変化(ただし〔 η 〕から〔g〕への変化)が少なかったとは単純には言いきれない点もある。もし前回富2で〔 η 〕がもっと多かったとしたら、全体としても変化はもっと大きかった可能性がある。なお、この〔 η 〕から〔g〕へという変化に比べると、その逆の〔g〕から〔 η 〕への変化(bの枠)は非常にまれであり、〔g〕のまま(aの枠)というのが圧倒的に多い。

図3-21-3は、以上の3語について総合的に見たものである。「gのみ」というのは3語とも〔g〕であったケース、「 η のみ」というのは3語とも〔 η 〕であったケース、「g& η 」というのは1語は〔g〕で他の2語は〔 η 〕ないしはその逆というように動揺の見られるケースである。なお前回富2の個々の項目で「g~ η 」とされているものの扱いは少し難しいが、ここでは〔 η 〕に分類した。従って前回富2の方は多少〔 η 〕に甘くなっている(すなわちグラフは全体的に実際よりもやや下側にシフトしている)。なお全体の人数が97

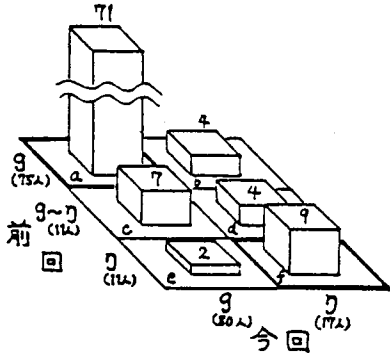


図3-18-3 「釘」の個人ごとに見た変化

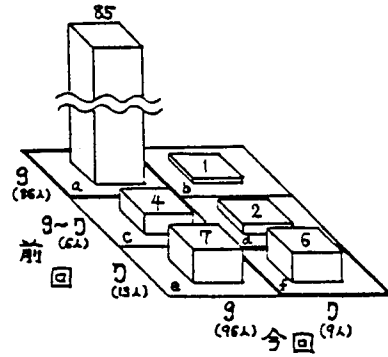


図3-19-3 「中学」の個人ごとに見た変化

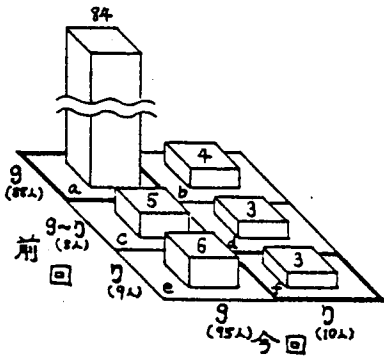


図3-20-3 「道具」の個人ごとに見た変化

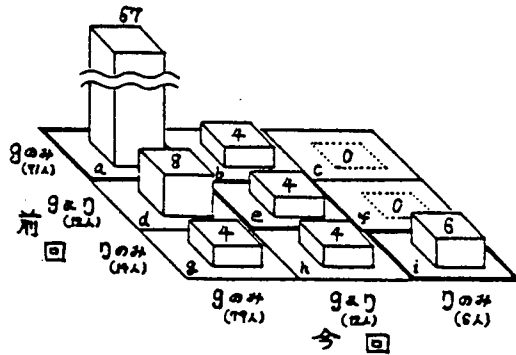


図3-21-3 3語の個人ごとに見た変化

人であるのは、前回富2で「釘」の記録がなく3語揃わない人を除いたためである。

さて、これら9つの枠のうち、太枠で示したa・e・iは27年経っても非常に安定していてほとんど変化のなかったものである。ここでもaが圧倒的に多いということもあり、全体の中ではこの「変化なし」は77人（約80%）と多数を占めている。

この太枠に隣接するb・fおよびd・hは、多少変化のあったものである。全体の中では16人（約16%）と少数派である。ただし、dは前回富2の「g&η」12人のうちの8人であり、またhも前回富2の「ηのみ」14人のうちの4人で

あることを考えると、少なからず変化しているとも言える。もし前回富2で「 η 」がもっと多かったとしたら、全体としても変化はもっと大きかった可能性がある。

cとgは変化が非常に顕著であったものである。しかしその人数は、gは4人(4%)、cは0人と、非常に少数である。ただしこれについても、gは前回富2の「 η のみ」14人のうちの4人であることを考えると、やはり少なからず変化しているとも言える。

さてここでもう一度この図全体を見渡して、太棒 a・e・i の向う側と手前側とを比べてみると、手前側に片寄りのあるのがわかる。すなわち、もし変化するならば、 $[g] \rightarrow [\eta]$ という方向よりも $[\eta] \rightarrow [g]$ という方向、すなわち鼻音を失う方向に変化する傾向のあることがわかる。

次に富良野(継続)と札幌の比較について。結果は先の図3-18-1・19-1・20-1・21-1および図3-23~26のようであった。

まず図3-18-1・19-1・20-1・21-1により全般的傾向を見てみると、いずれの項目においても $[g]$ が $[\eta]$ を大きく上まわっていることがわかる。また地域差も比較的是っきりと認められ、 $[\eta]$ は富良野よりも札幌に多いことがわかる。平均すると、 $[\eta]$ は富良野で15%程度であるのに対し札幌では30%程度と、約2倍の差がある。同じ道内でなぜこうした地域差が生じているのかについては、現在のところはっきりした理由はわからない。本人の最長居住地(5~15歳の間)について言えば、富良野・札幌ともに道内が圧倒的に多く(図3-22-1参照)、道外の鼻音/非鼻音の地域差が反映しているとは考えられない。父親・母親の最長居住地(5~15歳の間)になると道外の比率は道内の比率と同程度になる。しかしこれについても、非鼻音が主流である九州・四国・新潟などの比率は富良野・札幌ともに小さく、しかも両市間に大きな差も見られないので(九州・四国・新潟はむしろ札幌に幾分多い; 図3-22

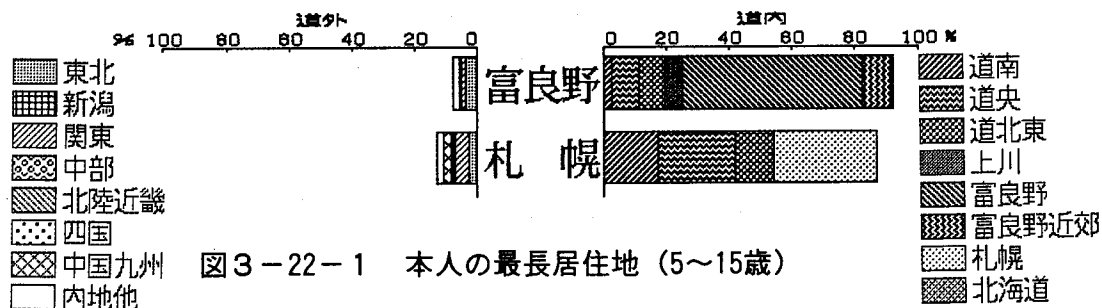


図3-22-1 本人の最長居住地 (5~15歳)

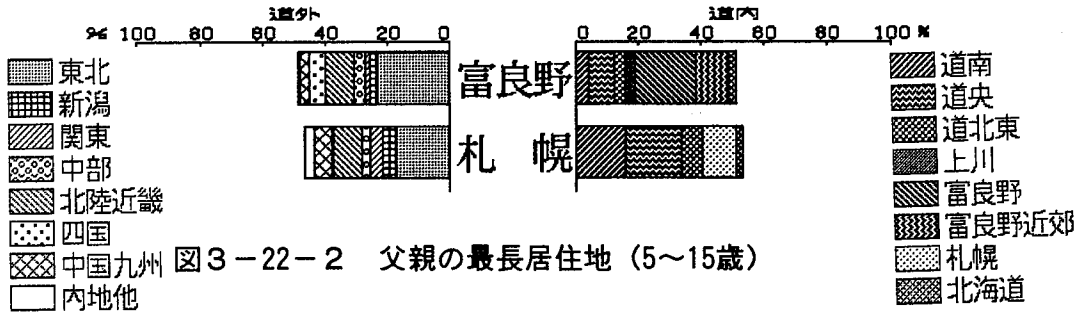


図3-22-2 父親の最長居住地 (5~15歳)

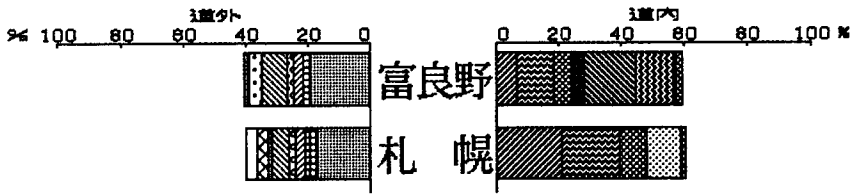


図3-22-3 母親の最長居住地 (5~15歳)

-2・-3参照), これについても道外の地域差が反映しているとは考えられない。

さて、先に見た図3-18-2~21-2で若いコーホートほど [ŋ] の比率が少なかったことから予想されるように、ここでも [ŋ] の比率に年齢差のあることが予想される。さいわいが行鼻音については、年齢差の分析に耐える程度に鼻音/非鼻音の対立が残っているので、インフォマントを10年刻みの6つの年齢層に分け、[ŋ] の比率がそれぞれどうなっているかを見てみた。結果は図3-23~26のようであった。

予想どおり、いずれの項目においても、富良野・札幌ともに若年層ほど [ŋ] の比率は低くなっているのがわかる。特に10代では、両市とも [ŋ] はほとんど0%となっている。富良野ではさらに20代でも0%直前である。先に見たパネル調査での結果、すなわちが行鼻音は27年経っても個人レベルではほとんど変化しない、もし変化する場合でもが行鼻音を失う方向に変化する傾向が強いという結果から考えると、このグラフをいわば左から右へという流れで見て、“年をとるにつれて鼻音を獲得していくのだ”と解釈すべきではなく、これはやはりグラフをいわば右から左へという流れで見て、“鼻音は衰退してきているのだ”と解釈すべきである。が行鼻音は個人レベル(およびコーホートのレ

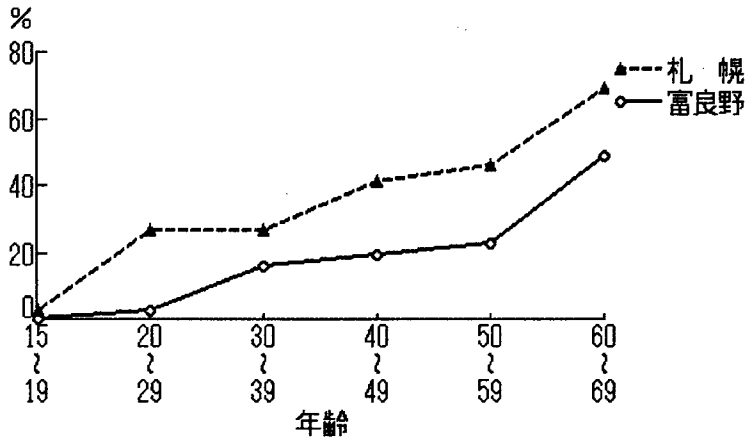


図3-23 「釘」のギの [ni] の年齢層別比率

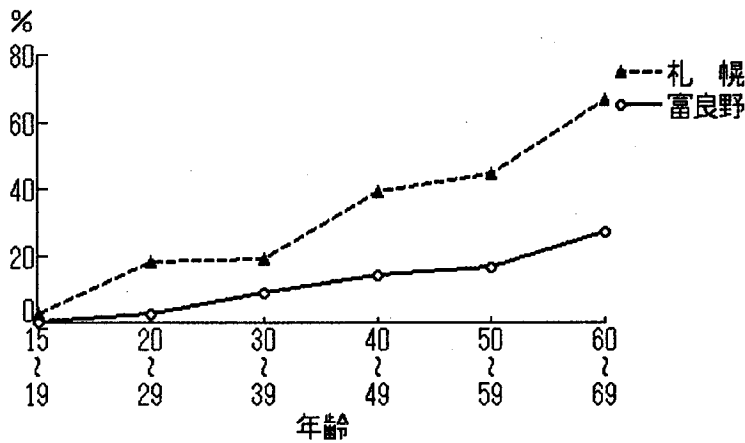


図3-24 「中学」のガの [na] の年齢層別比率

ベルでも) での変化はほとんど認められないが、新しく生まれてくる世代でガ行鼻音を持たない個人が次第に多くなっていくため、社会全体というレベルで見ただけでは変化が認められる。なお、これらのグラフにも地域差は比較的にっきりと見られ、ガ行鼻音の衰退は富良野で先行している。

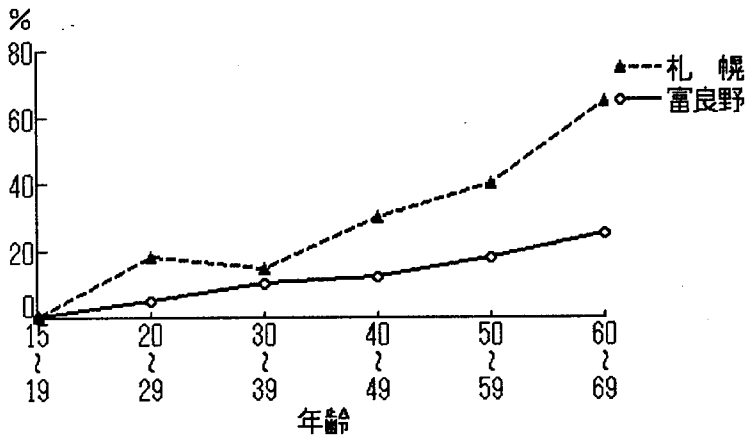


図3-25 「道具」のグの [ŋu] の年齢層別比率

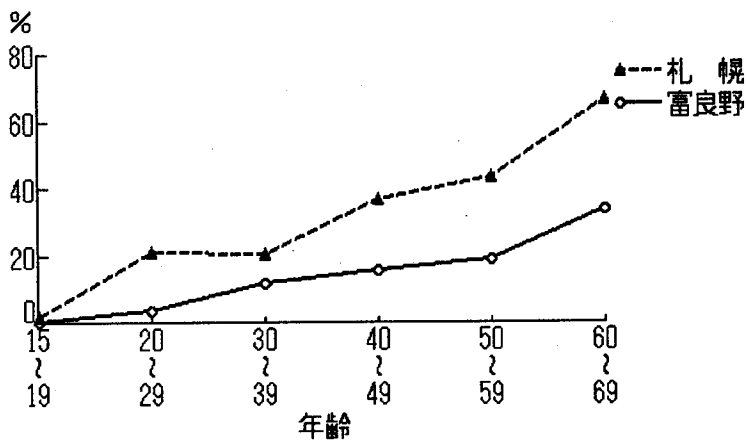


図3-26 3語平均の [ŋ] の年齢層別比率

3. 1. 6. ヒとシの区別…「火箸」「膝」

この項目は前回調査とパネル調査のみで調査した項目である。『共通語化の過程』では、「火箸」のヒと「膝」のヒについて、「2語ともシ」(=シとの区別なし)か、「1語だけシ」(=シとの区別少しあり)か、「2語ともヒ」(=シとの区別あり)かという観点から報告しているが、ここではまずそれぞれの音がどうであったかを見ておくことにする。結果は図3-27・28のようであっ

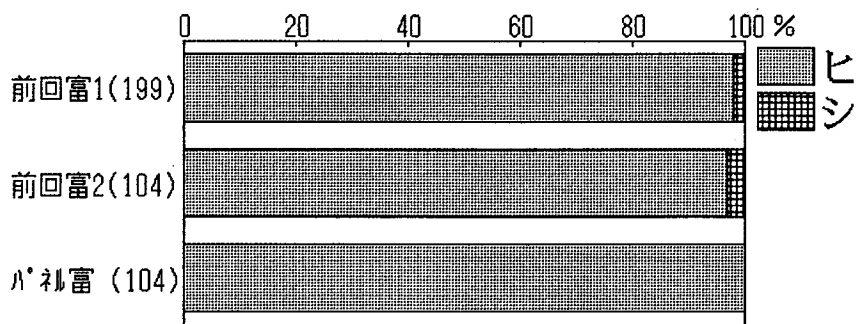


図3-27 「火箸」のヒ

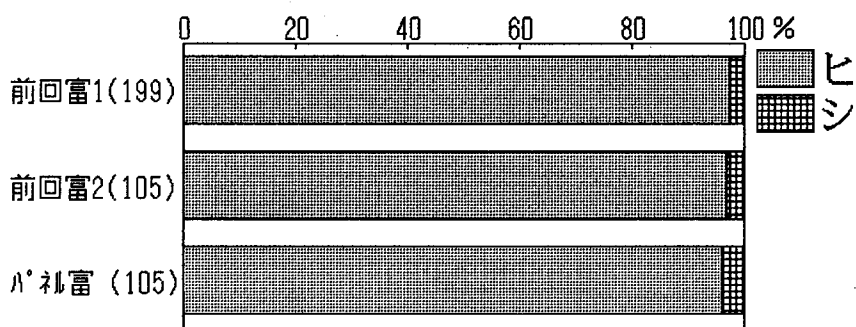


図3-28 「膝」のヒ

た。

共通語のヒは、すでに前回調査から97~98%と非常に高率であったが、パネル調査でもほぼ同じ状態である。「火箸」では完全にヒとなった。また「膝」では、若干ヒが減りシが増えているようではあるが、変化なしと看做してよからう。

次に「2語ともヒ」か、「1語だけシ」か、「2語ともシ」という観点からであるが、結果は図3-29のようであった。

個々の項目でヒは100%近くであったことから、「2語ともヒ」が非常に高率である。前回調査で95~96%、パネル調査でもほぼ同程度であった。前回調査で僅かに見られた「2語ともシ」は、パネル調査では皆無となった。

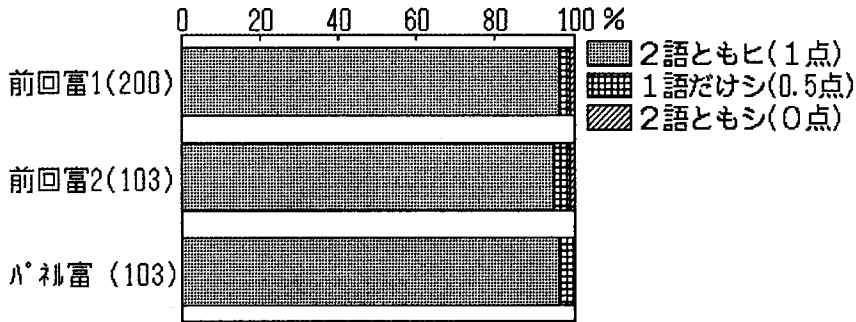


図3-29 「火箸」「膝」のヒとシの区別

*前回富1の0.5点の中には、調査ではたまたま2語ともヒであったが日常的にはシに近くなりがちであるという理由からここに入れられたケースが1人あった。

3. 1. 7. {口蓋化子音+u}と{口蓋化子音+i}の区別

この項目は、シュとシの区別、ジュとジの区別を見たものである。ただし本来はシュとシの区別を見る項目であり、ジュとジの区別はいわばたまたま調査できた項目である。そのため後者については、前回調査では調査員による記録は必須でなかったため『共通語化の過程』でも「不明」とされているケースが多い。なお区別の有無を見るに当っては、ここでも特にミニマルペアは用いず、共通語でシュ・ジュとなる音がどう発音されるかという点から調査した。シュとシの区別については「手術」「主人」のシュ、ジュとジの区別については「手術」のジュを調べた。後者に関連して「主人」のジについても調べた（なお図3-10の「知事」のジも参照）。

『共通語化の過程』ではそれぞれの項目ごとに報告しているのでここでもそれに従うことにする。なおこの項目については特に注意すべき点がある。それは、発音に対するインフォマントの注意・意識の程度により、比較的容易に発音が変わりうるらしいという点である。特に「手術」のシュ・ジュにおいて著しい。発音しづらいためにゆっくり発音したり、1度目でつかえて2度目を慎重にややゆっくり発音したりインフォマントが多かったが、これにより、本来ならばシ・ジで発音されたであろうと考えられるケースでも、しばしばシュ・ジュで記録された。従って、各調査の数値を見たり、調査間の比較をする場合にはかなりの慎重を要する。

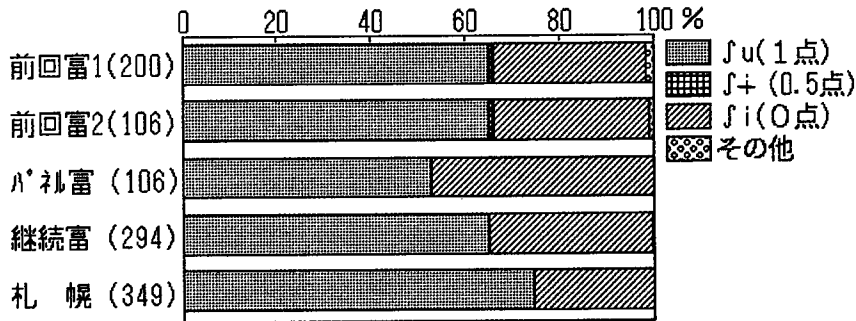


図3-30 「手術」のシュの音

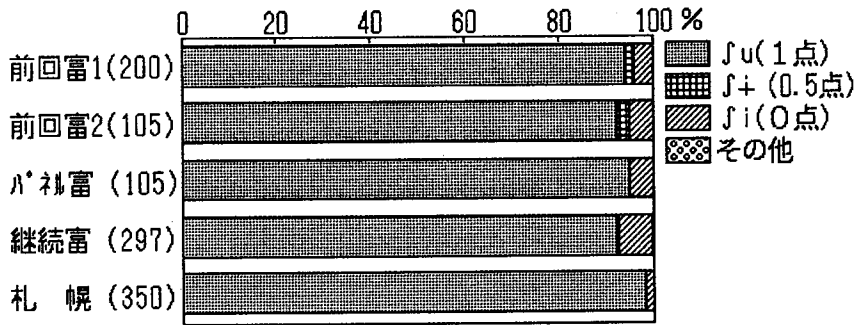


図3-31 「主人」のシュの音

1) シュとシの区別…「手術」「主人」のシュ

結果は図3-30・31のようであった。

まず前回調査とパネル調査の比較について。「手術」と「主人」とで大きな違いが見られる。「主人」のシュの方では、[ʃi] ないしはその中舌化した [ʃ+] が多少は見られるものの、両調査とも [ʃu] が90数%と非常に多く、共通語化がかなり進んでいることがわかる。それに対して「手術」のシュの方は、[ʃu] と [ʃi] で大きく対立している。前回調査では [ʃu] が60数%、[ʃi] が30数%であったが、パネル調査では [ʃu] [ʃi] とともに50%前後となり、非共通語の [ʃi] が増えてきている。27年間の差は比較的大きいが、先に述べた理由から、非共通語化していると結論づけるには慎重を要しよう。なお、[ʃi] が「主人」に少なく「手術」に多いのは、「手術」では [ʃu]

の発音が一段と難しい音環境にあるためであろう。

次に富良野（継続）と札幌の比較について。まず「手術」のシュについては、富良野で [ʃu] 65.3%, [ʃi] 34.4%であるのに対し、札幌では [ʃu] 74.8%, [ʃi] 25.2%であり、[ʃu] は富良野よりも札幌で多いようである。

「主人」のシュについても、全体としては富良野・札幌ともに [ʃu] が圧倒的に多いが、札幌で一層高率である。このように共通語の [ʃu] は、富良野よりも札幌でやや多くなっている。しかし先にも述べたように、シは容易にシュに変わりうるので、この地域差についても、そうであると結論づけるにはやはり慎重を要しよう。

2) ジュとジの区別…「手術」のジュ・「主人」のジ

結果は図3-32・33のようであった。

まず前回調査とパネル調査の比較について。「手術」のジュのおもなバリエーションは [z_ju] [z_ji] [zu] [zɯ] の4つであるが、前回調査に比べるとパネル調査では [zu] が減り [zɯ] および [z_ju] [z_ji] が多少増えている。共通語の [z_ju] が大幅に増加するというようなことはない。しかしこれらの数値についても、[zu] か [zɯ] かの判定は判定者による差も少なからずあろうし、また [z_ju] と [z_ji] は容易に変わりうるので、結論は慎重を要しよう。なお「主人」のジについては、両調査とも100%近くジであった。

次に富良野（継続）と札幌の比較について。まず「手術」のジュについては、おもなバリエーションは [z_ju] [z_ji] [zu] の3つであるが、札幌では共通語の [z_ju] が多く、富良野では [z_ji] が多いという傾向が見られる。しかしこの地域差についてもやはり慎重を要しよう。[z_ju] [zu] が弱まった [u] という音（直前のシュは [ʃu]）も両市で5%ほど見られる。なお「主人」のジについては、これもやはり両市とも100%近くジであった。

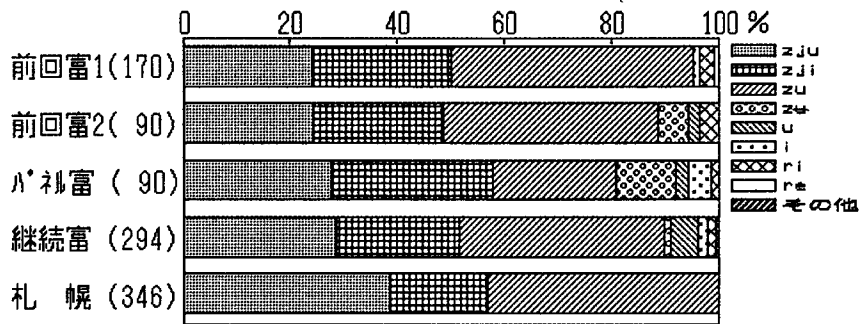


図3-32 「手術」のジュの音

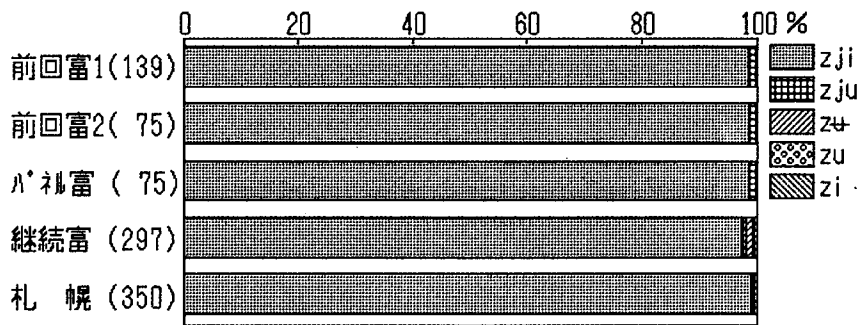


図3-33 「主人」のジの音

*前回富1, 2とパネルのzju(1人)は同一人物。
 前回富1, 2ではジュン, パネル富ではジッン。

3. 2. アクセント(1) 富良野・札幌継続調査から

3. 2. 0. はじめに

富良野・札幌継続調査のアクセント項目について報告する。ただし、調査しえた項目をまんべんなく取り上げるのではなく、テーマを絞って重点的に報告する。

調査に先立って設定したメインテーマは、「北海道アクセントの均質化」であった。このテーマのもとに、北海道共通アクセントが形成されていく過程、さらには東京アクセント化が進行していく過程を明らかにするため、過去の調査報告、予備調査の結果等を参考にして、事例として適当と思われる調査項目を選定した。調査項目は、観点別に大きく三つのタイプに分かれる。

- 1) いわゆるアクセントの「類別語彙」として扱われてきた語。
- 2) 北海道特有のアクセントをもつといわれる語。
- 3) 東京で明らかな年齢差が認められる語。

ここでは、この三つのタイプから、それぞれいくつかの語群を抽出し、事例研究を行なう。まず、主として1)、2)の観点から分析対象とする語群は、次の通りである。

- a) 3拍名詞 : 背中, 鯨, 葉, 欠伸, 畑, 後ろ, 涙, 姿, 烏, テレビ
- b) 4拍名詞 : アメリカ, すずらん, 生け花, 貧乏, オルガン, 夕張
- c) 5拍名詞 : 佐藤さん, 3時間

また、3)の観点からの対象語群は、次の通りである。

- d) 2拍名詞 : 熊, 鍬
- e) 3拍名詞 : つつじ, 心, 電車
- f) 4拍名詞 : どんぐり, チャンネル, 二次会

このように、この研究は、北海道におけるアクセント変化の方向を探ることを主たる目的としているが、富良野と札幌を対比させることによって、地域社会の性格の違いによるアクセント変化の様相の違いもまた、明らかにできるのではないかと考えた。すなわち、農村型地域社会(富良野)と都市型地域社会(札幌)によって、例えば、変化の進行度など様々な局面で較差が生ずることが予想された。分析に際しては、このような地域的な特性の観点も導入することにしたい。

なお、調査は、対象語を含む短文(例えば「畑をたがやす」「夕張に行く」

など)を読み上げてもらう方法で行なった。調査員がその場で調査票に記入することは必須とせず、後の聴き取りのために確実な録音が取れていることを優先させた。本節で用いるデータは、調査後に研究分担者の沢木幹栄(富良野 300名分を担当)と相澤正夫(札幌 350名分を担当)が一括して聴き取ったものである。

3. 2. 1. 北海道アクセントの変化

ここでは、3. 2. 0. の a), b), c) に掲げた語群について、北海道アクセントの変化という観点から分析する。いずれも、従来、東京語アクセントとは異なる北海道特有のアクセントをもつと報告されてきた語群である。変化の行き着く先としては、現代の趨勢として東京語アクセントが想定されるが、はたしてどの程度まで東京アクセント化が進行しているのか、例外的な現象はみられないのかなど、語ごとの違いにも注意しながらみていく。

a) 3拍名詞

3拍名詞は、次のように現在の東京語アクセントが平板型のものと同高型のものに二分される。(以下では記号の約束として、特に断わらないかぎり、○で1拍を、●でアクセント核(=下げ核)のある拍を表わすことにする。)

東京で平板型(○○○) : 背中, 鯨, 藁, 欠伸, 畑, 後ろ

東京で頭高型(●○○) : 涙, 姿, 烏, テレビ

【東京語アクセントが平板型である語】

富良野, 札幌それぞれの話者全体について、各語のアクセント型の割合を百分率で示すと、表3-2, 表3-3のようになる。語の配列は、富良野における平板型の割合の大きい順とし、末尾に6語の平均値を示した。

6語の平均値をみるかぎり、富良野と札幌はよく似た傾向を示している。すなわち、いずれも平板型(○○○)が最も優勢で4割強、続いて中高型(○●○)が3割強となっている。尾高型(○○●)は富良野が2割弱で札幌が1割強、頭高型(●○○)はいずれも1割に満たない。

このように、富良野, 札幌ともに、最も優勢なアクセント型は、すでに東京語アクセントと同じ平板型になっている。二番手である中高型も依然として根強いが、両者の勢力関係はどうなっているのか、尾高型, 頭高型の動きも参照

しながら、語ごとに変化の様子をみよう。

図3-34, 図3-35は、6語について、年齢層別に各アクセント型の出現率を示したグラフである。図3-34は富良野、図3-35は札幌である。枝番号は、-1「背中」、-2「鯨」、-3「葉」、-4「欠伸」、-5「畑」、-6「後ろ」である。

図3-34, 図3-35で、若い年齢層に向かって平板化傾向が顕著なのは、富良野、札幌ともに「背中」と「鯨」の2語である。

背中：富良野の平板型の割合が、どの年齢層でも札幌を上回り、平板化という点で先行している。反対に、北海道的アクセントと思われる中高型の割合は、札幌がどの年齢層でも富良野を上回る。富良野では、尾高型も20代以上の各年齢層で10%程度みられるが、札幌ではきわめてわずかである。

鯨：富良野、札幌ともに、30代以下で平板型が急激な勢いで伸びている。60代から40代までをみると、富良野では平板型、中高型、頭高型が三つ巴の様相を呈しているが、札幌では平板型と頭高型とが競い合い、中高型は低い割合に止まる。

この2語と比較して、残りの4語は緩やかな平板化傾向は認められるものの、他の型との競合状態は依然として続いている模様である。

葉：富良野、札幌ともに、一応若年層で平板型が優勢になっているが、富良野の10代で平板型が再び減少し、反対に中高型が伸びている。また、富良野では、尾高型が各年齢層で10~20%台を保っている。

欠伸：富良野、札幌ともに、20代で一度優勢になったかにみえた平板型が、10代で再び下降に転じている。この平板型の落ち込みには、中高型と特に頭高型の急激な伸びが強く影響している。生理現象を表わす語としての卑俗性を考え合わせると、これは新方言的なアクセントである可能性が高い。

畑：富良野、札幌ともに、20代、10代と平板型が徐々に優勢になりつつある。特に札幌では、平板型が一步抜け出した模様である。

後ろ：平板型は、札幌では20代、10代と明らかな優勢傾向を示しているが、富良野では依然として中高型との競合状態が続いている。どの年齢層も5割を超す型がほとんどなく、やや混沌とした現状である。

表3-2 [富良野]

	●○○○	○○●○	○○●●	○○○○
背中	0	25.0	12.0	63.0
鯨	17.0	24.3	2.3	56.4
葉	0	38.3	21.7	40.0
欠伸	4.3	38.0	21.7	36.0
畑	0	35.0	30.0	35.0
後ろ	7.0	33.0	28.7	31.3
<平均>	4.7	32.3	19.4	43.6

表3-3 [札幌]

	●○○○	○○●○	○○●●	○○○○
背中	0.3	44.9	1.4	53.4
鯨	22.9	8.3	1.1	67.7
葉	0	55.7	5.4	38.9
欠伸	7.7	36.9	27.7	27.7
畑	0	40.6	15.7	43.7
後ろ	24.3	21.7	21.4	32.6
<平均>	9.2	34.7	12.1	44.0

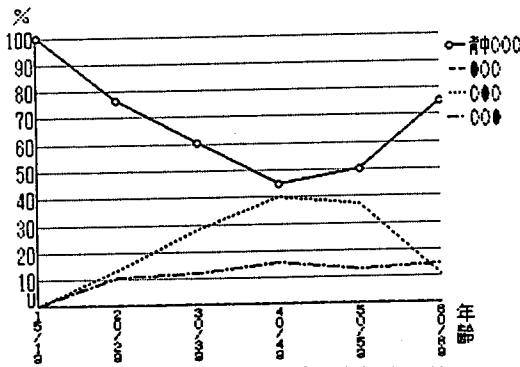


図3-34-1 背中 (富良野)

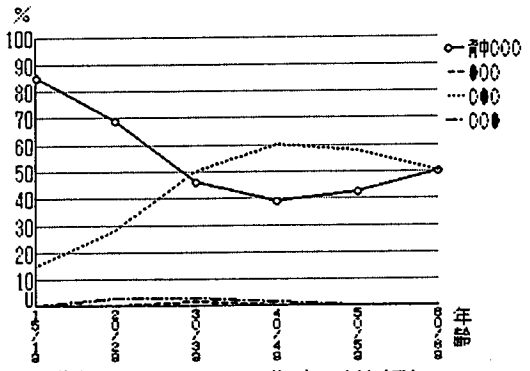


図3-35-1 背中 (札幌)

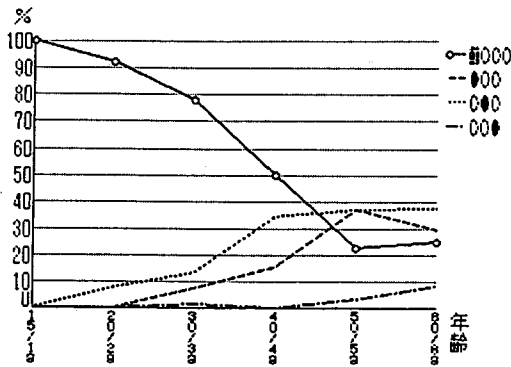


図3-34-2 鯨 (富良野)

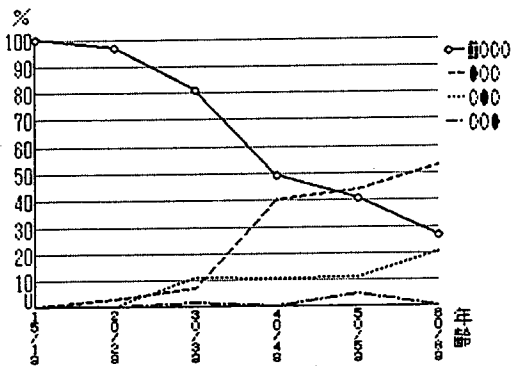


図3-35-2 鯨 (札幌)

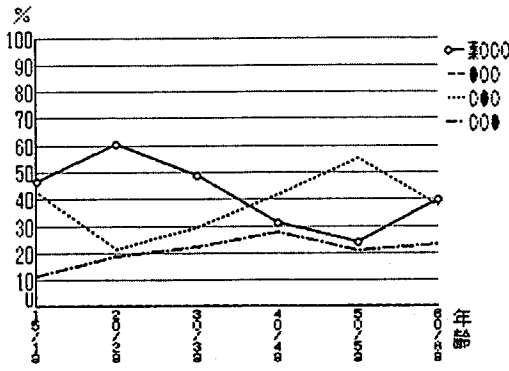


図3-34-3 葉 (富良野)

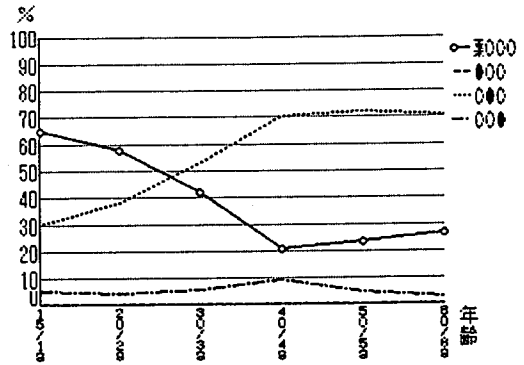


図3-35-3 葉 (札幌)

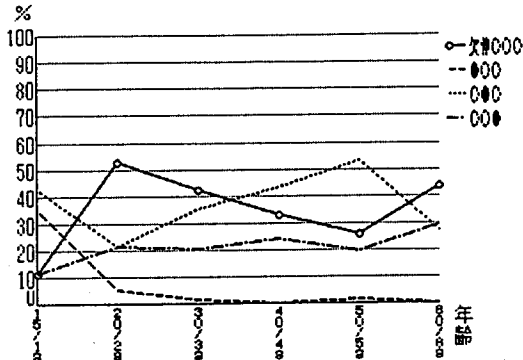


図3-34-4 欠伸 (富良野)

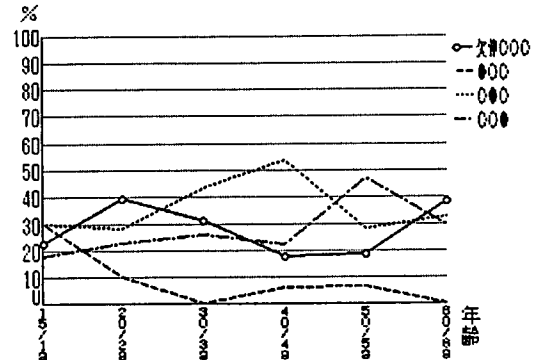


図3-35-4 欠伸 (札幌)

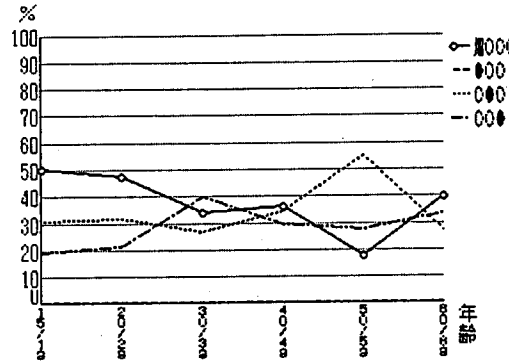


図3-34-5 畑 (富良野)

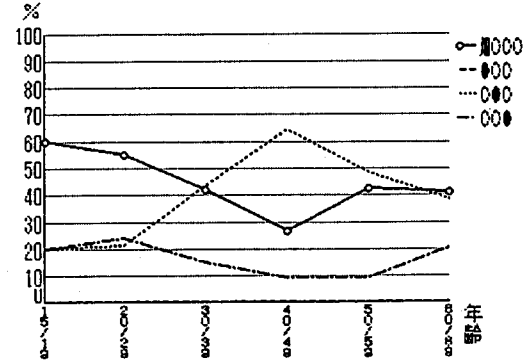


図3-35-5 畑 (札幌)

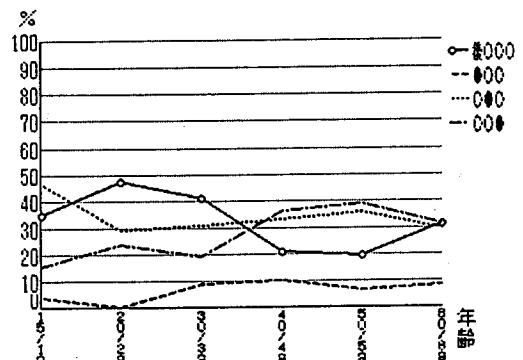


図3-34-6 後ろ (富良野)

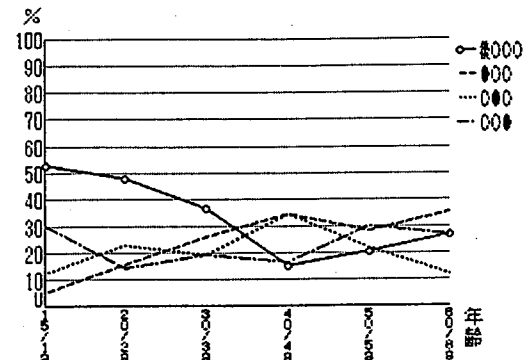


図3-35-6 後ろ (札幌)

【東京語アクセントが頭高型である語】

富良野、札幌それぞれの話者全体について、各語のアクセント型の割合を示すと、表3-4、表3-5のようになる。語の配列は、富良野における頭高型の割合の大きい順とし、末尾に4語の平均値を示した。

4語の平均値をみると、富良野と札幌で大きな違いのあることに気付く。すなわち、富良野では中高型(○●○)が6割強、頭高型(●○○)が2割弱と中高型が圧倒的に優勢であるのに対して、札幌では両者がともに4割台でほぼ肩を並べる状況にある。因みに、それ以外の尾高型(○○●)と平板型(○○○)は、両地域ともせいぜい1割程度の弱い勢力にすぎない。

頭高型と中高型の勢力関係を中心に、語ごとの変化を追跡してみよう。図3-36、図3-37は、年齢層別に各アクセント型の出現率を示したグラフである。図3-36は富良野、図3-37は札幌である。枝番号は、-1「涙」、-2「姿」、-3「烏」、-4「テレビ」である。

図3-36、図3-37から全体の傾向を概観すると、いずれも30代以下の世代で頭高型が上昇に向い、反対に中高型が下降していることがわかる。変化の進行度は、「涙」「姿」「烏」の3者にそれほどの大差はなく、「テレビ」の遅れが目立つ。また、いずれの変化も札幌が富良野に先行している。

涙：頭高型は、札幌の若年層では9割を超す勢いであるが、富良野では7割程度である。一方、中高型は中年層にピークがみられ、札幌では4割程度であるが、富良野では6割を超す圧倒的な勢力となっている。高年層をみると、中高型が伸張する以前には尾高型(特に札幌で)や平板型もある程度の勢いがあつたことがうかがえる。

姿：富良野、札幌ともに、中高型から頭高型への急激な勢力交替がみられる。頭高型は、札幌の若年層では9割を超す勢いであるが、富良野では7割程度である。中高型は中年層にピークがみられ、富良野、札幌とも8割に届く圧倒的な勢力となっている。高年層寄りには平板型と尾高型(富良野にも)もある程度みられる。

烏：頭高型は、札幌の若年層では9割を超す勢いであるが、富良野では6割程度である。中高型は、富良野では50代から20代まで6割程度の勢力を維持し下降に向うが、札幌では50代の6割をピークに大きく下降している。高年層寄りには平板型と尾高型(富良野にも)も相当の割合でみられる。

表3-4 【富良野】

	●○○○	○○●○	○○●●	○○○○
涙	26.0	49.3	12.7	12.0
姿	23.0	61.0	5.3	10.7
鳥	17.7	54.7	8.3	19.3
テレビ	11.0	76.7	6.3	6.0
<平均>	19.4	60.4	8.2	12.0

表3-5 【札幌】

	●○○○	○○●○	○○●●	○○○○
涙	52.3	24.0	19.4	4.3
姿	45.7	47.7	0	6.6
鳥	55.1	34.6	0.6	9.7
テレビ	35.7	60.5	0.9	2.9
<平均>	47.2	41.7	5.2	5.9

テレビ：頭高型は、札幌の若年層では5割を超えているが、富良野では10代でようやく4割に届く程度である。中高型の勢力が依然として強く、札幌では10代でようやく頭高型と逆転するが、富良野では全世代を通じて圧倒的に優勢である。高年層寄りには平板型や尾高型（富良野）もある程度みられる。

【3拍名詞のまとめ】

語ごとに遅速の差はあるものの、全体として北海道的なアクセントが衰退し、東京アクセント化が進行している。ただし、一部には「欠伸」の頭高型のように、新方言的な傾向を示すアクセントもみられる。

頭高型へと移行する変化では、明らかに札幌が富良野に先行している。平板型への変化ではこのような差がみられない。より耳だつ型である頭高型への変化が、情報に対して敏感な都市部が先行するかたちで起こっているものと推測される。

b) 4拍名詞

4拍名詞（6語）について、従来の報告による北海道特有アクセントの代表的な型と東京語アクセントの型を対比させて示す。ただし、「貧乏」「夕張」では、アクセント核の担い手が拍（モーラ）ではなく音節とみる方が妥当と思

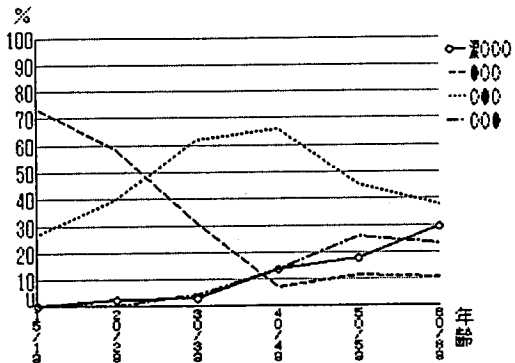


図3-36-1 涙 (富良野)

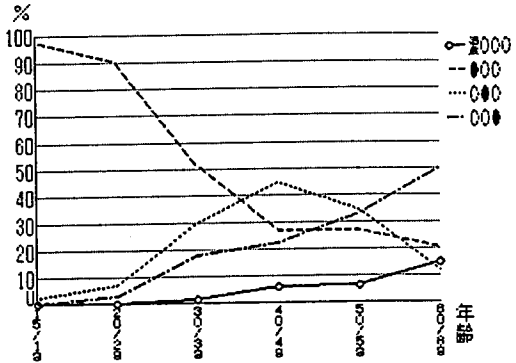


図3-37-1 涙 (札幌)

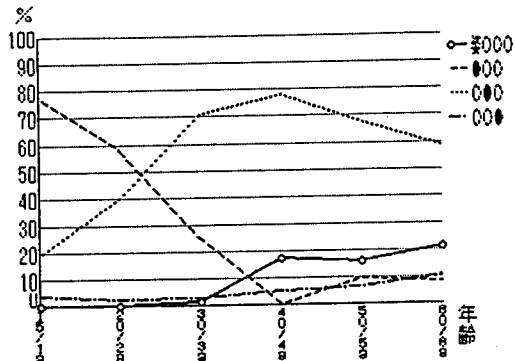


図3-36-2 姿 (富良野)

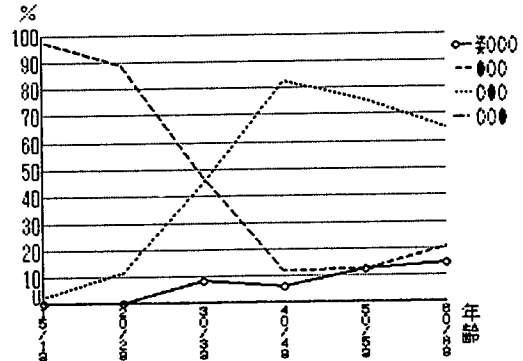


図3-37-2 姿 (札幌)

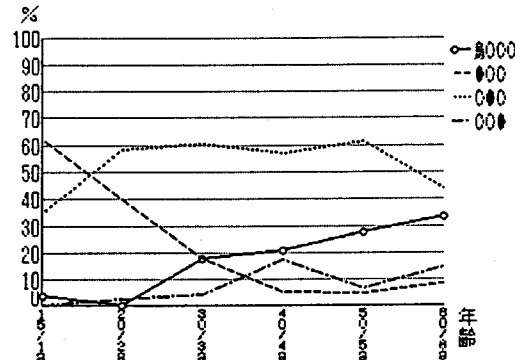


図3-36-3 鳥 (富良野)

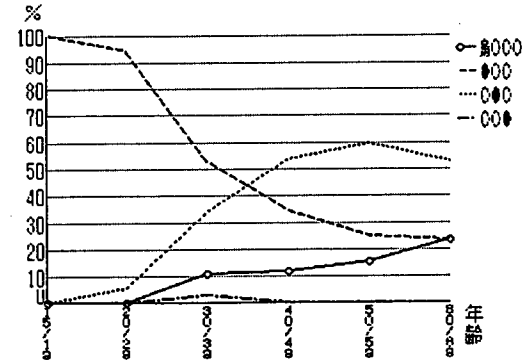


図3-37-3 鳥 (札幌)

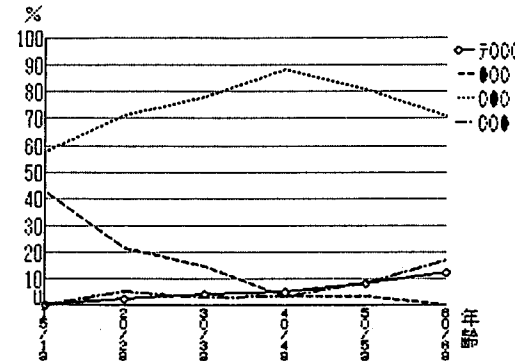


図3-36-4 テレビ (富良野)

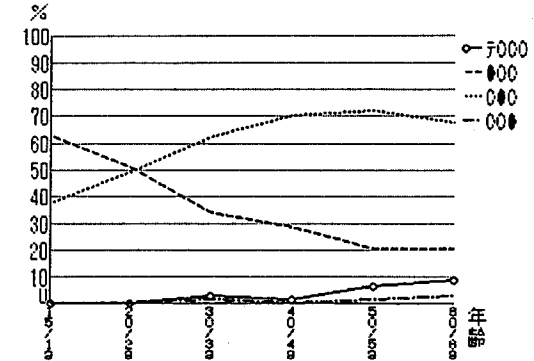


図3-37-4 テレビ (札幌)

われる話者もいたが、ここでは便宜的に次のように処理した。「貧乏」の2音節的な発音については、第1音節に核があれば●○○○に、第2音節に核があれば○○●○にまとめた。「夕張」の3音節的な発音については、第1音節に核があれば●○○○にまとめた。

	[北海道]	[東京]
アメリカ	○●○○	○○○○
すずらん	●○○○	○●○○
生け花	○○○○	○●○○
貧乏	○○●○	●○○○
オルガン	●○○○	○○○○
	○●○○	
夕張	●○○○	○○○○

富良野、札幌それぞれの話者全体について、各語のアクセント型の割合を百分率で示すと、表3-6、表3-7のようになる。概観すると、変化のタイプが大きく三分類されることに気付く。

- ① 「アメリカ」「すずらん」「生け花」「貧乏」は、富良野、札幌ともに東京アクセントの型が最も優勢である。
- ② 「夕張」は、富良野、札幌ともに北海道特有アクセントの型が圧倒的に優勢である。
- ③ 「オルガン」は、東京語アクセントの型と北海道特有アクセントの二つの型が、それぞれに一定の勢力を保持している。

以下では、この三分類に沿って、語ごとに東京語アクセントと北海道特有アクセントの勢力関係の動向をみる。

【東京語アクセントが優勢な語】

図3-38、図3-39は、①の4語について、年齢層別に各アクセント型の出現率を示したグラフである。図3-38は富良野、図3-39は札幌である。枝番号は、-1「アメリカ」、-2「すずらん」、-3「生け花」、-4「貧乏」である。いずれも、若年層に向かって東京アクセント化が進行中であることを示している。

アメリカ：富良野、札幌ともに、すべての年齢層で○○○○が優勢である。特に若年層（10代、20代）では、ほぼ東京アクセント化が達成された

表3-6 [富良野]

	●○○○○	○●○○○	○○●○○	○○○○●	○○○○○
アメリカ	0.0	9.7	8.7	1.0	80.7
すずらん	8.7	77.0	3.0	3.3	8.0
生け花	0.0	60.3	14.0	6.0	19.7
貧乏	65.0	-	30.0	-	5.0
オルガン	30.3	39.3	1.3	6.3	22.7
夕張	89.7	-	2.0	0.3	8.0

表3-7 [札幌]

	●○○○○	○●○○○	○○●○○	○○○○●	○○○○○
アメリカ	0.0	14.9	0.6	0.3	84.3
すずらん	15.4	78.6	1.1	0.0	4.9
生け花	0.0	59.1	7.7	20.9	12.3
貧乏	60.3	-	37.2	-	2.6
オルガン	43.4	17.1	0.9	0.0	38.6
夕張	95.1	-	0.3	0.6	4.0

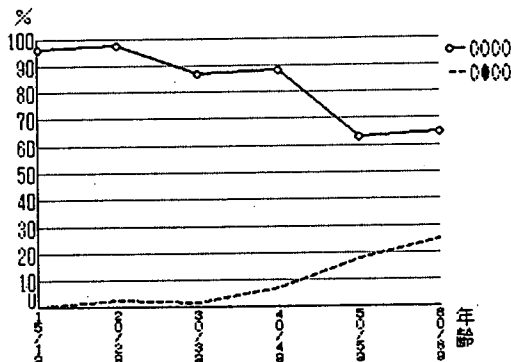


図3-38-1 アメリカ (富良野)

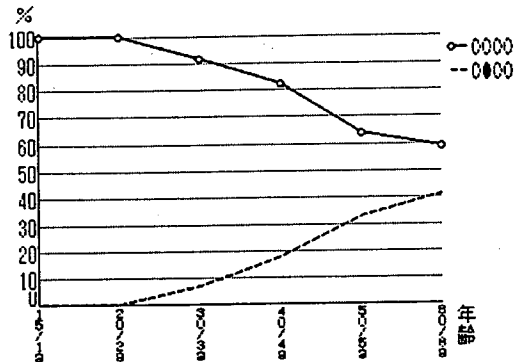


図3-39-1 アメリカ (札幌)

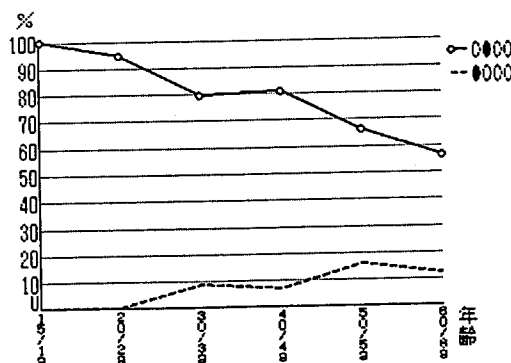


図3-38-2 すずらん (富良野)

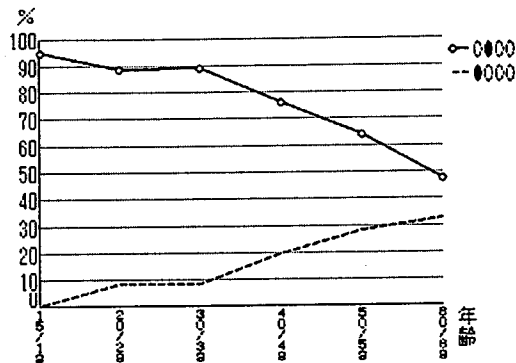


図3-39-2 すずらん (札幌)

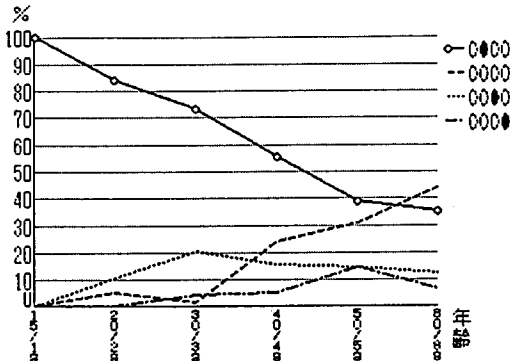


図3-38-3 生け花 (富良野)

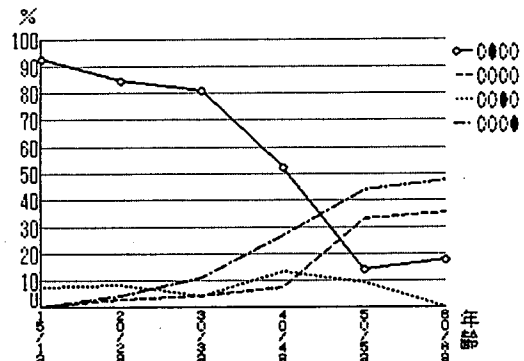


図3-39-3 生け花 (札幌)

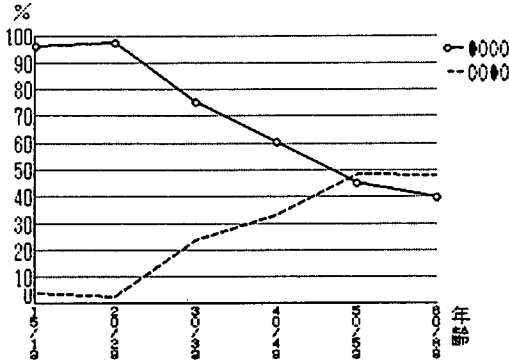


図3-38-4 貧乏 (富良野)

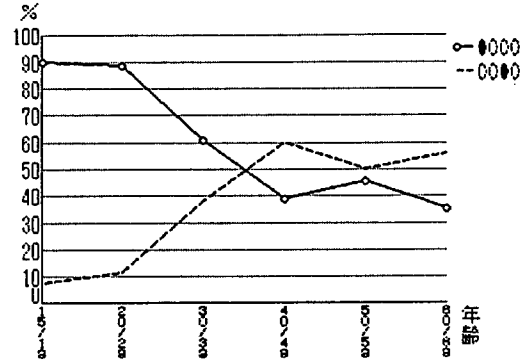


図3-39-4 貧乏 (札幌)

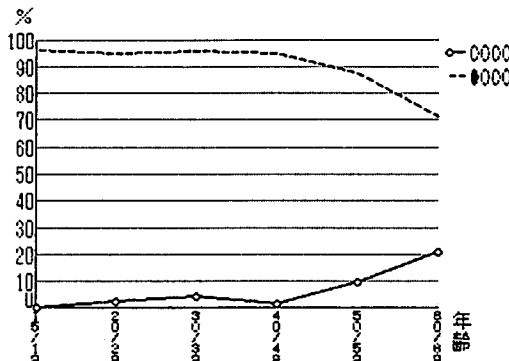


図3-40 夕張 (富良野)

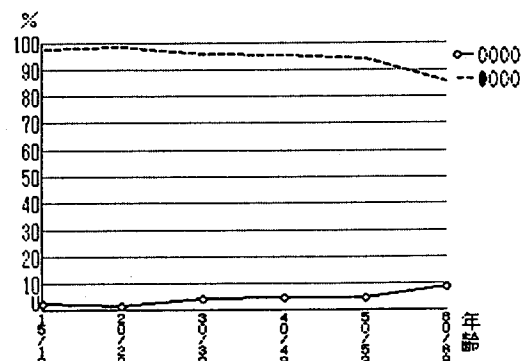


図3-41 夕張 (札幌)

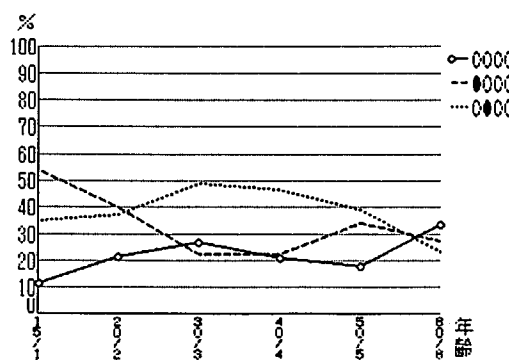


図3-42 オルガン (富良野)

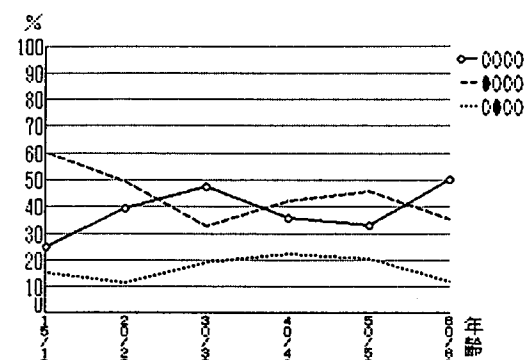


図3-43 オルガン (札幌)

とみられる。

すずらん：「アメリカ」にはわずかに及ばないが、富良野、札幌ともに、すべての年齢層で○●○○が優勢である。10代では、ほぼ東京アクセント化が達成されたとみられる。

生け花：富良野、札幌ともに、北海道特有アクセントの代表として予想した○○○○の他、○○●○、○○○●も一定の勢力を示している。○●○○は、富良野では50代で○○○○と交替して優勢になるが、札幌では40代で○○○●と交替する点に、両地域の違いが認められる。富良野の10代では、東京アクセント化が達成されたとみられる。

貧乏：富良野、札幌ともに、○○●○から●○○○へと勢力の逆転が起こる。富良野では40代以下で、札幌では30代以下で顕著になり、東京アクセント化が一気に進行している。

【北海道特有アクセントが優勢な語】

図3-40、図3-41は、②の「夕張」について、年齢層別に各アクセント型の出現率を示したグラフである。図3-40は富良野、図3-41は札幌である。

夕張：富良野、札幌ともに、高年層に○○○○の勢力が若干認められるが、中・若年層ではほぼ●○○○の一色となる。地元北海道の地名であることから、かえって固有のアクセントが根強く定着する傾向をみせているものと考えられる。

【東京語アクセントと北海道特有アクセントが拮抗している語】

図3-42、図3-43は、③の「オルガン」について、年齢層別に各アクセント型の出現率を示したグラフである。図3-42は富良野、図3-43は札幌である。

オルガン：富良野、札幌ともに、互いに拮抗する三つの型がもつれあうように変化している。しかし、20代、10代の動向に注目すると、今後は●○○○がさらに勢力を増していくものと推察される。特に札幌では、30代で一度優位に立ったかにみえた東京語アクセントの型が、若年層で再度●○○○に逆転され下降に転じており、新しい変化の動きに独特の勢いが認められる。

【4 拍名詞のまとめ】

北海道特有アクセントが衰退し、東京アクセント化が進行中の語（「アメリカ」「すずらん」「生け花」「貧乏」）と、北海道特有アクセントがむしろ勢力を伸ばし、東京アクセント化が進行しそうにない語（「夕張」「オルガン」）とがある。「夕張」における北海道アクセントの圧倒的な優勢には、地元北海道の地名であることが関係しているとみられる。

c) 5 拍名詞

「佐藤さん」「3時間」について、北海道特有アクセントと東京語アクセントを対比させて示す。ただし、両語とも5拍ではなく3音節的に発音する話者について、次のように処理した。「佐藤さん」は第2音節に核があれば○●○○○○に、「3時間」は第1音節に核があれば●○○○○○にまとめた。

	[北海道]	[東京]
佐藤さん	○●○○○○	●○○○○○
3時間	●○○○○○	○○●○○○

富良野、札幌それぞれの話者全体について、2語のアクセント型の割合を百分率で示すと、表3-8、表3-9のようになる。「佐藤さん」は、富良野では北海道特有アクセントが圧倒的に優勢であるが、札幌ではやや優勢であるにすぎない。一方、「3時間」は、富良野では東京語アクセントがわずかに優勢であるが、札幌では北海道特有アクセントの方が相当に優勢である。両語が、富良野と札幌とで違った傾向をみせていることに気付く。

図3-44、図3-45は、両語について年齢層別に各アクセント型の出現率を示したグラフである。図3-44は富良野、図3-45は札幌である。枝番号は、-1「佐藤さん」、-2「3時間」である。いずれも、若年層に向かって東京アクセント化が進行中であることを示している。

佐藤さん：富良野では、●○○○○○が30代以下で急増し、10代で○●○○○○と勢力交替するが、札幌では、一足早く40代で増加に転じ、20代で交替する。東京アクセント化は、札幌が富良野に先行している。

3時間：富良野、札幌とも、中年層で○○●○○○がわずかに減少したあと、増加に転じている。富良野では、20代で●○○○○○と勢力交替するが、札幌では、10代で交替する。東京アクセント化は、富良野が札幌に先行している。

表3-8 【富良野】

	●○○○○○	○●○○○○	○○●○○○	その他
佐藤さん	23.3	75.3	-	1.4
3時間	44.0	-	49.3	6.7

表3-9 【札幌】

	●○○○○○	○●○○○○	○○●○○○	その他
佐藤さん	44.6	54.9	-	0.5
3時間	64.3	-	34.6	1.1

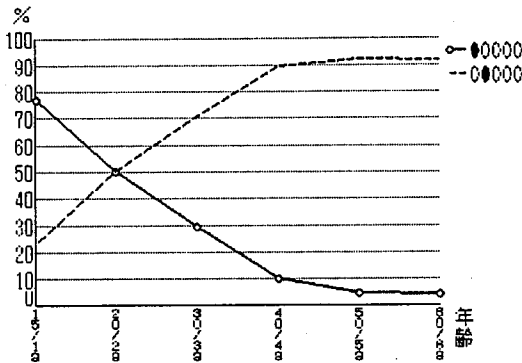


図3-44-1 佐藤さん (富良野)

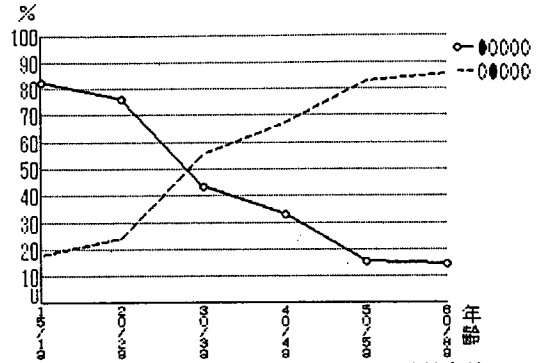


図3-45-1 佐藤さん (札幌)

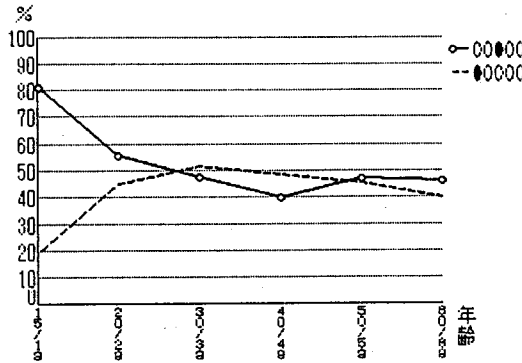


図3-44-2 3時間 (富良野)

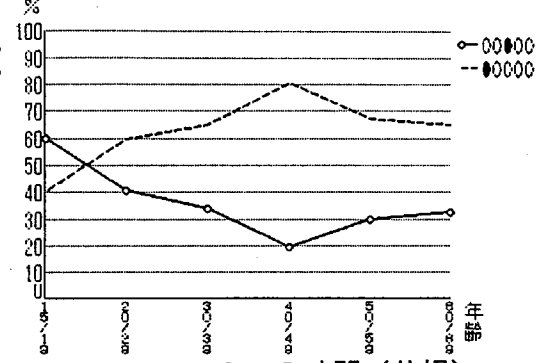


図3-45-2 3時間 (札幌)

【5拍名詞のまとめ】

「佐藤さん」「3時間」は、いずれも北海道特有アクセントが衰退し、東京アクセント化が進行中である。また、頭高型への変化（佐藤さん）では札幌が富良野に先行し、中高型への変化（3時間）では富良野が札幌に先行している。

3. 2. 2. 東京語におけるアクセント変化との関連性

ここでは、3. 2. 0. に d), e), f) として掲げた語群のアクセントについて、東京語におけるアクセント変化との関連性をみる。分析対象とするのは、次の8語である。

d) 2拍名詞 : 熊, 鋏

e) 3拍名詞 : つつじ, 心, 電車

f) 4拍名詞 : どんぐり, チャンネル, 二次会

これらの語は、『東京語アクセント資料 上・下』（以下『東京ア』）によって、そのアクセント型に明らかな年齢差が確認されている。すなわち、東京語においてアクセント変化が現在進行中の語とみられる。したがって、ひとくちに東京アクセント化といっても、行き着く先として想定される東京語アクセント自体が、一つの型で安定していないことになる。北海道のアクセントは、はたして東京語アクセントの動向とどのような関係にあるのであろうか。

まず、東京語におけるアクセント変化の動向を整理すると、次の三つのグループに分けられる。アクセント型は、「旧>新」の形で示す。括弧内に、『東京ア』の19人の話者のうち、何人がそのアクセント型を用いるかを示す。ただし、新旧両型を併用する話者もいるので、合計は19を超える。

イ) 平板化グループ

電車 : ●○○>○○○ (7>16)

チャンネル : ●○○○>○○○○ (6>17)

つつじ : ○●○>○○○ (9>11)

二次会 : ○●○○>○○○○ (14>6)

ロ) 頭高化グループ

どんぐり : ○○○○>●○○○ (7>15)

熊 : ○●>●○ (14>6)

鋏 : ○○, ○●>●○ (0, 3>18)

ハ) 尾高化グループ

心 : ○●○>○○● (8>14)

表3-10

	富良野	札幌	東京
電車	48.7	69.1	84.2
チャンネル	45.3	62.3	89.5
つつじ	62.0	69.4	57.9
二次会	7.0	22.0	31.6

【東京語で平板化が進行中の語】

東京語で平板化グループに属する「電車」「チャンネル」「つつじ」「二次会」の4語を検討する。富良野、札幌それぞれの話者全体について、各語の平板型の割合を百分率で示すと、表3-10のようになる。東京の百分率は、『東京ア』の19人話者における平板型の出現率である。

表3-10からまず、「電車」「チャンネル」がよく似た傾向を示していることがわかる。平板化は東京が最も進み、次いで札幌、富良野の順である。平板化の進行度はまだ浅いが、「二次会」もこの順に従っている。これらの語では、都市化の進んだ地域が先行する形で、アクセントの平板化が進行しているものとみられる。

これに対して、「つつじ」は特異である。平板型の出現率に3地域間の較差がほとんどなく、北海道が東京を、また富良野が札幌を追いかける形になっていない。ここには、どのような事情があるのであろうか。以下で、競合するアクセント型の動きも参照しながら、語ごとに変化の様子をみよう。

図3-46、図3-47は、この4語について、年齢層別に各アクセント型の出現率を示したグラフである。図3-46は富良野、図3-47は札幌である。枝番号は、-1「電車」、-2「チャンネル」、-3「二次会」、-4「つつじ」である。ただし、「電車」の2音節的な発音については、第1音節に核があれば●○○に、また、「チャンネル」の3音節的な発音については、第1音節に核があれば●○○○にまとめた。

電車：富良野、札幌ともに、10代では平板化が完全に達成されている。10代以外では、どの年齢層でも札幌の割合が富良野を上回り、平板化という点で先行していることを裏付けている。

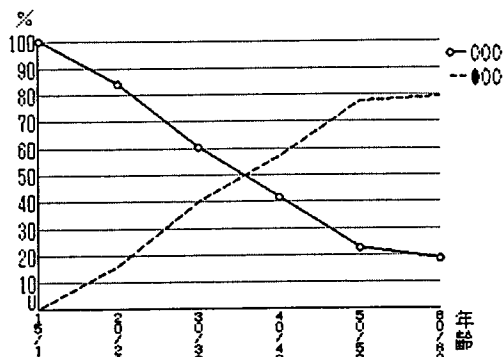


図3-46-1 電車 (富良野)

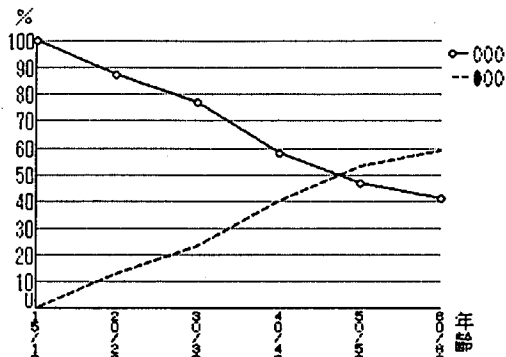


図3-47-1 電車 (札幌)

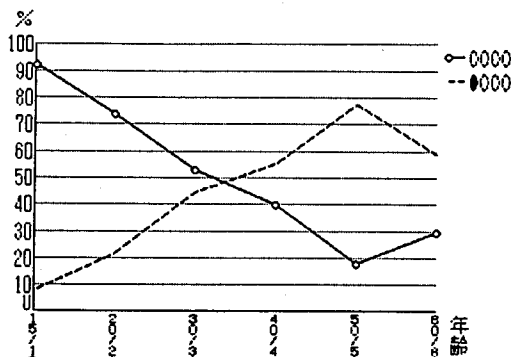


図3-46-2 チャソ礼 (富良野)

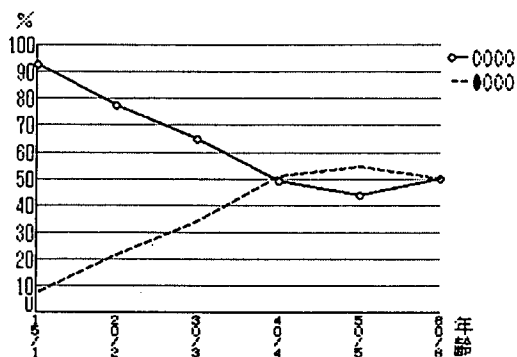


図3-47-2 チャソ礼 (札幌)

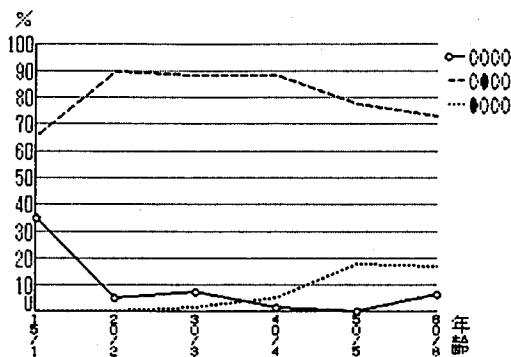


図3-46-3 二次会 (富良野)

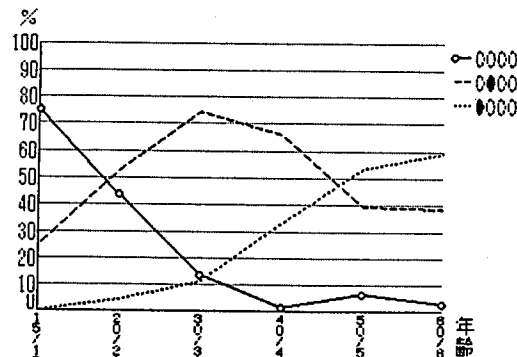


図3-47-3 二次会 (札幌)

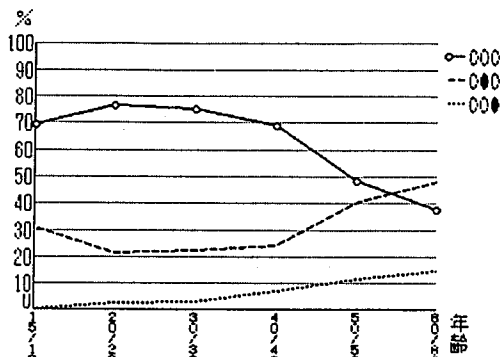


図3-46-4 つつじ (富良野)

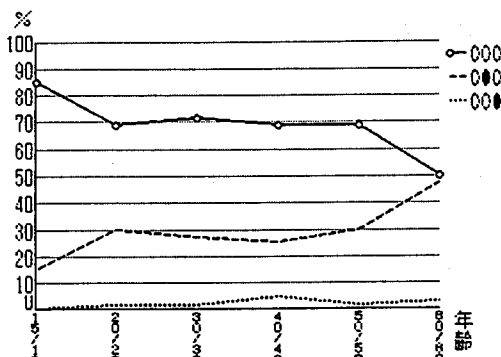


図3-47-4 つつじ (札幌)

チャンネル：富良野，札幌ともに，10代では平板型が9割を超え，ほぼ平板化が達成されたとみられる。10代以外では，どの年齢層でも札幌の割合が富良野を上回り，やはり平板化という点で先行していることを裏付けている。

二次会：札幌では20代から平板型の割合が急増するが，富良野では10代でようやくその傾向をみせる。平板化という点で札幌が富良野に先行していることをやはり裏付けている。「電車」「チャンネル」には大きく遅れるものの，今後平板化が進むことは確実であろう。富良野では全ての年齢層を通じて○●○○が圧倒的に優勢であるが，札幌では優勢な型がまず●○○○から○●○○へ，そしてさらに○○○○へと激しく交替してきた様子がうかがえる。

つつじ：富良野，札幌ともに，50代ですでに中高型にかわって平板型が優勢になるが，それ以降は7割前後の水準で横這い状態が続いている。札幌では10代で再び上昇に向うが，富良野では反対にやや下降傾向をみせ，今後の動向は容易に予測しがたい。和語ではあるが，日常の使用頻度がさほど高いとはいえない点が影響していようか。

【東京語で頭高化が進行中の語】

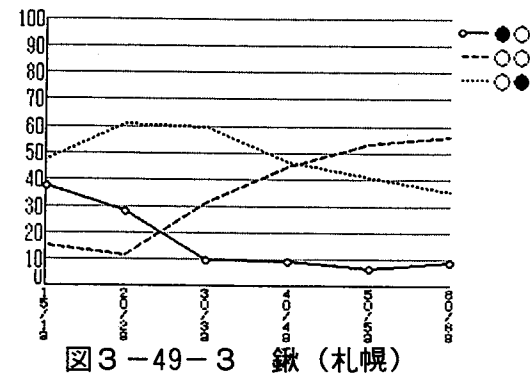
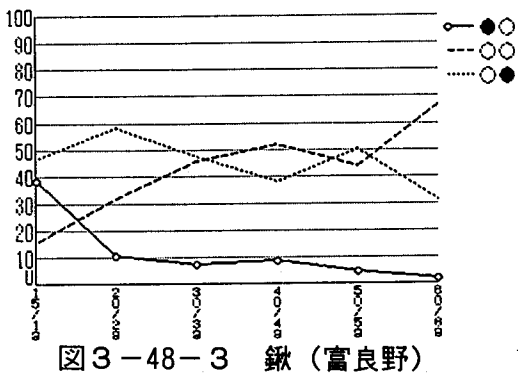
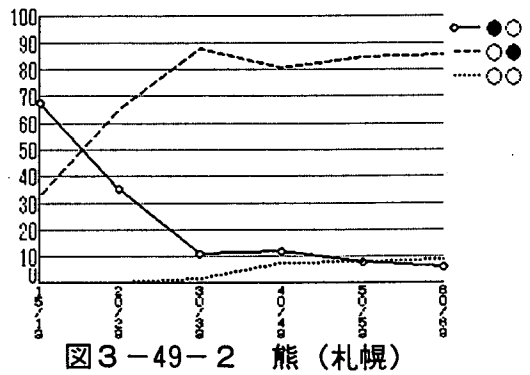
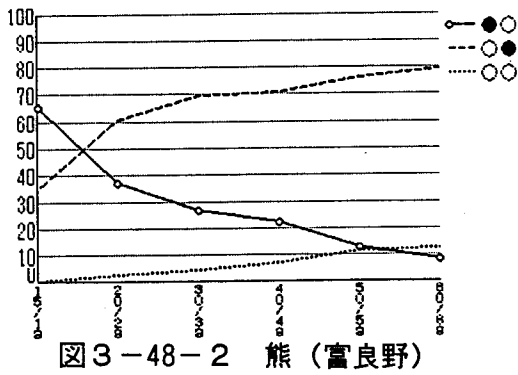
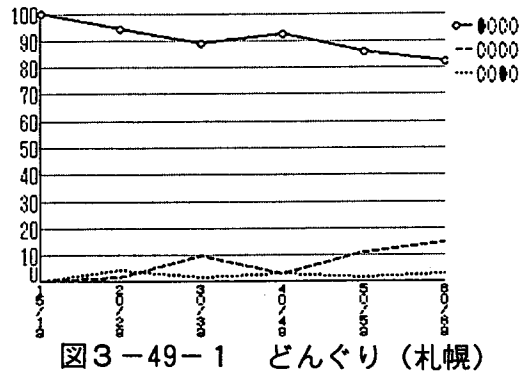
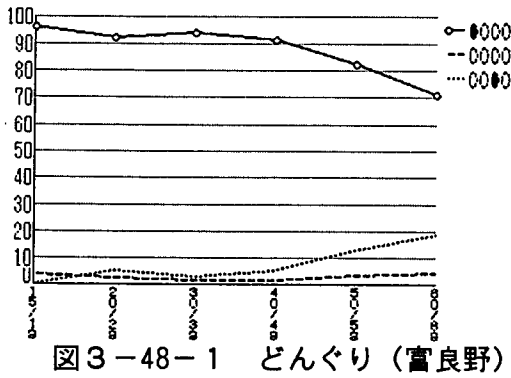
東京語で頭高化グループに属する「どんぐり」「熊」「鋏」の3語を検討する。富良野，札幌それぞれの話者全体について，各語の頭高型の割合を百分率で示すと，表3-11のようになる。東京の百分率は、『東京ア』の19人話者における頭高型の出現率である。

表3-11をみると，「どんぐり」では8割から9割程度，「熊」では2割から3割程度と，頭高型の普及水準には差があるものの，3地域間にそれほどの較差が認められない。一方，「鋏」では東京と北海道との間にきわめて大きな較差がある。これはどうしたことであろうか。競合するアクセント型の動きも参照しながら，語ごとに変化の様子をみたい。

図3-48，図3-49は，この3語について，年齢層別に各アクセント型の出現率を示したグラフである。図3-48は富良野，図3-49は札幌である。枝番号は，-1「どんぐり」，-2「熊」，-3「鋏」である。ただし，「どんぐり」の3音節的な発音については，第1音節に核があれば，頭高型ということで●○○○にまとめた。

表3-11

	富良野	札幌	東京
どんぐり	87.4	90.8	78.9
熊	24.7	21.4	31.6
鍬	9.3	15.7	94.7



どんぐり：富良野，札幌ともに，全ての年齢層で頭高型が圧倒的に優勢である。特に若年層では，ほぼ頭高化が達成されたとみられる。

熊：富良野，札幌ともに，60代から20代まで明らかな優勢を維持してきた○●が，10代で●○と交替する。若年層での着実な上昇傾向からみて，今後さらに頭高化が進むものと予測される。

鍬：富良野，札幌ともに，優勢な型が○○から○●，そして●○へと交替していく様子が見えてくる。若年層でも未だ●○は二番手に止まるが，グラフの上昇傾向からみて，今後は頭高化が進むものと予測される。身近な農具の名称ということで伝統的なアクセントが保持されやすく，若い世代に至るまで東京アクセントの影響が及びにくかったといえるかもしれない。

【東京語で尾高化が進行中の語】

東京語で尾高化が進行中とみられる「心」について検討する。富良野，札幌それぞれの話者全体について，「心」の各アクセント型の割合を百分率で示すと，表3-12のようになる。東京の百分率は，『東京ア』の19人話者における各型の出現率である（併用があるので，合計は100%を超える）。

表3-12をみると，東京では新しい○○●がすでに7割を超えて優勢となっているが，北海道で同様に○○●が優勢なのは札幌ではなく富良野である。札幌ではわずかながら○●○の方が優勢である。各アクセント型の変化の動きをみよう。

図3-50，図3-51は，年齢層別に各アクセント型の出現率を示したグラフである。図3-50が富良野，図3-51が札幌である。

心：富良野，札幌ともに，○○●と○●○の勢力関係の動きをみると，一方の型が圧倒的に優勢だったことはなく，20%程度の較差で均衡状態がしばらく続いたことがわかる。ただし，優勢を保っていたのは富良野では○○●，札幌では○●○と正反対であった。興味深いのは，富良野，札幌ともに，若年層でこの二つの型の勢力関係に逆転がおきていることである。札幌で○○●が優勢に転じた点については，東京語での新しい変化の影響が考えられるが，10代で横這いなのが不審である。富良野では10代になって，ようやく東京語の古い型の○●○に反応したということであろうか。不明な点が多い。いずれにしても，北

表3-12 「心」のアクセント

	富良野	札幌	東京
○○○	6.7	5.4	0
●○○	0	0.3	0
○●○	36.3	53.1	42.1
○○●	57.0	41.1	73.7

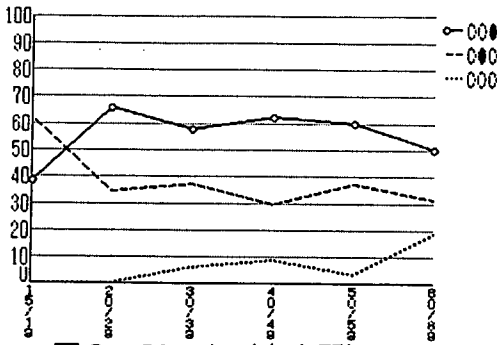


図3-50 「心」(富良野)

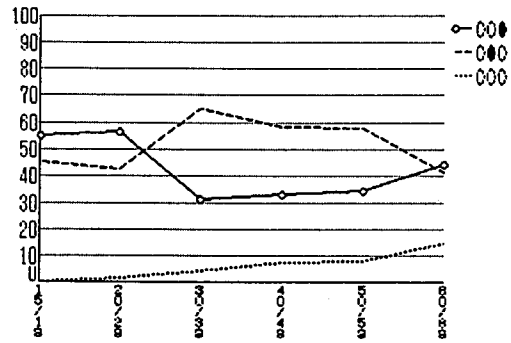


図3-51 「心」(札幌)

海道には以前から○○●が一定の勢力をもって存在していたということであろう。だとすれば、札幌で50代から30代まで○●○が優勢なのは、この世代が東京語の古い型の影響を受けたためかもしれない。

【まとめ】

東京語で進行中のアクセント変化に(おそらく)影響されて、早々と同様の変化をとげている語(「電車」「チャンネル」と、やや遅れるが同様の変化の兆しをみせている語(「二次会」「熊」「鍬」とがある。また、このような東京語に連動した変化は、都市化の進んだ札幌が富良野に先行する形で起っている。

東京語で進行中の変化の影響もあろうが、それ以前からすでに北海道ではその型が優勢であったと思われる語(「つつじ」「どんぐり」「心」)もある。

3. 3. アクセント(2) 富良野パネル調査から

3. 3. 0. はじめに

「Ⅱ. 調査の概要」で述べたように、アクセントについては組織だったパネル調査はおこなわなかった。しかし、音声項目の中で、アクセントについても同時に記録をとった項目がいくつかある。それらの音声項目は、実は前回富良野調査でも、調査者によっては調査票にアクセントまで丹念に記録してある場合がある。そこで、富良野パネル調査と前回富良野調査の両方でアクセントのデータが揃っているインフォマントを抜き出してパネル調査的な分析を試みた。ただし、企画の段階でパネル調査を断念したのと同様の理由、すなわちアクセントの判定者が両調査で異なっているということ、およびアクセントの判定が調査の場でなされるかそれともあとで録音テープを聞いてじっくりなされるかという判定方法の違いがあるという理由から、厳密な比較をするには限界があることは否めない。しかしおおよその傾向はつかめるであろうと考え、あえてこのような分析を試みたのである。なおパネル調査でのアクセントの判定は、音声項目の聴き取りを担当した尾崎喜光がおこなった。

3. 3. 1. 調査項目

とりあげた項目とインフォマントの数は次のとおりである。

「主人」(67人)、「火箸」(39人)、「窓」(40人)、「寿司」(41人)

このうち「主人」と「火箸」には、方言のシュ $\bar{}$ ジン・ヒバシと共通語のシュ $\bar{}$ ジン・ヒバシの2つのバリエーションが見られる(なおシュ $\bar{}$ ジン・ヒバシには語頭から高いシュ $\bar{}$ ジン・ヒバシというバリエーションも含めてある;以下の項目でも同様)。「窓」もこれと似ており、方言のマ $\bar{}$ 下(後ろにガなどが付いた場合は恐らくマ $\bar{}$ 下ガとなる)と共通語のマ $\bar{}$ ドが見られる。「寿司」にはス $\bar{}$ シ(後ろにガなどが付いた場合は恐らくス $\bar{}$ シガとなる)とス $\bar{}$ シがある。一応ス $\bar{}$ シが共通語であるが、ス $\bar{}$ シも新しい共通語とされており、先の3語と少し性格が異なる項目である。なお語形についてはそれぞれいくつかのバリエーションがあるが、ここではその違いは特に問題にしない。

3. 3. 2. 結果と考察

ではまず各項目の全般的傾向について見てみよう。結果は図3-52~55のようであった。(括弧内の数値は分析の対象とした人数)

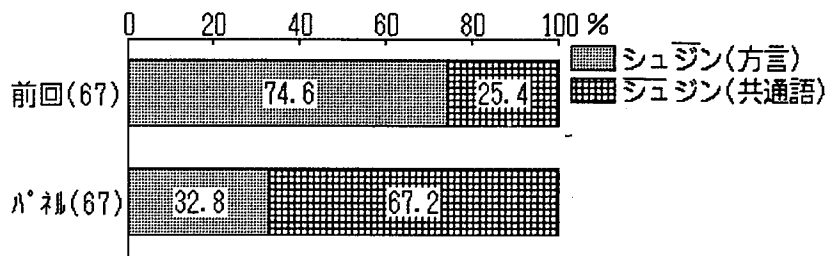


図3-52 「主人」のアクセントの全般的傾向

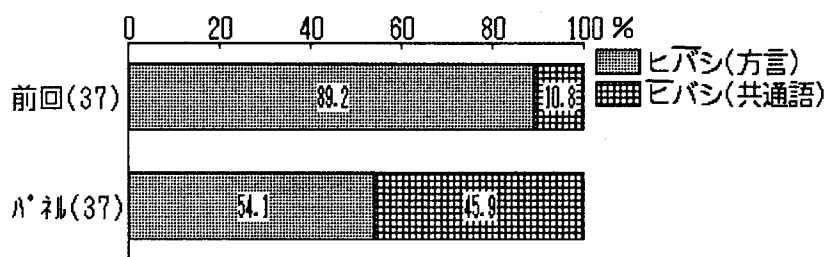


図3-53 「火箸」のアクセントの全般的傾向

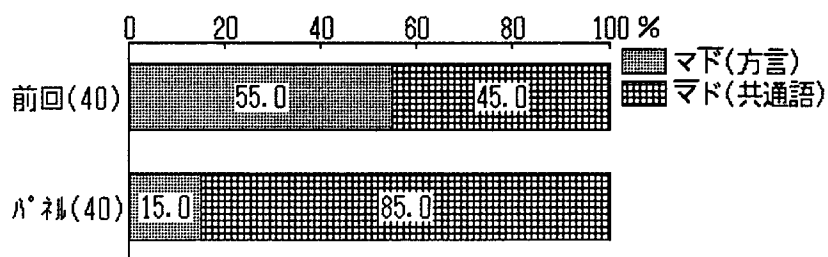


図3-54 「窓」のアクセントの全般的傾向

これによると、「主人」「火箸」「窓」では、方言アクセントが大幅に減少し（約40%の減少）共通語アクセントが大きく伸びてきているのがわかる。かつて多数派であった方言アクセントは、「主人」「窓」では少数派になっている。また「火箸」においても、方言アクセントは共通語アクセントと半々まで

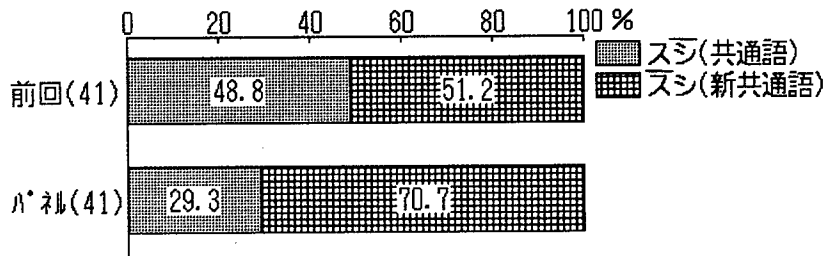


図3-55 「寿司」のアクセントの全般的傾向

に衰退してきている。「寿司」については、新旧共通語アクセントが半々の状態から、新共通語アクセントが20%ほど増加してきている。

次に、インフォマントを10年刻みの3つのコーホート（同時期出生集団）に分け、前回調査とパネル調査で共通語アクセントがどのように変化して来ているかを見てみよう。結果は図3-56～60のようであった。（なお前回調査での年齢はそれぞれから30歳差し引いた年齢である〔「60-69歳」→「30-39歳」、 「50-59歳」→「20-29歳」、 「40-49歳」→「15-19歳」〕）

これによると、いずれの項目においても実線（パネル調査）は点線（前回調査）より上にあり、どのコーホートも共通語化していることがわかる。図3-60は「主人」「火箸」「窓」の共通語アクセントの平均を示したものであるが、20～30%付近で水平になっている点線（前回調査）は、40%ほど上に平行移動して60～70%付近に来ている。共通語化は、前回調査の10代（パネル調査では40代）のような若いコーホートばかりでなく、当時の30代（パネル調査では60代）といったいわゆる言語形成期を過ぎたコーホートでも、ほぼ同程度見られる。語彙・文法などとは比べ変化しにくいと言われるアクセントでも、この調査で見ると、10代はもちろんのこと言語形成期を過ぎてからでも、かなり変化するものであることがわかる。なお、事情が特殊な「寿司」についても、パネル調査の60代ではほとんど変化がないが（この項目では60代は7人なのでそう見てよかろう）、50代・40代では新共通語アクセントが伸びて来ている。

次に、これらをさらに細かく個人レベルで見た場合どうであるかについて見てみよう。結果は図3-61～64のようであった。

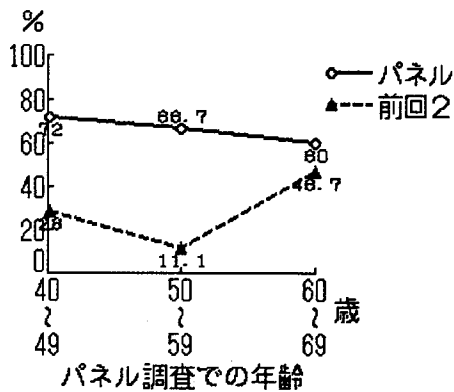


図3-56 共通語ツジツノのコホート別

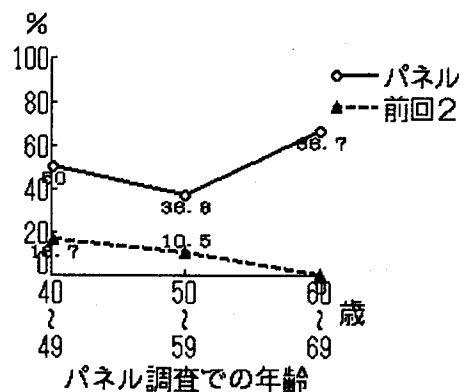


図3-57 共通語ハシのコホート別

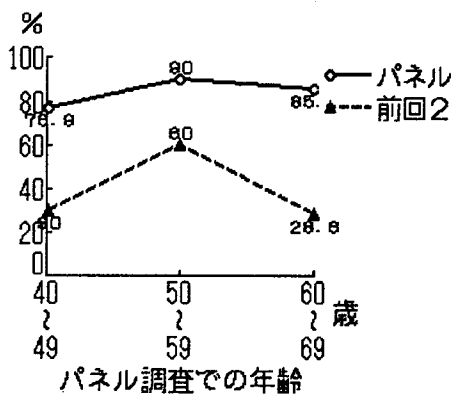


図3-58 共通語マドのコホート別

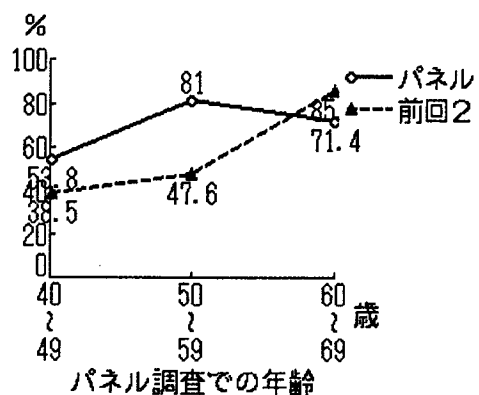


図3-59 新共通語のコホート別

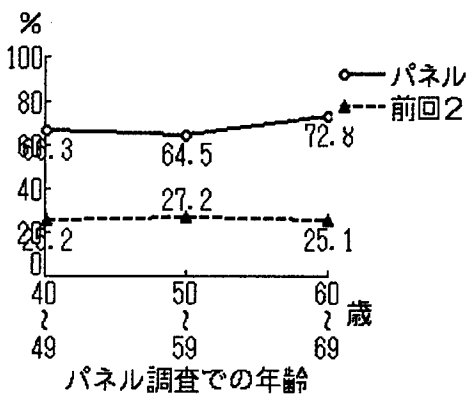


図3-60 「主人」「火箸」「窓」の共通語
アケトのコホート別 (平均)

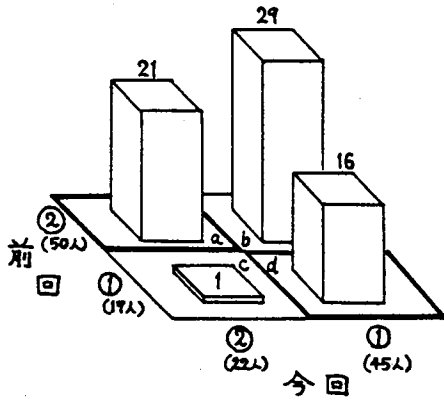


図3-61 「主人」のアクセントの個人ごとに見た変化

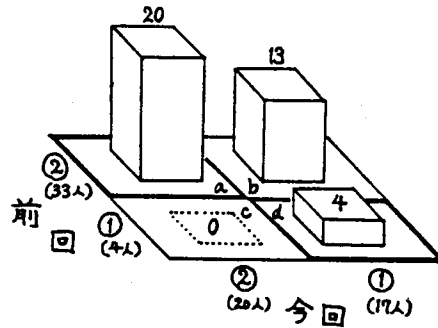


図3-62 「火箸」のアクセントの個人ごとに見た変化

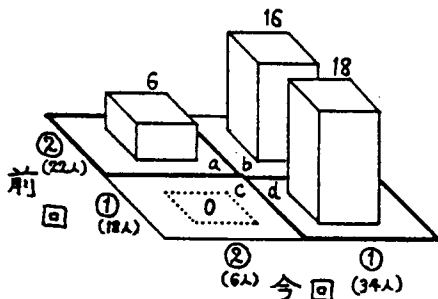


図3-63 「窓」のアクセントの個人ごとに見た変化

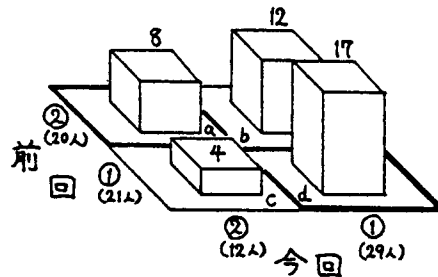


図3-64 「寿司」のアクセントの個人ごとに見た変化

図は、縦に前回調査、横に今回のパネル調査をとってある。②は $\overline{\text{O}}$, ①は $\overline{\text{O}}$ の意味である。全部で4つの枠があるが、図3-61~63の場合、枠aは前回調査で方言アクセントでパネル調査でもそのままという変化のなかった枠である。それに対して枠bは、前回調査では方言アクセントであったがパネル調査では共通語アクセントという変化のあった(共通語化した)枠である。また枠cは、前回調査では共通語アクセントであったがパネル調査では方言アクセントという変化のあった(方言化した)枠である。それに対して枠dは、前回調査でもパネル調査でも共通語のまま変化のなかった枠である。「寿司」につ

いては、従来の共通語アクセントと新しい共通語アクセントについて同様に示してある。

これら4つの枠のうち、もし太枠 a・d に全員入れればこの間個人レベルで変化は全くなかったことになり、逆にもし b・c に全員入れれば個人レベルで全員変化したことになるのであるが、これらの図（図3-61～63）によると、変化のなかった a・d および変化のあった b に人数の多いことがわかる。このうち b について言えば、例えば図3-61の「主人」の場合、67人のうち最多の29人までがここに入り、かなりの方がこの間変化している。そしてこの29人という人数は、前回調査で方言アクセントであった50人を母数にとると半数を越えており、ここから考えると、この27年間に非常に著しい変化があったと言える。同じような傾向は「火箸」「窓」についても見られる。

このように、個人レベルで見た場合でも確かに変化していることが確認された。ただし変化と言っても、「方言から共通語へ」の変化がほとんどであり、「共通語から方言へ」の変化（すなわち枠 d に入るもの）は皆無に近い。なお「寿司」については、新しい共通語アクセントへの変化がやはり多く見られる（前回調査で従来の共通語アクセントであった20人のうちの12人までが変化している）。ただしこの項目については、その逆の変化も多少見られる。

かつて国語研究所では、今回の北海道調査と類似したテーマで1950年と1971年の2度にわたり山形県鶴岡市で言語調査をおこなったことがある（国立国語研究所1974）。それによると、アクセントは個人の中で非常に変化しにくい要素であり、21年経た1971年においても、共通語アクセントは依然として変化なく10数%のままであった。この点、今回の富良野調査での結果と大きく違っている。この違いは、音声面での共通語化に大きな影響をもたらしたことが実証されているテレビの普及の時期と調査時期との関係から説明できよう。

テレビの普及は1960年代に始まるのであるが、鶴岡市で第2回目の調査がおこなわれた1971年という時期は、ようやく普及が本格化しはじめた時期であった。それに対し富良野市で第2回目の調査がおこなわれた1986年という時期は、テレビの普及からすでに20～30年経過し普及率は100%近くに達している時期であった。この社会状況の違いが、調査結果の違いに反映されているものと思われる。さいわい数年前に第3回目の鶴岡調査がおこなわれ、アクセントについてもパネル調査がおこなわれた。パネル調査はまだ報告が出ていないが、富良野調査での結果が一般化できるかどうか、興味深いところである。

3. 4. まとめ

北海道における方言の共通語化というテーマのうち、ここでは音声的な側面について、「発音」と「アクセント」に分けて見てきた。

このうち「発音」については、すでに前回富良野調査の時点から、北海道方言の重要な基盤の一つであったと考えられる東北方言的な音声がほとんど使われておらず共通語化が著しく進行していたため、今回の調査では、結果的に、27年後もほとんど変化なく共通語音が非常によく使われていることを確認するにとどまった。一言で言えば「発音」は、少なくとも富良野においては、共通語化を測定する尺度として十分機能していなかったと言える。この点、類似したテーマでかつて国語研究所が1950年と1971年の2度にわたり調査をおこない、発音面でも共通語化が認められることを実証した山形県鶴岡市における調査と状況がかなり異なっている（国立国語研究所1974参照）。もっとも、可能性としては、方言音への変化が逆に進行するということが全くありえないことではないので（実際鶴岡調査の文法項目にそれが認められた）、それがなかったことを確認できた点は意義があったと言えよう。

唯一例外であった項目は、語中のガ行子音の鼻音／非鼻音の対立である（もっともこれは方言音／共通語音の対立とは言い難い）。ただし結果としては、富良野のパネル調査で見ると、この27年間ほとんど変化がなかったことがわかった。コーホート別に、あるいは個人別にこの27年間の動きを見た場合もほとんど変化がなかったことからすると、語中のガ行子音の鼻音／非鼻音は、一度獲得すると個人の内で固定されその後変化しにくい特徴のようである（ただし〔ŋ〕→〔g〕という方向へは多少変化しうる）。パネル調査でこの27年間ほとんど変化がなかったのもそのためである。

なお、個人の内で変化しにくく、しかも若年層ほど〔ŋ〕が少なく〔g〕が多いということは、この年齢差は、加齢に伴う〔ŋ〕の習得ではなく、時の経過に伴う〔ŋ〕の衰退という社会における言語変化が反映されているものと見るのが妥当であろう。

そうすると、富良野全体としては〔ŋ〕が衰退に向かっていることになるわけであるが、それにもかかわらず、前回富良野調査と富良野継続調査との間に〔ŋ〕の衰退が見られないのは不審に思われるかもしれない（図3-21-1参照）。しかしこれは、そもそもサンプルの取り方が異なっていたことが関与し

ている可能性が高い（今回はランダムサンプリングではなかった）。もし前回調査の対象者もランダムサンプリングで選んでいたなら、27年間に比較的明確に変化（〔ㄏ〕の衰退）が認められた可能性が高い。

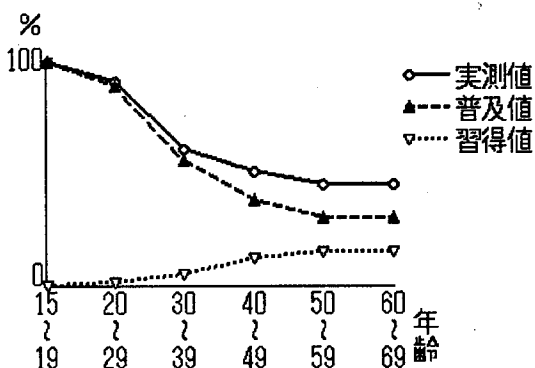
他方「アクセント」については、前回調査の報告書では、アクセント型の「安定度」という観点から分析されており各語のアクセント型の使用率がどうであったかは明示されていないのであるが、3.3.でパネル調査的な分析を試みた際に前回調査の調査票にもどってアクセント型を確認したところによれば、当時は共通語アクセントよりもむしろ方言アクセントの方が使用率が高かったらしいことがわかった（図3-52~54）。つまりアクセントは、音声と異なり、共通語化を測定する尺度としてまだ十分機能していたと言える。ただし、「Ⅱ.調査の概要」で述べたように、アクセント項目は前回調査のデータが録音されていないため比較が困難なことから、パネル調査では調査項目としなかった。そこでアクセントについては前回調査との比較はおこなわず、①現時点でのアクセント型の対立の状況、②年齢差から見た変化の動向、③富良野と札幌の地域差、という観点から分析をおこなった。前回調査で録音をとらなかったのが惜まれる。

今回の調査の結果によると、本来共通語アクセントとは異なるアクセント型を有していたと考えられる語の多くの場合、富良野・札幌いずれにおいても、現在でも両者が拮抗していることが明らかになった。27年前ばかりでなく現在も対立が続いている点、先の「発音」と状況が随分異なっている。北海道における音声面での共通語化は、過去においても現在においても、アクセントよりも発音で大幅に進んでいる。

共通語アクセントの普及には地域差も認められ、多くの場合札幌の方が富良野よりも先行していることがわかった。

また多くの場合、富良野・札幌ともに、若年層ほど共通語アクセントの使用率が高く逆に方言アクセントの使用率が低いという年齢差が、かなり明確に認められた。語によっては、10代の共通語アクセントの使用率が100%に近いものもある。こうした年齢差をどのようなものと読み取るかについては、3.3.で試みたパネル調査的な分析結果が参考になろう。

それによれば、語中のガ行子音の場合と異なりアクセントは、この27年間に個人の中で、共通語アクセントには変化しうるものの（2回目調査時で40歳以上のいずれの年齢層でも40%程度の上昇）、方言アクセントにはほとんど変化



共通語アクセントの使用率

年齢層別のグラフに反映されているのは、時の経過に伴う共通語の普及ばかりではなく、個人の習得も含まれている可能性が高い。少なくとも富良野の40歳以上の人たちの数値は、個人による共通語アクセントの習得がいわば上乘せされている可能性が高い（上のモデルグラフを参照；「実測値」は調査で実際得られた値、「習得値」は共通語アクセント習得による値、「普及値」は実測値から習得値を差し引いた値）。それを差し引けば、共通語アクセントの普及は、3.2.の年齢層別グラフで示した以上に急激なものであったと推測される。

富良野での調査は今回2度目であったわけであるが、今後富良野・札幌においてさらに調査を継続する意義があるかどうかについて、最後に触れておく。

「音声」については、語中のガ行子音の鼻音／非鼻音という、本質的には方言音／共通語音の対立ではない項目を除けば、共通語化はすでに広く行き渡っていて方言音／共通語音の対立はほとんど消滅しているため、将来継続して調査する必要性はあまり高くない。ただし、シの [si] の音（表3-1参照）や、語中のガ行子音の鼻音／非鼻音の対立などは、方言の共通語化という本研究のメインテーマからははずれるものの、現在変化が進行中であり、今後とも調査を継続する価値は大いにある。

一方「アクセント」は、①若年層で共通語アクセントが著しく普及したというものの全体としては共通語化は現在まだ進行中であること、②項目によっては共通語アクセントと方言アクセントが若年層においても拮抗していたり、旧来のアクセントの方がむしろ強い勢力を維持・回復したり、時には新しい方言アクセントが普及し始めているものもあることを考慮すると、今後とも調査を継続し動向を追跡する必要があるであろう。

しないことがわかった。ここから考えると、グラフに見られる年齢差は、基本的には加齢に伴う方言アクセントの習得ではなく、時の経過に伴う方言アクセントの衰退・共通語アクセントの普及という言語変化が反映されているものと見るのが妥当であろう。ただし、共通語アクセントへの変化は個人の内でも生じるうるようなので、

IV. 言語生活・言語行動項目編

4. 一日の言語生活・言語生活意識

「富良野市民継続調査」および「札幌市民継続調査」の言語生活調査関係の項目の中から、近所におけるつきあい・あいさつ、決まりことばのあいさつ、近所における1日の言語生活を取りあげ、分析を行う。

4. 1. 近所づきあい・あいさつ行動に見られる男女差、年齢差のパターン

まず、近所におけるつきあい・あいさつを取り上げ、男女差、年齢差という観点から札幌市と富良野市のデータを対比的に扱い、分析を行なう。これは言語行動の側面から見た、近所づきあいの模様を明らかにすることを目的とするものであり、地域社会におけるコミュニケーションの実態、言語的なコミュニケーションが行なわれる場の模様を描き出そうとする試みのひとつである。

この節では主に男女差と年齢差の観点から観察できるパターンを中心に分析を行なうことにする。なお、「性×年齢層」の属性別回答者数は、II. 2. を参照のこと。

4. 1. 1. 対象項目

ここで分析に取り上げる項目の質問文は次のようなものである。

「近所のかたとのおつき合いはどうでしょう。家でいえば向う三軒両隣り、マンションなら同じ階段やフロア、また、アパートなら同じアパートの人、という範囲くらいで考えて下さい。それぞれ、いくつ○印を付けてもかまいません。」

調査では、これを1)近所の奥さん、2)近所のご主人、3)他の近所の人、4)近所の家庭、5)近所の家で冠婚葬祭があったときについて聞いている。

まず、1), 2), 3)について見てみることにする。

この3種類の対象についての選択肢は、A “つきあいなし”，B “会釈程度”，C “あいさつ程度”，D “立ち話くらい”，E “家に上がる”，F “一緒に

出かける”の6通りである。図4-1～図4-12の横軸にふったA～Fの記号はそれぞれこの選択肢に対応するものである。

選択肢は“つきあいなし”，“会釈程度”，“あいさつ程度”，“立ち話くらい”，“家に上がる”，“一緒に出かける”という順で付き合いの程度が深くなっている。このような場合，各カテゴリの出現のしかたには，どのような構造があり，札幌と富良野とでは，どのような違いを見せるのか，そして，これらは関連する言語行動項目とどのような関係に立つのかということを探き上げることが目標である。ここではまず，主に前者についてデータから観察されることを記す。

4. 1. 2. 年齢層別のつきあいの程度の分布パターンの比較

ここでは地域別，性別によって分けて描いた年齢層別の反応のグラフの比較を行なう。各グラフは横軸につきあいの程度を取り，縦軸に当該のつきあいがあるとした人のパーセンテージを取り，年齢層別にプロットして描いたものである。

近所の人とのつきあいを聞く質問の結果をグラフ化して観察すると，付き合いの相手を近所のご主人とか近所の奥さんとかいう形で限定した場合には，その他の近所の人との関係を聞いた場合と比較して，非常に明瞭な男女差を見ることが出来る。

グラフに見られるパターンから，大きく以下の3通りのタイプが観察できる。

なお，下記 a, b, c のカッコ内のセミコロン（；）の左は札幌のグラフ，右は富良野のグラフであることを示す。

- a. (図4-4；図4-5，図4-6，図4-8)：富良野によく見られた。E“家に上がる”の程度までの関係がよく出ている。図4-6を除いて，さらにF“一緒に出かける”もよく出ている。親な関係のあるパターンと分類できる。
- b. (図4-1，図4-2；ナシ)：“立ち話くらい”程度までの関係を見ることはできるが，それ以上は少ない。“会釈程度”，“あいさつ程度”における年齢的なバラツキが目目を引く。札幌の男性に特徴的であり，比較的疎な関係である。
- c. (図4-3；図4-7)：親な関係は薄く，“あいさつ程度”までの関係が優勢である。

一般的な予想として、都市化の進んでいる地域である札幌と、都市化の進んでいない地域である富良野を比較すれば、富良野の方が親な近所づきあいがみられることが予想される。これはタイプaとして、グラフの上に見ることができた。また、このグラフのパターンからは、札幌の女性同士の関係は富良野におけるのと同じ様に親な関係があることが見える。

疎な関係としては、タイプcが上げられる。これは地域の別なく、札幌にも富良野（比較の問題だが）にもあって、いずれも（女性→ご主人）の関係である。この逆の（男性→奥さん）という関係は、札幌においても、富良野においても、より親な方へ傾いている。これは（女性→ご主人）という場合には、疎な関係にとどめておくような規制が働いているということが考えられる。

図4-1～図4-8の範囲で見ると、札幌を疎な地域社会として特徴付けているのは、タイプbとして観察される男性の行動パターンである。

図4-9～図4-12に示す「その他の近所の人と」では、以上のような顕著な男女差はなく、ピークの出方も比較的弱めで、平板な形になっているが、札幌と富良野を比較すると、富良野の方では男女とも、親な方へ向かっており、札幌の方では男女ともに疎な方へ向かっている。これに関しては、札幌は比較的疎、富良野は比較的親な関係といえる。

地域的な差として、都市型の疎な関係を示すものとして札幌、農村型の親な関係を示すものとして富良野というような対立を考えて始めたが、ここまでのところで観察できるかぎりでは、そのような単純な対立ではないことが分かる。「疎な関係」対「親な関係」（あるいは「都市型」対「農村型」というコミュニケーションのパターンの対比をよく示しているのは男性の行動パターンであるということが浮かび上がっている。

なお、表4-1として、図4-1～図4-12のグラフにした数値（パーセンテージ）を示す。

4. 1. 3. つきあいごとの相手別反応パターンの比較

図4-1～図4-12に示したデータを、こんどは横軸に年齢層、縦軸に回答者数のパーセンテージを取って描き直したものを図4-13に示す（年齢層はG1～G6で示し、G1=15-19, G2=20-29, G3=30-39, G4=40-49, G5=50-59, G6=60-69である）。札幌と富良野を対比的に見ることができるよう並べてあり、各々

の中はさらに男性、女性に分けて示してある。左の方から札幌の男性、札幌の女性、富良野の男性、富良野の女性の順であり、上から下に向かってA～Fの付き合いの程度の順になっている。近所づきあいの親疎に関しては、図4-1～図4-12ですでに観察をしたが、このように角度を変えて見ることによって、さらに、いくつかの点が見えてくる。

男性のパターンと女性のパターンを比べると、男性の方はグラフの中の3本の線が絡み合うように変化しているのに対して、女性の方は「あいさつ程度」から「立ち話程度」に移るところで「奥さん」の場合とその他の2つの場合との間が大きく開いてくる。女性の場合、相手によってどの程度の付き合いをしているのかということの程度のシフトが、男性の場合と比べてはっきり出てきている。これは図4-1～図4-8でも、(図4-1, 図4-2), (図4-5, 図4-6)と(図4-3, 図4-4), (図4-7, 図4-8)を比べれば、見えているが、図4-13では、これをより明瞭に見ることができる。

この傾向は地域によらず、札幌でも富良野でも男女差という形で、両方ともにはっきり出ている。その上で札幌と富良野の違いがどういう形で出ているかというところを見ると、「あいさつ程度」から「立ち話程度」に移るところのシフトが、札幌の女性の方が富良野の女性よりも大きく出ていることが分かる。さらにその先「家にあがる」、「一緒に出かける」へと続いていく様子を通して見ると、札幌の女性の方は、「立ち話程度」でいきなり大きくシフトしてしまうが、富良野の女性の方は、札幌の女性と比べると、より段階的に移っていく様子が見える。

女性の場合、同性の近所の奥さんとの近所づきあいとそれ以外の相手の場合のつきあいの程度の取り方の差という観点からは、札幌では「あいさつ程度」と「立ち話程度」の間に大きな落差があるのに対して、富良野ではこの差が、札幌との比較では、より小さく、また、その先のシフトの様子もより段階的な様相を示している。

すなわち、女性が近所の御主人やその他の人と結ぶ近所づきあいの程度が、札幌では「あいさつ程度」以上のつきあいになると急激に減っていくのに対して、富良野ではよりゆるやかな変化を示すといえる。近所づきあいの相手によるつきあい方の程度の取り方の違いが札幌と富良野の女性の行動の差として特徴的に現われていることになる。

札幌と富良野を対比させながら、図4-13のグラフの増減のおおまかな傾向

を觀察してみる。「会釈程度」以外の近所づきあいの程度に関しては、両者ともほぼ同様の傾向を見せているのに対し、「会釈程度」のみは、両者で反対の傾向を示しており、札幌では全体的に右上がりの傾向が見えるのに対して、富良野では右下がりの傾向が見える。

図全体におけるグラフの変動の傾向を見て、どの程度の段階からグラフの傾向が変わるかという見方をすることにする。札幌では「つきあいなし」から「会釈程度」へ移るところで、富良野では「会釈程度」から「あいさつ程度」へ移るところで、傾向が変わっている。「つきあいなし」は札幌でも富良野でも右下がりの傾向を示している。近所づきあい程度とグラフの傾きの傾向から見ると、札幌では「つきあいなし」とそれ以上の程度のつきあい5つとに二分され、富良野では、「つきあいなし」、「会釈程度」の2つと、それ以上の程度のつきあい4つに二分される。すなわち、「会釈程度」はあいさつの程度としては軽いあいさつと考えられ、の軽いあいさつの示すパターンは、富良野ではこれにつづくより程度の重いあいさつとの間に断層があるが、札幌ではより連続的な様子を示している。

「会釈程度」のパターンは、富良野では「つきあいなし」の示すパターンと同じタイプの変化を見せるのに対して、札幌では「あいさつ程度」以降の示すパターンにパターンとしてつながるタイプの変化を見せている。これは男女の別に大きな違いを示さず、「都市型」（「疎な関係」）の札幌と「農村型」（「親な関係」）の富良野との対比を示す特徴として捉えられる。

4. 2. 決まりことばのあいさつ

決まりことばのあいさつの項目は国立国語研究所の言語生活調査の項目としては1963年の松江の調査（「国民各層の言語生活の実態調査」）以来の伝統的な質問項目である。ここでは項目を個別に扱うのではなく、全体として観察できるパターンから分析してみることにする。個別の項目の示す特徴についてはここでは深追いしない。

図4-14～図4-17に札幌、富良野について、男女別に決まりことばのあいさつのグラフを示す。横軸にはあいさつの場面を調査票の順にとってあり、縦軸は反応数のパーセンテージである。

札幌の男女別の年齢層別グラフと富良野の男女別の年齢層別グラフを比較し

てみる。全体のパターンとしては、札幌の男性のグラフと富良野の男性のグラフ、札幌の女性のグラフと富良野の女性のグラフとがそれぞれ類似していることが観察できる。すなわち、男性同士、女性同士で似たパターンを示していることが見えている。同性同士では地域が違っても、大きな構造は変わらないということがいえそうである。

そこでこの構造を探るために、クロス集計の数量化にかけてみる。その結果を図4-18～図4-21に示す。横軸に1軸、縦軸に2軸の値を取ってあいさつの布置をプロットしたものである。

札幌、富良野の両者共に、男性の場合はあいさつを大きく4つのグループに分類でき、女性の場合は大きく3つのグループに分類できる。このとき各々のグループに入っているあいさつは、男女別に、札幌の場合も富良野の場合も同じになる。

男性の場合、あいさつはつぎの4つに分類される。なお、下で使われている1～9、A～Fはグラフの中のプロットの記号と対応する（下の「女性の場合」も同様である）。

(a) 1. 朝起きたとき、2. 夜寝るとき、3. 食事の始め、5. 家を出るとき、6.

家に帰ったとき、7. 家人が帰ったとき、8. 家人を送り出すとき

(b) 4. 食事の終り、9. 人と別れるとき

(c) A. 人を迎えるとき、B. 朝人に会ったら、C. 昼人に会ったら、D. 晩人に会ったら

(d) E. 慶事のあった人に、F. 不幸のあった人に

女性の場合、つぎの3つに分類できる

(a) 1. 朝起きたとき、2. 夜寝るとき、7. 家人が帰ったとき、8. 家人を送り出すとき、A. 人を迎えるとき

(b) 3. 食事の始め、4. 食事の終り、5. 家を出るとき、6. 家に帰ったとき、9. 人と別れるとき、B. 朝人に会ったら、C. 昼人に会ったら、D. 晩人に会ったら

(c) E. 慶事のあった人に、F. 不幸のあった人に

図4-18を1軸、2軸に関してそれぞれ反転させると、分類相互の位置関係としては図4-19の上のものと同じものが得られる。また、図4-20を1軸に関して反転させると図4-21の上と同じ分類相互の位置関係が得られる。1軸、

2軸に関して反転は数量化の内容に関しては無関係であるから、図4-18と図4-19および図4-20と図4-21とはそれぞれ同じパターン分類の構造を持つものといえる。すなわち、札幌か富良野かの違いに拘らず、きまった言葉のあいさつに関する年齢的な反応のパターンの分類からは、男性同士、女性同士で、それぞれ同じ構造を観察できた。すなわち、地域によらず、同じ男女別の構造を見ることができたことになる。

特徴的なのは、A、B、C、Dが男性ではかなりはっきりしたクラスターを作るのに対して、女性ではそうはならずその他のあいさつと混ざることである。Aは「人を迎えるとき」、Bは「朝、人に会ったとき」、Cは「昼間、人に会ったとき」、Dは「晩、人に会ったとき」であり、これらは家庭の外の人に対するあいさつであり、男性の場合は、これが年齢層別の反応という観点からはひとまとまりの集団を形成する。これは、より対外的な側面を持つ男性とそうでない女性という、現代までの日本における、それぞれの一生における言語生活の差の反映であると考えられることができるものとも思われるが、さらに分析が必要である。

さて、このように大きく分かれるということを見た上で、もとのグラフに戻ってみることにする。

図4-22～図4-25に図4-14～図4-17のグラフの横軸を上で得られた数量化による分類を利用して並べ直したものを示す。上で得られた分類別に並べ、各分類の中は調査票順のままにしたものである。グラフ中に縦線を引いて分類を示しておく。分類前とくらべて、グラフが整理されている様子が分かり、グラフ相互の比較がやりやすくなる。

男性の場合は次の点が観察できる。

- ・家庭でのあいさつは札幌の方がよくしている傾向がある。
- ・家庭の外の人とのあいさつは、札幌も富良野も同じ程度である。さらに、よく見ると、富良野の方が年齢によるバラつきが少なく一様であるように見える（このあたりは、地域社会の違いがあるかもしれない。都会と農村の違い、地域で出会う人の違いがあるかも知れない）。特に慶事・不幸はそうである。
- ・女性の場合は総じて札幌の女性の方がよくあいさつをする。
- ・札幌と富良野の差は、男性の方により明瞭にパターンの差を見ることができる。

近所との交流の様子を見たところでも、男性の方に地域差を特徴づけるようなパターンが見られた。決まりことばによるあいさつでも同様に、男性の方より明瞭に札幌と富良野の地域差を特徴づけるようなパターンが見られた。都市と農村では男性の就業様式に大きな違いがあるわけであり、都市化ということでは、男性の職業が変わってくるわけであるから、男性が大きく関わってくることは考えられる。

同じ地域で男女間を比べてみると、札幌の男女間の差の方が富良野の男女間の差よりも大きいことが観察される。

最初に4. 1. で見た親疎関係に戻ってみると、一番親な関係を示していたのは札幌の女性同士、富良野の女性同士の関係があり、その後に富良野の男性同士、そして札幌の男性同士という順をつけることができる。図4-22～図4-25の決まりことばのあいさつの中で、4. 1. で見たとなり近所との交流に關係する、朝、昼、晩と人に会ったときのあいさつと、慶弔のときのあいさつの部分の反応を比較すると、4. 1. で見たと同じ順序を見ることができる。

すなわち、(札幌の女性、富良野の女性)、富良野の男性、札幌の男性という順がここでもほぼ確認される。なお、ここでカッコで括ったのは差が少ないということである。

4. 3. 近所におけるきのう1日の言語生活

前日の言語行動について聞いている項目から、ここでは家と近所における言語行動の部分のデータを取り上げる。(a)きのう家で話したか、(b)きのう近所の親しい人と話したか、(c)きのう近所の親しくない人と話したかという3通りのケースについての回答を扱う。

これはこのデータから、家の中や近所における「発話活動」の一端を見ることができないか試みたものである。ここでは、ある人がより多くのジャンルで何かの話をしたということが、その人は発話の活動が活発だということになると考え、このように粗く捉えてみて、どのようにパターンが見えてくるのかを試そうとした。

なお、発話のジャンル別の分布の仕方は、ここでは問題としていない。

上の3つのケースについて、各々、札幌、富良野について男女別に集計してグラフ化したものを並べて示したのが図4-26である。図4-26の各グラフは、横軸に項目、縦軸に反応のパーセンテージを取り、さらに観察のために、その反応のパーセンテージの大小順に項目が並ぶように順序をソートしたものである。

各グラフの棒で示されているところの面積の大きいところほど、ここにおける観点からは発話が活発なところだということになる。

このようにして描いたグラフを札幌の女性、富良野の女性、富良野の男性、札幌の男性の順で上から下へ、また、家、近所の親しい人と、近所の親しくない人と、というようにだんだん関係が親から疎になっていくように、左から右へと配列した。

図4-26をみると、上から下へ、左から右へとグラフの形状はほぼ同じパターンを保ちながら、グラフの中の棒の占める面積が小さくなっている傾向が分かる。

すなわち、「4. 1. 近所づきあい・あいさつ行動に見られる男女差、年齢差のパターン」および「4. 2. 決まりことばのあいさつ」で見た（札幌の女性、富良野の女性）、富良野の男性、札幌の男性という近所づきあいの親疎関係の順序が1日の言語行動の中のある量的な側面にも現われていることが観察できた。

本稿（第4節）のデータの集計には、荻野綱男氏（現在は東京都立大学）の開発した方言調査分析用パッケージプログラムGLAPSを筆者（熊谷）がパソコン（MS-DOS）上に移植したPC-GLAPSを利用した。

なお、本稿の初稿は1992年2月までに集計・執筆したものであり、その当時は他にパソコン版のGLAPSが無かったが、その後、荻野綱男氏自身によってGLAPSがパソコン（MS-DOS）に移植されたので、現在は荻野氏自身によるパソコン版GLAPSが入手可能である。

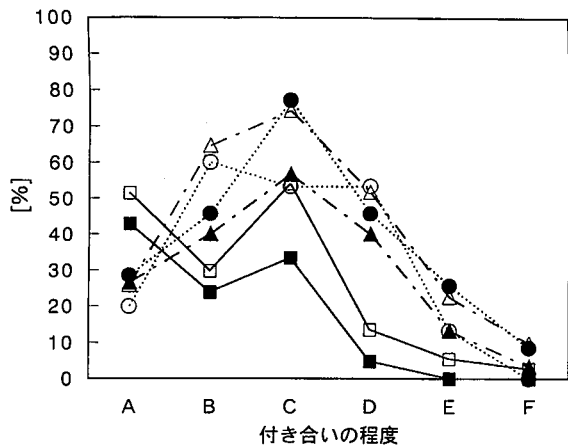


図4-1 (男性→ご主人) / 札幌

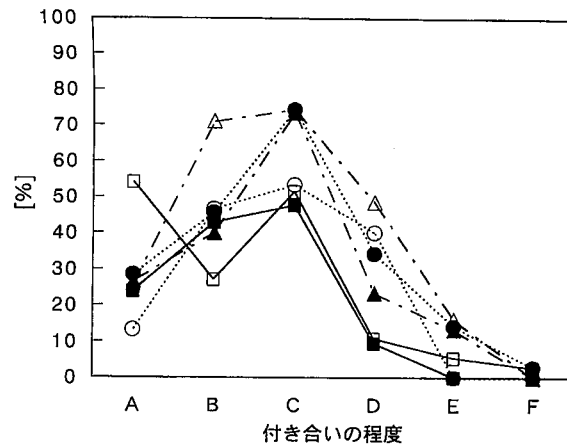


図4-2 (男性→奥さん) / 札幌

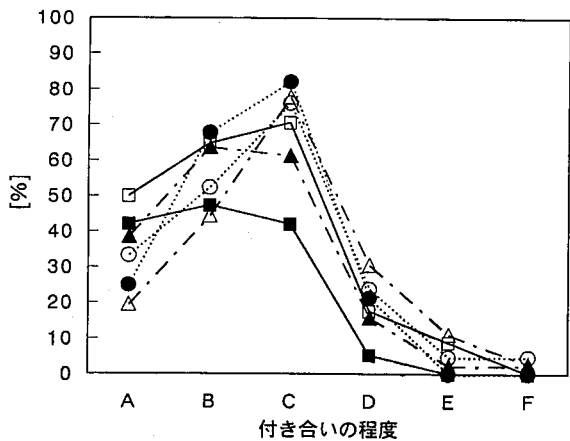


図4-3 (女性→ご主人) / 札幌

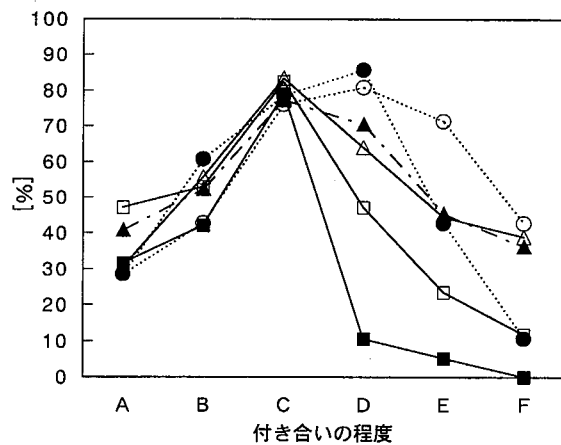
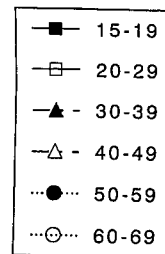


図4-4 (女性→奥さん) / 札幌



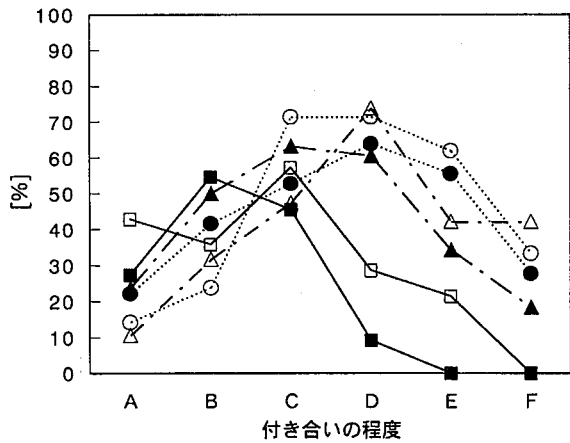


図4-5 (男性→ご主人) / 富良野

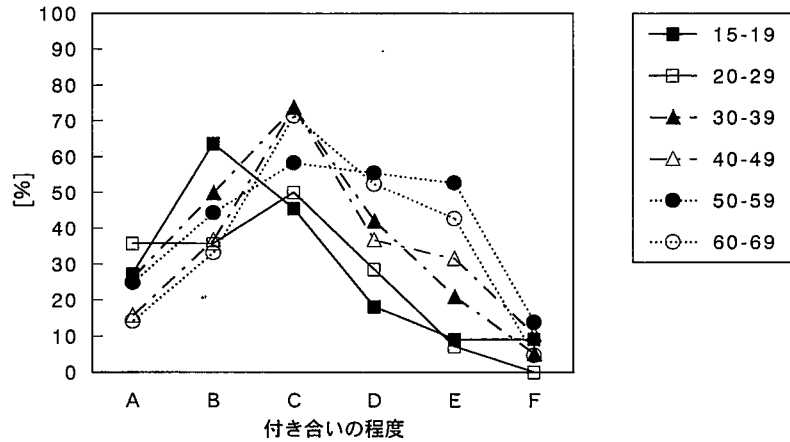


図4-6 (男性→奥さん) / 富良野

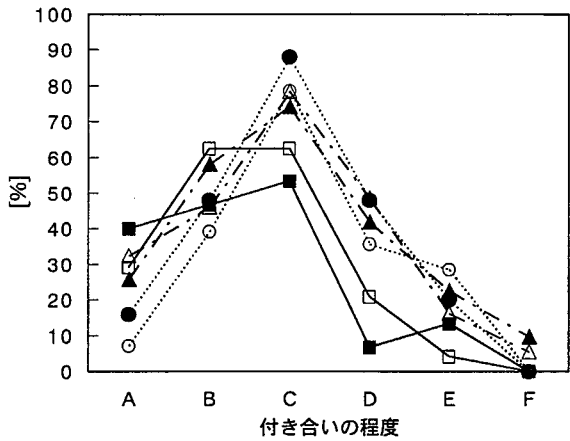


図4-7 (女性→ご主人) / 富良野

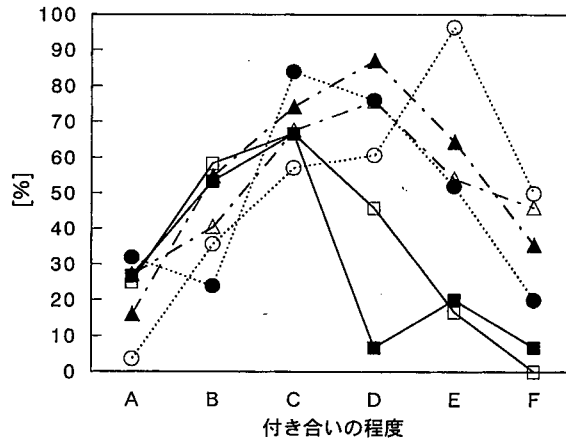


図4-8 (女性→奥さん) / 富良野

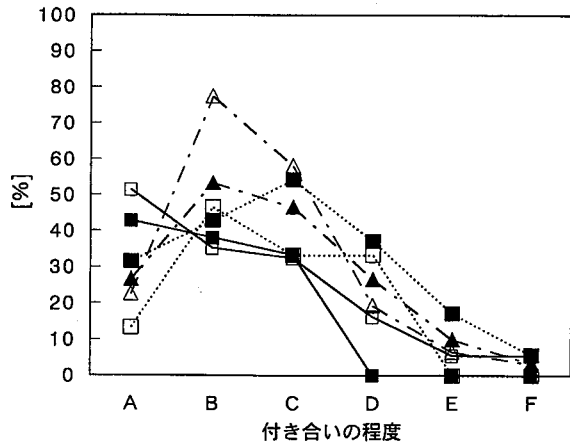


図4-9 (男性→その他の近所の人) /札幌

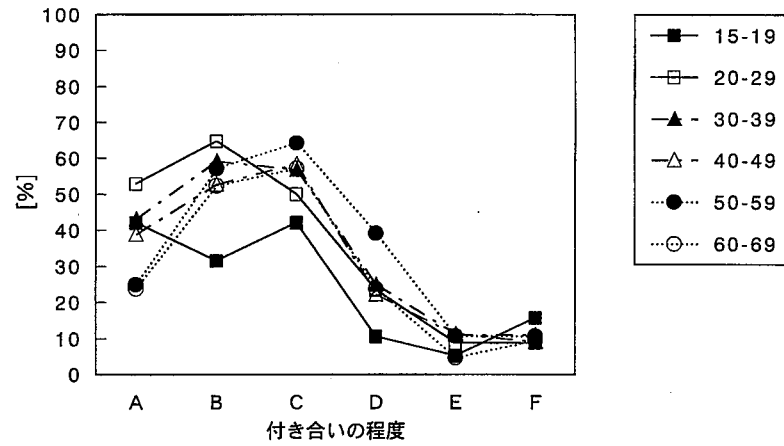


図4-10 (女性→その他の近所の人) /札幌

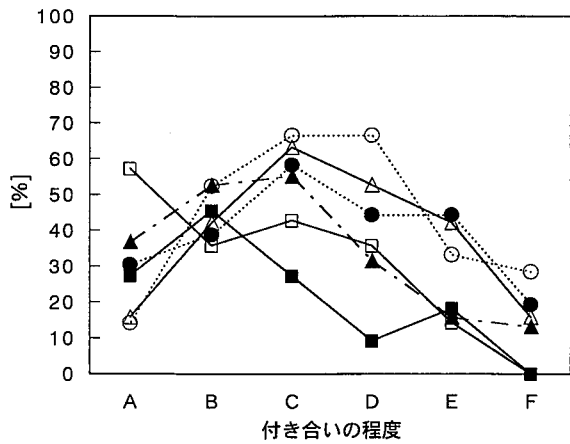


図4-11 (男性→その他の近所の人) /富良野

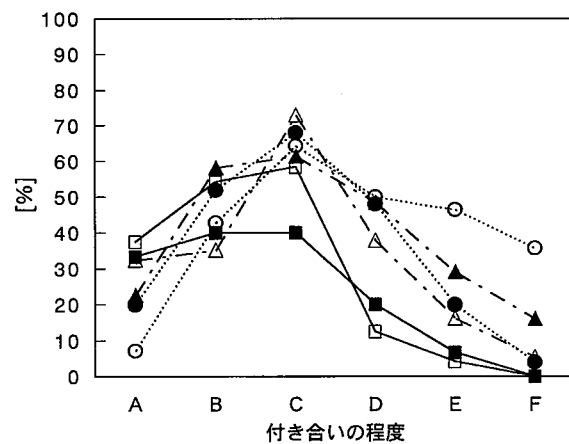


図4-12 (女性→その他の近所の人) /富良野

表4-1 [年齢層×近所付き合いの程度] (地域別) [%]

(男性→ご主人) / 札幌							(男性→ご主人) / 富良野						
	15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69		15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69
A	42.9	51.4	26.7	25.8	28.6	20.0	A	27.3	42.9	23.7	10.5	22.2	14.3
B	23.8	29.7	40.0	64.5	45.7	60.0	B	54.6	35.7	50.0	31.6	41.7	23.8
C	33.3	54.1	56.7	74.2	77.1	53.3	C	45.5	57.1	63.2	47.4	52.8	71.4
D	4.8	13.5	40.0	51.6	45.7	53.3	D	9.1	28.6	60.5	73.7	63.9	71.4
E	0.0	5.4	13.3	22.6	25.7	13.3	E	0.0	21.4	34.2	42.1	55.6	61.9
F	0.0	2.7	3.3	9.7	8.6	0.0	F	0.0	0.0	18.4	42.1	27.8	33.3

(男性→奥さん) / 札幌							(男性→奥さん) / 富良野						
	15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69		15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69
A	23.8	54.1	26.7	25.8	28.6	13.3	A	27.3	35.7	26.3	15.8	25.0	14.3
B	42.9	27.0	40.0	71.0	45.7	46.7	B	63.6	35.7	50.0	36.8	44.4	33.3
C	47.6	51.4	73.3	74.2	74.3	53.3	C	45.5	50.0	73.7	73.7	58.3	71.4
D	9.5	10.8	23.3	48.4	34.3	40.0	D	18.2	28.6	42.1	36.8	55.6	52.4
E	0.0	5.4	13.3	16.1	14.3	0.0	E	9.1	7.1	21.1	31.6	52.8	42.9
F	0.0	2.7	0.0	0.0	2.9	0.0	F	9.1	0.0	5.3	10.5	13.9	4.8

(女性→ご主人) / 札幌							(女性→ご主人) / 富良野						
	15-19	30-39	40-49	50-59	60-69		15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	
A	42.1	50.0	38.6	19.4	25.0	33.3	A	40.0	29.2	25.8	32.4	16.0	7.1
B	47.4	64.7	63.6	44.4	67.9	52.4	B	46.7	62.5	58.1	46.0	48.0	39.3
C	42.1	70.6	61.4	77.8	82.1	76.2	C	53.3	62.5	74.2	78.4	88.0	78.6
D	5.3	17.7	15.9	30.6	21.4	23.8	D	6.7	20.8	41.9	48.7	48.0	35.7
E	0.0	8.8	2.3	11.1	0.0	4.8	E	13.3	4.2	22.6	16.2	20.0	28.6
F	0.0	0.0	2.3	2.8	0.0	4.8	F	0.0	0.0	9.7	5.4	0.0	0.0

(女性→奥さん) / 札幌							(女性→奥さん) / 富良野						
	15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69		15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69
A	31.6	47.1	40.9	30.6	28.6	28.6	A	26.7	25.0	16.1	27.0	32.0	3.6
B	42.1	52.9	52.3	55.6	60.7	42.9	B	53.3	58.3	54.8	40.5	24.0	35.7
C	79.0	82.4	77.3	83.3	78.6	76.2	C	66.7	66.7	74.2	67.6	84.0	57.1
D	10.5	47.1	70.5	63.9	85.7	81.0	D	6.7	45.8	87.1	75.7	76.0	60.7
E	5.3	23.5	45.5	44.4	42.9	71.4	E	20.0	16.7	64.5	54.1	52.0	96.4
F	0.0	11.8	36.4	38.9	10.7	42.9	F	6.7	0.0	35.5	46.0	20.0	50.0

(男性→その他の近所の人) / 札幌							(男性→その他の近所の人) / 富良野						
	15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69		15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69
A	42.9	51.4	26.7	22.6	31.4	13.3	A	27.3	57.1	36.8	15.8	30.6	14.3
B	38.1	35.1	53.3	77.4	42.9	46.7	B	45.5	35.7	52.6	42.1	38.9	52.4
C	33.3	32.4	46.7	58.1	54.3	33.3	C	27.3	42.9	55.3	63.2	58.3	66.7
D	0.0	16.2	26.7	19.4	37.1	33.3	D	9.1	35.7	31.6	52.6	44.4	66.7
E	0.0	5.4	10.0	6.5	17.1	0.0	E	18.2	14.3	15.8	42.1	44.4	33.3
F	0.0	5.4	3.3	3.2	5.7	0.0	F	0.0	0.0	13.2	15.8	19.4	28.6

(女性→その他の近所の人) / 札幌							(女性→その他の近所の人) / 富良野						
	15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69		15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69
A	42.1	52.9	43.2	38.9	25.0	23.8	A	33.3	37.5	22.6	32.4	20.0	7.1
B	31.6	64.7	59.1	52.8	57.1	52.4	B	40.0	54.2	58.1	35.1	52.0	42.9
C	42.1	50.0	56.8	58.3	64.3	57.1	C	40.0	58.3	61.3	73.0	68.0	64.3
D	10.5	23.5	25.0	22.2	39.3	23.8	D	20.0	12.5	48.4	37.8	48.0	50.0
E	5.3	8.8	11.4	11.1	10.7	4.8	E	6.7	4.2	29.0	16.2	20.0	46.4
F	15.8	8.8	9.1	11.1	10.7	9.5	F	0.0	0.0	16.1	5.4	4.0	35.7

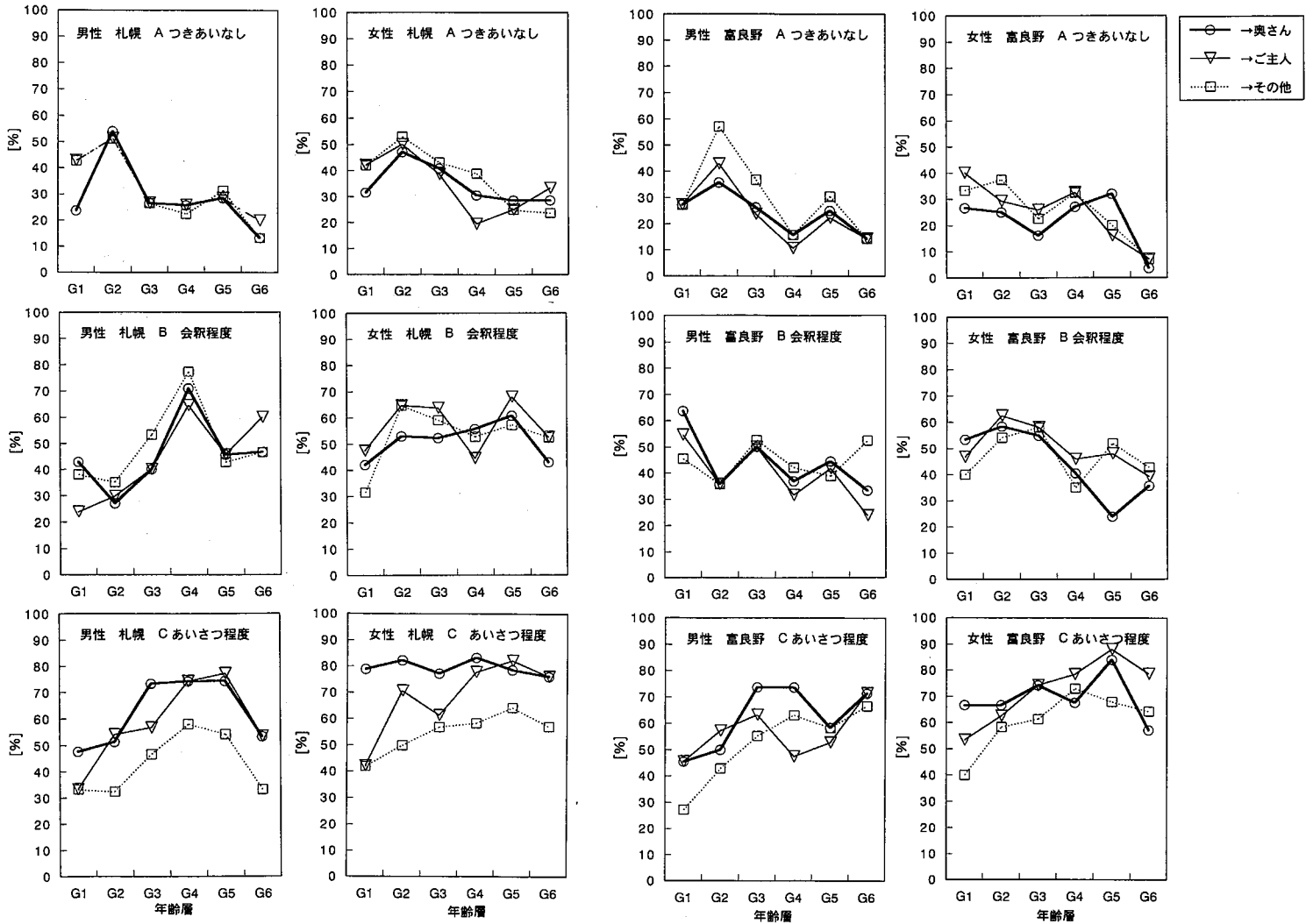


図4-13 (上)

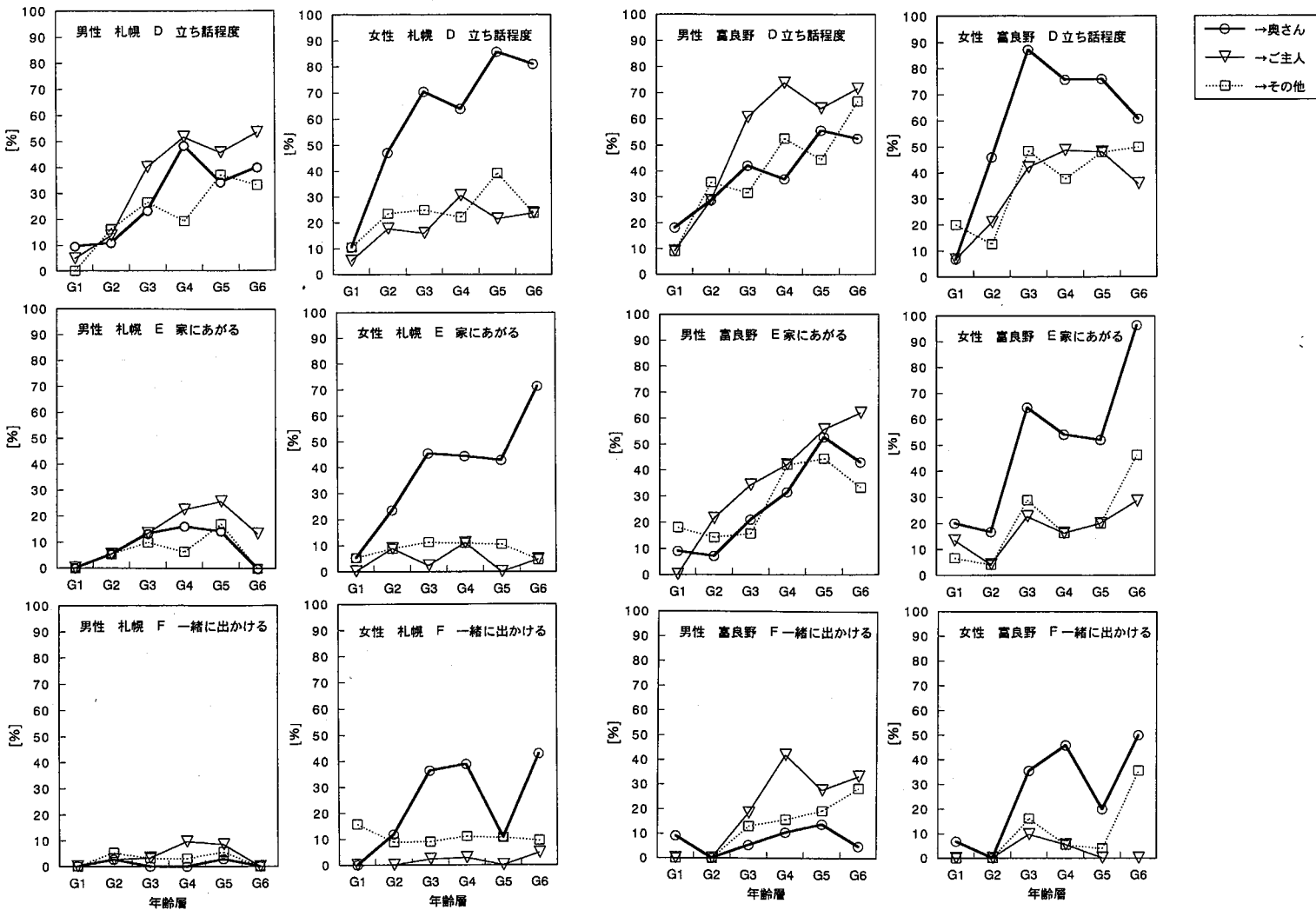


図4-13 (下)

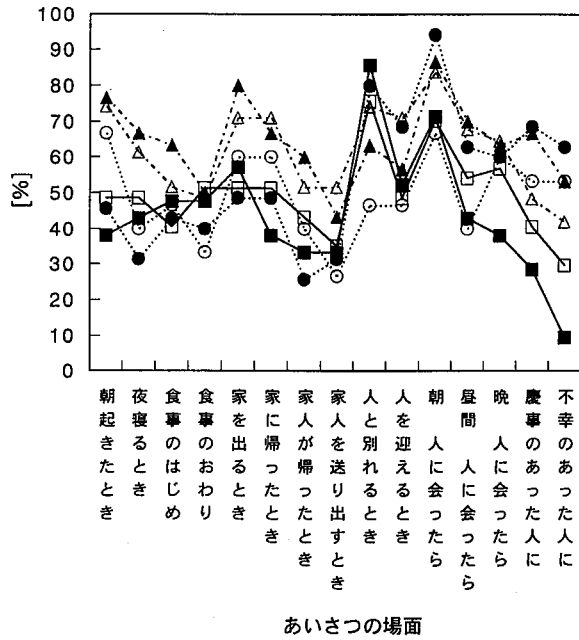


図4-14 決まった言葉で挨拶するか(男) / 札幌

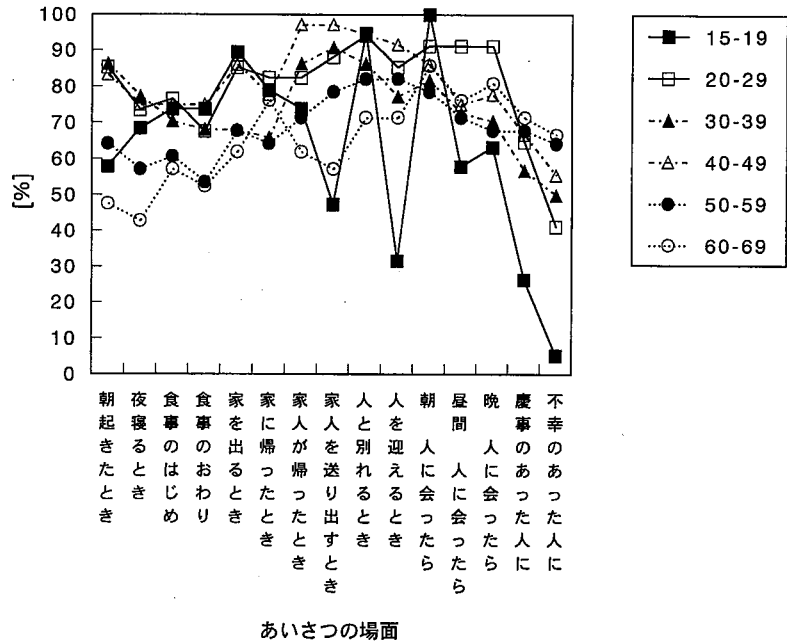


図4-15 決まった言葉で挨拶するか(女) / 札幌

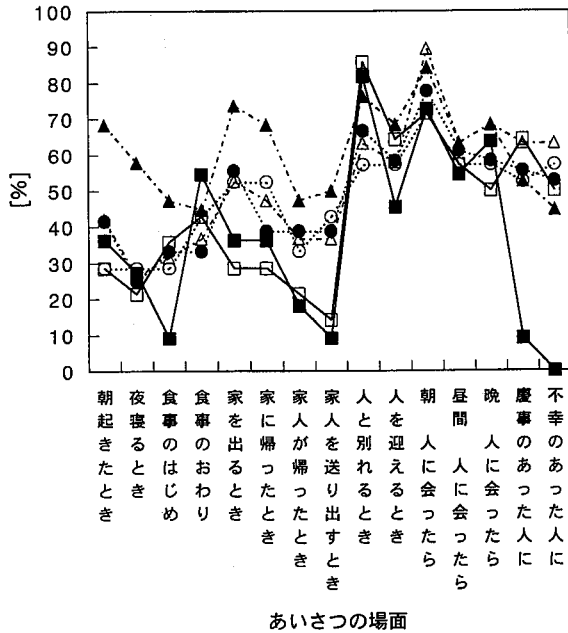


図4-16 決まった言葉で挨拶するか (男) / 富良野

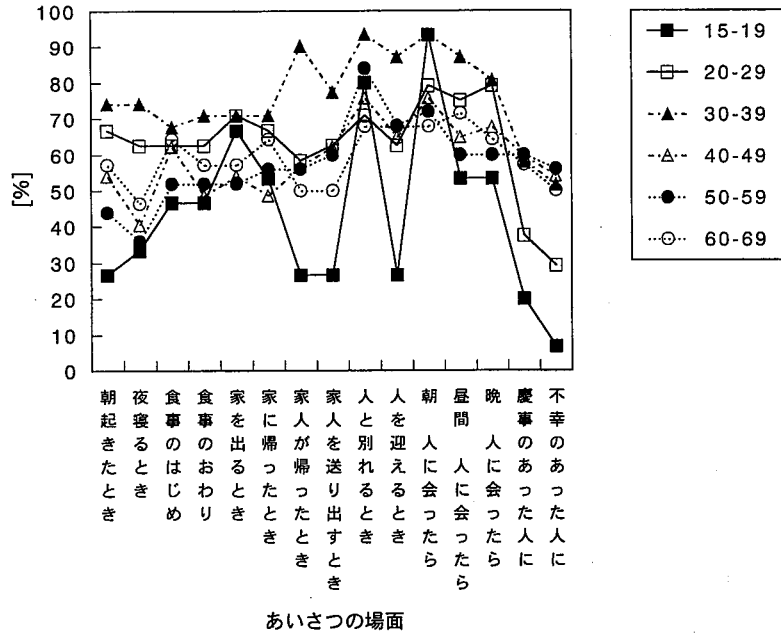


図4-17 決まった言葉で挨拶するか (女) / 富良野

決った言葉の挨拶をするか

CODE	SYM	NAME	TOTAL	1	2	3	4	5
1	1	'アイサツ--アサオキトキ'	98	-0.030	-0.152	0.013	-0.027	0.029
2	2	'アイサツ--ヨルネルトキ'	83	-0.164	-0.083	-0.002	0.017	-0.033
3	3	'アイサツ--ショクシ'ノハジメ'	82	-0.052	-0.019	-0.089	-0.029	0.008
4	4	'アイサツ--ショクシ'ノオワリ'	78	-0.116	0.091	-0.008	0.068	0.008
5	5	'アイサツ--イエラテ'ルトキ'	103	-0.082	-0.058	-0.057	-0.039	0.011
6	6	'アイサツ--イエニカエツトキ'	95	-0.019	-0.086	0.047	-0.005	0.035
7	7	'アイサツ--カシ'ンカ'カエツトキ'	72	-0.153	-0.131	-0.009	0.048	-0.012
8	8	'アイサツ--カシ'ンヲオクリタ'ストキ'	64	-0.103	-0.002	0.065	-0.044	-0.038
9	9	'アイサツ--ヒトワカレルトキ'	123	-0.051	0.217	-0.006	0.013	0.023
10	A	'アイサツ--ヒトヲムカエルトキ'	99	0.050	0.097	0.040	-0.068	0.002
11	B	'アイサツ--アサヒトニアッタ'	136	0.060	0.087	-0.020	-0.012	-0.002
12	C	'アイサツ--ヒルマヒトニアッタ'	99	0.027	0.024	0.029	0.013	-0.070
13	D	'アイサツ--ハ'ンヒトニアッタ'	98	0.048	-0.015	0.041	0.046	0.043
14	E	'アイサツ--ケイシ'ノアツヒトニ'	88	0.208	-0.022	-0.051	0.022	-0.023
15	F	'アイサツ--フコウノアツヒトニ'	72	0.348	-0.095	0.005	0.016	0.003

HORIZONTAL AXIS = 1 (-0.164 - 0.348) VERTICAL AXIS = 2 (-0.152 - 0.217)
 -0.164 -0.036 0.092 0.220 0.348

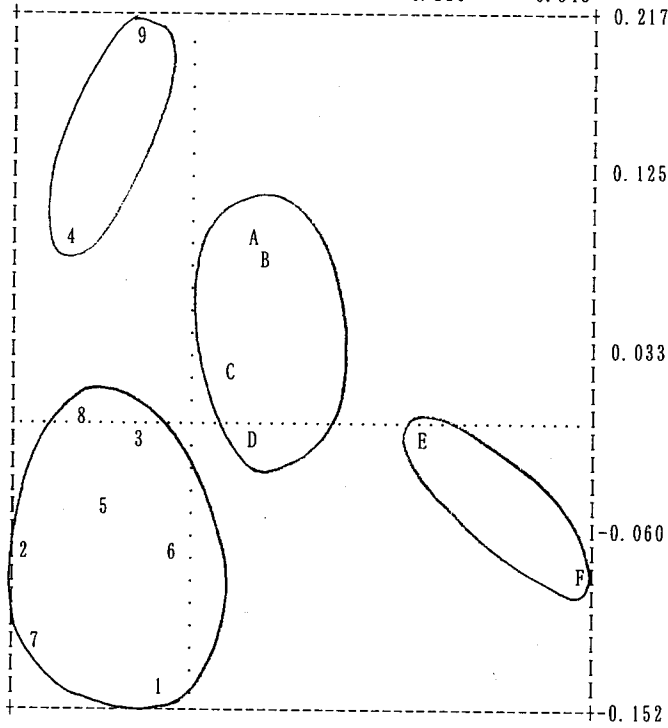


図4-18 決まったことばの挨拶をするか 数量化(男) / 札幌

決った言葉の挨拶をするか

CODE	SYM	NAME	TOTAL	1	2	3	4	5
1	1	'アイサツ--アサオキタトキ'	63	0.125	0.142	0.064	0.077	0.027
2	2	'アイサツ--ヨルネルトキ'	48	0.175	0.212	0.082	-0.060	0.018
3	3	'アイサツ--ショクシ'ノハジ'メ'	48	-0.085	0.092	0.145	-0.006	-0.014
4	4	'アイサツ--ショクシ'ノオワリ'	57	0.163	-0.146	-0.035	-0.083	-0.014
5	5	'アイサツ--イエヲテ'ルトキ'	77	0.020	0.126	-0.049	0.029	-0.028
6	6	'アイサツ--イエニカエツタトキ'	68	-0.068	0.127	-0.042	-0.079	0.024
7	7	'アイサツ--カシ'ンガ'カエツタトキ'	51	-0.043	0.118	-0.026	0.054	-0.025
8	8	'アイサツ--カシ'ンヲオクリタ'ストキ'	52	-0.111	0.211	-0.083	-0.013	-0.045
9	9	'アイサツ--ヒトワカレルトキ'	98	0.109	-0.163	0.057	0.009	-0.028
10	A	'アイサツ--ヒトヲムカエルトキ'	84	-0.007	-0.062	0.036	-0.018	-0.024
11	B	'アイサツ--アサヒトニアツタ'	110	0.019	-0.082	-0.039	0.032	0.023
12	C	'アイサツ--ヒルマヒトニアツタ'	84	0.010	-0.092	-0.032	0.020	-0.015
13	D	'アイサツ--ハ'ンヒトニアツタ'	86	0.066	-0.063	-0.063	0.020	0.026
14	E	'アイサツ--ケイジ'ノアツタヒトニ'	73	-0.235	-0.067	0.067	-0.007	0.015
15	F	'アイサツ--フコウノアツタヒトニ'	67	-0.317	-0.033	-0.022	-0.027	0.016

HORIZONTAL AXIS = 1 (-0.317 - 0.175) VERTICAL AXIS = 2 (-0.163 - 0.212)
 -0.317 -0.194 -0.071 0.052 0.175

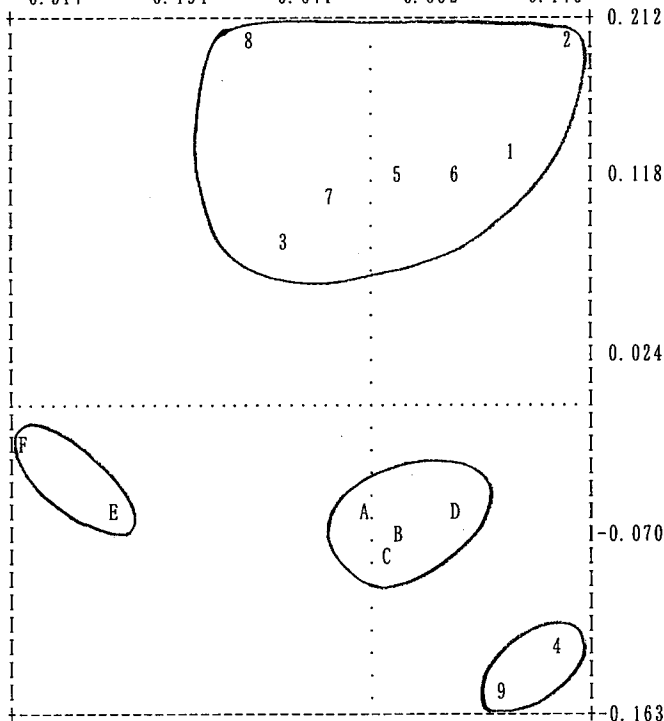


図4-19 決まったことばの挨拶をするか 数量化 (男) / 富良野

決った言葉の挨拶をするか

CODE	SYM	NAME	TOTAL	1	2	3	4	5
1	I	'アイサツ--アサキタキ'	136	0.021	-0.117	0.032	0.023	0.017
2	I	'アイサツ--ヨルネルトキ'	124	0.091	-0.089	-0.006	0.026	0.022
3	I	'アイサツ--ショクシ'ノハン'メ'	127	0.080	0.004	-0.004	0.006	0.019
4	I	'アイサツ--ショクシ'ノオワリ'	120	0.105	-0.013	-0.036	0.002	-0.009
5	I	'アイサツ--イエラテ'ルトキ'	139	0.113	0.039	-0.009	-0.049	0.029
6	I	'アイサツ--イエニカエツタキ'	134	0.059	0.094	0.005	-0.009	-0.001
7	I	'アイサツ--カシ'ンカ'カエツタキ'	148	0.035	-0.057	-0.037	-0.012	-0.004
8	I	'アイサツ--カシ'ンヲオクリタ'ストキ'	148	-0.065	-0.118	0.008	-0.010	0.019
9	I	'アイサツ--ヒトヲカレルトキ'	160	0.077	0.014	-0.020	-0.004	0.042
10	A	'アイサツ--ヒトヲムカエルトキ'	140	-0.158	-0.043	0.022	-0.035	0.019
11	B	'アイサツ--アサヒトニアツタ'	157	0.083	0.087	-0.024	0.024	0.026
12	C	'アイサツ--ヒルマヒトニアツタ'	137	-0.035	0.048	0.062	0.017	0.024
13	D	'アイサツ--ハ'ンヒトニアツタ'	138	-0.016	0.073	0.056	0.005	-0.002
14	E	'アイサツ--ケイシ'ノアツタヒトニ'	110	-0.190	0.055	0.007	-0.010	0.018
15	F	'アイサツ--フコウノアツタヒトニ'	89	-0.350	0.046	-0.079	0.026	0.018

HORIZONTAL AXIS = 1 (-0.350 - 0.113) VERTICAL AXIS = 2 (-0.118 - 0.094)
 -0.350 -0.234 -0.118 -0.003 0.113

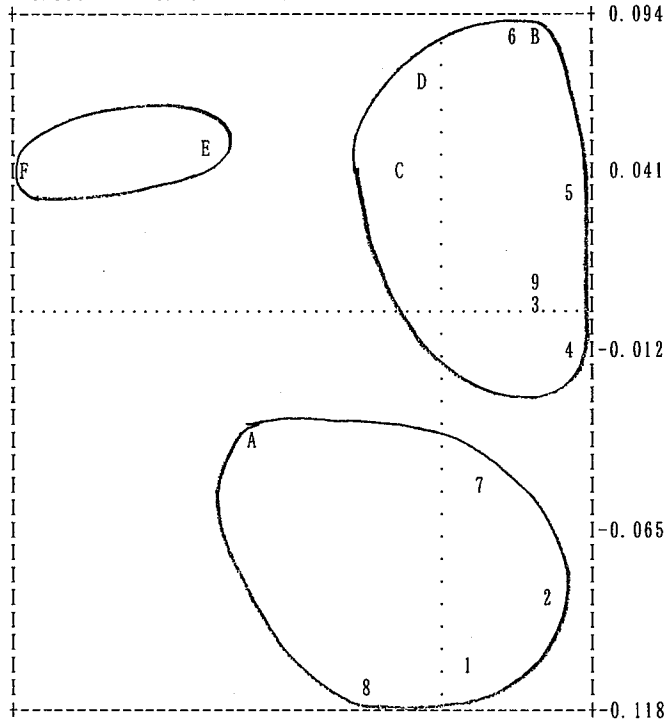


図4-20 決まったことばの挨拶をするか 数量化(女)ノ札幌

決った言葉の挨拶をするか

CODE	SYM	NAME	TOTAL	1	2	3	4	5
1	1	'アイサツ--アサオキタトキ'	90	-0.038	0.115	0.041	0.028	0.004
2	2	'アイサツ--ヨルネルトキ'	80	0.060	0.164	-0.015	-0.016	-0.006
3	3	'アイサツ--ショクシ'ノハジ'メ'	97	0.014	-0.027	0.063	0.032	-0.012
4	4	'アイサツ--ショクシ'ノオワリ'	91	0.058	0.019	0.018	-0.035	0.021
5	5	'アイサツ--イエヲテ'ルトキ'	98	0.156	-0.020	0.016	0.008	0.019
6	6	'アイサツ--イエニカエツトキ'	96	0.082	0.000	0.050	-0.058	0.031
7	7	'アイサツ--カシ'ンガ'カエツトキ'	95	-0.083	0.093	-0.094	-0.012	-0.008
8	8	'アイサツ--カシ'ンヲオカリガ'ストキ'	95	-0.091	0.039	-0.049	0.043	0.046
9	9	'アイサツ--ヒトワカレルトキ'	126	0.068	-0.103	-0.059	-0.014	0.016
10	A	'アイサツ--ヒトヲムカエルトキ'	106	-0.122	0.030	-0.003	-0.028	0.014
11	B	'アイサツ--アサヒトニアツタラ'	127	0.149	-0.081	-0.039	0.017	-0.009
12	C	'アイサツ--ヒルマヒトニアツタラ'	112	0.032	0.023	0.029	-0.006	-0.006
13	D	'アイサツ--ハ'ンヒトニアツタラ'	110	0.042	0.013	0.021	0.044	0.029
14	E	'アイサツ--ケイジ'ノアツタヒトニ'	83	-0.196	-0.098	0.027	-0.004	-0.001
15	F	'アイサツ--フコウノアツタヒトニ'	72	-0.296	-0.094	0.016	-0.006	0.008

HORIZONTAL AXIS = 1 (-0.296 - 0.156) VERTICAL AXIS = 2 (-0.103 - 0.164)

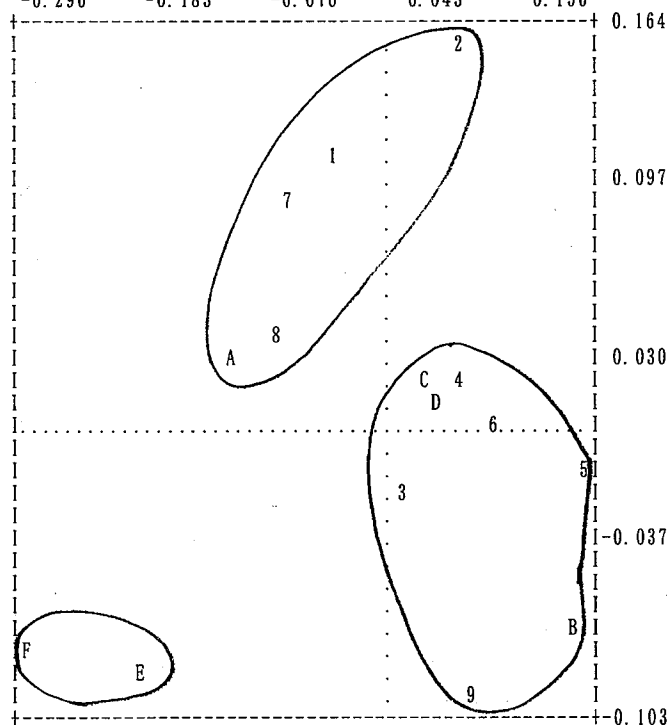


図4-21 決まったことばの挨拶をするか 数量化 (女) / 富良野

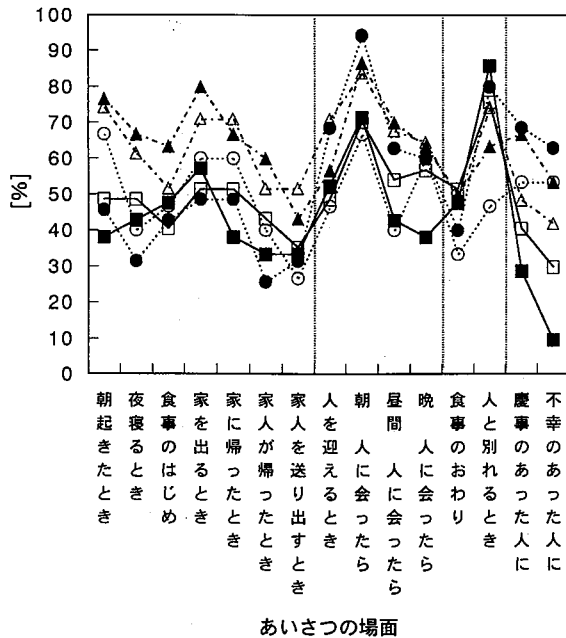


図4-22 決まった言葉で挨拶するか(男)／札幌
(あいさつ場面をクロス集計の数値化により分類)

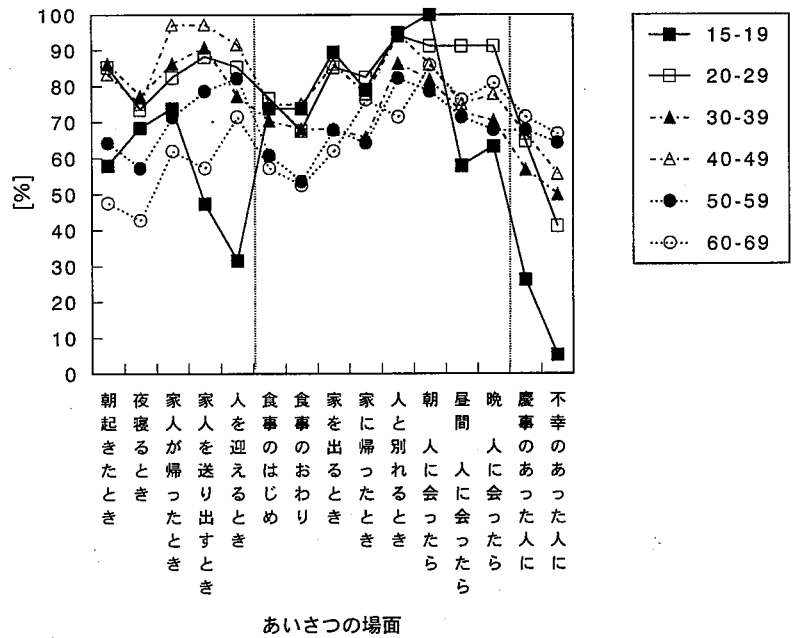


図4-23 決まった言葉で挨拶するか(女)／札幌
(あいさつ場面をクロス集計の数値化により分類)

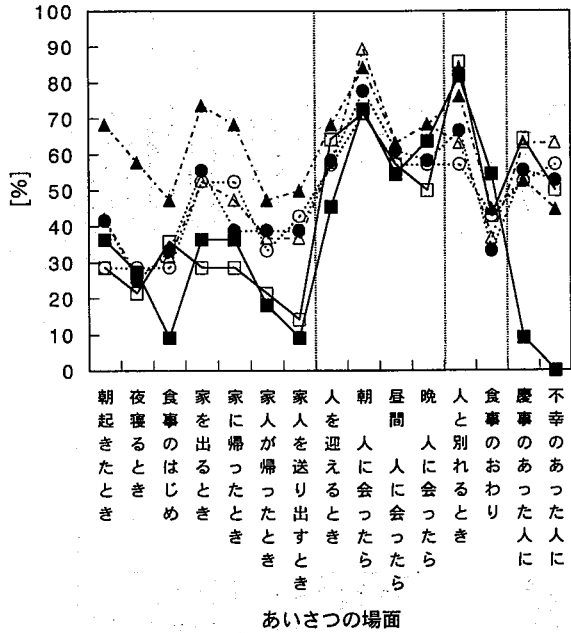


図4-24 決まった言葉で挨拶するか(男)／富良野
(あいさつ場面をクロス集計の数値化により分類)

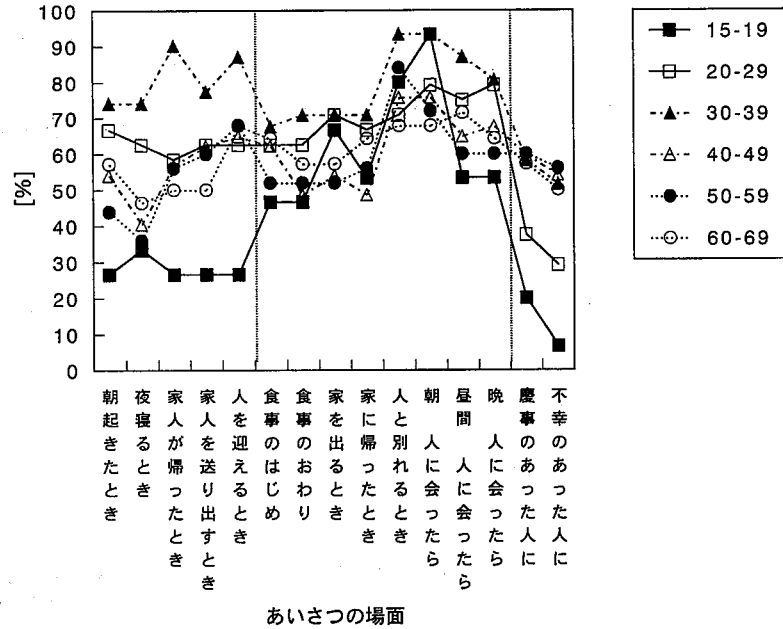


図4-25 決まった言葉で挨拶するか(女)／富良野
(あいさつ場面をクロス集計の数値化により分類)

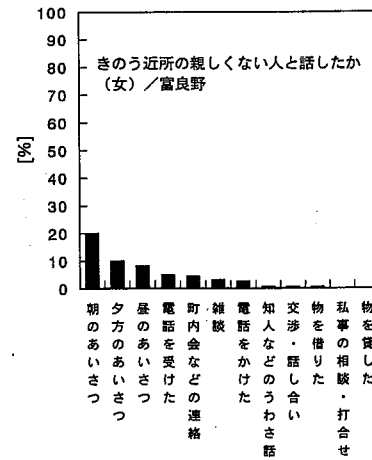
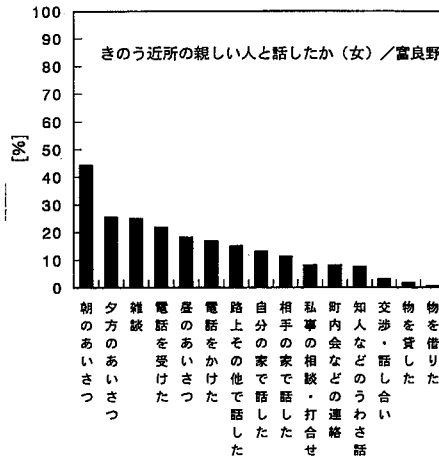
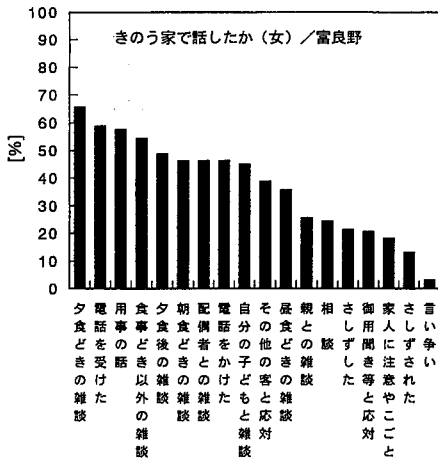
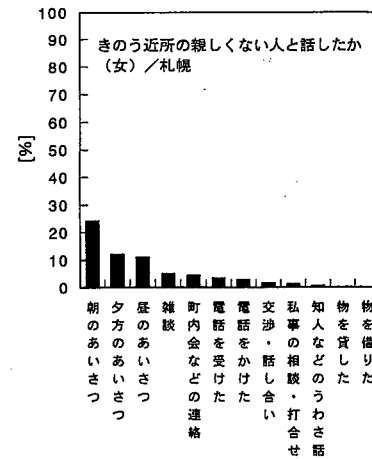
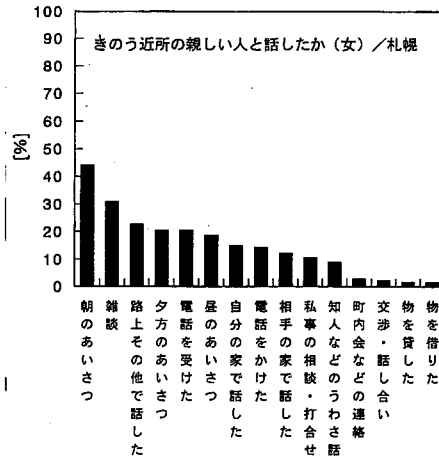
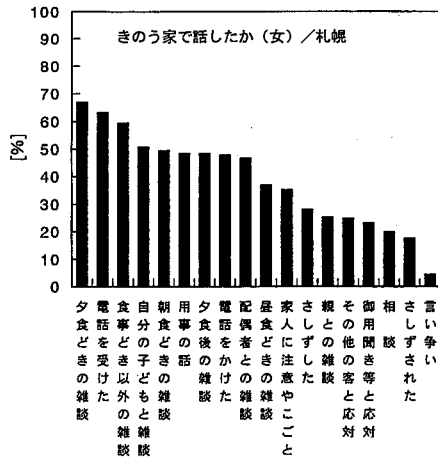


図4-26 (上)

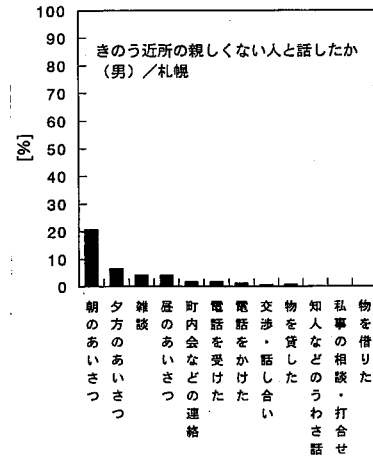
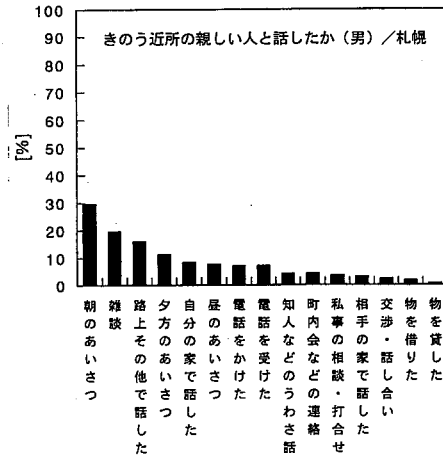
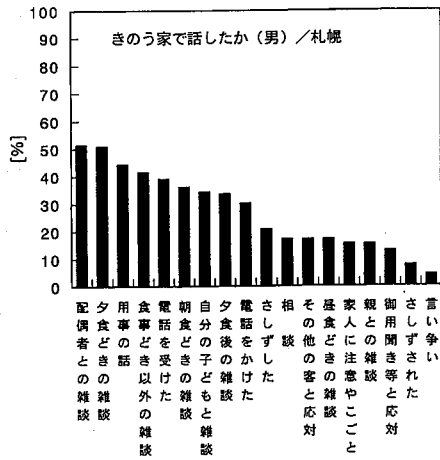
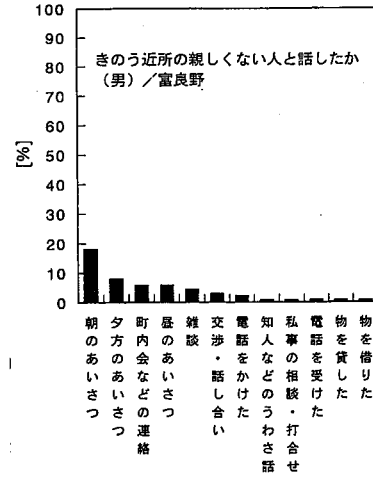
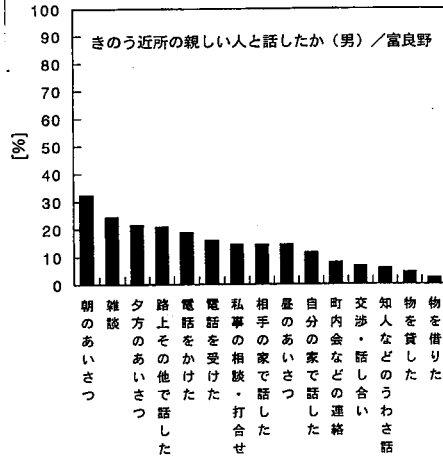
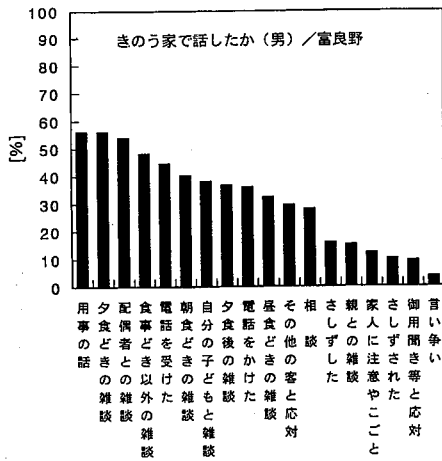


図4-26 (下)

5. 言語行動意識—買物場面について

5. 0. 設問の意図

前回調査にはなかった設問として、富良野と札幌での継続調査（面接）では日常の買物場面での言語行動についての設問を三つ設定した。設問番号 506の A, B, Cがこれで、回答者がふだん近所の小規模な商店で買物をするとき、店の人との間であいさつや雑談などの会話をどの程度しているか、またそれについてどんな意識をもっているかを質問している。

この設問の土台には、住んでいる地域社会の性格によって住民相互の人間関係の疎密はいろいろであって、その程度は具体的な場面における相互的な言語行動の量に現われるのではないか、という仮説がある。より詳しく言えば、都市化の進んだ地域社会では住民相互がさまざまな場面において<疎>の関係での行動をし、都市化の程度の低い地域ではより<親>の行動が現われやすいという相対的な関係を想定し、具体的には、買物場面で客と店員が、買物そのものに直接は関係しないような内容での会話をする機会の少ないのが都市化した地域社会であり、逆にそうした会話の多いのが都市化の進んでいない地域であろうと考えるのである。いうまでもなく札幌を前者に、富良野を後者に仮説的にあてはめ、ふだんの買物場面で客と店員とがどの程度ことばを交わすかという観点から札幌と富良野の地域社会を比較しようとしたのである。

設問においては、場面としての店の種類や買物の種類をできるだけ具体的に指定して回答者間のブレを少なくするのが望ましいことは言うまでもない。しかしながら、「近所の店」がどのように存在するかについては調査地点によってまちまちである。また日常的な買物をどの程度するのか、どのような買物をするのかについても回答者によりいろいろである。そもそも近所の店で日常的な買物はしないというのがふだんの生活である、という回答者もたとえば都会の既婚中年男性サラリーマンなどには多いはずである。残念ながらそうしたより個別的な条件まで考慮に入れられるような項目は今回は調査時間などの制約から断念した。せめては、ということで設問の「ふだんよく利用する店」は都会の大きなスーパーやデパートを除外し、個人の商店や小規模な店で考えてもらうという限定だけを施した。たとえば都会のスーパーでは、客は何も口をきかないで買物を始めて終わることができるしそれが普通の姿であろう、と考え、

そうした場面では設問の意図する情報は得られないと考えたのである。

以下、まず、買物場面を細かく分けたA, B, Cの質問ごとに注目すべき回答結果を指摘していき、最後にそれら全体から抽出できそうなことがらを上に述べた仮説との関連で記述することとする。

5. 1. 客から店員にあいさつをどの程度しているか

設問Aでは、回答者が買物客として店に行って店員に声をかけるとき、「コンニチハ」とか「キョウモ寒イデスネ」などの挨拶をだいたいいつもするかどうかをたずねた。店先に店員がいないとき奥に向かって「コンニチハー」と大声で呼びかける場合は、質問の意図としては除外しており、あいさつとしてのことばかけが客の方からどの程度起こるかをたずねている。

富良野と札幌の調査結果を比較すると、次のような点が注目される。

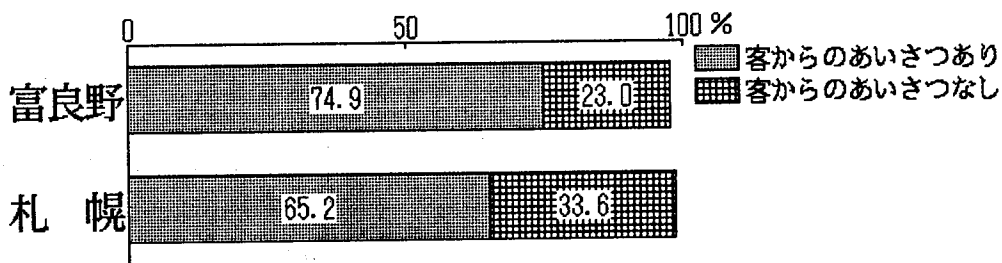


図5-1 客からのあいさつ

図5-1に示すように、回答者全体としては富良野、札幌とも「だいたいあいさつをしてから買物を始める」と答えた回答者（以下この選択肢を選んだ回答者を「客からあいさつあり」と略す）が多数派で、対比すべき選択肢「あいさつなしですぐに買物を始める」を選んだ人（以下「客からあいさつなし」）を大きく上まわっている。こうした中で、「客からあいさつあり」の比率が富良野74.9%、札幌65.2%という差を示している点、これと関連して「客からあいさつあり」と「客からあいさつなし」の差が札幌より富良野で顕著である点が注目される（「その他」・無回答は省略。以下同じ）。

属性別集計のうちでは、年齢層別の結果が注目できる。図5-2、5-3のように、富良野でも札幌でも、年齢が高くなるにつれて「客からあいさつあり」

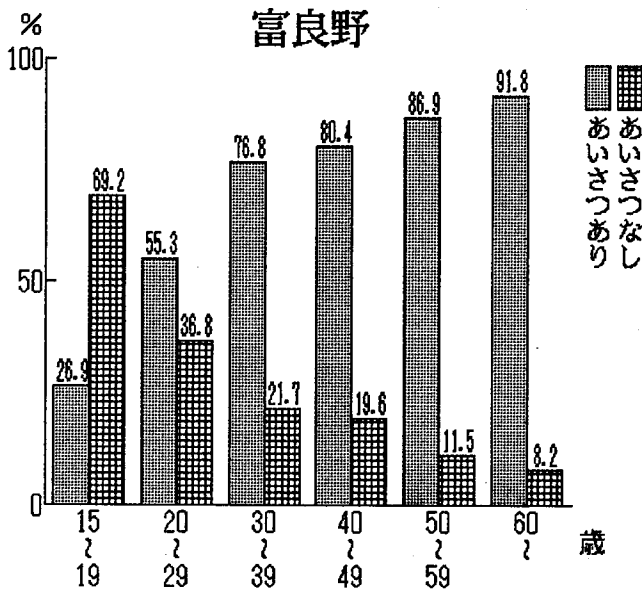


図5-2 客からのあいさつ（年齢別）

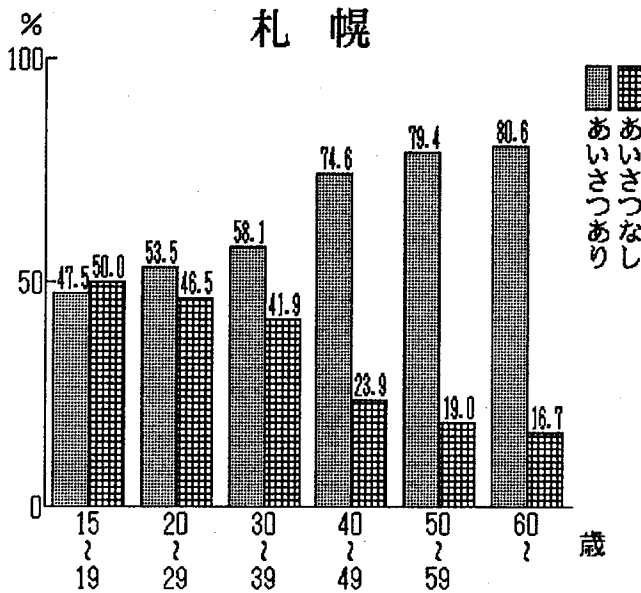


図5-3 客からのあいさつ（年齢別）

の比率が高くなるという特徴がはっきりと指摘できる。しかしながら、回答者全体で指摘した「客からあいさつあり」が「客からあいさつなし」をうわまわるという状況は、全年齢層を通じて見られるのではなく、明確にそれを示すのは富良野では30代以上、札幌では40代以上という中年世代以降であること、逆に若い世代では二つの回答率が接近し、特に10代では両者の比率が逆転していることは注意しなくてはならない。富良野の10代では「客からあいさつなし」が69.2%と圧倒的に多いのである。二つの回答率の差が札幌より富良野で顕著であるという回答者全体での指摘も、中年以降の世代では当てはまるが10代では差の絶対値こそ富良野の方が大きいが中身は逆転していて当てはまらない。

年齢のほかには、職業別集計のうちの学生の数値がほかと比べて特徴的

である。つまり学生以外の職業分類ではすべて「客からあいさつあり」が「客からあいさつなし」をうまわまっているのに対して、学生回答者はその逆で、とくに富良野では「客からあいさつなし」が80.0%と目立って多いのである。これは10代でこちらの選択が多かったことと重なる。

また富良野での居住地域別集計において、比較的新興の住宅地とされる「北の峯」地区で「客からあいさつあり」が他より少なめ（53.8%）であること、これと逆に市街から離れた「麓郷」「山部」両地区ではこれが多め（それぞれ85.0%、86.5%）であることも注意しておいてよいであろう。

性別の集計では富良野と札幌とで二つの選択肢がわずかではあるが男女で逆転した選ばれ方をしている。「客からあいさつあり」は、富良野では男性に、札幌では女性にそれぞれやや多く、地域をこえた性差というものが指摘しにくい。このことは設問Aだけでなく次のBにもあてはまる。今回は残念ながらこれ以上の言及を許すデータがなく、より詳しい調査が必要なところである。

このほかの観点での属性別集計にはとくに顕著な特徴を指摘できない。

5. 2. 店の人は雑談を話しかけてくるか

設問Bでは、店の人が客（回答者）に向けて、買物に直接は関係しない雑談（たとえば天気の話とか身辺の出来事の話など）をしてることが多いかどうかをたずねた。店員の行動を客の立場から見て回答してもらうのである。

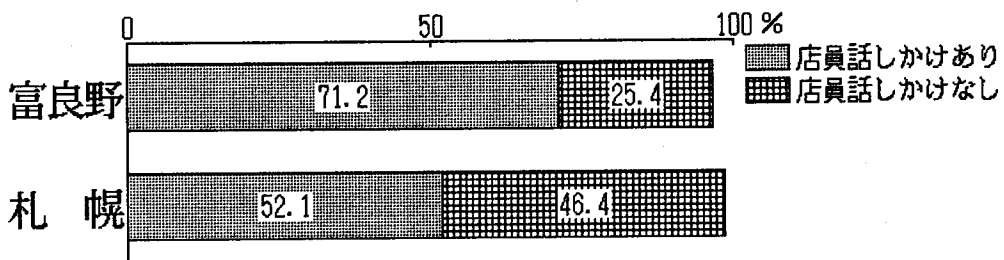


図5-4 店員は話しかけてくるか

集計結果は札幌と富良野とでかなり差のあるものとなった。回答者全体では図5-4のように、「わりあいよく話しかけてくる」と答えた人（以下、「店

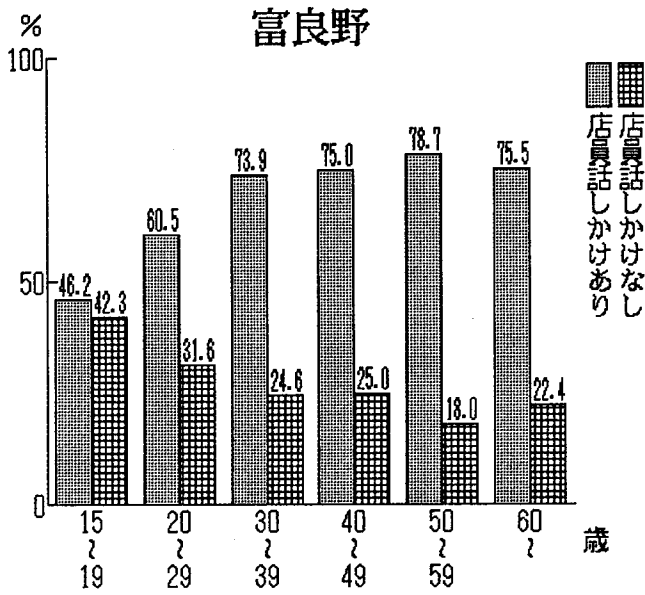


図5-5 店員からの話しかけ（年齢別）

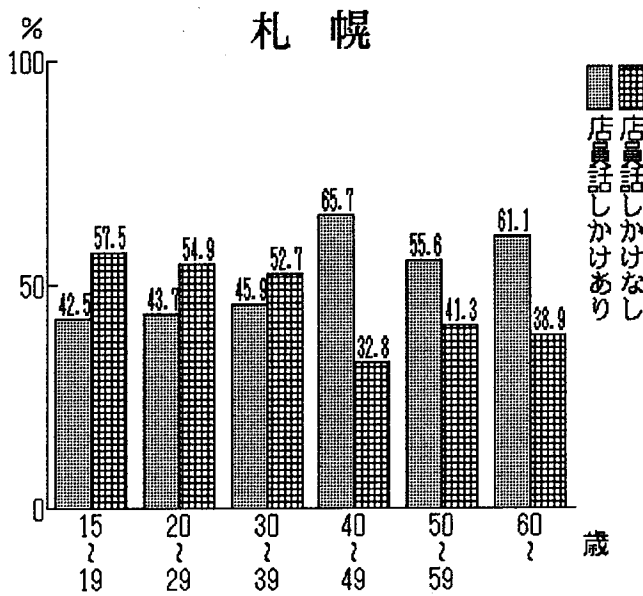


図5-6 店員からの話しかけ（年齢別）

員話しかけあり」と「ほとんど話しかけてこない」と答えた人（以下、「店員話しかけなし」とが、札幌ではほぼ同程度の比率で現われるのに対して、富良野では前者が71.2%、後者が25.4%という差を示している。設問Aで富良野は札幌よりも「客からあいさつあり」の比率が高かったが、店員の行動についての設問Bでも富良野で「店員話しかけあり」が優勢であり、合せてみれば、あいさつや雑談の聞かれる機会は札幌より富良野の方が多ということになる。

もちろん、札幌の回答者全体では「店員話しかけなし」が約半数を占めたとはいえ、図5-5、5-6に見るように、年齢層別の集計では40歳を境にして、若い世代では「店員話しかけなし」が過半数を占めるのに対して、それより上の世代では逆に「店員話しかけあり」が相対的に多いとい

うことは指摘できる。札幌ほどはっきりとしてはいないが富良野でも、30歳を境に両者の比率が変化し、若い層では「店員話しかけなし」が勢力を示す。ただし、それも札幌のように「店員話しかけあり」をうわまわるまでには至らない。

職業別集計で学生が他と異なる回答状況であることは設問Aの場合と同様である。とくに札幌では「店員話しかけなし」が61.5%を占めて全体の傾向から離れている。それほどでないまでも富良野でも「店員話しかけあり」の比率が55.0%ともっとも低く特徴的である。

設問Aで指摘した富良野の「北の峯」地区は、やはり「店員話しかけあり」がもっとも少ない地区である。ただし他との差はわずかである。

このほかの属性別集計に目立った特徴はない。

5. 3. 店員から買物に直接は関係のないことを話しかけられたらどんな感じがするか

設問Bの付属質問として「店員話しかけあり」の回答者だけにたずねたものである。選択肢は「わずらわしいと思うことが多い」「苦にせず対応する。会話を楽しむ方だ」の二つを掲げた。

結果は、富良野、札幌ともに、また年齢層などの属性別集計のいずれにおいても「苦にせず対応する。会話を楽しむ方だ」の回答が圧倒的に多かった（図表は省略）。

これをどのように解釈するかはなお検討を要するが、あるいは、設問Bで「店員話しかけあり」と回答すること自体、すでにそうした店員との会話を苦にしないで会話を楽しむという方向に寄った意識を土台にしているのかもしれない。

5. 4. 買物が終わって店を離れるとき、客として簡単な礼を言うか

設問Cでは、具体的には「アリガトウ」「オ世話サマ」などの謝辞を客の方から言うかどうかをたずねた。店員の方が「毎度アリガトウゴザイマス」「毎度ドウモ」「又オ越シクダサイ」などの謝辞を客に言うのは、いろいろなタイプの買物場面で幅広く観察されるのであるが、客からの謝辞はなんらかの偏り

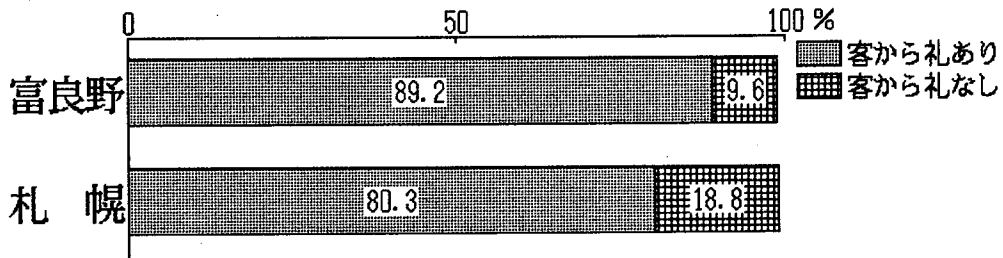


図5-7 客からの簡単な礼

を示すものであり、その一つの側面として今回の設問の前提としたその買物場面の当事者同士の親疎関係との関連もあるのではないかと考えたのである。

結果は図5-7のようになった。回答者全体としては、「ふつうのことで自然に（お礼を）言っている」とした回答者（以下「客から礼あり」）がきわめて優勢で「いつもはあまり言わない」と回答した人（以下「客から礼なし」）を大きくうわまわった。そしてその偏りは、設問A、Bと平行的に札幌よりも富良野で顕著である。富良野では約9割が「客から礼あり」である。

年齢層別の結果も、表5-1のように全ての層で全体の基調を反映しているが、それでもやはり若い層、とくに10代で「客から礼なし」が勢力を強めた数値が観察できる。札幌では半数近くが「客から礼なし」である。学生という集団が同様の傾向を示すのも前問と同様である。

表5-1 「客から礼なし」の比率（年齢層別）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
札幌	47.5	18.3	13.5	14.9	12.7	16.7 %
富良野	23.1	13.2	13.0	7.1	6.6	2.0

このほかには、性別や上で指摘した富良野の地域別集計も含めて、とくに指摘すべき結果は見られない。

5. 5. まとめ

買物場面における言語行動に関する設問の以上のような結果から、仮説として考えたことがらをめぐって富良野と札幌は次のような対比を示すということができると思われる。

ひとくちに言えば、富良野では客と店員の間であいさつや雑談などのことばのやりとりが、札幌に比べていくらかではあるが多めの買物が行なわれている（と意識されている）。設問Aでは「客からあいさつあり」、設問Bでは「店員話しかけあり」、設問Cでは「客から礼あり」の比率がそれぞれ富良野の方で高く現れていたことは、すべて買物場面での言語的やりとりの量が富良野でより豊富であるという解釈を許す。このことは前に掲げた仮説を支持していると言ってよい。つまり、都市化の程度の進んだ地域社会においてはたとえば買物場面における相互的な言語行動が相対的に少ないという＜疎＞の人間関係が観察されやすく、他方、都市化の程度の進んでいない地域社会では客と店員とがあいさつや雑談などをより多くするというような＜親＞の人間関係が優勢であろうという前提をたててみたとき、調査結果からして少なくとも相対的には札幌は前者、富良野は後者の性格をもつと言えることになる。

もちろんここで前提にしている考えは、なおいろいろな方面で具体的に検討されなければならないものである。たとえば社会言語学の領域では国語研1986『社会変化と敬語行動の標準』において、近隣社会におけるあいさつや敬語使用などの言語行動と都市化をはじめとする社会変化との関わりが実態調査をもとにして論じられ、その範囲では上記のような前提をたてることが可能であるという指摘がなされている。本節で扱った今回の質問項目も、そうした検討の一部をなす性格のものであろうが、なお幅広い検討が必要であろう。札幌、富良野で実施した留置調査にはこうした観点から検討すべき言語生活、言語行動にかかわる設問がいくつか含まれている。

このように概括できる札幌と富良野の全体的な回答結果であるのだが、しかし、その内容を少し詳しく見直すと設問ごとに指摘した次のことがらも注意しなくてはならない。

まず、扱った買物場面での言語行動の量が高い年齢層ほど多いという事実は多かれ少なかれ三つの設問場面に共通して、また札幌でも富良野でも指摘できた。このことは、年齢を重ねるにしたがって地域社会のなかで＜親＞の対人的

言語行動をとるようになる、という状況を表現していると言えよう。多くの場合、それぞれの地域社会での生活年数は年齢とともに長くなるであろうから、その社会の構成メンバーとの交際・接触の機会や程度も年齢とともに深まると考えられる。行きつけの店の顔見知りの店員もそれだけ多くなるであろう。そうした状況では、買物場面での言語的やりとりの量も増えるといえると考え。これに対して、富良野、札幌とも言語行動の量が少ないケースが多かった10代～20代の若者は、そのような形での地域社会とのつながりは相対的に薄いと考えられる。学生という集団にもこれと平行的な事情をあてはめてよいであろう。

年齢層による差に関しては、こうした地域社会とのつながりの濃淡ということのほかにも、言語場面における社交的・儀礼的な言語行動への参加の程度や姿勢の差という解釈も可能であろう。きちんとあいさつし、ほどほどの雑談をかわすという、いわゆる交話的 (Phatic) な言語行動を十分にこなすことが社会生活では多かれ少なかれ求められるが、そうした言語行動を自然に、あるいは積極的にする姿勢はやはり20～30代以上の年齢になって身につくものと思われる。上に見た10代の数値に、そうした意味での社会的未成熟というべき状態（具体的には、たとえば買物場面で店の人とあいさつや雑談をかわすことにある種の気はずかしさを感じたりする場合も含まれよう）を読み取ることも可能だと考える。

いま一つ、富良野の地域別集計で、比較的新興の住宅地である「北の峯」地区で言語的なやりとりが比較的少なく、逆に市街地から遠く離れた「山部」や「麓郷」地区でそれが多めの場合があったことについても、年齢について解釈した住民の地域社会への結びつきのありかたや程度との関連をあてはめておきたい。つまり、新興住宅地で住民相互のつきあいの日も浅く結びつきも薄い地域社会では、問題にしたような買物場面での言語的なやりとりも相対的に希薄であろうし、逆に世帯や住民の数も少なく、その出入りも少ない地域では住民がたがいに顔見知りである程度が高く、買物場面といえどもあいさつや雑談の現れる（あるいは求められる）度合いが強いだらうと考える。そうした事情が富良野の地域別集計に姿をのぞかせていると解釈しておきたい。

以上のように、買物場面における言語的やりとりという視点からして、富良野と札幌との間には、都市化の程度との関連での住民相互の言語行動上の親疎関係において総体的な差異が指摘できるとともに、その中に、住民の年齢による幅、地域の性格による幅も同時に指摘できるのである。

このような意識と方言使用の実態との対応を見るために、方言使用の実態を端的に示す一つの材料として図6-2「方言の総合図」を作成してみた。これは1.2.で扱った<1>から<40>までの(<35>、<36>は除く)方言について今回調査の結果を総合し、各地点ごとの平均使用率を地図化したものである(地点ごとの差が顕著に現れるように、他の地図と目盛りのとりかたを変えてあるので注意してほしい)。

さて、図6-1と図6-2を比較してみると、両者の傾向はよく呼応していることがわかる。すなわち、方言の使用率の低かった道央部では標準語意識が高く、逆に、方言の使用率の高かった渡島半島などでは標準語意識は低くなっている。文字通りに解釈すれば、これは、回答者の高校生たちが自分自身の方言使用度を意識の上で明確に把握している結果と解釈できよう。しかし、一方で、このような標準語意識には、全道的に流布していると考えられる北海道方言についての通念、すなわち「札幌あたりのことばは標準語に近いが、海岸部などそれ以外の地域には方言が多い」という既成の言語意識を下敷きにした面もあるのかもしれない。道央部の中でも詳細に見ると、三笠・歌志内・赤平という炭鉱地域は周囲と異なり方言の使用率が高くなっているが、それにもかかわらず標準語意識は札幌と同程度の強さを示している。逆に、遠軽・北見・本別・清水など道東の内陸部の地域は、方言の実際の使用率は道央部と大差がないのに、標準語意識は道央部より低い値を示している。これらの実態と意識のずれの背景には、ひとつにはそのような北海道方言についての通念が潜んでいる可能性がある。

次に、上の質問で少しでも方言を使うと答えた人たちについて、その方言はどこのことばか尋ねてみた(304)。結果には明らかな地域差が現れた。すなわち、図6-3-1と図6-3-2に示す通り、自分の「住んでる土地(町や村)のことば」と答えた人が渡島半島を中心に海岸部に目立ち、「北海道全体のことば」とする者が内陸部に多くなっている。これを図6-1の「いつも標準語で話す」人の分布とあわせて総合的に把握すれば、北海道の高校生たちの方言意識・標準語意識はおよそ次のようにまとめることができよう。

- ①いつも標準語で話す——道央部
- ②北海道全体の方言で話す——内陸部
- ③住んでる土地の方言で話す——渡島半島・海岸部

以上、総合的に見て、高校生たちの方言意識・標準語意識は方言の実態をよく映し出していると言える。今後、全国共通語化がさらに進んでいく過程で、このような意識はどう変化していくのであろうか。おそらく言語の実態と平行して意識の上でも標準語意識が強まってくると予想されるが、それがまた地域差を伴って進行する可能性があるだろう。あるいは、上で少し触れたような道内の方言差についての通念のようなものが生き残るとすれば、意識の上での地域差は遅くまでなくならない可能性もある。今回は、自分ないし自分の住んでいる土地のことばについてしか意識を尋ねていないが、他の地域に対する意識も視野に入れつつ、上のような問題に答えるために今後追跡的な調査を行っていく必要があると考える。

[文献一覧] 著者五十音順

- 相澤正夫1990「北海道における共通語使用意識－富良野・札幌言語調査から－」
(国語研報告101『研究報告集11』)
- 井上史雄1977「道南浜ことばにおける共通語化のパターン分類」(『北海道大学人文科学論集』13)
- 井上史雄1981「北海道内の方言差」(『五十嵐三郎先生古稀祝賀記念論文集 北海道のことば』北海道方言研究会叢書3)
- 井上史雄・荻野綱男1984『新しい日本語・資料図集』(科研費成果報告書)
- 小野米一1983「北海道の《新方言》事象」(井上史雄編『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』科研費成果報告書)
- 小野米一1989「北海道方言の均一化」(『人類科学』41)
- 河崎裕子・井上史雄1983「首都圏の《新方言》」(井上史雄編『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』科研費成果報告書)
- 国立国語研究所1965 国語研報告27『共通語化の過程－北海道における親子三代のことば』秀英出版
- 国立国語研究所1974 国語研報告52『地域社会の言語生活－鶴岡における20年前との比較－』秀英出版
- 国立国語研究所1986 国語研報告86『社会変化と敬語行動の標準』秀英出版
- 小林 隆1996「北海道における共通語化と地域差」(国立国語研究所編『世界の国語研究所－言語問題の多様性をめぐって－』凡人社)
- 佐藤亮一1976「北海道方言の地理的背景－『日本言語地図』第4集について－」
(『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』桜楓社)
- 真田信治1985「社会言語学と方言」(加藤正信編『新しい方言研究 愛蔵版』至文堂)
- 柴田武監修, 馬瀬良雄・佐藤亮一編1985『東京語アクセント資料 上・下』
(科研費「言語の標準化」資料集)
- 北海道方言研究会1978『共通語化の実態－北海道増毛町における3地点全数調査－』(北海道方言研究会叢書1 科研費成果報告書)

V. 調査票・提示リスト

以下に、今回調査の各調査で使用した調査票と提示リストを掲げる。

1. 富良野パネル調査の「面接調査票」（B5判全14ページ）

2. 札幌継続調査の「面接調査票」（B5判全20ページ）

富良野継続調査の面接調査も、基本的な質問項目の内容や配列はこの札幌継続調査の面接調査票とほぼ同様の調査票によった。ただし、札幌と富良野で次のような違いがある（主な点だけ）。

①札幌継続調査で質問した語彙項目のうち、112. タイシタ、113. バクル、114. ワタシガタ、115. マテナは、富良野では質問していない。札幌であらたに追加した項目である。

②札幌継続調査の語彙項目で、主な選択肢語形について

使う 使った 聞く 聞いた 知らない

という補充質問記入欄がある。富良野継続調査では、これらについて、

使う

使った ---- 何歳・いつごろ

聞く ----- 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫]

聞いた ---- 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫]

知らない

という情報も求めた記入欄を設けていたが、札幌で割愛・簡略化した。

③札幌継続調査の700番台、[父祖の出身地・札幌への関心]についての質問項目は、「札幌」を「富良野」に置き換えて富良野でも質問したもののだが、質問順序や質問文に若干の差異があった。

3. 札幌継続調査の留置アンケート調査票。「言語生活調査」。

(A4判全5ページ。ここにはB5判大に縮小して掲げる。)

富良野継続調査でも、原則的にこれと共通の内容の留置アンケートを行った。「札幌」を「富良野」と置き換えるなど最小限の変更は施してある。

4. 高校生調査の調査票。「ことばの調査 質問票」。

(A4判全12ページ。ここにはB5判大に縮小して掲げる。)

学校単位で郵送し、教師を通じて生徒に配付・回収を依頼した。回答は、別紙のマークシートに記入するのを原則としたほか、「その他」の回答など一部は自由記入にもよった。

5. 絵リスト

パネル・継続調査で回答者に提示したもの。絵リストの他に、発音・アクセント項目で文字リストを提示したが、ここでは省略する。

【 1 富良野パネル 面接】

北調（86富良野）

面接調査票
（パネル調査）

調査員氏名

001.氏名

	男・女	No.
--	-----	-----

002.生年月日

大正 年 月 日 → 大正 ____年 ____月 ____日
昭和 年 月 日 → 昭和 ____年 ____月 ____日

003.現住所

富良野市	TEL.()
------	---------

004.本籍※

現住所と同じ	都道府県	区市郡
--------	------	-----

005.調査月日 ____月 ____日

006.開始時刻 午前 ____時 ____分
午後 ____時 ____分

■電池チェック

■録音確認

【調査員メモ欄】 ※住所・本籍などが台帳と異なる場合はそのむねを記入すること

記録簿提出	済	日
整理・確認	済	日
テープ提出	済	日

104.次は魚です。秋になると海から川へ上って来る大きな魚。北海道名産です。

akiazi sake

【リスト】

- akiazi
- | | | | | |
|--------------------------|------|----|----|------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使 | った | —— | 何歳・いつごろ [] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | ┌ | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | いた | | |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | |
- sake
- | | | | | |
|--------------------------|------|----|----|------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使 | った | —— | 何歳・いつごろ [] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | ┌ | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | いた | | |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | |

-* 「ホッチャレ」ということばを使いますか。それはどんな意味ですか。(産卵後の味の落ちたさけ、ますにもいうことがある。また、転じてそのような女)

【リスト】

- hottiyare
- | | | | | |
|--------------------------|------|----|----|------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使 | った | —— | 何歳・いつごろ [] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | ┌ | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | いた | | |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | |

次に、ふだんの生活に関係のある色々なことばについてお尋ねします。

105.《絵》これは何と言いますか。冬寒い時にたくものです。色々種類がありますが、ひっくりめて何と言いますか。

stoobu stoohu

【リスト】

- sutoohu
- | | | | | |
|--------------------------|------|----|----|------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使 | った | —— | 何歳・いつごろ [] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | ┌ | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | いた | | |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | |

-* 《絵》【回答語形】の中をかきまぜるこの棒のことを何と言いますか。

derekki dereki hikakiboo

【リスト】

- derekki
- | | | | | |
|--------------------------|------|----|----|------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使 | った | —— | 何歳・いつごろ [] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | ┌ | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | いた | | |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | |

106. たきぎ(まき)をたいたあとに残る白いものを何と言いますか(燃える前の形をとどめている場合ではなく、完全に燃え尽きた状態のことを尋ねる)。

hai aku

【リスト】

•aku

- 使 う
使った——何歳・いつごろ []
聞 く
聞いた——誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫]
知らない

-* では、たばこの場合は？

hai aku

【リスト】

•aku

- 使 う
使った——何歳・いつごろ []
聞 く
聞いた——誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫]
知らない

107. 冬ひどく寒いことをどうだと言いますか。

sibareru samui

【リスト】

•sibareru

- 使 う
使った——何歳・いつごろ []
聞 く
聞いた——誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫]
知らない

-* 池の水が寒さのために氷になることを水がどうなると言いますか。

sibareru kooru

【リスト】

•sibareru

- 使 う
使った——何歳・いつごろ []
聞 く
聞いた——誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫]
知らない

-** 濡れた手ぬぐいが寒さのためにカチカチになることを手ぬぐいがどうなると言いますか。

sibareru kooru

【リスト】

•sibareru

- 使 う
使った——何歳・いつごろ []
聞 く
聞いた——誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫]
知らない

108. 冷たいことを「ハッコイ」とか「シャッコイ」とか言いますか。

hyakkoi syakkoi

【リスト】

- hyakkoi
- | | | | | |
|--------------------------|------|---|----------------------|---|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使った | — | 何歳・いつごろ |] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | | |
| <input type="checkbox"/> | 聞いた | — | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫 |] |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | |
- syakkoi
- | | | | | |
|--------------------------|------|---|----------------------|---|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使った | — | 何歳・いつごろ |] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | | |
| <input type="checkbox"/> | 聞いた | — | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫 |] |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | |

109. 「手に手袋を……」それから何と言いますか。

haku hameru suru tukeru

【リスト】

- haku
- | | | | | |
|--------------------------|------|---|----------------------|---|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使った | — | 何歳・いつごろ |] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | | |
| <input type="checkbox"/> | 聞いた | — | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫 |] |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | |

110. では、こんどはこちらからひとつひとつことばを出して、その意味や使うことがあるかどうか、などをおたずねします。

疲れた・くたびれたという意味で、「コワイ」とか「コワカッタ」と言いますか。

【リスト】

- kowai
- | | | | | |
|--------------------------|------|---|----------------------|---|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使った | — | 何歳・いつごろ |] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | | |
| <input type="checkbox"/> | 聞いた | — | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫 |] |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | |
- kowakatta
- | | | | | |
|--------------------------|------|---|----------------------|---|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使った | — | 何歳・いつごろ |] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | | |
| <input type="checkbox"/> | 聞いた | — | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫 |] |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | |

-* やはり同じような意味ですが、楽でない・苦勞だという意味で「ユルクナイ」ということばを使いますか。

【リスト】

- yuruku nai
- | | | | | |
|--------------------------|------|---|----------------------|---|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使った | — | 何歳・いつごろ |] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | | |
| <input type="checkbox"/> | 聞いた | — | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫 |] |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | |

111. かわいいという意味で「メンコイ」ということばを使いますか。

【リスト】

- menkoi
- | | | | | |
|--------------------------|---|-----|--------------------------|------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使 | った | —— | 何歳・いつごろ [] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | <input type="checkbox"/> | |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | いた | —— | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 知 | らない | | |

-* 人間についても使いますか。赤ん坊がメンコイというふうに。

【リスト】

- menkoi
- | | | | | |
|--------------------------|---|-----|--------------------------|------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使 | った | —— | 何歳・いつごろ [] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | <input type="checkbox"/> | |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | いた | —— | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 知 | らない | | |

112. 「アシタ」・「アサッテ」その次の日のことを何と言いますか。

siasatte yanoasatte goasatte

113. その次の日は何と言いますか。

siasatte yanoasatte goasatte

114. ごく親しい人に物の値段を尋ねる時、何と言って尋ねますか。
「このマンジュウはひとつ……」それから何と言いますか。

nanbo ikura

【リスト】

- nanbo
- | | | | | |
|--------------------------|---|-----|--------------------------|------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使 | った | —— | 何歳・いつごろ [] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | <input type="checkbox"/> | |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | いた | —— | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 知 | らない | | |

115. あなたが夜8時ごろ、この町の知っている人の家へ用があつて行ったとします。
玄関で何と言って夜のあいさつをしますか。

oban

【リスト】

- obanという語
を含む表現
- | | | | | |
|--------------------------|---|-----|--------------------------|------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使 | った | —— | 何歳・いつごろ [] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | <input type="checkbox"/> | |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | いた | —— | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 知 | らない | | |

では、こんどはこちらからひとつひとつことばを出してお尋ねします。

116. 「ハッチャキニ ナル」とか「ハッチャキ コク」ということばを使うことがありますか。それはどういう意味ですか。 (一生けんめいがんばる)

意味:

【リスト】

- ~ ni naru
- | | | | | | |
|--------------------------|------|----|---------|---|------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | | |
| <input type="checkbox"/> | 使った | —— | 何歳・いつごろ | [|] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | | | |
| <input type="checkbox"/> | 聞いた | —— | 誰のを | [| 祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | | |
- ~ koku
- | | | | | | |
|--------------------------|------|----|---------|---|------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | | |
| <input type="checkbox"/> | 使った | —— | 何歳・いつごろ | [|] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | | | |
| <input type="checkbox"/> | 聞いた | —— | 誰のを | [| 祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | | |

117. 「タナク」とか「タガク」とかいうことばを使うことがありますか。それはどういう意味ですか。 (持ち上げる・運ぶ)

意味:

【リスト】

- tanaku
- | | | | | | |
|--------------------------|------|----|---------|---|------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | | |
| <input type="checkbox"/> | 使った | —— | 何歳・いつごろ | [|] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | | | |
| <input type="checkbox"/> | 聞いた | —— | 誰のを | [| 祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | | |
- tagaku
- | | | | | | |
|--------------------------|------|----|---------|---|------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | | |
| <input type="checkbox"/> | 使った | —— | 何歳・いつごろ | [|] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | | | |
| <input type="checkbox"/> | 聞いた | —— | 誰のを | [| 祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | | |

118. 「アメル」ということばを使うことがありますか。それはどういう意味ですか。 (腐る)

意味:

【リスト】

- ameru
- | | | | | | |
|--------------------------|------|----|---------|---|------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | | |
| <input type="checkbox"/> | 使った | —— | 何歳・いつごろ | [|] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | | | |
| <input type="checkbox"/> | 聞いた | —— | 誰のを | [| 祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | | |

119. 「カテル」ということばを使うことがありますか。それはどういう意味ですか。
(加える・仲間に入れる。その自動詞はkataru〈連れ立つ〉)

意味: _____

【リスト】

• kateru

- 使 う
使った _____ 何歳・いつごろ []
聞 く
聞いた _____ 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫]
知らない

120. 「バクル」ということばを使うことがありますか。それはどういう意味ですか。
(とりかえる・交換する・ずるく交換する)

意味: _____

【リスト】

• bakuru

- 使 う
使った _____ 何歳・いつごろ []
聞 く
聞いた _____ 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫]
知らない

121. 「カッチャク」ということばを使うことがありますか。それはどういう意味ですか。
(ひっかく)

意味: _____

【リスト】

• kattiyaku

- 使 う
使った _____ 何歳・いつごろ []
聞 く
聞いた _____ 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫]
知らない

122. 「アメユキ」とか「アマユキ」ということばを使うことがありますか。それはどういう意味ですか。(みぞれ)

意味: _____

【リスト】

- ameyuki
- | | | | | |
|--------------------------|------|----|--------------------------|------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使 | った | _____ | 何歳・いつごろ [] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | <input type="checkbox"/> | |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | いた | _____ | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | |
- amayuki
- | | | | | |
|--------------------------|------|----|--------------------------|------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使 | った | _____ | 何歳・いつごろ [] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | <input type="checkbox"/> | |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | いた | _____ | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | |

123. 「ホイト」ということばを使うことがありますか。それはどういう意味ですか。(こじき)

意味: _____

【リスト】

- hoito
- | | | | | |
|--------------------------|------|----|--------------------------|------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> | 使 | った | _____ | 何歳・いつごろ [] |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | く | <input type="checkbox"/> | |
| <input type="checkbox"/> | 聞 | いた | _____ | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> | 知らない | | | |

では次に、いろいろな言い回しについてお尋ねします。

124. 「私のうちには電気器具は何でもあるよ」この反対のことを言うとしたら、あなたなら何と言いますか。

- (nanmo nai : nan と nai に注目)

125. 「ああ、そうだよ」この反対のことを言うとしたら、あなたなら何と言いますか。

- (sode nai : de と nai に注目)

<これより、文法の問題へ移行>

301. 「あの人はよく手紙を書く人だ」 この反対のことを言うとしたらどう言いますか。
「あの人は手紙を全然……」あなたならどう言いますか。

~nai

302. 「いそいで手紙書かないっけなんない・書かなきゃならない・書かねばならない」
あなたならどう言いますか。

~naikkenannai ~nakyannaranai ~nebanaranai

303. 「こんなペンではうまく書かさない」 こういうふう「書かさない」という言い
かたをしますか。

【リスト】

- kakasaranai
- | | | | |
|-------------------------------|----|---------|--------------------|
| <input type="checkbox"/> 使 | う | | |
| <input type="checkbox"/> 使った | —— | 何歳・いつごろ | [] |
| <input type="checkbox"/> 聞 | く | | |
| <input type="checkbox"/> 聞いた | —— | 誰のを | [祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> 知らない | | | |

304. 「手紙書く(ん)なら早く書いた方がいい・書く(ん)だら早く書いた方がいい」
どっちを使いますか。

~nara ~dara

305. 「手紙はあの人を書くだろう・あの人を書くべ」ごく親しい人にならどっちを使いま
すか。

~darou ~be

306. 「私は朝6時に起きる」この反対のことを言うとしたら、「私は朝6時には起き…」
それから何と言いますか。

~nai

307. 「さあ起きよう・さあ起きるべ」ごく親しい人にならどっちを使いますか。

~you ~be

308. 「眠くて起きれない・起きられない・起きらんない」どう言いますか。

~renai ~rarena ~rannai

309. 「早く起きろ・早く起きれ・早く起きい」どう言いますか。

~ro ~re ~i

310. 「映画見に行くべ・行こう」ごく親しい人にならどっちを使いますか。

~kube ~kou

311. 「きょうは忙しいから映画は見れない・見られない・見らんない」どう言いますか。

~renai ~rarenai ~rannai

312. 「この新聞読んで見ろ・読んで見れ・読んで見い」どう言いますか。

~ro ~re ~i

313. 「もっと勉強すればいいのに・勉強しればいいのに・勉強すりゃあいいのに・勉強しりゃあいいのに」どう言いますか。

~sureba ~sireba ~suryaa ~siryaa

314. 「もっと勉強せい・勉強しろ・勉強しれ・勉強すれ」どう言いますか。

~sei ~siro ~sire ~sure

315. 「早くこればいいのに・早くくればいいのに・早くこいばいいのに・早くくりゃいいのに」どう言いますか。

~koreba ~kureba ~koiba ~kurya

316. 「子供（弟）に持ってこさすといい・持ってこさせるといい・持ってこらすといい・持ってこらせるといい」どう言いますか。

~kosasu ~kosaseru ~korasu ~koraseru

317. 「あんまりおかしくてどうしても笑わさった」こういうふう「笑わさった」という言い方をしますか。

【リスト】

- warawasatta
- | | | |
|-------------------------------|----|------------------------|
| <input type="checkbox"/> 使 | う | |
| <input type="checkbox"/> 使った | —— | 何歳・いつごろ [] |
| <input type="checkbox"/> 聞 | く | |
| <input type="checkbox"/> 聞いた | —— | 誰のを [祖父母・父母・同世代・子・孫] |
| <input type="checkbox"/> 知らない | | |

318. 「新しい魚だら買う・新しい魚なら買う・新しい魚だば買う」どう言いますか。

~dara ~nara ~daba

319. 「その魚新しいだろう・新しいべ（質問音調）」ごく親しい人にならどっちを使いますか。

~darou ~be

320. 「子供に新しい魚を食べらせよう・食べさせよう・食べらそう・食べさそう」どう言いますか。

~raseyou ~saseyou ~rasou ~sasou

321. 「高いなら買わない・高いば買わない・高いだら買わない」どう言いますか。

~nara ~ba ~dara

401. 前の調査（昭和34年夏）のことを覚えていらっしゃいますか？

- ・覚えている ・忘れた

402. ずっとここにお住まいですか。お生まれは？ そこからすぐこちらへいらっしゃったのですか。

年 齢	居 住 地			理 由
	富 良 野 市	県・市	郡・町	
0歳	現住所			
～				
～				
～				
～				
～				

※5～15歳の居住経歴の複雑な人には、その期間で一番長く居住した地域を尋ねる。

_____ 県 _____ 市郡 _____ 町村

403. 失礼ですが、学校はどこまでおいでになりましたか。

なし 小 高小・新中 旧中・新高 短大 旧高・高専・大学

その他（_____） / 卒・中・在 N.A.

その学校は何市にありましたか。

富良野市 _____ 県 _____ 市町

404. あなたのお仕事は。

【オレンジ・リスト】そのお仕事は、このうちどれに当てはまりますか。

1. 専門的・技術的 2. 管理的 3. 事務 4. 販売 5. 農林・漁業
6. 採鉱・採石 7. 運輸・通信 8. 技能・生産および単純作業
9. 保安 10. サービス 11. 主婦 12. 学生 13. 無職
14. その他（_____） N.A.

405. 【黄リスト】あなたのお父さんの出身地はどちらですか。

- | | | | | | | | |
|------------|-------|----------|-------|---------|-------|--------|------|
| 富良野市 | _____ | 都道
府県 | _____ | 区市
郡 | _____ | 区
町 | D.K. |
| それではお母さんは？ | // | 都道
府県 | _____ | 区市
郡 | _____ | 区
町 | D.K. |
| 父方のおじいさんは？ | // | 都道
府県 | _____ | 区市
郡 | _____ | 区
町 | D.K. |
| 母方のおじいさんは？ | // | 都道
府県 | _____ | 区市
郡 | _____ | 区
町 | D.K. |
| 父方のおばあさんは？ | // | 都道
府県 | _____ | 区市
郡 | _____ | 区
町 | D.K. |
| 母方のおばあさんは？ | // | 都道
府県 | _____ | 区市
郡 | _____ | 区
町 | D.K. |
| 配偶者は？ | なし // | 都道
府県 | _____ | 区市
郡 | _____ | 区
町 | D.K. |

これで終わりです。長い時間ご協力ありがとうございました。

501. 終了時刻 午前 _____ 時 _____ 分
午後 _____ 時 _____ 分

所要時間 = 分

502. 調査全般の被調査者のことば〔調査員判定〕

正しい 共通語	共通語だがどこ となくちがう	共通語が 混ざる	共通語を 話さない	共通語が 通じない
1 →	2 ←	3 →	4 ←	5 →
6 ←	7 →	8		

503. 調査に対する態度
〔調査員判定〕

積極的	ふつう	消極的	拒否的
1	2	3	4

504. その他

- | | | | | |
|----|-----------------|------|-----|---------------|
| -1 | 調査した場所 | 自宅 | 勤務先 | (_____) |
| -2 | // | 部屋の中 | 玄関先 | 店先 (_____) |
| -3 | 同席者 | 本人のみ | 配偶者 | 子ども (_____) |
| -4 | 反応までの時間 | 長いほう | 普通 | 短いほう |
| -5 | 質問に対する
問いかえし | 多いほう | 普通 | 少ないほう |

【 2 札幌継続 面接】

北調 (87札幌)

面 接 調 査 票

調査員

--

001.氏 名

	男・女	No.
--	-----	-----

002.生年月日

大正 年 月 日 → 大正 _____年____月____日
 昭和 年 月 日 → 昭和 _____年____月____日

003.現住所※

札幌市 区	TEL.()
----------------	--------------

004.本 籍※

札幌市	都道府県	区市郡
-----	------	-----

005.調査月日 ____月____日

006.開始時刻 午前____時____分
 午後____時____分

■ 電池チェック

■ 録音確認

【調査員メモ欄】 ※住所・本籍などが台帳と異なる場合は
 そのむねを記入すること

記録簿提出	済
整理・確認	済
テープ提出	済

それでは、ことばのことを順番にうかがっていきます。

ふだんのことばづかいを、自然な調子で聞かせて下さい。

101a. 【絵】最初は食べものの名前です。このいもを何と言いますか。

zyagaimo gosyoimo nidoimo imo bareisyo

■gosyoimo, nidoimoが回答されなければ、下の質問をする。

【白リスト】gosyoimoという言い方について、この中からあてはまるものを選んで下さい。（以下、同様に質問する）

- gosyoimo 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない
- nidoimo 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

101b. それでは、【101aの回答語形】・さといも・さつまいも　のうち、ただ「いも」と言ったらどれのことを指しますか。

ジャガイモ　サトイモ　サツマイモ

102. 【絵】これを何と言いますか。大きな葉が巻いて、玉になる野菜です。

kyabetu kaibetu tamana kanran

■kaibetu が回答されなければ、下の質問をする。【白リスト】

- kaibetu 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

103. 次に、ふだんの生活に関係のある色々なことばについてお尋ねします。

【絵】こういうストーブを見たことがありますか。【ある・ない】

【絵】ストーブの中をかきまぜるこの棒のことを何と言いますか。

derekki dereki hikakiboo

■derekki が回答されなければ、下の質問をする。【白リスト】

- derekki 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

104a. 冬ひどく寒いことをどうだと言いますか。

sibareru samui

■sibareruが回答されなければ、下の質問をする。【白リスト】

•sibareru 使 う 使 った 聞 く 聞 いた 知 らない

104b. 池の水が寒さのために氷になることを水がどうなると言いますか。

sibareru kooru

■sibareruが回答されなければ、下の質問をする。【白リスト】

•sibareru 使 う 使 った 聞 く 聞 いた 知 らない

104c. 濡れた手ぬぐいが寒さのためにカチカチになることを手ぬぐいがどうなると言いますか。

sibareru kooru katikatininaru

■sibareruが回答されなければ、下の質問をする。【白リスト】

•sibareru 使 う 使 った 聞 く 聞 いた 知 らない

105. 「手に手袋を………」それから何と言いますか。

haku hameru suru takeru

■hakuが回答されなければ、下の質問をする。【白リスト】

•haku 使 う 使 った 聞 く 聞 いた 知 らない

では、こんどはこちらからひとつひとつことばを出して、その意味や使うことがあるかどうか、などをお尋ねします。

106. 【白リスト】「疲れた・くたびれた」という意味で、「コワイ」とか「コワカッタ」と言いますか。

• kowai, kowakatta 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

107. 【白リスト】やはり同じような意味ですが、「楽でない・苦労だ」という意味で、「ユルクナイ」ということばを使いますか。

• yurukunai 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

108. 【白リスト】「かわいい」という意味で、「メンコイ」ということばを使いますか。

• menkoi 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

109. 【白リスト】「一生懸命になる」「思いきりがんばる」という意味で、「ハッチャキニナル」とか「ハッチャキコク」ということばを使いますか。

• ~ ni naru 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

• ~ koku 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

110. 【白リスト】「ごはんなど、物が腐る・いたむ」という意味で、「アメル」ということばを使いますか。

• ameru 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

111a. 【白リスト】「仲間に入れる」とか「加える」という意味で、「カテル」ということばを使いますか。

• kateru 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

111b. 【白リスト】同じ意味で「カセル」とか「カゼル」とは言いますか。

• kaseru 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

• kazeru 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

112. 【白リスト】「とても」という意味で、「タイシタ」と言うことがありますか。

たとえば、「とても速く走るね」を「タイシタ速く走るね」と言うような使い方です。

• taisita 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

113. 【白リスト】「交換する」という意味で、「バクル」と言うことがありますか。

• bakuru 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

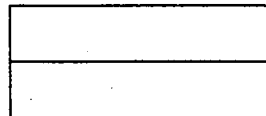
114. 【白リスト】「私達」という意味で、「ワタシガタ」と言うことがありますか。

• watasigata 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

115. 【白リスト】「丁寧な」とか「律義な」という意味で、「マテナ」と言うことがありますか。たとえば、「あの人はマテナ人だ」と言うような使い方です。

• matena 使　う 使った 聞　く 聞いた 知らない

録音確認



これからは、ここに書いてあることばを、ふだん話すときの自然な調子で言ってみてください。教室で教科書を読むような、あらたまった調子でなく、ふつうに言って下さい。

201. 【赤リスト】まず、これです。

○冬の朝などハァーッとやると白くなります。

○つぎは、電車や汽車がとまる所です。

i- ~ e- 息 [] 駅 []

202. 【赤リスト】○煙突の内側などに付く黒い粉で、さわると手がまっ黒になります。

○ごはんに刺身をのせたり海苔をまいて作る食べ物です。

- i ~ - ü 煤 [] 寿司 []

203. 【赤リスト】○草花の花をささえる軸の部分です。

○かなづちで木や板に打ちこみます。

- k- ~ - g - ~ - rj - 茎 [] 釘 []

204. 【赤リスト】○方角のうち、南の反対側です。

○顔のうち、このあたりの部分です。

無声化 北 [] 口 []

205. 【赤リスト】○6年生を卒業するとつぎに入る所です。

○鍬や鎌、のこぎりやかなづちなど、仕事をするときに使うものをひくくめて呼ぶと。

- g - ~ - rj - 中学 [] 道具 []

206. 【赤リスト】○盲腸炎など病気になったとき病院でしてもらいます。

○一家の主（あるじ）のことをどう言いますか。

全体を記録 手術 [] 主人 []

録音確認

207. 【青リスト】ここに書いてあることばを、ふだん話すときの自然な調子で読んで下さい。ふだん話しているような調子でお願いします。

- | | |
|---|---|
| <input type="checkbox"/> 1. ハナモ ハナモ | <input type="checkbox"/> 25. ハナモ ハナモ |
| <input type="checkbox"/> 2. ハナ ハナ | <input type="checkbox"/> 26. ハナ ハナ |
| <input type="checkbox"/> 3. アメモ アメモ | <input type="checkbox"/> 27. ヤマモ ヤマモ |
| <input type="checkbox"/> 4. アメ アメ | <input type="checkbox"/> 28. ヤマ ヤマ |
| <input type="checkbox"/> 5. ニワモ ニワモ | <input type="checkbox"/> 29. イケモ イケモ |
| <input type="checkbox"/> 6. ニワ ニワ | <input type="checkbox"/> 30. イケ イケ |
| <input type="checkbox"/> 7. カキモ カキモ | <input type="checkbox"/> 31. アシモ アシモ |
| <input type="checkbox"/> 8. カキ カキ | <input type="checkbox"/> 32. アシ アシ |
| <input type="checkbox"/> 9. トリモ トリモ | <input type="checkbox"/> 33. イヌモ イヌモ |
| <input type="checkbox"/> 10. トリ トリ | <input type="checkbox"/> 34. イヌ イヌ |
| <input type="checkbox"/> 11. ミズモ ミズモ | <input type="checkbox"/> 35. ミミモ ミミモ |
| <input type="checkbox"/> 12. ミズ ミズ | <input type="checkbox"/> 36. ミミ ミミ |

【リスト次ページへ】====

- | |
|---|
| <input type="checkbox"/> 13. オトモ オトモ |
| <input type="checkbox"/> 14. オト オト |
| <input type="checkbox"/> 15. ウタモ ウタモ |
| <input type="checkbox"/> 16. ウタ ウタ |
| <input type="checkbox"/> 17. ムネモ ムネモ |
| <input type="checkbox"/> 18. ムネ ムネ |
| <input type="checkbox"/> 19. ハシモ ハシモ |
| <input type="checkbox"/> 20. ハシ ハシ |
| <input type="checkbox"/> 21. カミモ カミモ |
| <input type="checkbox"/> 22. カミ カミ |
| <input type="checkbox"/> 23. フユモ フユモ |
| <input type="checkbox"/> 24. フユ フユ |

【リスト次ページへ】====

【リスト次ページへ】====

- | |
|---|
| <input type="checkbox"/> 37. カタモ カタモ |
| <input type="checkbox"/> 38. カタ カタ |
| <input type="checkbox"/> 39. イタモ イタモ |
| <input type="checkbox"/> 40. イタ イタ |
| <input type="checkbox"/> 41. イトモ イトモ |
| <input type="checkbox"/> 42. イト イト |
| <input type="checkbox"/> 43. ハシモ ハシモ |
| <input type="checkbox"/> 44. ハシ ハシ |
| <input type="checkbox"/> 45. ハリモ ハリモ |
| <input type="checkbox"/> 46. ハリ ハリ |
| <input type="checkbox"/> 47. ウミモ ウミモ |
| <input type="checkbox"/> 48. ウミ ウミ |

【リスト次ページへ】====

- 49. アメモ アメモ
- 50. アメ アメ
- 51. マドモ マドモ
- 52. マド マド
- 53. イドモ イドモ
- 54. イド イド
- 55. アキモ アキモ
- 56. アキ アキ
- 57. ハルモ ハルモ
- 58. ハル ハル
- 59. ツルモ ツルモ
- 60. ツル ツル

【リスト次ページへ】====

- 61. ヒガ ヒガ
- 62. タヲ タヲ
- 63. ハタケヲ ハタケヲ
- 64. クスリヲ クスリヲ
- 65. セナカガ セナカガ
- 66. アクビヲ アクビヲ
- 67. テレビヲ テレビヲ
- 68. ナミダヲ ナミダヲ
- 69. スガタガ スガタガ
- 70. カラスガ カラスガ
- 71. ビンボーニ ビンボーニ
- 72. イケバナヲ イケバナヲ

【リスト次ページへ】====

- 73. クジラガ クジラガ

- 74. ウシロヲ ウシロヲ

- 75. オルガンヲ オルガンヲ

- 76. スズランガ スズランガ

- 77. アメリカニ アメリカニ

- 78. ユーバリニ ユーバリニ

- 79. サンジカンモ サンジカンモ

- 80. サトーサンガ サトーサンガ

【リスト次ページへ】====

【質問も次ページに続く】

□ 81. ドングリヲ ドングリヲ

□ 94. アツマリニ アツマリニ

□ 82. ツツジガ ツツジガ

□ 95. カミナリガ カミナリガ

□ 83. チャンネルヲ チャンネルヲ

□ 96. アシオトガ アシオトガ

□ 84. クマガ クマガ

□ 97. ワカレメダ ワカレメダ

□ 85. ニジカイニ ニジカイニ

□ 98. コザカナヲ コザカナヲ

□ 86. クワデ クワデ

□ 99. アツマリガ アツマリガ

□ 87. ココロニ ココロニ

□100. コガタナデ コガタナデ

□ 88. デンシャガ デンシャガ

□101. ワカレメニ ワカレメニ

□ 89. アカイ アカイ

□102. サカナヲ サカナヲ

□ 90. アカイイロ アカイイロ

□103. カタナヲ カタナヲ

□ 91. クロカッタ クロカッタ

=====

□ 92. クロイイロ クロイイロ

■録音はここまできちんと

まわっていたか？

□ 93. ニエンガ ニエンガ

確認



【リスト次ページへ】=====

【これより、文法の問題へ移行】

301. 「手紙はあの人が書くだらう／あの人が書くべ」ごく親しい人にならどっちを使いますか。

～ daroo ～ be

302. 「早く起きろ／早く起きれ／早く起きい」どう言いますか。

～ okiro ～ okire ～ okii

303. 「映画見に行くべ／行こう」ごく親しい人にならどっちを使いますか。

～ ikube ～ ikoo

304. 「きょうは忙しいから映画は見れない／見られない／見らんない」どう言いますか。

～ mirenai ～ mirarenai ～ mirannai

305. 「もっと勉強すればいいのに／勉強しればいいのに／勉強すりゃあいいのに／勉強しりゃあいいのに」どう言いますか。

～ sureba ～ sireba ～ suryaa ～ siryaa

306. 「もっと勉強せい／勉強しろ／勉強しれ／勉強すれ」どう言いますか。

～ sei ～ siro ～ sire ～ sure

307. 「早くこればいいのに／早くくればいいのに／早くこいばいいのに／早くくりゃいいのに」どう言いますか。

～ koreba ～ kureba ～ koiba ～ kuryaa

308a. 【紫リスト】道で会った親しい友だちに、その行き先を尋ねるとき、ふつうどう尋ねますか。

dokoni dokoe dokosa doko

308b. 【紫リスト】では、目上の人（たとえば学校の校長先生など）に出会って、その行き先を尋ねるときはどうか。

dokoni dokoe dokosa doko

309. 【白リスト】「こんなペンではうまく書かさない」こういうふう
「書カサラナイ」という言いかたをしますか。

使 う 使った 聞 く 聞いた 知らない

310. 【白リスト】「あんまりおかしくってどうしても笑わさった」こういうふう
「笑ワサッタ」という言い方をしますか。

使 う 使った 聞 く 聞いた 知らない

311. 【白リスト】相手に念を押して、「行くでしょう」「来るでしょう」というところ
を、「イクシヨ、イクッシヨ、クルシヨ、クルッシヨ」という言い方は
どうか。

使 う——何歳・いつごろから []

使った 聞 く 聞いた 知らない

312. 【白リスト】「さようなら」という意味で、「シタッケ」と言うことがありますか。

使 う——何歳・いつごろから []

使った 聞 く 聞いた 知らない

【語彙・文法への追加質問】

さきほど聞いたことばづかいについて、もう少し教えて下さい。

401. 【茶リスト】冬ひどく寒いことを「シバレル」という言い方は、つぎのうちこのことばだと思えますか。あなたのふだんの感じを知りたいので、むずかしく考えずに選んで下さい。
1. 札幌独特 2. 道央 3. 浜ことば
 4. 北海道全体 5. 東北・北海道
 6. 入植前の故郷 [どこ:]
 7. 全国の共通語 8. このことばを知らない
402. 【茶リスト】「手袋をハク」という言い方はどうですか。
1. 札幌独特 2. 道央 3. 浜ことば
 4. 北海道全体 5. 東北・北海道
 6. 入植前の故郷 [どこ:]
 7. 全国の共通語 8. このことばを知らない
403. 【茶リスト】「うまく書カサラナイ」という言い方はどうですか。
1. 札幌独特 2. 道央 3. 浜ことば
 4. 北海道全体 5. 東北・北海道
 6. 入植前の故郷 [どこ:]
 7. 全国の共通語 8. このことばを知らない
404. 【茶リスト】「あまりおかしくて、どうしても笑わさった」の「笑ワサッタ」という言い方はどうですか。
1. 札幌独特 2. 道央 3. 浜ことば
 4. 北海道全体 5. 東北・北海道
 6. 入植前の故郷 [どこ:]
 7. 全国の共通語 8. このことばを知らない
405. 【茶リスト】「見レ」とか「起キレ」という言い方はどうですか。
1. 札幌独特 2. 道央 3. 浜ことば
 4. 北海道全体 5. 東北・北海道
 6. 入植前の故郷 [どこ:]
 7. 全国の共通語 8. このことばを知らない

【 対人行動 】

501. 【黄リスト】長距離列車の中で隣りの人が話しかけてきた場合のことを考えてみてください。話の内容は、「どこまで行くのか」とか気候の話題とか、世間話の範囲で、特にむずかしい意図はなさそうです。ところで、その人が自分と同性で同じ年かっこうのとき、その相手について、あなたはまずどんなことが気になりますか。

つぎの1～12の中から、もっとも気になるものから順に三つ選んで下さい。その他にもあれば言って下さい。

- 1.年齢（自分より年上か年下か）
- 2.職業など
- 3.社会的地位
- 4.家族構成（結婚しているか、子供は？）
- 5.経済状態
- 6.人柄
- 7.旅行の目的や目的地
- 8.話しかけてきた真意
- 9.出身地や現住所
- 10.政治的あるいは宗教的立場
- 11.趣味
- 12.その他_____

502. 【黄リスト】今と同じ状況で、ただし相手が異性（同じ年かっこう）のとき、その相手について、あなたはどんなことが気になりますか。同じように答えて下さい。

- 1.年齢（自分より年上か年下か）
- 2.職業など
- 3.社会的地位
- 4.家族構成（結婚しているか、子供は？）
- 5.経済状態
- 6.人柄
- 7.旅行の目的や目的地
- 8.話しかけてきた真意
- 9.出身地や現住所
- 10.政治的あるいは宗教的立場
- 11.趣味
- 12.その他_____

503. 家を出てちょっと行ったところで近所の人に出会ったとします。そして「どこへ行くのか」と尋ねられたとします。特に秘密のない普通の場合を考えてほしいのですが、一般にそういう質問をあなたはどのように思いますか。

【黄リスト】以下の1～6の中で、あなたの気持ちに近いものを選んで下さい。

その他であれば、言って下さい。

1. 私事に立ち入る感じで気に入らない
2. 別に気にならない
3. 知人にちょっと声をかけるのは好ましい習慣である
4. 自分たちより年上の人たちのする習慣である
5. 時と場合による
6. その他 _____

504. 【黄リスト】では、そういう質問をされたら、ふつう、あなたはどのような返事をしますか

1. 本当のことではないが、たとえば「ちょっと切手を買いに」などのような具体的な答をする
2. 「ちょっとそこまで」のように、あいまいに答える
3. 率直に目的（地）を答える
4. 時と場合による
5. その他 _____

505. 【黄リスト】では、逆に家の前で近所の人に出会ったときに、あなたのほうから、「どこへ行くのか」（ドチラヘ／ドコカヘオデカケデスカなど）とことばをかけることがありますか。

1. よくある
2. たまにはある
3. あまりない
4. まったくない

506. ふだんよく利用する店（*下注）で買物をするときについて、以下の質問に答えて下さい。

* 「ふだんよく利用する店」—— 都会の大きなスーパーやデパートは除外する。個人の商店や小規模なスーパー風の店で考える。その店の人とある程度のことばのやりとりがあるような店を考えてもらう。

A. 【緑リスト】店の人にあなた（客）から声をかけるとき、「こんにちは」とか「きょうも寒いですね」などの挨拶はだいたいいつもしますか。

1. だいたいいつも挨拶をしてから買物を始める
2. ほとんど挨拶なしですぐに買物を始める

B. 【緑リスト】店の人は、天気の話とか身辺の出来事の話とか、買物に直接は関係のない話を話しかけてくることが多いですか。

1. 割合よく話しかけてくる → SQ. へ
2. ほとんど話しかけてこない

SQ. 【緑リスト】話しかけられた場合、どんな感じがしますか。

1. わずらわしいと思うことが多い
2. 苦にせず対応する。会話を楽しむほうだ

C. 【緑リスト】買物を終わって店を離れるとき、あなた（客）のほうから「どうもありがとう」とか「おせわさま」などの簡単な礼を言うことはふつうにすることですか。

1. ふつうのことで、自然に言っている
2. いつもは、あまり言わない

601. ずっとここにお住まいですか。お生まれは？ そこからすぐこちらへいらっしゃったのですか。（■移住の理由、とくに札幌への理由は聞きもらしのないように！）

年 齢	居 住 地			理 由
	札 幌 市	都道府県	市 郡 町 村	
0～	現住所			
～				
～				
～				
～				
～				

※5～15歳の居住経歴の複雑な人には、この期間で一番長く居住した地域を尋ねる。

_____ 都道府県 _____ 区市郡 _____ 町村

602. 失礼ですが、学校はどこまでおいでになりましたか。

なし 小 高小・新中 旧中・新高 短大 旧高・高専・大学
 その他（ _____ ） / 卒・中・在 N.A.

その学校は何市にありましたか。

札幌市 _____ 都道府県 _____ 区市郡 _____ 町村

603. あなたの今のお仕事は。（できるだけ詳しく）

主婦 学生 無職

【橙リスト】そのお仕事は、このうちどれに当てはまりますか。

1. 専門的・技術的 2. 管理的 3. 事務 4. 販売 5. 農林・漁業
 6. 採鉱・採石 7. 運輸・通信 8. 技能、生産および単純作業
 9. 保安 10. サービス 11. その他 _____

604. 現在、同居しているご家族は全部で（自分を除いて）何人ですか。 _____人
それは、どなたですか。

祖父 祖母 父 母 夫 妻 兄姉（___人） 弟妹（___人）
子供（___人） その他 _____（___人）

605. 【橙リスト】いまの（札幌での）あなたのお住まいは、次のどれですか。

持ち家（一戸建 マンション _____階建の _____階）
社宅・寮（一戸建 集合住宅 _____階建の _____階）
個人で借りている（一戸建 アパート・マンション _____階建の _____階）
下宿 親類の家 その他 _____

606. あなたが現在お住まいの区の区長さんは、どなたですか。

氏名 _____ 聞いたことがある 知らない N.A.

【父祖の出身地・札幌への関心】

701. 【黒リスト】 -1. あなたのお父さんの出身地はどちらですか。

	札幌市	_____	都道府県 _____	区市郡 _____	区町 _____	D.K.
-2. それではお母さんは？	//	_____	都道府県 _____	区市郡 _____	区町 _____	D.K.
-3. 父方のおじいさんは？	//	_____	都道府県 _____	区市郡 _____	区町 _____	D.K.
-4. 父方のおばあさんは？	//	_____	都道府県 _____	区市郡 _____	区町 _____	D.K.
-5. 母方のおじいさんは？	//	_____	都道府県 _____	区市郡 _____	区町 _____	D.K.
-6. 母方のおばあさんは？	//	_____	都道府県 _____	区市郡 _____	区町 _____	D.K.
-7. 配偶者は？	なし	//	都道府県 _____	区市郡 _____	区町 _____	D.K.

702. 札幌へはだれの代のときに移り住んで来られたのですか。

自分自身 父母 祖父母 曾祖父母 その他 _____ D.K.

703a. あなたにとって、^{7ル外}故郷はどちらですか。

_____都道府県_____区市郡_____町村

N.A.

703b. 【黒リスト】そこを、^{7ル外}故郷と思う理由はどれですか。

1. 自分が生まれ育った所だから
2. 自分が一番長く住んだ所だから
3. 一番思い出深い所だから
4. 家族が今住んでいる所だから
5. 先祖がいた所だから
6. 先祖の墓がある所だから
7. その他_____

N.A.

■ 以下 704～709 は、703aで札幌以外の地名や地方名を答えた場合だけ質問する。

704. その^{7ル外}故郷へは行ったことがありますか。どれくらいの頻度で（回数）行きますか。

1. 住んだことも行ったこともない
2. 以前住んでいたが、離れて以後は一度も行ったことがない
3. ほとんど行かないが、これまでに_____回くらいは行った
4. 一年に_____回くらいは行く
5. 最近引っ越してきたばかりだ
6. その他_____

N.A.

705. その^{7ル外}故郷には、今どんな人がいますか。

1. 親類・知人 2. 家族 3. いない 4. はっきりしない N.A.

1. のみ SQ. へ

→ SQ. 【黒リスト】どんな付き合いをしていますか。

1. 年賀状のやりとりくらいだけ
2. 冠婚葬祭だけの行き来をする程度
3. 冠婚葬祭の他にも行き来をする
4. かなり親しく付合っている。
5. その他_____

N.A.

706. テレビや新聞でその故郷^{7ルサ}のことが出てきたようなとき、懐かしく思ったり、興味をもって見るほうですか。

1. そうだ 2. 興味はわからない 3. どちらともいえない N.A.

707. 甲子園の高校野球で故郷^{7ルサ}の高校が出場したとき、その高校を応援したくなりますか。

1. なる 2. ならない 3. どちらともいえない 4. 野球に興味がない N.A.

708. その地方のことば（関西弁、九州弁など、ゆるやかに聞く）を乗物とかテレビなどで耳にすると、なんとなく懐かしい気持ちになったりすることがありますか。

1. ある 2. なることもある 3. あまりない 4. むしろいやだ
5. その地方のことばを知らない N.A.

709. できることなら、いつかその故郷^{7ルサ}へ帰って暮らしたいと思いますか。

1. 思う 2. 思わない 3. 考えたことがない 4. わからない N.A.

■最後です。全員に質問して下さい。

710. 【黒リスト】あなた御自身のことを考えた場合、どの程度札幌人だと思いますか。

1. 完全な札幌人だと思っている
2. かなり完全に近い札幌人だと思っている
3. 半分程度は、札幌人になっていると思う
4. 少しは、札幌人になっていると思う
5. 札幌人だとは全然思っていない

<<<<<これで終わりです。長い時間ご協力ありがとうございました。>>>>>

801. 終了時刻 午後 _____ 時 _____ 分

所要時間 =

分

901. 調査全般の被調査者のことば〔調査員判定〕

正しい 共通語 1 →	共通語だがどこ となくちがう 2 ←	共通語が 混ざる 3 →	共通語が 混ざる 4 ←	共通語を 話さない 5 →	共通語を 話さない 6 ←	共通語が 通じない 7 ←	共通語が 通じない 8
-------------------	--------------------------	--------------------	--------------------	---------------------	---------------------	---------------------	-------------------

902. 調査に対する態度
〔調査員判定〕

積極的 1	ふつう 2	消極的 3	拒否的 4
----------	----------	----------	----------

903. その他

- 1 調査した場所 自宅 勤務先 ()
- 2 // 部屋の中 玄関先 店先 ()
- 3 同席者 本人のみ 配偶者 子ども ()
- 4 反応までの時間 長いほう 普通 短いほう
- 5 質問に対する
 問いかえし 多いほう 普通 少ないほう

メモ欄

【 3 札幌継続 留置】

北調07

言語生活調査

No.

ふだんの生活の中で使っておられることばやことばに対するお考えをお尋ねします。あまりむずかしく考えないでお答えください。

1. あなたは、きのう、どんなことをしましたか。つぎの中から思い出して、きのう1日にしたこと 全てに○印を付けてください。

【家で話をしましたか】

- 1 相談 2 言い争い 3 家人に注意やことごと 4 用事の話 5 さしずした 6 さしずされた
7 御用聞き・集金人・セールスマン等と応対 8 その他のお客と応対
1 朝食ときの雑談 2 昼食ときの雑談 3 夕食ときの雑談 4 夕食後のお茶や夜食ときの雑談
5 食事とき以外の雑談
1 配偶者との雑談 2 親との雑談 3 自分の子どもとの雑談
1 電話をかけた 2 電話を受けた

【近所の親しい人と話をしましたか】

- 1 雑談 2 知人などのうわさ話 3 私事の相談・打ち合わせ 4 町内会・自治会などの連絡
5 交渉・話し合い
1 相手の家で話した 2 自分の家で話した 3 路上その他で話した
1 朝のあいさつ 2 昼のあいさつ 3 夕方のあいさつ
1 電話をかけた 2 電話を受けた
1 物を貸した 2 物を借りた

【近所のあまり親しくない人と話をしましたか】

- 1 雑談 2 知人などのうわさ話 3 私事の相談・打ち合わせ 4 町内会・自治会などの連絡
5 交渉・話し合い
1 朝のあいさつ 2 昼のあいさつ 3 夕方のあいさつ
1 電話をかけた 2 電話を受けた
1 物を貸した 2 物を借りた

【職場や学校で話をしましたか】

- 1 先生や上役の人と 2 先輩や上級生と 3 友だちや同僚と 4 部下や下級生と 5 客と
6 あまり心安くない人と 7 はじめての人と 8 サークル・クラブの人と
1 質問 2 私事の相談・打ち合わせ 3 仕事の相談・打ち合わせ 4 交渉・話し合い 5 会議
6 さしずした 7 さしずされた 8 雑談
1 電話をかけた 2 電話を受けた

【レストラン・喫茶店などで話しましたか】

- 1 目上の人と 2 目下の人と 3 同年配の人と 4 家族と 5 親しい人と
6 あまり親しくない人と 7 職場の人と 8 近所の人と 9 サークルの友人と

【自動車やバスの中で話しましたか】

- 1 目上の人と 2 目下の人と 3 同年配の人と 4 家族と 5 親しい人と
6 あまり親しくない人と 7 職場の人と 8 近所の人と 9 サークルの友人と

【その他の場所で話しましたか】

- 1 買い物で店の人と 2 連れと歩きながら 3 受付や窓口で 4 待合室で 5 医者や看護婦と
6 旅行者・観光客と 7 大勢の人の前で
1 道などを教えた 2 道などを尋ねた
1 立ち話 2 人の家を訪ねた 3 酒を飲みながら

【聞きましたか】

- 1 ラジオ 2 テレビ 3 ビデオ 4 宣伝カーの放送 5 その他の街頭放送 6 外国語
1 演説 2 講義・訓話・説教 3 駅などの案内・お知らせ 4 放送のニュース 5 注意やことごと

【読みましたか】

- 1 新聞 2 週刊誌 3 その他の雑誌 4 教科書・参考書 5 辞書 6 外国語 7 小説 8 漫画
9 その他の本 10 テレビの字幕
1 はがき・手紙 2 書類 3 掲示 4 回覧板 5 広告のチラシ 6 ポスター 7 看板

【書きましたか】

- 1 日記 2 はがき 3 手紙 4 ポスター・掲示板 5 職場での書き物 6 署名 7 その他の文章
1 伝票 2 帳簿 3 家計簿 4 メモ 5 ノート 6 届・申し込みその他の書類
<筆記具?>→ 1 万年筆で 2 ボールペンで 3 シャープペンシルで 4 鉛筆で 5 毛筆で
6 ワードプロで

2. あなたは、次の場合に例えば「おはよう」「いただきます」のような、決まったことばで、あいさつしますか。するものを全てに○印を付けてください。

- 1 朝起きたとき 2 夜寝るとき 3 食事のはじめ 4 食事のおわり 5 家を出るとき
6 家に帰ったとき 7 家人の誰かが帰ってきたとき 8 家人を送り出すとき
9 人と別れるとき 10 人を迎えるとき
1 朝のうち、人に会ったとき 2 昼間、人に会ったとき 3 晩、人に会ったとき
1 おめでたのあった人に会ったとき 2 不幸のあった人に会ったとき

3. 「標準語で話すと言の真実味が少ない」という人がいます。あなたは、この意見に賛成ですか。

- 1 まったく賛成である 2 どちらかといえば賛成である
3 どちらかといえば反対である 4 まったく反対である

4. 「方言まるだしでも話を通じればよい」という人がいます。あなたは、この意見に賛成ですか。

- 1 まったく賛成である 2 どちらかといえば賛成である
3 どちらかといえば反対である 4 まったく反対である

8. 家族の人を除いて、以下の人たちのなかで、あなたがつき合いをもっとも大切に思っている人に◎印を、その次に大切に思っている人に○印を付けてください。

- 1親戚 2近所の人 3職場や学校の人
4趣味の仲間 5その他 _____

9. 友だちに、たとえばニュースで聞いた事件について意見を求められたとします。自分の考えは漠然とながら一応あるし、またそれは、自分や相手、また他人に利害が及ぶとは思えない内容とします。またその友だちがどう考えているか不明とします。そんなとき、あなたはどのように思いますか。最も当てはまるものに○印を付けてください。

- 1率直に自分の考えを述べる
2とりあえずはあいまいに答えておき、相手の考えを聞きそれと対比しながら、だんだんに自分の考えをまとめていく
3時と場合による

10. 人とのつき合い方では、あなたはどちらが望ましいと思いますか。

- 1何でも相談したり助けあえるつき合い 2お互いのことに深入りしないつき合い

11. あなた自身がふだん話しておられることばのことについてお尋ねします。最もよく当てはまると思うものに○印を付けてください。

- 1 他人と話をするとき、自分のことばが気になるほうですか。

- 1非常に気になる 2少し気になる 3あまり気にならない 4全然気にならない

- 2 では反対に、相手の人のことば使いが気になりますか。

- 1非常に気になる 2少し気になる 3あまり気にならない 4全然気にならない

- 3 自分のことば使いはていねいなほうだと思いますか。

- 1ていねいだと思う 2ふつうだと思う 3ぞんざいだと思う 4考えたことはない

- 4 あなたは家の中でも敬語を使って話をする相手がありますか。

- 1いつも敬語で話す相手がいる } その人は: 1祖父 2祖母 3父 4母 5配偶者
2ときどき敬語で話す相手がいる } → 6婿・嫁 7兄・姉 8その他 _____
3敬語で話す相手はいない 4ひとり暮らし

- 5 あなたはどの程度標準語で話しますか。

- 1いつも標準語で話す 2いつも方言で話す 3標準語と方言とが混ざる
4相手や場合によって、標準語や方言を使い分ける

- 6 上の質問で、1以外に○を付けた人だけ答えてください。あなたの話す方言はどこのことばですか。

- 1札幌のことば 2北海道全体のことば 3その他 _____

12. あなた自身のことばは別として、この札幌のことばは標準語と同じだと思いますか。それとも違っていると思いますか。

- 1 標準語とかなり違う 2 標準語と少し違う
 3 標準語とあまり変わらない 4 標準語と全く同じ 5 わからない

○では、札幌のことばと東京のことばとでは、どちらが標準語だと思いますか。

- 1 札幌の方がより標準語的だと思う 2 東京の方がより標準語的だと思う
 3 どちらも標準語であることには変わりはない
 4 どちらも標準語とは違う 5 わからない

13. あなたは札幌のことばが好きですか。

- 1 はい 2 いいえ 3 どちらともいえない

14. あなたは地元の行事や祭には積極的に参加したいと思いますか。

- 1 はい 2 いいえ 3 どちらともいえない

15. かりに、日本中どこでも好きな所に住んでいい、ということになったら、あなたはどこに住みたいと思いますか。

- 1 札幌市 2 その他の道内 _____ 3 北海道以外 _____ 4 特にない

16. ここで行われている選挙の中で、どの選挙に関心がありますか。一番関心のあるものに◎、二番目のものに○印を付けてください。

- 1 衆議院議員選挙 2 参議院議員選挙 3 道知事選挙 4 道議会議員選挙
 5 市長選挙 6 市議会議員選挙 7 どの選挙にも関心はない

17. この半年の間に1泊以上の旅行をしたことがありますか。それはどのような用事（私用か公用か）でしたか。

場 所	回数	用 事	場 所	回数	用 事
		公用・私用			公用・私用
		公用・私用			公用・私用
		公用・私用			公用・私用
		公用・私用			公用・私用

どうもありがとうございました。このアンケートに御記入くださったのはいつですか。

____月 ____日の朝・昼・夕方・夜ごろ

国立国語研究所

【 4 高校生調査】

国立国語研究所

北調88高校

ことばの調査 質問票

001. 回答者番号 配付されたマーク・シートに書いてある

5けたの番号を、右の四角わくの中に、
そのまま書き写してください。

--	--	--	--	--

002. 学年 (○でかこむ) 1. 1年 2. 2年 3. 3年

003. 性別 (○でかこむ) 1. 男 2. 女

004. 現住所

〒 _____ 北海道 _____ 郡・市 _____ 町・村

005. どこで生まれましたか。 _____ 都道府県 _____ 郡・市

006. 生まれてから家を引っ越したことはありますか。

1. ない

2. ある

↳ _____ 歳から _____ 歳まで _____ 都道府県

_____ 歳から _____ 歳まで _____ 都道府県

_____ 歳から _____ 歳まで _____ 都道府県

007. 下にあげる家族の方の出身地を書いてください。「出身地」とは、その人が5歳から15歳くらいの子供時代を過ごした所です。知らなければ、「知らない」に○印を付けてください。

お父さんの出身地 _____ 都道府県 ・知らない

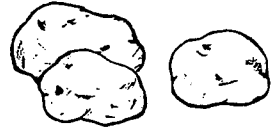
お母さん _____ 都道府県 ・知らない

父方のおじいさん _____ 都道府県 ・知らない

回答はマーク・シートに。「その他」の場合は、その番号をマーク・シートに記入すると同時に、自分の使うことばをそのまま_____部分に記入する。

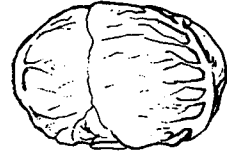
101. はじめに、右の絵の「いも」を何と言いますか。

- 1.ゴショイモ 2.ニドイモ 3.ジャガイモ
4.ただ「イモ」とだけ言う 5.その他_____



102. 右の絵の野菜を何と言いますか。

- 1.カイベツ 2.キャベツ
3.その他_____



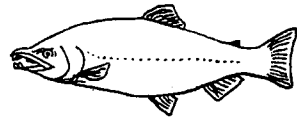
103. では、右の絵の野菜を何と言いますか。

- 1.トーキビ・トーキミ 2.キミ・キビ 3.ナンバ
4.トーモロコシ 5.その他_____



104. 次は魚の名前です。秋になると海から川へ上がって来る大きな、北海道名産の魚です。

- 1.アキアジ 2.サケ 3.その他_____



105. 冬ひどく寒いことを「シバレル」と言いますか。

- 1.言う
2.言わない → どう言いますか_____

106. 池の水が寒さのために氷になることを、水がどうなると言いますか。

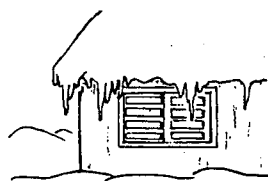
- 1.シバレル 2.コール 3.その他_____

107. 濡れた手ぬぐいが寒さのためにカチカチになることを、手ぬぐいがどうなると言いますか。

- 1.シバレル 2.コール 3.その他_____

108. やはり冬のようですが、のきさきに下がる右の絵のよ
うな氷の棒を何と言いますか。

1. シガ・スガ 2. コーリ 3. アメンボー
4. ツララ 5. その他 _____



109. 冬の初めごろ、雨と雪とがまじって降ってきます。これを何と言いますか。

1. アメユキ 2. アマユキ 3. ミゾレ 4. その他 _____

110. 氷を手でさわった時の感じをどんなだと言いますか。

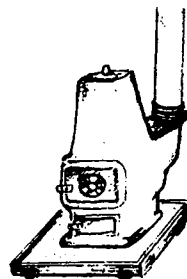
1. ヒャッコイ 2. シャッコイ 3. ツメタイ 4. その他 _____

111. 寒い時、手に手ぶくろをどうすると言いますか。

1. ハク 2. ツケル 3. スル 4. ハメル 5. その他 _____

112. 寒い時、まきや石炭を入れてたく、右の絵の暖房
器具を何と言いますか。

1. ストフ 2. ストーフ 3. ストープ
4. その他 _____



113. その暖房器具の中をかきまぜるための、右の絵の
ような棒を何と言いますか。

1. デレキ・デレッキ 2. デリキ・デリッキ
3. その他 _____ 4. その物を知らない



114. 煙を外に出すための、右の絵のような装置を何と
言いますか。

1. エント 2. エントー 3. エントツ
4. その他 _____



115. まきをたいたあとに残る白いものを何と言いますか。

1. アク 2. アグ 3. ハエ 4. ハイ 5. その他 _____

116. 足の部分の名前です。右の絵の矢印の部分のところを何と言いますか。

1. アクト・アグド 2. キビス 3. カガト
4. カカト 5. その他 _____



117. では、右の絵の矢印のところを何と言いますか。

1. クロブシ・クロボシ・クロコブシ
2. クルブシ 3. その他 _____



118. 今度は物の味のことです。薬は「ニガイ」などと言いますが、塩の味はどんなだと言いますか。

1. カライ 2. シオカライ 3. ショッパイ 4. その他 _____

119. では、砂糖の味はどんなだと言いますか。

1. ウマイ 2. アマイ 3. その他 _____

120. それでは、梅干の味はどんなだと言いますか。

1. スカイ・スッカイ 2. スイ 3. スッパイ 4. その他 _____

121. 切手を貼るとき、べろっとなめることがあります。その時つける粘り気のある水のようなものを何と言いますか。

1. ヨダレ・ヨダリ 2. ベロ・ピロ 3. ツバ 4. ツバキ
5. その他 _____

122. ^{ニオ}ものの匂いを知ろうとするとき、鼻を近づけて匂いをどうすると言いますか。

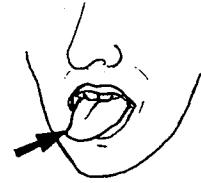
1. カム 2. カマル 3. カグ 4. その他 _____

123. 日を数えて、よっか（4日）、いつか（5日）、むいか（6日）、そのつぎは何と言いますか。

1. ナヌカ 2. ナノカ 3. その他_____

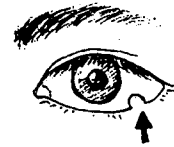
124. 右の絵の矢印のところを何と言いますか。

1. ベロ 2. シタベロ
3. シタ 4. その他_____



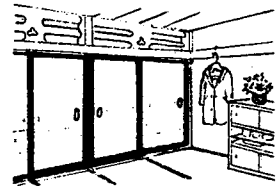
125. 右の絵のような、まぶたのへりにプツツとできる小さなできものを何と言いますか。

1. メツパ 2. メイボ
3. メバチコ 4. モノモライ
5. その他_____



126. 右の絵のような、部屋と部屋との境にする、紙を貼った引き戸を何と言いますか。

1. カラカミ 2. フスマ
3. その他_____



127. 米のうち、餅や赤飯用のものは何と言いますか。

1. モチマイ 2. モチコメ 3. モチゴメ 4. その他_____

128. 松の実のことを何と言いますか。

1. チンチリ・チンチロ 2. マツボックリ 3. マツカサ
4. その他_____

129. 大根をなべに入れて、みそやしょうゆを入れて火にかける。そうすることを、大根をどうすると言いますか。

1. タク 2. ニル 3. その他_____

130. 足の裏とか、わきの下などにそっと触れると、妙に笑いたくなるような感じがします。その感じをどんなだと言いますか。

1. コソバイ 2. モチョコイ 3. クスグッタイ
4. その他_____

131. 大きな犬が何匹もほえかかってきて、今にもかみつかれそうになる。そんな時の感じをどんなだと言いますか。

1. オッカナイ 2. コワイ 3. オソロシイ 4. その他_____

132. ごはんが腐^{カサ}ることを言うのに「アメル」ということばを使うことがありますか。

1. 自分も使う 2. 聞くことはある 3. 知らない

133. かわいいという意味で「メンコイ」ということばを使うことがありますか。

1. 自分も使う 2. 聞くことはある 3. 知らない

134. 疲れたとか、くたびれたという意味で「コワイ」とか「コワカッタ」ということばを使うことがありますか。

1. 自分も使う 2. 聞くことはある 3. 知らない

135. 草や木が大きくなるの意味で「オガル」ということばを使うことがありますか。

1. 自分も使う 2. 聞くことはある 3. 知らない

136. 右の絵を見てください。たたみの上にどうすると言いますか。

1. ネマル 2. ヒザマズク
3. ヒザオル・ヒザツク
4. スワル 5. セーザスル
6. その他_____



137. あなたが夜8時ごろ、町の知っている人の家へ用があつて行ったとします。玄関で何と書いてあいさつしますか。
1. オバンデス 2. コンバンワ 3. その他_____
138. ごく親しい店で物の値段を尋ねる時、何と書いて尋ねますか。
1. ナンボ 2. イクラ 3. その他_____
139. 今日の次の日は「アシタ」、その次は「アサツテ」です。さて、その次の日のことを何と言いますか。
1. ヤノアサツテ・ヤナサツテ 2. シアサツテ 3. その他_____
140. では、さらにその次の日のことは何と言いますか。
1. ヤノアサツテ・ヤナサツテ 2. シアサツテ 3. ゴアサツテ
4. その他_____
141. 「重いものを持ち上げる」という意味で「タナク」とか「タガク」ということばを使うことがありますか。
1. 自分も使う 2. 聞くことはある 3. 知らない
142. 「一生懸命になる」「思いきりがんばる」という意味で「ハッチャキニナル」ということばを使うことがありますか。
1. 自分も使う 2. 聞くことはある 3. 知らない
143. 上の 142と同じ意味で「ハッチャキコク」ということばはどうですか。
1. 自分も使う 2. 聞くことはある 3. 知らない
144. 「仲間に入れる」とか「加える」という意味で「カテル」ということばを使うことがありますか。
1. 自分も使う 2. 聞くことはある 3. 知らない

145. 「交換する」という意味で「バクル」ということばを使うことがありますか。

1. 自分も使う 2. 聞くことはある 3. 知らない

146. 「きたならしい」とか「むさくるしい」という意味で「ヤバシイ」とか「ヤバチイ」ということばを使うことがありますか。

1. 自分も使う 2. 聞くことはある 3. 知らない

147. 「気楽だ」「ゆったりしている」「気まずくない」などの意味で「アズマシイ」ということばを使うことがありますか。

1. 自分も使う 2. 聞くことはある 3. 知らない

148. 「私達」という意味で「ワタシガタ」ということばを使うことがありますか。

1. 自分も使う 2. 聞くことはある 3. 知らない

149. 「ていねいな」とか「^{りぎ}律義な」という意味で「マテナ」ということばを使うことがありますか。たとえば、「あの人はマテナ人だ」というような使い方です。

1. 自分も使う 2. 聞くことはある 3. 知らない

150. 「とても」という意味で「タイシタ」ということばを使うことがありますか。たとえば「とても速く走るね」を「タイシタ速く走るね」というような使い方です。

1. 自分も使う 2. 聞くことはある 3. 知らない

もう少しお願いします。次から少し質問が変わります。

ここからは、物の名前や単語でなく、言いまわしを質問します。
親しい友人や家族と話す場合を考えながら教えてください。

201. 「あの人はよく手紙を書く人だ」。この反対のことを言うとしたらどう言いますか。

「あの人は手紙を全然……」

1. カカン 2. カカナイ 3. その他 _____

202. 「こんなペンではうまく書かさない」。こういうふうに「書カサラナイ」という言い方をしますか。

• 言う → 1

• 言わない → それではどう言いますか。

2. カケレナイ 3. カカレナイ 4. カカラナイ
5. カケナイ 6. その他 _____

203. ペンが書きやすいということを、「このペンは書クニイー」のように言いますか。

1. 言う

2. 言わない → それではどういいますか。 _____

204. 「自分はローマ字で手紙を書くことができる」という意味のことをもっと短く言ったら、あなたはどの言いますか。

1. カケル 2. カケレル 3. カカサル 4. カカエル
5. カクニイー 6. その他 _____

205. 「手紙はあの人が書クダロー・あの人が書クベー」。仲のいい友だちにならどっちを使いますか。

1. カクダロー 2. カクベー 3. その他 _____

206. 「手紙を書くなら早く書いた方がいい・書くなら早く書いた方がいい」。

どっちを使いますか。

1. カクナラ 2. カクダラ 3. その他_____

207. 「朝5時には眠くて起キレナイ・起キラレナイ」。どっちを使いますか。

1. オキレナイ 2. オキラレナイ

3. その他_____

208. 「早く起キロ・早く起キレ・早く起キー」。仲のいい友だちにならどう言いますか。

1. オキロ 2. オキレ 3. オキー

4. その他_____

209. 「いっしょに映画見に行くべ・映画見に行コー」。仲のいい友だちにならどう言いますか。

1. イクベ 2. イコー 3. その他_____

210. 「もっと勉強セー・もっと勉強シロ・もっと勉強シレ・もっと勉強スレ」。仲のいい友だちにならどの言いかたをしますか。

1. 勉強セー 2. 勉強シロ 3. 勉強シレ 4. 勉強スレ 5. その他_____

211. 「早くコレバイーのに・早くクレバイーのに・早くコイバイーのに」。どの言いかたをしますか。

1. コレバイー 2. クレバイー 3. コイバイー

4. その他_____

212. 「あんまりおかしくてどうしても笑わさった」。こういうふう「笑ワサッタ」という言いかたをしますか。

1. 言う 2. 言わない

213. 「このりんごは弟に食べラセヨー・弟に食べサセヨー・弟に食べラソー・弟に食べサソー」。どう言いますか。

1. 食べラセヨー 2. 食べサセヨー 3. 食べラソー 4. 食べサソー
5. その他 _____

214. 「冬には野菜の値段がたけくなる」というふうに「タケク」という言いかたをしますか。

1. 言う 2. 言わない

215. 「冬は野菜は高カンベ・高イベ・高カッベ」。どういう言いかたをしますか。

1. 高カンベ 2. 高イベ 3. 高カッベ
4. その他 _____

216. 「寒いから寝た方がいい」という意味で、「寒イスケ寝た方がいい」とか「寒イハンデで寝た方がいい」というような言いかたをしますか。もし言わなければ、どう言いますか。

1. 寒イスケ 2. 寒イハンデ 3. その他 _____

217. 「寒いども雪は降っていない」のように、「寒いけれども」の意味で「寒いドモ」という言いかたをしますか。

1. 言う 2. 言わない

218. 「学校さ行く」とか「東京さ行った」のように「サ」と言うことがありますか。

1. 言う 2. 言わない

219. 相手に念を押して「行くでしょう」「来るでしょう」というところを、「イクショ・イクッショ・クルショ・クルッショ」のように言いますか。

1. 言う 2. 言わない

220. 「さようなら」という意味で、「シタツケ」と言うことがありますか。

1. 言う 2. 言わない

最後に、ことばについての、あなた自身の気持ちや考えを選んでください。

301. 他人と話をするとき、自分のことばが気になるほうですか。

1. 非常に気になる 2. 少し気になる
3. あまり気にならない 4. 全然気にならない

302. では反対に、相手の人のことば使いが気になりますか。

1. 非常に気になる 2. 少し気になる
3. あまり気にならない 4. 全然気にならない

303. あなたはどの程度標準語で話しますか。

1. いつも標準語で話す 2. いつも方言で話す
3. 標準語と方言が混ざる
4. 相手や場合によって、標準語や方言を使い分ける

304. 上の 303の質問で、2, 3, 4 に○印を付けた人だけ教えてください。

あなたの話す方言はどこのことばですか。

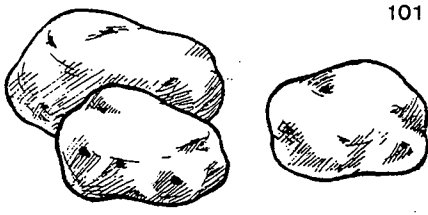
1. あなたの住んでいる土地（町や村）のことば
2. 北海道全体のことば 3. その他 _____ のことば

305. あなた自身のことばは別として、あなたの住んでいる土地（町や村）のことばは、標準語と同じだと思いますか。それとも違っていると思いますか。

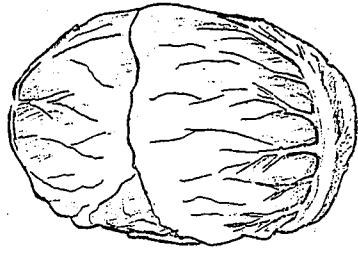
1. 標準語とかなり違う 2. 標準語と少し違う
3. 標準語とあまり違わない 4. 標準語と全く同じ
5. わからない

【これで終了です。ありがとうございました。】

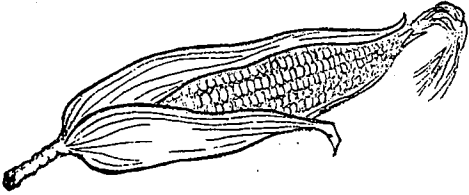
【5 絵リスト】



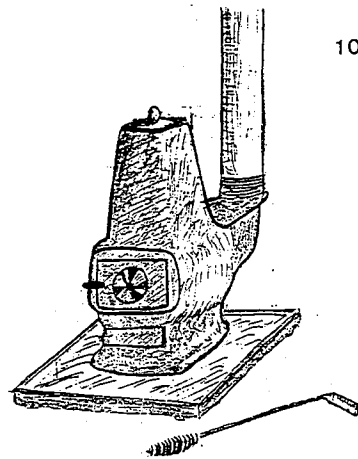
101



102



103



105

本報告は、昭和61～63年度文部省科学研究費補助金
総合研究A（課題番号：61301052. 代表者・江川清）
「北海道における共通語化および言語生活の実態」を
うけて実施した調査にもとづくものである。

北海道における共通語化と
言語生活の実態
（中間報告）

1997年3月 発行

国立国語研究所